

# 騎士と魔女と御伽之話

十握劍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは電撃文庫《オオカミさんと七人の仲間たち》に新たな人物が入っているお話です！ 御伽学園学生相互扶助協会に所属している主人公は魔女先輩ことマジョーリカと一緒に学園生活を送るちよつとしたラブストーリー♪

## 目次

### 第一章 『オオカミさんと七人の仲間たち』

第1話 「出逢い」	1
第2環 「おかし荘」	10
第3話 「騎士と魔女と」	16
第4話 「円卓の騎士」	27
第5話 「騎士と猟師」	39
第6話 「闇夜駆ける鉄馬と騎士」	47
第7話 「騎士とメイド」	59
第8話 「おおじ様とシンデレラ」	83
第9話 「謙る戦魚（せんし）達」	93
第10話 「騎士さん竜宮城の戦魚達に無理矢理手伝わされる」	106
第11話 「雷の魚は哀愁の荒波を泳ぐ」	123
第12話 「雷魚の哀苦」	141
第13話 「白馬の王子とその従騎士」	163
第14話 「騎士と王子を護る騎士」	172
第二章 「オオカミさんとおつう先輩の恩返し」	
第15話 「再・騎士とメイド」	209
第16話 「次・騎士とメイド」	221
第17話 「結・騎士とメイド」	248
第18話 「兎と亀の時ならぬ争い」	277
第19話 「白馬の王子さまと奏でる間奏曲」	291
第20話 「オオカミさんと白馬の王子さま、とついでに騎士」	301

第21話 「騎士は兎と亀の醜い争いに再び巻き込まれる」 |  
第22話 「騎士の兄の弟妹と金太郎」 |

# 第一章 『オオカミさんと七人の仲間たち』 第1話 「出逢い」

むかしくむかし、ある所に父から過激なまでに暴力をふるわえ何度も死にかけてた少年が居ったそうなの。

その少年は何度も父から逃げることを試みたが、次々と失敗してしまった。

少年は暴力を振るっている父を母に告白する、だが、その母もまったく聞き耳を立ててくれず、逆に父から受ける暴力が一層酷くなつた。

ああ、どうして自分は産まれて来たのだろうか。

少年は毎日のようにそう思っていた。

それもそのはず、父から肉体的苦痛を与えられ、母から精神的苦痛を受けているのだから。

そして少年はある日決心しました、この地獄のような日々を終わらせる為に。

自殺だ。

自殺をすれば良いんだ、と。

少年は決意し、どうせ死ぬなら外で死にたい。

死んで親<sup>アイツ</sup>らを迷惑をかけてやると、少年は思ったのだ。

少年は意を決して、親が寝静まった夜中にこっそりと家から出て、どこで死のうかとぶらりぶらりと歩いて行く。

少年は思った。

普通死に行く者は怖がるのだと、死にたくないと呼びながら足掻くのだと、だが少年にはそんな気持ちにならなかった。普段から受けている苦痛のせいで少年にはどこか壊れてしまった所があるらしい、『生』に対する執着心が無さ過ぎるのだ。

暗い夜道を歩く少年。

ひたすら足を歩かせる。

足掻こうとせず、『死』へと歩を進める。

だが、その少年の前に突然、

「もおー、ヨナカになればなにかみつかるとおもったのにーなにもみつからなかった」

少年の同い年、より少し下のような女の子が虫取アミを片手に走っていた。

少年はまさかこんな夜中に人と会うとは思わず、その場で足を止めてしまった。

「あ、ソコのひとー、ソコで呆けてるひとー」

そして女の子は止まってしまった少年の元へと駆け寄って来た。少年には普段同世代の友達や、ましてや女の子とは話したことが無かったのだ。

「こんなよなかに一人でであるくのはあぶないよー？」

女の子は少年の近くまで近寄りそう言って来た。

少年は驚く、その近寄って来た女の子は完全に外国の人だったのだ、日本人にはあり得ない金色こんじきに髪に、緋い瞳、外国人だ。

だが少年は表情には出さなかった、少年にとっていちいち表情にするのは「無駄」だと知っているからだ。

「むう、きいてるの?」

その金髪の女の子は片手に持っている長い虫取アミをトントンと音を鳴らしながら少年に聞いた、ちゃんと答えていなかったからだ。

「……………」

だが少年は気付いた、この自分より小さな女の子は糸も簡単に日本語をペラペラと喋っていることに、少年は英語を知らない、勉強を受けける環境では無かったから。だから少年は女の子になんて話しかければ良いか分からなかったのだ。

「…………ねえ、なんでキミはそんな目をしているの?」

少年が困っているのと金髪の女の子はそんな質問をしてきた。

「なんだか、何もみてない、かなしい目をしてる」

何故か女の子も少し悲しそうな目で少年を見てきた。

少年はただ無表情にそれを聞く。

「なにか…………あつたの?」

女の子は聞いて来る、だが少年も見知らぬ赤の他人に自分の今の置かれている状況や気持を話す訳も無い。少年は再び歩を進めた。

そうだ、早く死なないと。

少年は女の子の横を通るとした、だが次の瞬間、

ガバツ!

「…………!?…………」

少年は女の子に押し倒させられたのだ。自分より小さな女の子がこんな力が強いとは思わなかったらしい、簡単に倒れた。

「はなしをきけー!」

女の子は少年の胸に顔を埋めさせて大声で言う、父から受けた暴力で骨を折ったことで少し痛めていた右足を我慢する少年、静かに少年は女の子の肩を掴み、剥がそうとする。

所詮はやはり男と女、少年が少し力を入れて剥がそうとすると簡単に放せる事が出来た、少年は無表情のまま女の子の顔を見た。

「……泣いてるのか？」

女の子の緋い瞳から涙が雫となって少年の衣服に落ちる。

「……何で泣いている」

少年は無表情のまま、だが少し困ったような顔をしてまだ少年の上に乗ってる女の子に聞いた。

「かなしいからだよ、キミからとつてもかなしいかんじがするの！」

女の子は大量には無いが少しずつ涙を流す。

どうして泣く？

自分には関係無いのに。

少年はそう思いながら起き上がろうとするが女の子は少年に抱き着く。

「……どうして」

「いや」

「……どうして」

「いやー」

「……どうして」

「いやー!!」

女の子は断固として少年から離れようとしなかった。

少年は仕方無くそのまま立ち上がる。

なんとも苦にもせず簡単に立ち上がる少年、女の子も驚いて少年に抱き着いたまま浮かぶ。

だがこのままでは自殺出来ない。

少年はそう思い近くにあった公園に入り、そこにあった木製の椅子に座る。

「……」

少年は未だに離れない女の子を見ながら考えた。

何も関係の無い、何も得も無い自分を助けてなんになる？。理解出来ない、解らない。



「しゃべってよ、私にはテンサイ的なズガイがあるんだから何かかい  
けつするかもしれないよ」

「……頭蓋じゃなくて頭脳？」

女の子は自分が間違えた事に赤面して、少年から離れる、だが手を  
握られていた。

とても、とても柔らかい。

「……どうしたの？　なんで急に泣きそうなかおをするの？」

女の子は少年の顔を見てそう言ってきた。

少年はハツとする。

手を握られたことで何かが崩れ掛けた。

少年は女の子から手を払おうとするが、強く握り締められる。

「……………や、めろ。離せ」

少年は少し怒気の含んだ声で女の子に言う。

もうすぐ、もうすぐ何かがきてしまう。

少年は早く女の子から手を離そうとする。だが、女の子はまた断固  
として離そうとせずに逆に強く握り返して来る。

「やめろ、離せよー」

そして少年は女の子に怒りを露にして叫んだ。

普通ならば泣くか逃げるだろう今の場面に金髪の女の子は真剣な  
眼差しになり、そしてもう片方の手を少年の頬にペタと着けた。

「いや……だってキミ、泣いてるんだもん」

女の子に言われ、少年はハツとする。頬に伝わるこの冷たい何か、  
それは涙だった。

少年は自分の手で涙に触れる。

ああ本当だ、泣いてる。

壊れたであろう感情の一部分が一時的に溢れ返してきた。少年は  
女の子の温かく、そして柔らかい手を強く握り返していた。

こんなにも、こんなにも柔らかいものなのか、人間はこんな温かく  
て安心出来るものなのか。

親からバットやら皿、花瓶、酒瓶で殴られ続かれ、こんな温かく柔

らかい感触なんて産まれて初めて感じたかもしれない。

少年は女の子が頬に付けている手に自分の手を据えた。

「温かい、こん……なにも温かいんだ。それに、柔らかいかい……だ  
なっ……ウグツ、ヒグツ」

少年は女の子の手を握る、ただそれだけでどんと涙が溢れ出てきた。

こんなに優しく温かい、そして冷たく固くない。

「うぐう、ガアッ、グガア、アガア！」

少年は声に出さずにと必死に声を消して泣いている、すると女の子は。

「泣いて、いいんだよ。ここにはだれもないから」

女の子は少年の顔を引き寄せて、胸に抱き寄せた。

そして少年は、硬く氷らせていた感情を溶かし、爆発させた。

「うわああああああああああ……ヒグツ、うぐあああああああああ！」

少年は女の子をギュツと抱き着き大声で泣いた、苦しかった、誰かに助けてもらいたかった。救われたかった。

少年は心の中でそう叫びながら泣いていた。

「……泣き疲れたのかな、ねむっちゃった」

少年はあの後、プスツと泣き止み、今までの精神の疲れが本の少し晴れたことで睡魔に襲われたのだ。

そして今は女の子の膝を枕に寝ていた。

女の子は少年の髪を弄りながら身体を触り、診察していた。

「……身体の至る所が紫色にパンパン腫れてる、普通の部分の方が少ないってどういう、……！……酷い」

先程とは打って変わり、幼さが残る女の子の表情では無く、多才溢れるような少女の顔つきになり、少年の髪を弄りながら痛々しい生傷を見つけた、頭に何かに強打されて裂けていたのだ、血で髪が固まっていた。

そしてその後骨にひび割れしている部分が七つ、折れている所を二つ見つけた。

「……酷すぎる。きつと、この男の人は、死に行こうとしたんだわ、死んだような目をしていたもの」

女の子は手を少年の頬にピタツとつけると、少年はパチツと目を覚ました。

「……俺は、寝てしまったのか」

「と言っても数分だよ」

女の子の声が真剣になっっているのに少年は気づくと、起き上がった。

「……濟まない、見知らぬ人の膝を借りるとは」

「知らなくないよ」

「……なに？」

「私は君を知ってるの」

「……それは、何でだ？」

女の子は真剣な面持ちで少年の向き合った。

「私は貴方を迎えに来たの、『黒軋ガウエイン』くん」

少年はいきなり自分のフルネームを言われて驚いた、無表情だが。

「私の名前はマジョーリカ、君のお祖父さんに名前をつけて貰ったのよ」

「……俺の祖父ちゃんか？」

コクリと金髪の女の子、マジョーリカは頷いた。

「ふふふ、君のお祖父さんは《アーサー王伝説》が大好きだからその中に登場する者から名前を取って、付けたらしいのよ。だから君の名前は円卓の騎士の一人である『ガウエイン』から取ったのよ」

マジョーリカは可愛いらしい笑みを浮かばせて少年、ガウエインに

言った。

「名前なんて、どうでも良い、そのせいで親に何度も、何度も……」

ガウエインはまた死んだような目でそう呟く、するとマジョーリカはまた手を握ってくれていた。

「大丈夫だよ、もう、あの家に帰らなくても良いの」

「……なに」

ガウエインは不思議そうにマジョーリカの顔を見る、マジョーリカは笑みを浮かばせていた。

「私の親は今頃、君の親の所に行ってる。君を引き取りに来たの」

「引き取り？ どうして？」

「どうしてって、居たいの？ 暴力を振るう親の所に」

マジョーリカの言葉にガウエインはピクツと反応した。

「……なんで暴力が振るわれているのが分かった」

「君の……至る所に傷が残ってる」

マジョーリカの指摘にガウエインは黙る。

「えつとね、私の両親、というより父親は君のお祖父さんと知り合いで、お祖父さんは君の境遇を知り、私の父親に頼んで里親になって貰いたいって言ってきたの。本当は君を引き取りたいと言ったのお祖父さんなんだけど、訳あって無理みたいなの、それで私の父親に頼んできた、という訳」

分かった？ とマジョーリカは首を傾げてガウエインに言う。

「……それで、どうして俺がこんな時間に出て来るって分かったんだ？」

ガウエインはマジョーリカにそう聞くと、まるで困ったような顔になり渋々答える。

「私もその、両親と一緒に行くこうとしたんだけど、途中ではぐれちゃって、携帯で連絡して待ち合わせをしていたんだけど、私が探していた研究材料の薬草とか幼虫とか動物とか見つけて、それで追いかけて来たら……」

「つまりブラブラしている所で俺と会った、という訳か？」

マジョーリカはゆっくり、渋々頷く。

「……あれから離れられるなら、それだけで、充分だ」

ガウエインはもうすぐ暗い夜空が段々と青くなるのを見上げていた。

「ジー」

マジョーリカはガウエインの顔を覗いてきた。

「なに」

「私が思うに、君はその恵まれない環境で何か欠けているんだと、私は判断した」

「なにをいきなり」

「だから私がその欠けている所を埋まらせてあげる！」

マジョーリカはそれだけ言うと、ガウエインの頬にキスした。

「なにしてんの？」

だがガウエインは何の反応もせず、その行為を聞いてきた。

マジョーリカはため息を吐いて言う。

「君には『愛情』が注がれていないんだよ。だから私は君に空となった『愛情』の器を充たしてあげるよ」

マジョーリカはまた満面は笑顔でガウエインに言った。

それが騎士と魔女が

初めて出逢った日だった。

## 第2環「おかし荘」

ガウエインとマジョーリカと出逢ったあの日、ガウエインはフェイ家一家に身を預ける形になった。

ガウエインの両親は最初は断固のように断っていたのだが、子供虐待の話や裁判などの話を持ち上げてみれば簡単にガウエインに関する荷物や親権書類などの類いをマジョーリカの両親に預け、姿を消した。

それほど自分の息子に関心を持っていなかったのだ。

ガウエインにとってそれはどうでも良かった、あのままだったら絶対に殺されていたのだから。

だがガウエインは己の姓だけはそのまま『黒軋』で名乗っていた。公の場ではガウエイン・ル・フェイと名乗っているが黒軋の名だけは捨てなかった。

マジョーリカの両親もそれは黙認してくれていた。

そしてガウエインはマジョーリカの義理の兄としてフェイ家の位置づいていた。

マジョーリカの両親はとてもガウエインのことを愛(いつく)しみ、久しい暖かい抱擁(ほうよう)で義理の息子を愛撫(あいぶ)してくれた。息子が出来たと逆に喜んでくれていた。

ガウエインにとって初めての体験ばかりだった。歳相応に泣けば良かった、と後から思ったらしい。

そして何より、マジョーリカとガウエインはとても仲が良くなっていた。

「マジョーリカって名前、長いよ」

「そしたらガウエインっていう名前だってそうじゃない?」

ある日ガウエインとマジョーリカは互いの名前が長いことに話していた、そこでガウエインは一つ考えた。

「マジョーリカは長いから、最初の字と最後の字で『マカ』はどう?」

女の子らしくて可愛い名だよ」

ガウエインはとても恥ずかしい事を言っているのだが恥じることは無く、相変わらず無表情のままマジョーリカに言う。

「マカ……か。な、なんか照れるね／＼／＼」

マジョーリカは頬を赤くして照れていた。そしてマジョーリカもガウエインの名を考え、そして、

「ガウエインだから、『ガークン』はどう♪ とってもカッコ良いよ！」

マジョーリカは身体を乗り出して言ってきた。

「ガ、ガークン？」

「そう、ガークン♪」

「……」

「ムフフ♪」

二人は数分見つめ合う、というよりガウエインが放心している。

なんていう名前を付けるんだと、ガウエインは心の中で恥ずかしくなっていた。

「……他には？」

「え、他に？ うーん、ガークン以外はもう無いかな」

マジョーリカは満面な笑顔でそう言ってきた。

マジョーリカの家に住むようになったガウエインは一つだけ分かることがあった。

最初に会った時からそうだがガウエインはマジョーリカのこの満面な笑顔がとても弱かった、つまりとても、いや、無茶苦茶可愛いらしくて直視出来ないことが分かった。

だがこれからは義理とは言え、兄妹となったのだ。こんな感情を持つてはいけないと思うのが当たり前だ。と思った。何分ガウエインは感情が所々が欠けている為に別にそんな風に思っていたり、思っていないかったりしていた。

そして次の日からガウエインはマジョーリカに『ガークン』と呼ばれるようになったのは言うまでも無かった。



長い年月が立ち、ガウエインはとうとう高校生となる歳となった。ガウエインが引き取られたのは小学生六年の頃であり、三年はフェイ家でお世話になっていた。

だがガウエインもずつとお世話になるのは心苦しいと思い、一人暮らしをする事を決意した。

フェイ家に来てからはまともな食事にまともな教育、まともな生活を送って来たガウエインは一般常識や教養を身に付けた。

なので一人暮らしくらい出来ると判断したガウエインはさつそくフェイ夫妻に相談した。最初は駄目だ、と頑なに言われ続けて来たがガウエインもいつまでも世話になるのはとても辛いと答えた所、フェイ夫妻も折れ、許可が下った。

「……ここが『おかし荘』か」

ガウエインがやって来たのは御伽花市(おとぎばなし)という街だ。御伽花市には五つの地域に分けられており、学校関係の施設がある北区、様々な店が集まっている御伽花市の中心である中央区、東区は寮や学生マンションなどの学生たちの住まいが多く、南には一般住宅の建ち並ぶ住宅街、西区が工場などが建ち並ぶ工業地区となっている。

街の歴史はそれなりに古いが発展してきたのは凄く最近なので、新しい街ならではの区分けが行われているのだ。

そしてガウエインが今日の前に建っているのが南区と東区の境にある『おかし荘』である。

そこには庭付きの比較的大きな家が建っており、表札には『村野』と書かれている。

その家はそれほど豪華(ごうしゃ)で成金的な建物ではないが、そ



れでも金がたらふくあるな、と感じさせるほどに大きく、それに比例して庭も広がった。

「……広い」

ガウエインは庭をジイーと見つめて答えた。

するとその大きな家から誰かが外に出て来て、ガウエインに近付いて来た。

「よう、お前が黒靴（くろきし）っていう奴か？ ……ってうわッ

！ その黒バイクお前のか！」

出てきたのは長身でぼさぼさに伸びた髪を無造作に後ろで縛った化粧つ気のない眼鏡の女性だった。

「……今日からお世話になる黒靴ガウエインと申します、どうぞヨロシクお願いします」

「おう、現代の若者の癖に異様に礼儀が良いんだな」

「祖父から貰った本にありました、《騎士道》の一つ『礼儀正しき』と、そして日本にもある《武士道》の徳目『礼』『尊と卑を分別し謙虚にて上を敬い下を侮らない心』それを実行したままです」

ガウエインが真剣にそう言うと言と眼鏡の女性はポカンとしていると、次の瞬間大口を開けて笑い出した。

「アッハッハッハ！ 良い！ 気に入ったね、ちよつと堅いかもしれないが、まあそれは後々治つてくдарろ」

女性はガウエインに近付き肩にパンパンと何度も叩いた。  
元気な人だ。

ガウエインの第一印象だった。

「私の名前は村野雪女（むらのゆきめ）、このおかし荘の宿主つて所だ」  
雪女と名乗った女性は家の隣にある二階建ての全八戸ほどの部屋数のアパート風の建物を指差した。

「……（アパート）」

ガウエインはそんな風に思っていると、まるで心を読まれたように雪女は言ってきた。

「まあ建物的にはアパートだな、だがこれははれつきとした下宿なんだ」  
にっつと笑った雪女はある所に指を指した。

「……あのアパートと住宅は渡り廊下で繋がっているんですか？」  
「おう、そうだ。部屋には小さなユニットバスはついているんだが、本邸の方が大きな風呂があるんでほとんどの住人がそこ使ってるな。あと、飯もついてくる。朝と夜はみんなで食べるぞ」

「……確かにアパートというより下宿ですね。……それで名前は何かし荘？」

建物にかかっている看板を目を細めて読むガウエイン。

「ハハハハ、こいつはお菓子と、おもしろそうっていう意味の「おかしそう」が、掛かってるんだよ」

そうなんですか、とガウエインはおかし荘を見上げながら答える。

「八つ部屋があるんだが、ほとんどが空いてる。だか好きな部屋使って良いぞ」

雪女はそう言っただけで家に入ろうとしたが、戸の前ピタッと止まり、ガウエインに聞く。

「……ずっと気になっていたんだが、その黒バイクはお前のか？」  
雪女はガウエインが横でずっと支えていた大型のバイクに指差しを聞いた。

「俺のです、名前はGALLER10でちゃんと免許も持ってます」

「ほく、コイツは良い買い出し係を手……ゴホゴホつ、いいや、何でも無い。邪魔にならない所に置いとけよ。あと昼飯がもうすぐだ、荷物運んだら食べに来い」

いやあ、本当に便利な奴が来たぞ、と凄く嬉しそうに雪女は家の中へと入って行った。

「……使われるな、俺は」

そう言っただけでガウエインは黒い大型のバイクGALLER10をおかし荘の隣に持って行く。

バイクは中学生の頃に免許皆伝した、高校生になるし一人暮らしで色々と思えば、通う高校を調べのバイク通学OKを知り、バイクを「貰った」。

どこから貰ったかはいずれ話そう。

「ここなら邪魔じゃ無いかな」

ガウエインはバイクをおかし荘の影の所に置いて、バイクに乗せてあった荷物を片手で担いでどの部屋にしようか迷っていた。

すると、ある部屋から白くて長い髪に黒縁（くろぶち）眼鏡をかけた暗い雰囲気をもとった少女が出て来た。

ガウエインはその少女に挨拶をした。

「今日引越して来た黒軋ガウエインと申します、ヨロシクお願いします」

ガウエインがそう言うと言った少女はビクツと驚いて逃げて行ってしまった。

「いきなり過ぎた、マカから色々とお教わったのだが……」

ガウエインは一人でそう思いながら空いてる部屋に入り荷物などを置いた。

「今日からここが、俺の家か……良い部屋だ」

昔にろくでもない親に押し付けられていた部屋より数倍、数億倍良かった。

「……変わっていいこう」

ガウエインは一人部屋で誓った。

ここから変わっていいこうと。

ガウエインは、誓った。

### 第3話「騎士と魔女と」

御伽学園高等部二年生となった、この物語の主人公である黒軋（くるきし）ガウエインは今現在、漆黒の大型二輪自動車、つまり簡単に言えば大型のバイクにまたがりながらある場所へと向かっていった。

因みに今のガウエインの姿は黒いライダースーツに身に纏っているのだが、そのライダースーツはとにかく特別製に作られており、まるで西洋の鎧甲冑を思わせる、鎧姿だった。

ヘルメットが騎士の兜鉢かぶとぼち、両腕に手甲、足部分に脛当すねあて（すねあて）を付け、胴部分や他の所は黒いコートを身に纏っていた。

この恰好にはちゃんとした理由があるのだが、それはまたの機会にて。

「……………」

ブルン！ とバイク特有の爆音を鳴らし……………とはいかず、爆音対策をしているらしく静かなエンジン音を鳴らしながら疾走している。

漆黒のバイクだけでも目立つと言うのに、更に目立つ恰好をしているガウエインはまったく気にしないで疾走。

そして行き着いた場所はと言うと、御伽学園内にあるボロいプレハブ小屋、そのプレハブ小屋付近までやって来たガウエインは、大型のバイクを巧みに操り、影にバイクを置いた。

「……………頭取も人を使うな、わざわざコンビニまで菓子を買わせに行かせるとは」

愛用のバイクから降り、ヘルメット 兜を取り外し、他の鎧（カバー）も外す。ライダースーツ 鎧甲冑を脱いだガウエインの恰好は両腕と両足の鎧（カバー）を外しただけで、黒いコートのみままで漆黒の髪を伸ばし、丁度前髪で片目が見えなくなっており、黒縁くろぶちメガネを掛けていた。

御伽学園は制服が何種類か用意されていて、且つ条件付きで改造が

許されているのでそれらは少しづつ形が変わっている。

許されているというよりは、ぶつちやけ生徒数が多すぎるので、顔だけではなく服装でも区別できるようにと黙認されているらしい。

黙認される条件は、校章が見える部分について御伽学園の学生だと一目で分かること、過度な露出や危険な装飾を取り付けないこと、公式行事用にノーマルな制服を一着用意すること。

常識を逸脱するなということだが、その常識が個人の良識に任せられているため、ものすごいことになってたりする。

特にガウエインの恰好は確かに校章が見えてはいるのだが、まるでどこかの悪の組織にでも所属していそうな黒衣のコート姿だった。騎士に見えるか、と問われたらすぐには答えられないだろう。

ガウエインはバイクの後部にある荷物などが入れる所からコンビニ袋を取り出した。

そのままプレハブ小屋に入ろうとすると、

ガラガラー。

「あら、お帰りなさいですの、騎士先輩」

と、先に扉を開いて現れたのはガウエインの御伽学園高等部一年生の、つまりガウエインの後輩である小さな可愛いらしい赤髪の女の子が立っていた。

「林檎か、今から何処かに行くのか？」

「はいですの、これからちよつと仕事がありまして、ストーキングしているところある男性を退治しに行く所ですの」

その言葉を聞いたガウエインは少し目を細める。

因みに騎士先輩とは、黒靴くろくきしのきしから取って呼ばれているらしい。それ以外にもガウエインの行動や性格によって「騎士」の名が合っていることを学園の殆ど生徒が知っている。

「荒事や運送係は俺じゃなかったのか」

「騎士先輩は恰好とかがこの御伽学園や御伽花市で有名ですから無理ですの、それに騎士先輩には『黒騎士』の二つ名が持つてあるので…」

やっぱり無理ですよ」

「そういうこった、わりいな、騎士先輩」

そして、赤髪の女の子の後ろからまるでスケ番のような恰好をした女の子が出て来た。

紺のセーラー服タイプの制服で、スカートが長く、動きやすいように左右にスリットが入っている。

その為に時折見える足が艶かしい。

「涼子か、御伽銀行の『赤頭巾』と『おおかみ』が出ると言うなれば、俺は不要だな」

ガウエインの目の前にいる二人の女の子たちは、ガウエインが所属する組織『御伽学園学生相互扶助協会』という非営利組織の仲間である後輩だ。

スケ番のような恰好をしているのが大神涼子おおかみりょうこで小さ過ぎて高校生なのか、と疑いが掛かるほど小さい女の子は赤井林檎あかいりんごと言う。

知る人は知っているが、知らない人はまったく知らない二人組である。

ガウエインは買って来た菓子をオオカミさんとりんごさんにあげた。

「怪我はするなよ、危なくなった必ず連絡を寄越せ」

ガウエインは力強い眼差しで二人に言うと、二人も力強く頷く。

「危なくなった頼むよ、騎士先輩」

「頼りにしてるですよ、騎士先輩♪」

オオカミさんとりんごさんはそう言って歩いて行った。

ガウエインは二人を見届けた後にプレハブ小屋に入る。

そこには汚いソファアールやボロボロの椅子。ガウエインはそのままキッチンの中へと向かう。

キッチンにはくすんだステンレスの流しに錆びたコンロ、大きいボロの食器棚。ガウエインは食器棚に触れ、大きな食器棚を片手で開けるとそこには地下へと続く階段があった。

誰かが秘密基地みたい、とか言ってきそうな雰囲気だ。

ガウエインはそのまま地下へと降りて行った。

そしてとある大きな部屋の扉を開けると、

「いやー、やっぱり早いね？ バイクは？」

「頭取、菓子です」

ガウエインが入った部屋には、地下とは思えないほど広い空間の部屋で、部屋の左は壁一面本棚でさまざまな本や資料などが所狭しと並び、右側には大画面液晶テレビやDVDプレイヤー、ゲーム機に巨大なスピーカーとどこのお金持ちの部屋かといういたれり尽くせりっぷりの部屋で。正面に見えるのは社長室にでもありそうな大きな机と革張りの椅子。机の上には液晶モニター。その後ろの壁には大きな書の掛け軸があり、そこには達筆で『あなたより大切な物はないこともない』と微妙な文が書かれていたら、足元にはふかふかの絨毯。部屋の中心には正方形のテーブルが置いてあり、その三辺には座り心地の良さそうな高級ソファが置いてある。

「お帰りなさいませ、ガウエインさま」

「ム・・・、おつうか」

おつうと呼ばれたメイドの恰好(?)をした女性はガウエインにっこり微笑んでお辞儀を一つしてきた。

ガウエインは買ってきた菓子をおつうに渡す。

「補充だ」

「はい♪」

菓子を受け取ったおつうはそのまま地下本店にあるキッチンへと向かって行った。

このメイド服に身に包んだ少女は鶴ヶ谷おつうと言って、ガウエインと同学年であり、同じクラスである。

「さつき涼子たちと会ったのですが、依頼内容はなんなんですか？」

ガウエインは高級ソファに座ってどんな依頼の話なのか訪ねる。「別れた彼氏が未練がましく、何十回もストーキングするらしく、そのストーリーを退治しに大神さんたちを行かせました」

答えてくれたのは御伽学園高等部三年、御伽銀行の副頭取である桐

木アリスであった。まんま秘書のような恰好をしていて絶対零度の切れ目を持つクールビューティーの女性だ。

「ストーカー……危くないのでしょうか」

「まあ、大神くんが居るから大丈夫だと思おうよ？」

そして、この御伽銀行の『頭取』、つまり責任者を務めているのが、マイナスもプラスもなく、目立たない容姿をしていて、髪の毛は短く切り揃えられている。服装はなぜか燕尾服であり、白いタイがまぶしく見え、黒いベストを身に付けているため体型はよく良く分からないうい、だが机の上で組んだ手は男とは思えないほど白くほっそりとしている。その細面からもやしっ子という言葉がしっくり来そうなのが桐木リストという少年だった。

何故、アリスと同じ苗字だと言うとリストとはいとこ同士だかららしい。

「……頭取のその曖昧で断言しない口調は相も変わらずですね」

ガウエインはチャーと頭取を見てみるが、顔をゆっくりと逸らす。

「何かあつたら連絡を、と伝えておりますから、黒軋（くるきし）さんは何時でも行けるように準備をお願いします」

「最初から出てますよ」

ガウエインは立ち上がり、扉へと向かった。

「では、ご苦労様です。無事大神さんたちが依頼達成したら、後ほど教えてあげます」

アリスがそう言うと、ガウエインは片手を軽く上げパタパタしながら出て行った。

広い部屋に二人きりとなった頭取とアリス、だが二人共静かに出て行った二年生後輩について話す。

「うん、一年の頃よりは半分愛想良くなったんじゃないのかな？」

「そうですね、まだ少し感情の無さを感じさせますが……」

「そうだね？　まああとは魔女くんにも任せようか？」

「……」

「あ、あれれ？　きゅ……急にどうしたのかな、アリスくん？」

「こんな時でも人任せとは、さすがは“駄目人間”を名乗るだけある



な、と思ひまして」

「え？ あれ？ 僕そんな自虐的な名乗った覚えが無いんだけどなく？ あと『駄目人間』と言う言葉に妙に強調してなかったかい？」

「現実且つ、事実且つ、真実を述べたまでなのですが、何か？」

「ア、アハハハ？・・・」

部屋には頭取の苦く乾いた笑い、苦笑いが音響していた。



コンコン

「入るぞ、マカ」

「良いヨー」

ガウエインは部屋から出ると、すぐ近くにあつた部屋にノックをして入る。

そこには大きな本棚に数々のオカルト的な本が並べられており、部屋の真ん中には大きな鍋のような物が置かれていた。鍋の中の色が紫色になってグツグツと何か煮込んでいた。

他にも黒魔術に用いる陣や魔術の参考書やら、何やら怪しい物が盛り沢山集合していた。

ガウエインがそう思ったのは物の一分、その一分後には侵入者を撃退する為の迎撃用トラップが発動した。

シュン！

「・・・矢？」

ガウエインは駆けてくる矢を素手で掴む。だが、その矢の鋒(さき)には袋のような物があり、それが破裂する。

「コシヨウか」

袋の中には小数のコシヨウの粉が入っており、ガウエインの顔面に

ぶちまかれようとした。

だがガウエインは軽く数歩下がり、それを回避した。

だが、

カチツ

(ん………?)

「掛かったヨー!」

ガウエインは何かのスイッチのようなものを踏むと、上から十数個の鉄球が降ってきた。

だがガウエインはまた表情を変えずに鉄球を素手で払う。

ガガガガ!

鉄球は床へと落ちて、見事な重さで床を凹ませる。

重力に従って地に落ちてくる鉄球をガウエインはまたも難なくキャッチして、横に落としていっていたのだが、一向に止まる気配を感じない。

この落下しまくってくる鉄球から逃れる為にガウエインは巧妙な足捌きでその落下地帯から見事脱出し、そのオカルトオーラが包み込む部屋で構えていた『魔女』の眼前まで迫ってみた。

「ヨヨヨー!?!」

『魔女』は思いもよらなかった展開に反応出来ず、固まっていると、

ピシッ!

ガウエインは小さくあたふたしている金髪長髪の『魔女』の額にデコピンを見事必中させる。

「大変な仕掛け、苦勞だったな、マカ」

ガウエインはそのまま『魔女』の髪に手が移動し、それをなぞるようにして綺麗な金髪を持ち上げたら、そのままパチンツ! と音が鳴る。『魔女』が両の手でガウエインの顔面に押し当てていた。

『魔女』は正直驚いた、あんなにも離れていたし、<sup>トラップ</sup>罠を瞬時に搔い潜つ

たというのに。

「マカの悪戯も段々と上がっているように思うのだが？」

「実験の為だヨー♪」

とニカツと笑って来る小さな『魔女』。

御伽学園高等部二年生であり、ガウエインと同じクラスでもある。服装は黒衣のブレザー（丈が長すぎてローブのようになってる）と三角帽子、簡単に魔女が被るようなトンガリ帽子を被り、牛乳瓶底ぐるぐる眼鏡と正統派魔女ルツクの姿だ。

髪はストレートの金髪で地に付くほど長い。

外国人の風貌だが日本人であり、その事で昔ちよつとした事件があったが、それはまたのお話。

通称『魔女さん』と言われている、この少女、マジョーリカ・ル・フェイは長い帽子を直しながら、ガウエインの胸板に悔しパンチを連続しているが、ポカポカという擬音が聞こえてくる。

「……俺の前までそんな喋り方なのか

？」

笑っているマジョーリカにガウエインは微笑み返しながら聞く。

「ならまずそっちから普通にしろヨー……そんな言い方じゃなかったよね？」

マジョーリカはグルグル眼鏡を少し下げて、眼鏡の脇から綺麗な瞳をガウエインに向けて素の言い方になりながら呟く。

「ごめん、祖父から色々なこと叩き教えられたら、こんな変な言い方になったんだよ」

ガウエインも素の状態、というより楽な話し方でマジョーリカと向き合う。

すると、

ガシッ

マジョーリカはガウエインいきなり抱き付いた。

だがガウエインの身長は御伽銀行の中で一番長身であるからして、

マジョーリカは丁度ガウエインの胸板に顔が当たり、埋もれている感じになった。

見た目は、優しいお兄さんに抱き付いている甘えん坊な妹を連想させる。

「…さつきはごめんね、迎撃用トラップを仕掛けないと、その、ガークンと安心して話せないから…」

「…(イジイジ)」

「ああ〜♪ やっぱりガークンの懐は安心するなあ♪ ふむゆふみゆく♪」

「…(さわさわ)」

「…髪フェチにも大概だよガークン、無言で私の髪をなぞったり、見つめたりしないでよー」

マジョーリカはずっとガウエインの胸に顔をむふむふさせていたのだが、肝心のガウエインは綺麗で長いマジョーリカの金髪を弄っていた。

「…綺麗だ」

「…ん？」

「綺麗だよ、マカ」

「…うん」

マジョーリカとガウエインは互いに顔を向き合わせる。ガウエインは真剣な顔でマジョーリカに言う。

マジョーリカも真剣な顔をしているが、互いに違う所を見ていた。

(たぶん髪だ)

「この輝く艶やか金色こんじきの美髪」

やっぱり、といった感じにマジョーリカは片手でガウエインの隠れている片方の髪を上げて、左目を診る。

「…痛くない？ ガークン？」

「…ん、ああ。痛感覚の反応は無しだ」

こんどはちゃんと反応してマジョーリカの問いに答える。

「そういう時は『痛くないよ』でしょ、まるで自分の身体じゃなくて、他人の身体を診ている感じだよ？」

「痛くないよ」

マジョーリカはぷくぷくと可愛いらしく頬を膨らませてガウエインの言い方を直させると、ガウエインは正直に直して言い返す。

それを聞いたマジョーリカは満面な笑顔でガウエインに再び抱き付いて呟いた。

———そうだよ———

ガウエインとマジョーリカはマジョーリカの工房、ガウエイン曰く《魔女さん工房》と名付けたらしい。

その工房の中でガウエインとマジョーリカは椅子に座りながら話をしていた。

「また何か造ってるのか」

「そうだよ♪　ちよーつと電気回路が繋がらなくて困ってるんだけどね」

カチャカチャと器用に作業をするマジョーリカを眺めるガウエイン。それがガウエインの日課になっていた。

クラスでも一緒だと言うのにガウエインはマジョーリカを安心しきったような目で見つめていた。

この学園に来て、ガウエインは少しずつだが変わっていった。

常識的な知識は祖父やマジョーリカ、友達に教えてもらったり、感情も一部分ずつ回復していつている。だが完全では無い、『歓喜』『恐怖』『怒』『悲しみ』と限りがあった。

だがガウエインは感じていた。

マジョーリカのお陰で俺は死なず、生き、未来を歩むことが出来るのだと……。

「マカ」

「ん？？」

「ありがとう」

ガウエインはマジョーリカをまっすぐ見て、そう言った。

マジョーリカは「何が？」といった感じにポカンとしていたが、ガウエインの顔を見てマジョーリカは微笑みを浮かばせ、

「どうぞ致しまして♪」

ガウエインの頭を撫でていた。

騎士が魔女に救われたお話。

## 第4話 「円卓の騎士」

ガウエインは朝早く起床し、御伽学園に来ていた。

何故こんなにも早く来ないといけないかと言うと、理由は簡単であり、それは。

「ああ、来た来たあ〜♪」

「……遅い」

そこには黒曜石のような瞳と、頭の上でまとめられた髪はゆるりと流され腰の辺りで揃えられている女子高生ともう一人の女子高生、つまりは二人立って居た。その黒く濡れた長い髪に若干の興奮を覚えるガウエインだったが、ここは自制し、普通の対応。

「おはようございます、桃子先輩。今日もお早い通学で」

ガウエインは勿論のようで当然のようにバイク通学だ。

だが、御伽学園の生徒はあまりバイク通学をする生徒が少ない。

しかし、それは当然と言っても過言では無いのだ。ガウエインが住んでいるこの御伽花市（おとぎばなし）は優秀な人材を育てるべく数々の学校学園学院が多々ある都市、つまりは学生がこの御伽花市の半分を占めているのだ。ならば、無理してバイクなどと危険な通学手段を選ぶはずもなく、必然のようにバイク通学は少数となる。

相変わらず騎士甲冑のようなライダースーツに身に纏っているガウエインは門の近くで降りる。

「早起きは三文の徳よ〜ん、それより、こっちにも挨拶しなきゃ〜、ダメよ〜」

そして御伽学園の校門に立って居たのはセーラー服を着た女子高生なのだが、何分そのセーラー服はけしからん位に改造されてあったのだ。

まず、おへそが見えている、つまり裾が異常に短く、スカートも短い。最早ミニスカだ。

そして腕には風紀委員の腕章。つまり風紀委員に所属しているら

しいのだが、完全に風紀にケンカを売ってるしか思えない恰好をした風紀委員だった。

外見的に「乱れる性、最近の十代」とかいう感じでいかがわしい週刊誌の中扉くらい飾りそうな露出度だ。

だがこれで女子高生で通る範疇はんちゆうらしい。

そして何より、何よりも目立つものを持っている女子高生であるのも事実。

胸のポリユームが女子高生レベルではない。

反則？ 異常？ 負担荷？ 危険？ エロい？

なにもかも当てはまる。

そして腰にはゆるく何重にも巻かれた革のベルト、それがその白い腰を美しく引き立たせている。

女子高生ではなく女王様である。

『黒騎士』の異名を持つガウエインにとって、騎士故か、それとも何かに目覚めよう故か、とてもじゃないが逆らえなかった。

そして、女王様の隣に立っているのは、白い髪を背中まで伸ばした、これまた『美』が付くほどの少女が立っていた。

恰好もまた独自で改造されており、ドレスと鎧を上手く組み合わせたような恰好をしている少女はガウエインに一睨みする。

「何故私には挨拶をしないのですか、黒靴ガウエイン殿？」

「これは申し訳無い、だが朝から睨まれてはこちらとしても困るのだが……、フェイル」

「ふん、私の名は確かにフェイル・サーベル・ド・ランスロットですが……気安く貴方に名で呼ばれる間柄ではありません」

フェイルと呼ばれた白髪美少女はガウエインと顔を逸らす。

「ああん♪ そつぽを向くフェイちゃんも可愛いわねえ♪」

そして女王様こと、桃ちゃん先輩はフェイルを豊満な胸に押し寄せ、埋もらせた。



因みに桃ちゃん先輩は両刀使いであります。

「はぶっ！　　ちよ、吉備津先輩殿！　　く、苦しいー！」

フェイルはバタバタと暴れるが一向に離さない桃ちゃん先輩。見馴れた風景にガウエインは愛用バイク「GALL-10」を校門の通り道を邪魔にならぬ所に置きに行く。

何故ガウエインがこんな早朝に御伽学園の校門に来ているかと言うと、基本的にガウエイン個人的で桃ちゃん先輩の手伝いに来たのだ。

ガウエインは根本的に人に頼まれたり、女性の人から頼まれた事はほとんど苦い顔せずに『手伝い』をしているのだ。

祖父に教わった教おしえである『騎士道』の中の一つ「親切心」と『武士道』の徳目の一つ「信」を貫いているからである。

と、カツコ良く言っではいるが、簡単にガウエインは女性からの頼みを上手く断れないだけであるからだ。

ガウエインも無理難題を押し付けられても、別に良いか、という考えを持って行なっているので器の大きさなどを良く分からせる性格だった。

勿論、女子だけの頼みを断れないだけでは無く、見事に男子からの頼みも断れないらしい。

「騎士道の一つ「寛大さ」」

ガウエインは眩きながら、黒いコートを靡きながら桃ちゃん先輩の元に戻り、風紀委員の仕事の手伝いをしたのであった。

因みにフェイル・サーベル・ド・ランスロットは生徒会に所属しており、風紀委員の手伝いにかもしだされていたらしい。

※

時間は過ぎて昼頃、ガウエインは一人屋上にて読書をしていた。読んでる本にはカバーが付いている為なにを讀んでいるのか分からない。

だが、ガウエインはかなり集中した瞳で本を讀んでいる。するとそこに、

「よう、こんな所に居たのか、ガウエイン」

「一人だなんて、寂しい過ごし方をしてるわね」

ガウエインは本から目を離して見ると、目の前には金髪を独自に編んだ髪が特徴な青年と、長いオレンジ色の髪をした女性が居た。

「鳥栖淡とりすあわいと萌仁香モニカ・ルーカンか、どうした」

「ご挨拶だな、寂しそうに本を讀んでいるガウエインを見つけたからやって来たって言うのによお♪ あと俺をトリスタンと呼べ」

「……名は淡あわいだろ」

「いや、トリスタンだ、苗字と名前を付けるのは確かにおかしいが、トリスタンだ」

「……また面倒なことになってるんだな、萌仁香」

「なんでフルネームで呼ばれたんだろうと考えている私って……もしかしたら俗に言うKYなのかしら！」

「聞いてないか」

鳥栖淡とりすあわいことトリスタンは、自分の名前と苗字のことに暑く語りながらガウエインの横に座り、ルーカンは空いているもう片方のガウエインの横に座った。

「それで、何か用」

ガウエインは本に羅列された文字に目を戻しながら二人に聞く。

「んくそうだな、萌仁香が言ってく……」

「嫌よ」

「即答ツスか!? 最後まで言わせて！」

「さん、ハイッ！ どうぞ」

「ええッ！ いきなり！ え、あつ、えと、んくそうだなく、萌仁香が言ってくりえ……… 噛んだ!!」

「……… 振ってあげれば残念過ぎる結果に私は至極残念な気持ちになって残念なトリスタンに残念な眼差しを送ってあげるわ………」

「残念残念と残念を連呼するなア！ 何ですか？ 計残念四回言っただけですか？ 残念に何か嫌な思い出とかあるのか!? っておいつ！

やめろ！ その不愉快な残念な眼差しやめろ!!」

とトリスタンとルーカンが漫才をしている中、ガウエインは本を淡々と読破しつつある。五ページくらい読んだ。

「分かったわ！ 自分で言いますよ！ あのな、ガウエインに学

園から、いや……… 《学園を守護せし円卓の騎士》から命が出た」

トリスタンは真面目な表情になってガウエインに告げた。ガウエインもトリスタンから出てきた《学園を守護せし円卓の騎士》という言葉に反応する。

「最近になり鬼ヶ島高校の生徒たちの行動範囲が広がっているみたいなのよ、そこで鉄馬バイクを持っており、《円卓の騎士》内で『最強』の称号を受け持っている黒靴ガウエインに正式に荒神洋燈あらがみらんぶ学園長から命が下りました、という話なのよ」

ルーカンの言葉を聞いたガウエインは少し訝しげな顔をするが、承諾したように、本を閉じて、言う。

「《円卓の騎士》の一人、この黒靴ガウエイン、主である荒神洋燈パトロール学園長の命により今晚から市内の警邏パトロールを実行する、以上」

横になりながら答えたガウエインだった。

「《円卓の騎士》の一人、このトリスタン。騎士ガウエインからの命令実行の意思を確認、貴公の武運を祈る。……… まあテキトーにやっつけ」

「《円卓の騎士》の一人、このルーカン。騎士ガウエインの命令実行意思を確認、貴公の武運を祈る。……… 大変だけどがんばってね」  
トリスタンとルーカンも最初は真面目な顔をして、後はガウエイン

を労う言葉を掛ける。

《学園を守護せし円卓の騎士》

それは学園を己の武力で護る為に結成された生徒による組織であり、学園長である荒神洋燈を主とした十二人の『騎士』が存在している。

ガウエインはその《学園を守護せし円卓の騎士》の一騎であり、御伽銀行の一員でもあるのだ。

正式名称が《学園を守護せし円卓の騎士》なのだが、長いので《円卓の騎士》と略されている。

そして、その『騎士』となつた者は学園を護り抜き、無事に卒業までいければ学園長からなんでも願い事を叶えることを約束され、護れなければ白紙と、かなり際どい仕事なのだ。

だが、ガウエインは荒神洋燈に「借り」を作ってしまった為に上手く利用されているガウエインなのだ。

《円卓の騎士》メンバーと別れ、自分のクラスにへと戻ろうとしたガウエイン、すると廊下でぴよぴよこと歩いて来るピンク色のツインテール女の子を見掛ける。

背はあまり高くないが、細身の身体はすらっとした印象を与え、ツインテールに纏められた長い髪はどこか兎の耳を彷彿とさせる。つぶらで大きな瞳以外の顔のパーツは小振りで、どことなく可愛らしい愛玩動物のような雰囲気を漂わせている。美人というより、可愛いという言葉が似合う少女だ。

ガウエインの顔見知りな為に声を掛ける。

「宇佐見か」

「アラア、騎士くんじゃない。相変わらず長身ね」

宇佐見と呼ばれた少女は長身であるガウエインを見上げながら答える。

容姿に合わせるように制服も少女趣味な改造が施されている。白を基調とし所々にピンクをちりばめたゴスロリファッションと化した御伽学園指定制服のなれの果ては、しかし、とても宇佐美には似合っていた。

そしてガウエインは、自制していた。

己の欲望を抑えて、

(相変わらず何て綺麗なピンク色の髪なんだ、あの二つに別れさせたツインテールなんて最高の組み合わせだ、そして何より……長髪だ……)

ガウエインはそれはもう必死に抑えながら、宇佐見と向き合う。

「……?……どうかしたの騎士くん?     なんだか目が凄いことになってるわよ」

宇佐美はギンギンと隠れていない片方の目を見開きながら、何気なく髪を直視しているガウエインに訪ねる。

だが、ガウエインは我慢出来ず、リミッターアウト制御解除してしまった。

スサツ

「えっ!」

ガウエインは宇佐見と同じ目線にする為に膝を床に付けさせて、宇佐見と見つめ合う。

まるで騎士が王女にせまげん跪くような体勢になり、そしてゆっくりと、ガウエインは宇佐見に近付いて行く。

「へっ……あつ、なっ……」

「動くな、宇佐見」

ガウエインは優しく、そして何処か凛々しく宇佐美に言う、すると宇佐美はピシッと固まる。

※注意

廊下です」(´、`;)」

ガウエインは手を伸ばし、そして、

「髪に、ホコリが付いている、今払うから動くなよ」

何気なく酷い事をポツリと言ったガウエインなのだが、宇佐見は目の前で起きている事態で頭が回転してなかった。

ホコリのある場所に赴いたのならまだホコリが被る理由が分かるのですが、普通にしていた人の頭にホコリがあるなんて、あるはずがありません。

つまりそれは風呂に入っていないという意味になりうるかもしれないから、失礼な言葉だと思うのですが………本人はそれどころじゃ無いみたいです。

（あああ〜っ♪♪ マカの金色に輝く金髪も良いけど、宇佐見のこのピンク色の髪はかなり、かなり触り心地が………良い！）

ガウエインは宇佐見の髪を弄りながら見つめる。

※注意

廊下だっつーの（ノ>ム<ノ

「ちよ……ちよっと、恥ずかしいわよお〜」

宇佐見は顔を赤くして言う。

「ま、まだホコリがあつてだな、もうちよっとだけだから………綺麗だな」

ガウエインの発言一つ一つに宇佐見は顔を赤くして、逃れようとするが、ガウエインの大きな身体で覆われておる為に、逃げられない。

だが、そこに、ガウエインにとっての「抑え付け」がやって来たのだ。

「……………  
ガークン」

ビクッ!!!

果てしなく驚いたガウエインは思わず体勢を崩してしまい。

宇佐見を押し倒す形になってしまった。

「きゃ、きゃあ／＼／＼」

「しまっ！」

ガウエインはすば抜けた身体能力で宇佐見を上手く庇うようにして廊下に倒れる。

だが、上手い具合に宇佐見を胸の上に抱き上げた恰好で倒れてしまっている。

ガウエインはすぐに興奮していた己の欲望が血の気を引くように無くなっていく。

そして、目の前には、

「……………(ニコニコ)」

満面な笑顔を浮かばせ、片手にバズーカを構えている、金色の魔女が居た。

「宇佐見呼び止めて済まなかったあと髪を触らせて貰ってありがとうとても艶（つや）やかで艶（あで）やかでそしてまあ色々と申したいことがあるがそれじゃ」

物凄い早口で宇佐見にそう言えば、ガウエインはすぐに廊下の窓を開け、そして、

「とうー」

飛んだ。

「ちよっ!!?」

宇佐見にとって驚愕過ぎる展開で最早思考が追いつけなかった。

だが飛び降りたガウエインに追撃しようとする人物が唯一人居た。それは、

「アハハハ！ 待つヨー！」

マジヨーリカだった。

ドガアアアアン！

マジヨーリカは窓に足を乗せ。容赦無く肩に担いだ『漆黒の大罪を背負いし破杖』……………まあ要するにバズーカを発射つ。

だが、弾は流石に火薬では無い、だが、  
「バブツ!? こ、これは水弾か!？」

砲弾はゴム袋に水をギュウギュウに積みし込んだ水弾だった。

ガウエインは空中でマジョーリカ特性水弾を受け、体勢を崩し、地面へと落ちていった。

「まず言いたいことが山ほどあるけど、取り敢えずこれだけ言わせて……あんだ何してんのよ!？」

宇佐見は当然に落ちていくガウエインに弾を放ったマジョーリカに驚きながら、窓からガウエインを見る、するとガウエインは糸も簡単に地面に降り立つ。

「……甘いな、マカ」

ガウエインは上に居るであろうマジョーリカに、挑戦的な瞳で見ると、濡れた恰好のまままで逃走に掛かろうとする、だが、

「ぐふふふ☆ 甘いのはそっちだヨー♪」

(なに?)

マジョーリカは牛乳瓶底型眼鏡をクイツと上げて不気味な笑みと、『漆黒の大罪を背負いし破杖』……ん、まあ要するにバズーカを肩に掛けながら言う。

ガウエインは疑問に思い、自分の身体をもう一度見ると、段々と水弾で受けた濡れた場所が白くなり、固まっていた。

「こ、これは」

「それは特別な液体で作ったヤツだヨー♪ 乾燥すればコンクリー  
トのように硬化し、動けなくなるヨー♪」

マジョーリカの言った通り、濡れた場所から次第に白色に変わり、硬い錘のように重くなっていった。

(こ、これは……)

「ヨヨヨ♪ 今日こそガーくんを止めてみせたヨー!」  
「いけるな」

「待ってるヨー、今すぐ行って私の研究に手伝ってもらおう……ヨ?」  
ガウエインは硬化したままガシンガシンと歩いて行った。

「んなー!」



「確かに硬くなっただけはいるが、普通に歩ける程度だ」

ガウエインはそれだけ言うと、すぐに逃走していった。

「しまったヨー！　普通の人間なら動かなくなるけど、ガークン

には効かなかったヨー！」

マジョーリカはすぐにガウエインの後を追って行くのであった。

「一体なんなのよ……」

そして途中から空気になっていた宇佐見は、凄すぎる二人を見て唾然としていたのであった。

※

「なるほど、了承したのじゃな、黒軋は」

「はい……しかし何故アイツなのか、荒神学園長？」

「そうじゃのう、簡単に黒軋は移動手段に困らんじやろうし、鬼ヶ島の生徒がおつても簡単に蹴散らすじやろうて、故に黒軋に任じたのじゃ」

「……確かに『円卓の騎士』内では黒軋ガウエインは強いかもしれませんが、ですが、純粋に強さだけなら『ラモラック』の方が——」  
「確かにラモラックも言わずと知れた強者<sup>つわもの</sup>じゃ、しかし故に純粋なだけの強さだけでは最強になりえぬのじゃ」

「では……黒軋ガウエインにはその『純粋な強さ』以外の何かを持ち合わせておられると、言われるので？」

「そうじゃな。その通りじゃよ」

「……」

「理解しかねるかの？」

「いえ、理事長<sup>王</sup>の命は絶対であり、仕えし騎士は命令<sup>それ</sup>を実行するまでで

「ごぞいます」

「敬意を払うのは結構じやが、社会に出たらどうなるのじやろうな、お前のその性格は」

「・・・『学園を護りし円卓の騎士』は学園長兼理事長の命を受け、騎士ガウエインはその命を実行することの確認の報告を終えます、私はこれにて・・・」

「むう・・・忙しい奴じやのう。じやが、黒軋ガウエイン、あ奴はなかなかの逸材じや、儂の荒神財閥に必要な・・・な」

## 第5話 「騎士と猟師」

「この場所に降ろせば良いんですね？」

そう言つてガウエインはゆつくりとだが校庭に置いてあつたサッカーで使うゴールを、誰も来なさそうな場所に置いた。

「あ、相変わらず。凄いわね、黒軋くろぎしくん……」

とても一人じゃ動かせないであろうサッカー場にある白いゴールをガウエインは掴み、浮かばせて、邪魔にならない所に移動させた。

「よつと」

どんっ!!

ガウエインはゴールを置く。

「また何かある?」

「う、ううん。もう無いよ、ありがとうね黒軋くん、御伽銀行つて以外と頼りになるんだね」

「これからも御伽銀行を宜しく」

※

ガウエインが手伝っていたのは陸上部の皆さんで、授業でゴールを出したのは良いが片付けてなかつたので、練習が出来なかつたらしい。

ならば、皆で動かせば良いのでは? と思うのだが、そこにもき

ちんとした理由があり、今現在の御伽学園のサッカーゴールは超合金やら、闇の結社が特殊な武器を作っている材料がオリハルコンなどで出来上がっているらしく、サッカーゴールを運ぶ為の運搬車があるらしい、何故そんな風に作られたかと言うと、卒業して行つた先輩達の中で、何故か『思い出として作りたい!』と考えた人が居たらしく、秘密裏に作られていたらしい。

まずガウエインはどこでその超合金やらオリハルコンをその先輩が手に入れたのか気になつた。きつと学生ならではの手腕で中々面白い展開を築いた話で手に入れたのではッ!? とガウエインは小説

を読みすぎたイタイ脳を活用しながらも、きつと最後にはあの魔法のランプ魔神ジジイが夢を壊すことをオチ付けて思想を終える。

そして、そんな超重量のサッカーゴールを運ぶ運搬車がその日に限って修理に出していて運べなかつたらしい。

そこで、学園で幾つもの問題（荒事）を解決してきたガウエインに頼み込むと、ガウエインは普通に了承して、見事に運搬車しか運べないサッカーゴールを運んだのだ。

「う〜ん……以外と重かつたな」

そして運んだ本人はまったく表情を変えないで、御伽銀行本店に戻っている途中だった。

「よう、ガウエイン。またまた相変わらず無表情のまま歩いてやがるな」

「……トリスタンか」

ガウエインは声を掛けられた方を見ると、金髪に独自に編んだ髪が特徴な青年、鳥栖淡トリスタンが居た。

「これから何処行くんだ？」

「御伽銀行だ」

「ん〜、そうか」

ガウエインはスタスタと御伽銀行があるプレハブ小屋に向かおうとするが、何故かトリスタンも付いてくる。

「……何か用があるのか？」

ガウエインは付いてくるトリスタンに質問する。

「いやあ、暇だから付いてっただけなんだけどね。ついでに御伽銀行に寄らせて貰おうかなと♪」

「餌をやるから何処かに行ったらどうだ」

「あつはつは、人を犬みたいに言うなよなあ」

トリスタンはニカニカしながらガウエインに答える。ガウエインも溜め息を吐きながらまた歩を進める。

（別に良いか）

ガウエインはそう思いながら御伽銀行へと戻って行った、若干一人

を足して。

※

ガウエインとトリスタンは御伽銀行地上店と言い張る、ボロボロなプレハブ小屋に着くと、ガラガラとドアが開く。

「……！……騎士先輩」

「うん？　涼子か」

ドアから出て来たのは御伽銀行に所属している一年の大神涼子で、何やら苛々している雰囲気だった。

「……失礼します」

「ああ」

大神はガウエインの横を通り過ぎ、帰って行った。

「なんだ、なんだ？」

そして一緒に居るトリスタンは若干自分だけ挨拶されなかった事を気にしつつ、今の展開に興味を示す。

ガウエインはトリスタンを無視してプレハブ小屋に入ると、そこには前髪を下ろして目を隠している男の子と、御伽学園で『赤頭巾ちゃん』と有名なロリキャラの赤井林檎が居た。

「お帰りなさいですの、騎士先輩、あら？　トリスタン先輩も一緒ですの？」

「失礼しますよ、赤井ちゃん」

林檎が帰って来たガウエインと、トリスタンに挨拶をする。

「依頼は無事に終了した。副頭取に連絡をしといてくれ」

「はい、分かりましたですの」

「あと、邪魔だったか？」

ガウエインは物凄くビクビクしている男の子に申し訳無く言う。

「あ、あれ？　ガ……ウエインさんですか？」

そしてビクビクしていた男の子は、ガウエインを見るとハツとする。

「うん？　君は・・・ああ、亮士りょうしか」

「はいッスー！」

ガウエインに気付かれたビクビクしていた男の子、亮士はガウエインに名前を呼ばれて元気の良い挨拶が帰って来た。

「ご存知なのですか？」

「ああ、同じ寮で暮らしてる」

ガウエインはそう言いながら壁に寄りかかる。

「それで、何かあったのか？」

ガウエインがそれを言うと、亮士は黙ってしまった。

「何か訳ありね」

そしてトリスタンは興味津々に理由を待つ。

「まあ、かくかくしかしかかなのですの」

「そうか、この前の仕事でストーカーに襲われた涼子は影でジツと見ていただけの亮士に怒って出て行ったのか」

「えっ!?　今で分かったの!？」

「しかも亮士は涼子に惚れていて、告白したのは良いが、視線が怖くてヘタレになっていると・・・」

「マジで!？」

「だが亮士も亮士なりに涼子を守るように援護射撃をしたと・・・言う訳か」

「はっ!・・・ま、まさかの読心術を心得ているのかガウエイン!」

ガウエインが次々に理解していつてるのに驚愕を示すトリスタン。

「凄いスね・・・ガウエインさん。でも・・・何を言おうと、飛び出せなかったのは変わらないっスよ。人前に出るとヘタレて身体が思うように動かなくなる、それが分かってたっスから。あの十数メートルはおれには長すぎたんスよ。・・・情けないっスね。あれほど自分が情けなかったことはないっスよ」

りんごとガウエイン、トリスタンは黙って亮士の独白を聞く。

「それなのに告白したのはっスね、すぐ側にいれば、突っ立ってるだけでも盾変わりにはなるだろう・・・そう思ったからなんっスよ。でも・・・考えてみればこれも逃げっスよね、自分を変えようとし

ていない」

……ほんと情けない。

ガウエインの耳に亮士の最後の一言が届く。

亮士はその一言を絞り出すようにそう言って、立ち上がった。

「それじゃあ帰ります。どうもっした」

とぼとぼと部屋を出ていった亮士、ガウエインはその後ろ姿を見て少し寂しい目をする。

「……亮士」

「……んまあ別にな、盾になるだけが『守る』って意味じゃないと思うけどな、俺は」

「私もトリスタン先輩と同じ意見ですの、でも、まあ、男の子的には騎士（ナイト）になりたい年頃なのかもしれないのですの」

三者三様の反応する。

「…….……んーやっぱり欲しいですね」

「亮士をか？」

「ハイですよ！ 涼子ちゃんの内面を見抜いた彼なら頑なな涼子ちゃんをどうにかできるかもしれないですし、何より…….……」

一旦言葉を切った林檎にトリスタンは不思議にがり、聞いてみる。「何より、どうしたの赤井ちゃん？」

「ふふふふ、二人を絡ませるといじりがいがさらにありそうですよ。でも涼子ちゃんは頑固ですし、今の状態で森野君を受け入れるなんてのは余程のことがない限り無理でしょう。ほんと、ままならないものですのねえ」

(な、なんて子なの!?)

そう静かに頭の中で思ったトリスタンでした。

※

ガウエインは受け持った仕事を全部終わらせたので、お馴染みの魔女工房へと向かうと、そこには。

「おジャマしてるよ♪」

萌仁香（モニカ）・ルーカンが居た。

「・・・んで此処に萌仁香が居るんだよ」

「私も聞きたいな、と思ったら間違いかしらマジョーリカさん？」

「んゝ間違いじゃないヨー」

ルーカンとマジョーリカはグツグツと巨大な鍋が何かを煮込んでいる横でお茶しながらガウエインとトリスタンを見た。

「萌仁香か、どうしたんだ？」

「マジョーリカさんをお願いしたい物があつてね、それより何で弾（タン）が此処に——」

「タンじゃねえよ！ “トリスタン” だ!! やめろその名っ！」

ルーカンの間違いにトリスタンは怒り奮闘して訂正させる。

「良いじゃない、本名がタンなんだから」

「・・・嫌だ」

「私もそう思うヨー♪」

「嫌だ」

「俺もおも——」

「嫌だアあああああああああああああああああああああああああああッ!!!」

「「必死かつ!?!」」

トリスタンは物凄い剣幕で本名を毛嫌う。

「この名でどれ程の苦勞と苦行を抱きながら生きてきたか分かるまい！」

トリスタンは近くに居たガウエインの肩を揺すぶりながら大声で叫ぶ。

「静かにしろよ・・・」

「いいいや！ お前らには前々から一回俺の説明をするべきだったんだ！ 良いか、この名前はな——でな——」



——そして

——あれから俺

は

——あの日から——

「急に自分の名前について詳しく、そして熱く語っているがガウエインの頭の中では、

(.....ああ、何でだろ、急に綺麗な髪触りたいと思ってきた) 物凄く関係無いことを考えていた。

そして説明が終わったトリスタンは、

「——そして俺はこの『トリスタン』にプライドを持つようになったんだ、.....分かったくれたか、ガウエイン」

「そうか、お前も大変だったんだな」

「お.....おお！ やつと、やつと分かってくれたかガウエインよ！」

「ああ」

「おお！ 我が友よ！ 我が盟友よオオー！」

「髪は素晴らしいよな」

「何の話だアアア!!」

正に感動な場面になり掛かろうとした瞬間に、トリスタンはガウエインの横を通り過ぎ、ガシャーン！ とマジョーリカが作った数々の発明品に突撃してしまった。

「てめえガウエイン！ 人が名前についてどれだけ熱く語っていたと  
思ってた痛(た)アアアアアい!! えっ普通に痛い!?!.....痛たい!

痛い何コレ痛い！ 手が挟まったぞ！」

「おおー！ トリスタンも私の実験に手伝ってくれるのかヨー♪」

「実験って何ッ!? てか痛いんですけど、この鳥を捕まえる為のト  
ラップ的な物！」

「おりよ？ ソレは『相手絶対逃避不能！ 必殺トリートラップ』  
だヨー！」

「何そのツツコミ所が満載な品名！ 取り敢えずコレ取れないの!?!

さつきから俺の肉の食い込みようが半端無えんだけど！」

「痛えんだけど!？」

「取れないヨー♪」

「えっ、あつ、取れないの!？」

あつ! そういえば『相手絶対逃避不

能』とか前置きあったわ!

つうか痛い!」

「ぶっ (笑)」

「(笑) じゃねえよ萌仁香アアア!!」

てかさつきから言ってますけ

どね、うん、実際ゆっくり見てから溜めてから言うけどね、コレ

食い込みようが半端無えよオオオ!」

痛いイイイ!

とトリスタンが床を転がっている中、ガウエイ

ンは頭を押さえて考えていた。

また頭取にコキ使われるな。

ガウエインはそう思いながらトリスタンを足で止め、食い込んでいたトラップ的な物をガウエインは糸も簡単に取ってあげて、簡単に取れたことにシヨックを受けているトリスタンに『へボいな』と止めの一言に突きつけ、トリスタンのプライドと精神と“何か”をトリプルブレイクしたガウエインだった。

## 第6話 「闇夜駆ける鉄馬と騎士」

ガウエインは夜の御伽花市を愛用二輪車 “GALLER10” で巡回中であった。

だが、ガウエイン一人だけでは無く、もう一人隣で騒いでいた。

「うひゃあー♪ はやいヨー♪」

そう、マジョーリカ・ル・フェイと一緒に巡回（ツーリング）しているのだ。

「ヘルメットちゃんと被れよ」

ガウエインはかなり早い速度で移動しているのだが、軽い感じでマジョーリカのヘルメットを片手で、ポンツと叩く。

そう、今のガウエインの二輪車にはサイドカーを付けてあり、取り付けるには十分過ぎるサイドカーだった、だがガウエインはそこを不安にさせないべく、早い速度を保ちながらして安全運転を遂行しているガウエインには称賛に値する。

「今夜のGALLER10は走りが良いな、ステアの拳動もエンジンの響きも心地良いし、道路のコンディションも丁寧だ。思わず速度（スピード）を出してしまう程に刈りたたされる！」

そして若干、二輪車が調子よく走る為にテンションが少し上がったているガウエイン。

「・・・荒神財閥が加わっている新型二輪車、超電動リニア二輪も気になるヨー」

そして隣で少しガウエインのテンションに驚いていたなからも律儀に話に加わるマジョーリカだったが、ガウエインが好きそうな話題を振り掛けてみると、顔は無表情だが、ガウエインは目をかなり喜びを表しながらマジョーリカとバイクについて話に花を咲かせていた。

※

「ふう・・・夜の外は寒いだろ、マカ。何か暖かい物を買って来るよ。何が良い？」

御伽花市をある程度巡回したガウエインとマジョーリカは、コンビニの近くで休んでいた。マジョーリカの恰好は、いつもの学生服に大きなローブを着、牛乳瓶底型の眼鏡を掛けてちよこんと座っていた。ガウエインの恰好も変わらない、黒いコートの上に、ヘルメットと言う名の兜、そして甲冑（ライダースーツ）を着ていた。

「ん、それじゃ私は冷たい炭酸水と、アイスが欲しいヨ」

「却下だ、聞いてるだけで身を寒慄（かんりつ）する。まあ……俺が適当に買っておく、マカの好物は熟知しているつもりだからな」

ガウエインは兜（ヘルメット）を被りながらは流石にコンビニに入れないので取り、スタスタとコンビニに入って行った。

（ふふふ、『マカの好物は熟知しているつもりだから』……か）

マジョーリカは頬を赤くさせながらサイドカーで待っていた。

※注意、高校生が大型二輪車と大型特殊二輪車、つまりサイドカーを付けたバイクは乗れませんよ☆★

知ってますって？ アハハハ！ じゃあ大丈夫だア!!

「警邏（パトロール）……か」

ガウエインたちは最近妙にチラつく鬼ヶ島高校生が御伽学園（ウチ）にちよっかい出しをしてこないかを見回る仕事を受け持ったのだ。

もしかしたら『荒事』になるかもしれないからだ。

そして、ガウエインはコンビニの中から外に居る奴らを発見させる。

（アイツらは……鬼ヶ島高校の奴ら……か）

外に居たのは、数人の学生で、結構な人数で集まっており、駐車場を我が物顔で座っていた。

「……すみません」

ガウエインは店員に聞く。

「は、はい」

レジに居た女性の店員が反応する。若干ガウエインの恰好を見て驚いていたが、無視。

「あそこで集まっている学生はいつもああやっているのですか」

ガウエインは親指を外に向けたまま、質問する。

「ああ、はい。ここ最近なのですが、良く駐車場で集まるようになってはああやって駐車場の邪魔しているんです……」

女性の店員は溜め息を吐きながら言う。

するとガウエインは顔色変えずにこう答えた。

——俺が、なんとかします。

※

「きゃはははは！ でアイツがよく森村の財布盗んだのバレてやがんのオー！」

「マジで!? アイツばかりじゃねエの!?」

会話に花を咲かしている学生たちなのだが、如何せん場所や時間帯が悪い。

そんな少年たちを叱る大人たちは居なかった。

だが、一人の少年が注意しにやってきた。

「…………お前ら、邪魔だぞ」

「あアん!?」

鬼ヶ島高校生の少年たちは注意しにやって来た相手を見てみると、

「……………何?」

「んなつ！ お前は『黒騎士』!?」

鬼ヶ島高校の学生たちはガウエインを見た瞬間にさつきまでの去勢が無くなっていた。

「なつ、なんてたつて此処に黒騎士が居やがるんだよ！」

「お、俺が知る訳無えだろうが！」

「俺達だって分かんねえよ！」

鬼ヶ島高校の各々たちは、互いに今の状況を理解しようとしていた

が、その場に居た一人の学生が、

「オイオイ、何ビビってんだよ。御伽学園の奴だろコイツ、なら……」  
ガウエインに近寄りながら、馬鹿にしたような顔でガウエインの胸ぐらを掴む。

「オウオウ、坊っちゃまが何の用だ！ あアン！」

かなり威勢良く言っただけで来た鬼ヶ島高校の学生の男、ソイツは決まっただけ、と言わんばかりに決め顔をしていると、かなり焦った声が男に浴びさせる。

「ば、馬鹿野郎ツツ!! 黒騎士(そいつ)に手を出すな! 死ぬぞ!」

焦った声で言っただけで来たのは、この集まりで頭と思わせる大柄な男は、手を出した男を止めようとしたが、

「遅い」

打撃。

たったそれだけだった。

「——ツ!!」

ガウエインの胸ぐらを掴んでいた男は生まれて初めて脳が揺さぶられる感覚に襲われていた。

ガウエインが行ったのは簡単な一動作だけ。

ただ『殴った』だけだ。

たったそれだけで男は意識が飛んでしまう程の衝撃に襲われ、数本の歯が折れて口から血が流血していた。

「……しまった、血を流させてしまったな。済まない。医者に行くか」  
そしてガウエインは無表情のまま、殴った相手が流血しているのに気付く病院まで送ると言ってきたのだが、

「ひ、ヒィ!!」

「は、初めて人が人を殴り飛ばした所を見たかもしれねえ……!」  
「化物……化物だツ!」

他の学生たちは一目散に逃げており、残りの鬼ヶ島高校の学生たちは気絶して、パクパクさせている男を拾って、撤退していった。

駐車場に残った血痕が物凄く嫌な感じになっていた。

(面倒事は全部、あのエロ魔神にでも押し付けよう……うん、それだ)

ガウエインはそう思いながら、買ってある暖かい食べ物や飲み物をマジョーリカの下へと持って行こうとした。

※

「はあはあ……な、何なんですかアイツ！ 何であんな破壊力抜群なパンチを持つてるんスカ！」

「俺が知るかよ！ とにかくこのバカを病院に連れてくぞー！」

鬼ヶ島高校の学生たちは散り散りになり、その日は解散となつて怪我をした男を病院に送り届ける為に走っている鬼ヶ島高生の佐林(さはやし)と高山(たかやま)が居た。

「ああ！ でも、こんな暴力を働くアイツに訴えれば……」

そして佐林と呼ばれている男は担がれている男の後頭部を押さえながら高山に聞く。

「ああ止めとけ、黒騎士(アイツ)を訴えたいのなら、パトカーを30車くらい準備しないと無理だ」

高山は気絶している男の両足を担ぎながら走っていた。

「この殴られた馬鹿は生粋の馬鹿だし、アイツと会うのは初めてだったから喧嘩を売ったが、圧倒的だったろ？ 無知な奴ほど酷いものは無いな」

佐林はガウエインのパンチを思い出し、身震いをする。

「アイツ『戦才(せんさい)』なんだよ、戦いの天才、つまり喧嘩がかなり強いんだ。もうアイツと喧嘩をしていると圧倒的過ぎて逆に清々しくなつちまうくらいに強いんだ」

厨二病みたいツスね……と佐林が呟くと同時に病院が見えて来たので、高山はペースダウンしてしっかりと佐林に教える。決して喧嘩を売ってはいけない相手を、

「良いか佐林、良く聞けよ。御伽学園には『騎士』という称号を持つて

いる人物が数人居る、その騎士と呼ばれている人物は一人一人が桁外れた戦闘力を所持しており、喧嘩を売れば最後、ボコボコにされてお仕舞いだ」

病院に着いた高山と佐林は気絶した同校の学生を、ぽいつと投げ、話の続きをする。

「絶ツツツ対に喧嘩を売るなよ!! 巻き添え喰うのはまっぴらだからな!」

「し、しません! 絶対に喧嘩を売ったりしましえん! つか怖いッス!!」

高山と佐林は互いに見つめ合い、そして無惨に投げ捨てられた気絶男を見て、

「よしッ!」

二人とも全力疾駆でその場から散って何処かに行ったのであった。

※

「さつきは大変だったみたいだヨー」

「アイツらも懲りずによくやるよ」

ガウエインはマジョーリカに買ってきたホットのカフェオレとコンビニ限定肉汁たっぷり肉まんを渡し、ガウエインはコーヒーを飲んだ後に、また巡回の為にバイクを走らせていたのだ。

すると、バイクを走らせていたガウエインの懐から携帯の着信音が鳴った。

ガウエインは道路の邪魔にならない所で一時停止し、携帯を取る。

「もしもし」

『あつ、こんばんわですの騎士先輩』

電話の相手は同じ御伽銀行に勤めいる、後輩の赤井林檎（あかいりんご）からだった。

「どうした、何かあったのか」

ガウエインがそう言うのと林檎は焦りながら内容を言う。



『はいですよ！ さつき涼子ちゃんから電話があつたんですよ、この前涼子ちゃんと私が受け持った依頼でお灸を添えてあげた愛の戦士（ストーリーカー）がどうやら逆恨みで涼子ちゃんを襲つてるらしくて……』

「復讐か」

ガウエインは静かに呟く、そして林檎も聞こえたらしく電話越しで「そうですよ！」と認める。

「分かった、林檎の察は近いから今すぐ迎えに行く」

『すみません、お願いしますですよ！ 私もすぐに外に出て待つてるですよ！』

林檎がそれだけ言うと、ブツンと通話を終了させた。

「……マカ」

「内容は分かったヨー。武器は揃つてるヨー♪」

マジョーリカはブカブカのブレザーから色々な発明品を取り出し、不気味な笑い声を出しながらガウエインにさっさと発進しろ的な視線で居るとガウエインも領き、そして、ブオオオオン！ とエンジン吹き鳴らし、林檎の察へと向かつていった。

※

その頃、オオカミさんこと大神涼子（おおかみりょうこ）は、通っているボクシングジムの帰りに何故か一緒に帰ることになった白馬王子（はくば・おうじ）と現在、愛の戦士（ストーリーカー）に逆恨みで襲われている所だった。

大神と白馬の前には数人の男たちが立ちふさがっており、相手が女だからと油断していたお陰で何人かは道路で踞（うずくま）っており、そしてその中の一人、頬に大きなガーゼを当てた男、愛の戦士は焦っていた。

こんなハズじゃなかった。

そう、こんなハズでは無かったのだ。

相手は女だから大人数で押せば何とかなると考えていた愛の戦士、最初は余裕をかましていたのだが、今の状態につれ、そんな余裕は消

えていた。

そして、数人居た男の一人が鉄パイプを振り回し、大神の頭上へと振り下げていた。

「くっ」

前いた連中だけでなく、後ろにも奴らが居たらしく、伏兵となり大神を襲ったのだ。白馬は他の男を相手にしている為にこちらにこれない。

大神は覚悟を決め、最悪攻撃を受けても意識を保とうと歯を食いしばる。

だが、次の瞬間……。

ゴスツ！

そんな鈍い男が辺りに響いた。

大神はいつまで経っても頭上から振りかかる衝撃がこないのを不思議に思ったが、その隙に目の前の男を地に沈め振り返る。そこで見たのは倒れている一人の少年だった。

※

ガウエインはすぐに林檎を拾い、大神が襲われている現場にへと向かっていった。

「は、早いですのーッ！」

そして林檎はサイドカーにマジョーリカが居る訳で結果的にガウエインの後ろに乗る結果になったのだが、もの凄い速さでバイクを飛ばすガウエインに声を掛ける。

車では無いので勿論シートベルトなんてものは存在せず、己の腕力だけで突き離されないようにガウエインの背中に抱き着いていた。

余裕があれば林檎特有の腹黒い何かをしてるかと思えば、そんな余裕は無かったらしい。林檎は力一杯にガウエインにしがみついていた。

「速いか？ 一応、時速ギリギリで走っているんだが」

「きやあ~~~~~!」

ガウエインは前を向きながら喋っているのだが、風がびゅんびゅんと風きってるので声が聞こえていなかった。

物凄い速さで現場周辺に着いたガウエインはスピードを緩やかにし、大神を探していた。

因みに林檎はかなり脱力しながらガウエインの背中に寄り掛かっていたりする。

「……ん？ あそこに居るのは涼子たちではないか？」

「あつ、本当だ、居るヨー」

「マ……マジですか？」

ガウエインは器用にバイクを捻りさせながら大神たちと倒れている男たちを発見した。

「あれは、亮士か？ 何であそこに……」

ガウエインがそう言っていると、いつの間にか被っていたヘルメツトを置き、降りていた林檎は大神の傍へと駆け寄っていた。

「……いい雰囲気ですね」

「うわっ、りんごいつの間にも！」

「今さっきですよ」

林檎は若干真実を曲げたこと言ったがあながち間違えでは無かったのでスルー。

走ってきた訳では無いのに、息は荒く、嫌な汗で髪の毛もおでこに張り付いている。

速いのは速かったのだが、変わりに死ぬ思いをしたので元気ではなかった。

だが大神は林檎の様子を見て、そんなに心配してくれたのかという嬉しい気持を隠しつつ、照れ隠しに憎まれ口を叩く。

「ずいぶんと、お早いお着きだな」

「……察まで近いですし、何より騎士先輩のバイクで来たので、ちよ……超特急で、来ましたのよ？」

林檎は頑張っていたが、足ががくがくと震え始めてきて、その場でペタンと座り込んでしまった。

「それはさておいて、何故ここに亮士と、白馬先輩が居るんだ、理由を求めろ」

林檎の後ろから大型二輪車サイドカー付きを引つ張り歩いて来たガウエインはすぐに亮士や白馬に質問した。大神はガウエインの姿を見て驚いていたがスルー。

「君は確か、高等部二年の——」

「黒軋ガウエイン（くろきし・ガウエイン）と申します」

白馬もガウエインの姿を見て驚きながらも、ちゃんと対応する。

「騎士先輩、理由はオレが話します」

改造したガウエインの黒色の西洋甲冑（ライダースーツ）に驚きながらも、大神はガウエインに説明した。

「……分かった。白馬先輩、涼子を助けていただきありがとうございます  
ごぞいます」

「いやいや、どういたしまして」

「これは御伽銀行の借りといたしますので、何か俺たちの助力が必要  
なときは、おっしゃって下さい」

「そんなことはしなくても構わないよ。こつちが勝手にしたことだし  
ね」

ガウエインは大神から話を聞いて、白馬に大きな借りを作ったこと  
にお礼を言う。会話に復活した林檎も入ってきた。

「貸しは貸し、借り借りですの。私も御伽学園学生相互扶助協会で  
すのよ？ 一方的に借りを作るのは私どもの沽券（こけん）に、はて  
は存在理由にまで関わりますの」

それを聞いた白馬は仕方なく引く。

「分かったよ、じゃあ何かあったら頼むとするよ」

「はいですの。……と、これから警察呼びますの。白馬先輩はど  
うしますの？ 警察には私どものOBがいますので、そうそう悪いこ  
とにはならないと思いますけど、面倒には違いありませんの」

「そうだね、お暇（いとま）させていたただこうかな」

そう言つて帰り支度を始める白馬に大神たちは頭を下げる。

「では、ありがとうございますました」

「ありがとうございますましたの」

「・・・助かりました」

「どうもっス」

「いやいや、それじゃおやすみ」

白馬は王子様スマイルできらーんと齒を光らせ、手を振りながら去っていく。林檎は笑顔で白馬が見えなくなるまで手を振り・・・見えなくなつた所で笑顔を消した。

「・・・仕方ないとはいえ」

「ええ、まずい方に借りを作つたかもしれませんの」

「そうか？ 確かに体育会に借りを作つたのはまずいかもしれないが」

「体育会というよりは白馬先輩に借りを作つたのがまずいんですよ」

「確かになんとなく気に入らないけどな。でもそこまで気にすることか？」

大神がそう言っているとガウエインが口を開き静かに言う。

「白馬王子という男は、たらしという話だぞ」

「・・・それがなんの関係があるんですか？」

ガウエインの無表情顔を少しだけ深刻そうな表情に変えて言う。

「白馬王子という男は、今日のことと涼子のいいところに気がついてしまったかもしれない。もしかして、もしかすると——」

「はっ！ まさか、今日の貸しを使って涼子ちゃんにあんなことやそんなことまでっ!!」

林檎は目をクワツと限界まで見開く。

それを聞いた亮士は、

「そつ、それはまずいっス」

亮士が慌ててそう言った。だが、大神はどこ吹く風。

「オレを口説こうなんて物好きはそうそういねえだろ」

「物好き一号として意見はどうですか？」

林檎は亮士に振る。

「お、大神さんは、とても魅力的っス！」

と三人が仲良く話している中、ガウエインは安心して見守っていた。

無事で良かった。

ガウエインそれだけ思っ、警察が来るまで後輩たちと一緒に居た。

因みにマジョーリカはと言うと、色々とブレザーの中に発明品を入れ過ぎたせいでサイドカーから出られない状態になっていたのを知ったのは、数分後だった。

## 第7話 「騎士とメイド」

御伽花市のパトロールをした結果を、ガウエインが所属しているであろう御伽銀行に居る頭取に報告していた。

「ふうん、やっぱり鬼ヶ島高校の人たちが群がっていたんだねえ？」

そして御伽銀行の責任者であろう頭取・桐木リストがガウエインから報告を受けていた。

「街からの苦情も何件かありますね」

そして頭取が使っている机の傍に立っているのは、知的なメガネと見た目まんま秘書な桐木アリスが分厚いファイルを見ながら答えた。「はい、俺が見つけた鬼ヶ島高校の生徒は計36人、その全ての生徒には『注意』をした上で聞き入れを拒否され、更に『説得』を試み、それでも尚聞き入れないと俺が判断した場合には『冷静』に対処しました」

「う、うん？ 僕には注意が『警告』に、説得が『最終警告』に、そして冷静に『冷徹』に対処したように聞こえるんだけど？ 僕がおかしいのかな、アリスくん？」

「・・・難しいですね」

ガウエインは相変わらず何の表情も無しに淡々と頭取とアリスに報告するが、その報告内容がとても、凄過ぎた。

彼は確かに最初の二回くらいは言葉で注意をして、すぐに鬼ヶ島高校の生徒が居なくなるなら何もしなかったのだが。それでも、歯向かったり、注意を聞かない生徒が居れば『実力行使』という名の暴力的解決法で鬼ヶ島高校の生徒たちを退けさせて居たのだ。

その内容を見た頭取とアリスは、一気に言葉を無くして、ガウエインを見た。

「・・・君は本当に『荒事』専門家だね？」

「全くもって」

二人の言葉の内容が分からないガウエインは少しばかり思案する。すると横から、メイドさんが現れた。

「どうぞ、出来上がりの紅茶です」

メイド姿の鶴ヶ谷おつうだった。

「……言葉の内容が分からん」

「まあまあ、そんなんですか？ 取りあえずこちらにお座りください」  
鶴ヶ谷はガウエインの腕を引つ張りながら御伽銀行地下本店の中央にある長イスに座らせ、机の上に香ばしい紅茶を、では無く緑茶を置いた。

「……おお、緑茶だ」

「はい、ガウエイン様はこの前に『紅茶は、苦手だ』とおっしゃっているのを憶えていたので、紅茶ではなく緑茶にしてみました♪」

鶴ヶ谷は満面な笑顔でガウエインにそう言うと、ガウエインは鶴ヶ谷に向けて、

「ん……(グー)」

「グーです♪」

緑茶を飲みながら鶴ヶ谷にビシツと親指を立てると、鶴ヶ谷も返すようにグーをした。そんな鶴ヶ谷をメイドスキーな人が見ていたら失神ものの可愛いさを出していた鶴ヶ谷だった。

「そう言えば？ 赤井君から聞いたかい、黒軋君？」

頭取が思い出したように、座りながら緑茶を飲んでいるガウエインに聞いた。

「……？……何も聞いてません」

ガウエインも正直に答える。

すると頭取はニコリと笑いながらガウエインに言う。

「どうやらね？ 僕ら御伽銀行に新たな仲間が加わるかもしれないんだよね？」

※

頭取から聞いた話だと、林檎が亮士の能力を買い、御伽銀行の新たな仲間しようというらしい。

気配を消す能力に尾行潜入能力などで大活躍する亮士を是非とも仲間に入れたいらしく、もう地上店で大神たちと話しているらしい。



ガウエインは緑茶をすすりながら聞いていると、ドアの向こうから声が聞こえてきた。

「ふふふ、どうやら上手くいったみたいだね？」

頭取が微笑みながらそう言うのとドアが開いた。

「あ、騎士先輩。この間はありがとうございます」

「ん？ 涼子か。気にするな」

ドアから入って来たのは、可愛らしいフリルのついたボリユームのあるスカートを着ている女の子、赤井林檎とまんまスケ番のような恰好をした少女、大神涼子に、長い前髪で目を隠し、ビクビクしながら歩いて来る少年はガウエインの同じ寮に住んでいる森野亮士だった。

大神は部屋の中央に備えられたソファに座っているガウエインにこの間のお礼を言った。

そして林檎と大神にメイド・鶴ヶ谷がにっこり微笑んでお辞儀を一つ。

「お帰りなさいませ、りんごさま、涼子さま」

「おつう先輩こんにちはですの、騎士先輩も」

「どうも」

「はい」

「おう」

にこにこにこと慈愛あふれる笑顔で後輩たちを迎え入れる鶴ヶ谷、湯飲みを片手に持ちながら後輩たちの挨拶に反応するガウエイン。

そして大神たち二人の後ろに彫像のごとき固まったまま突っ立っている亮士に気付いた鶴ヶ谷。

「あら、そちらの方が噂の……」

「そう、期待の新人森野亮士君ですの」

「いったいどこが期待の新人なんだよ」

「涼子ちゃんのハートをゲットするかもしれない人なんですから、期待の新人ですの」

「はっ、ありえねー、ありえねー」

手を振り呆れたといったジェスチャーをする大神、だが、

「涼子ちゃん顔真っ赤ですよ？」

「なっ!!」

そんな大神と林檎のじゃれあいを横目に鶴ヶ谷は亮士に挨拶をする。

「それはそれは、申し遅れました。わたくし鶴ヶ谷おつうと申します。以後お見知りおきを」

「……森野亮士っす。よろしくお願いするっす」

亮士は何故か、かなり驚きながら鶴ヶ谷に挨拶する。まるで生まれ初めて初めてメイドを見たように啞然としたまま答えていた。

「それですので、森野君に皆さんを紹介しようと思っんですの」

自分の名前が出てきたことでやっとメイドの世界から現世に帰還したような亮士を、ガウエインは心配そうに見ていた。

「頭取、仕切っていただけですの?」

「え〜僕がかい? こういうことはアリス君が適任じゃないかな?」

頭取はそう言って自分の隣に立つ大人びた少女に話しかけるが、一言でばっさりと切られた。

「頭取、たまには働いてください」

アリスはその切れ長の瞳が絶対零度の冷たさで頭取を突き刺している。その鋭利な美貌がその冷たさに拍車をかけている。

「ん、ん〜? 黒軋君もそう思うよね?」

アリスから受ける冷たい視線を掻い潜り、ガウエインにへと助けを求め。

「……正直俺はどっちで……も……」

「黒軋さん」

「アリス先輩の言う通りだと俺は思います」

ガウエインもアリスから凄みの掛かった声を聞いた瞬間にアリスに寝返った。

「え〜黒軋く〜ん?」

「頭取、お早く」

「ん、ん〜そうだね〜?」

そしてアリスの凍えそうなほど冷たい視線を気にもせず、思いきりやる気のなさそうな顔でどうにか話をそらそうとしている頭取、わき

上がる非労働意欲を隠そうともししていない。と、そんなダメ人間一直線の頭取に救いの手がさしのべられた。

「……ちょっと待って、お客さんみたいだよ?」

「あらそうですの?」

「うん、ほら」

机の上に置いてある液晶モニターをくるりと回して皆に見えるようにする頭取。その画面には部室の前に立ってノックするかしまいかと迷っている少女が映っていた。

「アリス君、確か今日の当番は二年生組だったよね?」

「はい、そうです」

「じゃあ、それに一年生組も加わってもらおうかな? 実際見てもらえばただ紹介するよりみんながどんな人間か分かるんじゃないかな? 百聞は一見にしかずと言うしね? そう思わないかい? ねえアリス君?」

嬉しそうな顔でそう問う頭取にアリスはクールに言った。

「頭取はただめんどくさがっているだけでしょ」

「ははは、そんなことないよ?」

「まあ、頭取の言うことも一理あるので依頼によっては一年生組と二年生組の共同作業ということにしましょう。ただ、上の支店に上がるのは二年生組のみで、一年生にはここで待機してもらいます。全員で行ってしまうと依頼者を怯えさせることにもなりかねませんので、邪魔ですし」

「分かりましたの」

一年を代表して林檎が答える。

「では、お願いします黒軋さん、鶴ヶ谷さん。とりあえず、非常勤の方を呼ぶかどうかは依頼を聞いたあとで決めましょう」

「分かりました」

「かしこまりました」

そう言ってガウエインはスタスタと地上店へと繋ぐ階段に向かい、深々と一礼したあと、ガウエインの後を追うように部屋から出て行くおつう（メイド）さん。

ガウエインと鶴ヶ谷が上に上がるまでに簡単な紹介をした頭取とアリス。

色々と女子から攻めたてられていた頭取だったのだが上に着いたガウエインと鶴ヶ谷に視線が一気にモニターに集中する。

『いらつしやいませ。お飲み物は何にいたしますか？ コーヒー紅茶日本茶などの簡単なものなら用意できますが？』

画面の中でメイドな鶴ヶ谷が言った。

『ごっつ、紅茶をお願いします』

『緑茶』

何気なくガウエインは鶴ヶ谷に注文する。

メイドにもてなされる少女はおどおどとし、可哀想なほど緊張している。

少女の外見は茶色がかった長い髪を後ろで三つ編みにしている。制服はセーラー服をベースに所々手を加えている。というか改造というよりは修復だろうか、なんともなく生活感が漂う少女で、生活感が少女の可愛らしさを打ち消してしまっている。

そんな主婦予備軍といった感じの少女。その少女の目の前に飲み物が用意されたあと、鶴ヶ谷が口を開いた。

『それでは今日のご用件は……と、申し遅れました。わたくしは鶴ヶ谷おつうと申します。以後よろしくお願いします』

『俺は黒靴ガウエイン。よろしく願える』

『灰原かかりです。よ、よろしくお願いします』

『灰原さまですね。それではさっそく本題の方に入れらせていただきますか？』

『は、はい、力を貸してもらおうかわりにこちらも力を貸すんですね？』

『そうだ。俺たちが貸した「貸し」、これはいつか俺たちが必要になった場合に返していただくことになる。ただ、灰原が背負った「借り」はそれに見合った協力しか求めないのでご安心を。あと、何か耳寄りな情報を貰えば、それで「貸し」を相殺することが出来るので記憶に留めておいてくれ』

『は、はい、わかりました』

そんな鶴ヶ谷とガウエイン二年生組とお客様である灰原のやりと  
りを見た亮士はなるほどと眩きながら納得し、頭取から色々と説明を  
聞いている中、ガウエインたちは着々と話を進めていく。

『それで依頼の方はなんなのでしよう』

鶴ヶ谷が微笑みとともにきりだした。それを聞いた灰原はゆっく  
りと口を開く。

『はい……黒軋先輩や鶴ヶ谷先輩は二年生の大路（おおじ）先輩  
をご存じですか？』

『はい、存じています』

『明弘か、確か大きな怪我をして……』

ガウエインがそこまで言うのと灰原の口が開いた。

『そうです。もう、テニスが出来なくなつて……』

『それも存じております。一時期ニュースになりましたから』

同学年のガウエインと鶴ヶ谷は知っていたらしく、鶴ヶ谷の表情が  
少し暗くなる。だが、ガウエインは無表情のまま灰原の話を聞く。

『先週まで入院してたんですけど、今週から学校に来たんです。で  
も……私は見てられなかった』

画面の中で暗い雰囲気の流れる中、大神がぼつりと言った。

『大路って誰だ？』

それを聞いて林檎は啞然とする。

『涼子ちゃん……本気ですの？』

『んなこと言われても知らねーし』

『……はあ。涼子ちゃんは女の子として大事な部分がどこか欠  
けてますの』

『うぐっ』

『お、おれも知らないっすけど……その大路先輩ってのはどん  
な人なんっすか？』

大神をちらちら見つつフォローに入る亮士、実にかいがいい。

「大路明弘（おおじ・あきひろ）二年R組、スポーツ科？ その整った容貌、テニスの上手さ、そして名前から、テニスのおーじさまと呼ばれているね？」

頭取が自慢気に答える。それを聞いた皆の反応はというと……。

「おーじさま……ぎりぎりだな」

「ぎりぎりですの」

「い、いや、微妙にアウトじゃないっすか？」

「間違いなくアウトです」

様々だった。

『それで、明弘がどうかしたのか』

ガウエインは出来る限り《礼儀正しく》していた。

これも騎士道の一つだからである。

そして何気に大路のことを名前で読んでいることに鶴ヶ谷が気づき、ガウエインに聞いてみると、

『アイツから頼み事があったからな、覚えていた』

大路から受けた頼み事は、テニスの練習相手だったらしく、ガウエインがテニス出来ることに鶴ヶ谷やモニターで見ていた大神たちも驚いていた。

「練習相手って、相手はテニスのエースじゃねーのか？」

「まあ黒軋君なら相手出来るんじゃないかな？ 反射神経や反応速度がズバ抜けて学園一位だからね？」

それを聞いた亮士は驚く。

「学園一位っすか!？」

「うん、彼は本当に凄いよ？」

頭取は笑顔で答える。

『昔……私もテニスをしていたことがあるんです。……家庭の事情でやめましたけど。テニスやめたあと、いろいろ辛くて、くじけそうになることがあって、そんな時にテニスコートを一人で眺めて

たんです。もしたら私相当暗い顔をしてたのか、大路先輩が声をかけてくれたんです』

灰原は思い出を蘇（よみがえ）させながら顔を綻（ほころ）ばせていた。

『それから暇があるときにテニスコートを眺めに行くようになったんです。私はただ見ているだけ、話すといっても二言三言。でもそれだけで良かった。大路先輩が楽しそうにテニスをする姿に元気づけられました。そんな交流が、大路先輩が中学を卒業するまで続いたんです。でも大路先輩が怪我したって聞いて、テニスが出来なくなりました。聞いて……。私は辛いときに大路先輩に助けてもらった。救われた。だから……。だから、今度は私が、私が……。』

そして灰原は決意を秘めた眼差しで前を向き……。目を爛々と輝かせテンションが異常に高い鶴ヶ谷の姿に面食らった

『恩返し!! 恩返しなのです!! なんと素晴らしいことでしょう』

『落ち着け、おつうよ』

胸に手を当て恍惚としたまま、灰原ににじり寄る鶴ヶ谷、そしてそれを止めようとするガウエイン。

「むちやくちやテンション高いっスね」

「いやー鶴ヶ谷君は恩返しという行為に目がなくなってるね。だから、お世話になった人に恩返しをするというシチュエーションにぐっと来るものがあるんだと思うよ? そもそも、うちに所属しているのも恩返しのためだしね? むかし僕らが鶴ヶ谷君を助けたことがあるんだよ? で、灰原君の家庭の事情は……。アリス君お願いするよ。」

アリスはカチャカチャとキーボードを操作し画面に灰原の個人情報報を呼び出す。

「中学二年の秋に母親を亡くなられたようですね」

「ふくん、それで家事をするためにテニスをやめたと?」

「それだけではありません。母親は病死で、その治療費として多額の費用が必要だったようです。金銭的な面からテニスを続けることが出来なかったのでしょう。テニスは持ち前の運動神経を発揮し、前途

有望だと期待され、実際に良いところまでいっていたようです。これが春に行われた体力測定です」

画面に映し出される体力測定の結果。

「へえ、こりやすくないね?」

そんなことを何気ない様子で話す二人に亮士は驚きの顔で聞く。

「そんなことまで分かるんスか?」

「そうだよ? でも一応プライバシーに関わることは外に漏らしちゃいけないよ? もし漏らしたら・・・君の個人情報が学園内を駆けめぐることになるよ? いやー恐ろしいな? 情報は基本的に、目には目を歯には歯をどころか、目にも歯にも利子をしっかりと付けて返すことにしてるからね? まあ、僕らは人選からしてしっかりしてる、そんな不屈き者は今まで出てないけどね?」

「りよ、了解ッス」

一通り騒ぎ、ガウエインもなんとか宥め、どうにかテンションが下がってきた鶴ヶ谷。

「わかりました。恩返しに大路さまを立ち直らせればよいのですね?」

『はい。でもどうすればいいのかわからないので、ここに相談に来たんです』

そう困っている灰原に鶴ヶ谷は簡単なことだと答える。

『単純に考えれば、新たな生き甲斐を見つけられればいいのでしょう。大好きで大好きでたまらなかったテニスに振られてしまった。だから今の状態になっっているのですから』

『はい、それはそうかもしれません』

『なら、灰原さまが癒して差し上げればいいんですね』

鶴ヶ谷はにつこり微笑んで言った。

『えっ、えっ?』

予想もしてなかった話の流れについていけない灰原。

『ああっ恩を返すために伴侶のように側に寄り添い傷を癒す。……』



「たまりませんわ!」

『おつうよ、トリップするな』

暴走気味の鶴ヶ谷にガウエインは緑茶を飲みながらツツコミを入れる。凄い温度差だった。そして、そんな鶴ヶ谷に灰原は訪ねる。

『なんでそんなことに・・・?』

『灰原さまは大路さまのことを憎からず思っているのではないですか?』

『それはあの・・・その』

灰原は頬を染めつつ乗り気ではないようで、少しの沈黙のあとに答えた。

『・・・大路先輩テニス部をやめるつもりなんです』

『残念だが、それは仕方がないのではないか?』

ガウエインはため息をつく。それには灰原ですら異存はない。

『はい、やめるのはしょうがない事だと思います。・・・もうできないんですから』

しかし、それだけでもなかった。深刻な顔で灰原は続ける。

『でも、今はまだまずいと思うんです。なし崩しに、心の整理もできてないままテニスから離れるのは。このままだと、先輩は絶対に後悔する。・・・私みたいに』

※

上でガウエインが度々テンションが上がる鶴ヶ谷を押さえ込むのに四苦八苦しながらも下でさっそく対応策を練りたててた。

「んーとうことはまずやることは時間稼ぎだろうね? どうするにせよ時間が必要だし? 取りあえず明日を乗り切れば・・・」

「なんで明日を乗り切ればいいんだ?」

大神は頭領に聞くと、正式に退部するためには、部長、顧問、担任から承認を貰った後、体育会に提出し承認を得る必要があるらしい。一度退部した場合、再入部が認められていないかららしい、何事もよ

く考えてから自分で決断させ、自分の決断には責任を持って、そういうことらしい。

それを聞いた大神は呟く。

「逆に言えば、そこまでの覚悟を持って大路先輩とやらはテニスをやめるつもりなわけか」

「そうだね？ 中途半端な説得じゃどうにもならないだろうね？ 話を戻すよ？ それで最後に退部届を持って行く体育会は構成しているのが体育会系のクラブメンバーなわけで、週末の金曜日にそれぞれのクラブが持ち回りで体育会室を詰めることになっているんだよね？ つまり、今日は木曜だから、明日退部届を提出させなきゃいけない、一週間ほど時間ができるということだね？ まあ、今日明日で何ができる訳でもなし？ 明日をしのいでその後、本格的な作戦を立てるって感じかな？ タイムリミットは明日の五時半だね？」

「いえ、明日は休日なので体育会室が開くのは今日です」  
頭取の言葉にアリスはクールに返す。

「……………」

「……………」

「……………」

一年生三人の視線が頭取に集中し……………。

「……………アリス君、携帯電話を」

「はい」

そう言われたアリスはどこから鞆を持ってきて開く。そこに並べられているのは沢山の携帯電話。それぞれ携帯の上には男女関係なく人の名前が書いてある。

「えーと、テニス部の部長と知り合いなのってなっちゃんて良かったかな？」

「はい、二宮夏美さんでテニス部に接触したはずで。確かに一緒に合コンをしたのではなかったですか？」

「あーあー、そうだったそうだった」

頭取はずらりと並んだ携帯電話の中から二宮夏美と書かれた携帯電話を取り出す。

「ごほん。あーあーあー、あめんぼあかいなあいうえおー」

喉の調子を確認。そして、アドレスからテニス部部长を呼び出し電話をかけた。

「……………何してるんっすか？」

亮士が林檎と大神に小声で聞く。

「まあまあ、見ててくださいの。おもしろいですよ？　だてにこの昼行灯の穀潰しの宿六さんが頭取やってるわけじゃないということですよ」

「確かにこれは大した芸だな」

そう言われて亮士は頭領に視線に移し……………信じられないものを見た。いや聞いた。

『あつ、どうもご無沙汰してます、はい夏美です。その節はどうも』  
どう見ても男子高校生の頭取の口から、可愛い女性の声が流れ出していた。

『それですね、大路先輩どこにいらっしやるか知りませんか？』

えっえっえっ？　と頭取と大神たちの間を亮士は視線が往復する。  
「ま、こういうことですの。頭取は変装が趣味で、変装してはここをアリス先輩に任せては遊びに行くんですの。そこにある、携帯電話の数だけ変装のレパートリーがあるということですね。聞いての通り声帯模写も見事で、男に化けたり女に化けたり。まあ、怪人二十面相の廉価版ですね。一応男らしいんですけど、本当かどうか微妙に疑わしくなってきましたのよ」

「確かにな、ありゃあ女にしか見えねーな」

女性した頭取を脳裏に思い浮かべ、うんうんとうなずく大神。

頭取が部長である二宮夏美さんと話が終わったらしく、頭取が携帯電話を置く。

「どうやら、困ったことにもう出発したらしいです」

「頭取、声と口調女のままです」

「あつごほんあーあーあー。うん、これでいいかな？　かな？」

アリスに注意され、いつものしまりのない顔と声に戻る頭取。

「えーつと今は五時二十分か、大路君もやっぱり悩んでたんだねえ、こ

んなぎりぎりな時間に退部届けを出しに行くなんて、もう十分しか時間がないよ？ でも、これは逆にチャンスかもしれないね？ テニスコートから体育会室までは距離は結構あるからね？ 松葉杖をついているはずだから、歩く速度は遅いと思うし急げば間に合うかもしれない？ だから、どうにか邪魔をして五時までに到着できないようにすれば大丈夫かもね？」

そんなことをまるで人事のように言う頭取。アリスは机の上のマイクを手にとると上の支店に向けて話し始めた。

「鶴ヶ谷さん、黒軋さん、緊急事態です。どうやら、大路さんは退部届けを持って体育会室に向かったもようです。十五分ほど前のことですから、この学校の広さ、松葉杖であることを考慮したとしてももう体育棟に到着しているかもしれません。しかし、ここは体育棟の隣です。急げば間に合うかもしれません」

その放送にガウエインは一瞬ビクンツと驚きながら音源を捜して回るように首をフリフリとボロツちい部屋を見渡し、灰原はというと、

『そ、そんな!!』

焦りの混じり合わせた叫び声が響いた。あまりの急展開にパニックになる灰原。

『ど、どうしましょう!』

『時間がないので、急いで無理矢理にでも止めるしかありません。退部届けを出してしまえば終わりですから』

『でもいったいどうしたら?』

『こうなったら、小細工なしです。灰原さまの思いの丈をそのままにぶつけるしかないと思います!』

『………はい!!』

あたふたとしていた灰原だが、その言葉に覚悟を決め頷いた。ガウエインは心配そうな顔をしながら鶴ヶ谷と灰原を交互に見た。

(上手くいけば良いのだが………)

と、熱血青春ドラマ風に二人が走り出そうとしている中ガウエインがそう思っていると、闖入者(ちんにゆうしや)が現れた。

『話は全部聞かせてもらったヨー。すべてこの魔女っ娘マジョーリカにお任せヨー』

『・・・波乱の予感がする』

現れたのは正統派魔女ルツクの少女、とんがり帽子に丈が伸びすぎてローブのようになった真つ黒なブレザー。いやどちらかといえはなので白衣ならぬ黒衣といった所だ。とんがり帽子から漏れるのはガウエインが一目見るだけで興奮してしまいそうなサラサラストレートの金髪、ぐるぐる牛乳瓶底眼鏡。ともかく現れたのは魔女だった。

『まずこれ履くヨー』

マジョーリカは奇妙な効果音と共に取り出したのは、微妙に厚底の運動靴。

『えっえっ』

『いいから履くヨー!』

『は、はい』

その剣幕に思わず頷き履いてしまう灰原。

『よし、それじゃ行くヨー!』

そしてマジョーリカは鶴ヶ谷で灰原を引き連れて外に出ていく、その後を心配半分渋々半分のガウエインが重い足取りで付いて行った。疾風のようにやってきて疾風のように去っていった魔女について亮士は聞いた。

『えっと、あの人は・・・』

『二年の魔女君だよ? 本名はマジョーリカ・ル・フェイ。黒靴君以外のみんな魔女さんと呼んでるけどね? うちの備品担当って所かな? あの、大神君のねこねこナツクルも彼女作だよ?』

『あ、あれですか!?!』

『工房の方で一部始終見ていたようだね? .....とりあえず僕らも外に出ようか? なーんか大事になりそうな気がするしね?』

『賢明です』

困った顔でそう言う頭取に、今日初めてアリスは心底からの肯定の意を示した。

五人が外に出ると噂の魔女さんが何やら大仰な物を体育棟に向けて構えていた。それは大砲のような外見だったが、・・・・・・・・・・なぜか先にカボチャが付いていた。

「えっと黒軋君？ あれはいったいなんなのかな？」

皆を代表して頭取がマジョーリカの後ろで見守っていたガウエインに聞く。

「なんでもワゴンオブパンプキン一号らしいですよ。あれを打ち込んだら先端のカボチャが割れて引つかかるみたいです」

確かによく見るとマジョーリカの足下にはロープがとぐるを巻いている。

なるほど、あれを撃つとこのロープを伴っていくのか。亮士はマジョーリカが何をしようとしているのか理解した。思わずツツコミを入れる。

「いやそれまずいっすよ!」

「なんでヨー?」

不満そうなマジョーリカ。マジョーリカの狙いは体育棟の四階一番左の窓、その窓の向こうには体育会室がある。

「窓閉まつてるじゃないっすか!」

「派手でいいヨー。ガラス破りはアクションの基本ヨー」

「いや、下手すれば怪我人が出るっすよっ!! 下手したら死人が出ますよ!!」

「んーわかったヨー、死んだら流石に直せないヨー」

ガラスをぶち破るといふ派手さが相当捨てがたかったが、流石に怪我人はまずいと渋々承諾してマジョーリカは狙いを変えた。マジョーリカは右端に近い場所の開いた窓を狙い、ワゴンオブパンプキン一号を撃った。

ポシューウツとそんな音とともに二本のロープを伴ったカボチャが空を飛ぶ。

「なんてシュールな光景なのだろう」

「まったくですの」

視線をカボチャから離さないでガウエインがそう言うのと、林檎も同意していた。

カボチャは狙い変わらず窓の中に吸い込まれて行つた。マジヨリカはロープを何度か引つ張り、ちゃんと引つかかったことを確認。

「うまくいったヨー。というわけで、かかりちゃんこつち来るヨー」

「えっ、でも、早く上がらないと」

カボチャに心奪われていた灰原。正気に戻つて早く上に上がりたい旨を伝える。というか、自分の運命を悟つたのかいやいやと無意識に首を振っている。しかし、マジヨリカは人の話を聞かないとか通知票に書かれるタイプらしく。

「いいからいいから」

そう言つて何かベルトを灰原にはめ、もう片方のロープをこの場に  
いる皆に渡した。

「あのっ、そのっ、階段上がった方が早いんじゃ……」

さしてそう言う灰原を無視して……

「引つ張るヨー」

と叫んだ。

どうやらあのカボチャの根本には滑車が付いているらしく、それに繋がるロープの片方はみんなの下に、そしてもう片方は灰原の腰のベルトに。

本当にいいのか？

そんな視線がこの場で最上位の責任者、頭取に集まるが、せの頭取はマジヨリカ押さえ付け役であるガウエインに顔を向けた。

「いいのかな？」

「……ふう、しようがないとは言え、これは危ない。こういう時は俺に任せてください」

と言つてガウエインはマジヨリカに近付く。

「（これは危ないから俺に任せてはくれないか？）」

ガウエインは小声でマジヨリカの耳元でそう呟くと、

「ふ、ふにやあつ!? いい良いヨー! うんそれでOKヨー!!」

マジョーリカは赤面になり、バタバタとガウエインから離れて眩か  
れた耳元を触る。耳まで赤くなっていた。

「分かってくれたか、ありがとう」

ガウエインがそれだけ言うのと灰原と向き合った。

「で、どうするんだい?」

「ちゃんとマカの道具は使いますよ、使わせてもらいます」

そう言つてガウエインは灰原が履いていた微妙に厚底の運動靴に  
履き替えた。

もちろん灰原は普通に履いてきた靴になっている。

そして、灰原がはめていたベルトとガウエインもはめたベルトを結  
合させた。

体勢はと言うと、灰原を背負つたガウエイン。となつている。

「ま、まさかガウエインさん」

「そのまさかをやるんだぜ、この先輩は」

亮士はガウエインがやろうとしている事に半分信じられなさそう  
に見ていると、横で尊敬の眼差しで見ている大神が居た。

「………掴まつてくれよ」

「あ、あの、一体何を」

ガウエインはしっかりと固定しているベルトを何回も確認した後  
に、走る構えを取り、そして、

「はッー!」

爆走。

かなり踏ん張りの聞いたスタートに一瞬でガウエインは走つてい  
た………ロープを上を。

「うきやあああああー!!!」

灰原を落ちさせないような絶妙なバランスを保ちながら上手い具  
合にロープを上を走る、走る、走る。

その運動神経とバランス感覚は正に神業。

そしてあつという間に四階へと進入した。プロ過ぎる入り方だつ  
た。



「いやー凄いなね？」

「凄いなねってレベルじゃねーぞ？ あれ絶対どつかでレスキュー活動してたって」

「まあ騎士先輩ならあり得ない話では無いですよ」

「いや！ 普通に人間技じゃないっすよ!?!」

人体、というかガウエインの身体能力に神秘的“なにか”を目撃した御伽銀行の皆さん。亮士はガウエインの凄さに異常なまでに驚いていた。

「ファイトです灰原さまー！ ガウエインさまもー♪」

恩返しをサポートができた鶴ヶ谷は、とても達成感に満ちた顔をしていた。

体育会室の扉に手を掛けた大路を発見したガウエイン。すぐにベルトから灰原を外し促した。

灰原はまだバクバクする心臓を落ち着かせながらも大路へと走り出す。

「先輩！ 待って下さい！ 今、やめたら先輩は絶対後悔・・・」

大路に向かって叫ぶ灰原。しかし大路はそれに気づかず無情も扉は開き大路は松葉杖を進め・・・。

「・・・間に合わないか・・・」

ガウエインがそう呟く、が、いきなりガウエインが履いていた靴の厚底部分が分離し・・・中からタイヤが出てきた。靴がいきなりインラインスケートに変形してしまった。

「・・・はっ？」

ガウエインはいきなりインラインスケートに変形した靴をまたもや巧みに乗りこなす、がシユボツと靴が巧みに抜けた。

またもガウエインは愕然としながら飛ばしていく靴の方向を見る。

その靴は上手い具合にロボット飛行機みたく分離し、必死に走っていた灰原の靴と『合体』した。

「へっ、あっ、きゃーきゃーきゃー！」

いきなり靴がインラインスケートに変わった為にあたふたとしていたが、両手をわたわたさせながらどうにかバランスをとる。

ガウエインは耳に無線機のような小さなものから伸びたイヤホンを付け、御伽銀行の会話を聞く。(マジョーリカがガウエインの為に作った作品の一つ)。

『こつ、これは?』

恐らく亮士がモニターを見ながら言ったのだらうとガウエインは推測する。

『名付けて、《大好きなあなたの下へとまっしぐラー! ガラスの靴一号》でース!』

『なんてことするんっスか!?!』

『なんでヨーあれなら十分間に合うヨー?』

『いや、確かに速くなりましたっスけど、どうやってあれを止める気っスか! あの様子見ると、どう考えてもかかりさんはインラインスケート初めてっスよ?』

マカか。

ガウエインはそれだけ聞き取っていると、前方で手を振り回したまま滑り続けている灰原を見た。もう大路の目の前だ、持ち前の運動神経を発揮しているのか転びはしていないが、それも時間の問題だろう。

(別に止めに入っても良いんだが……行くか)

ガウエインが靴が無くなった状態で灰原を止めに入ろうとしたが、

〔尾前(おまえ)はガイリンでは内(ない)か〕

突然と現れた人物によってガウエインはその場に立ち止まった。

〔戸々(こっこ)で無二(なに)をしているルのだ〕

現れたのは白い前髪で目を隠し、口を隠している白いマフラー。服装は一つに纏まってなく、ジャージの上にブレザーを着てズボンの上に半ズボンを履いているのだ。何故か下駄も履いている男だった。

〔追(お)いガイリン、木(き)いてイルのか?〕

「……そこを退くんだ」

何故かガウエインは不機嫌そうになりながら男に言う。だが男は怒りを表した感じで独自の喋り方で言う。

〔そう尾枯(おこ)るな、まあ魔(ま)て、そう乙小(おこ)るな〕

「・・・退け、『ケイ』よ」

ケイと呼ばれた男は怒った感じから悲しんだ感じになった。

「他紙（たし）かに折（おれ）は『ケイ』だが、『ケイ』じゃ名井（ない）」

「また訳の分からない事を・・・」

「また和気（わけ）の若羅（わから）ない湖都（こと）を蛇斗（だど）？ 飯矢（いいや）、血牙（ちが）うな、汚俵絵（おまえ）が侘毛（わけ）が和火（わか）らんのだ」

「・・・」

と、『ケイ』という人物と相手をしていると、いつの間にかやら灰原の姿が居なくなっており、その変わり大路が倒れていた。

（い、いつの間にか、大変な事に）

ガウエインは倒れている大路に駆け寄ろうとするが、

「折（おれ）の葉梨（はなし）を器（き）け」

またケイに邪魔される。

「くっ・・・はあ、何だケイ、俺に言いたい事があるなら言つて良いぞ？」

キレてしまってもおかしくないのにガウエインはきちんとケイと向き合い、話し合いに望む。ケイもガウエインの対応に驚いたのか反応が無い。しばらくするとケイが動き出した。

「・・・緒麻衣（おまえ）は、五（いつ）もそうだな」

それだけを告げて、いつの間にか姿を消していた。

ガウエインはいつもの事らしく、反応せずに大路の下へと向かったのであった。

※

「よう、『ケイ』じゃねーか」

ブツブツと何か独り言を呟きながら歩いているケイに金髪頭の青年が話し掛けて来た。

「央前（おまえ）は……………タンメン」

「違ええよ!? トリスタンだ、トリスタン!」

トリスタンと名乗った青年は親指を自分に指して必死そうにそう言った。

「本名は弾（タン）ですけどね」

そして隣からオレンジ色の髪をストレートロングにしている少女もやってきた。

「貴方も『円卓の騎士』の一人なら、ちゃんと身なりくらいしたらどうです」

「歩雨（ほう）、凶（きょう）はルルカンも射（い）るのか?」

「……………萌仁香・ルーカンなのだけれど、気にしている私って……………KYなのかしら!」

「刑猿（けいわい）? 南（なん）だその已診（いみ）が稚（わか）らん事刃（ことば）は?」

「だああ! 二人供黙れって、何か聞いてる俺が苛ついてくるぞ!」

その後トリスタンはルーカンとケイを相手に一時間費やす。

そして互いに落ち着いた時にはトリスタンはかなり疲労している顔だった。

「それで、ガウエインはどうでしたか?」

ルーカンはケイに聞いた。

「銅（どう）も攻（こう）も奈（な）いさ、アイツは不痛（ふつう）じや娜（な）い」

お前が言えた義理か、とルーカンは横目にケイの話を聞く。

「折（おれ）のコの車辺（しやべ）り堅（かた）に南（なん）の伊良（いら）つきヲ店（みせ）んかった。折はこの能（チカラ）で怨嗔（えんたく）の愧死（きし）に癡（はい）れたんだ。ソレ奈幅（なの）にアイツは……………」

ケイはそれだけ言うと、また独り言を呟きながら二人から離れて

行った。

「・・・あれも『円卓の騎士』の一人なのね」

「荒(すき)んだ目で見ると見るんじゃねーよ。ケイだってなりたくなかったんじゃねえんだ・・・ああでもしてないと精神が崩壊する」

「確かケイの家族は、外国で・・・」

そこでルーカンはそこから言わなかった、いや、「言えなかった」。

「・・・お前(め)えさあ、ワザとやってんのか」

一瞬にして出来た仕込み槍をトリスタンはルーカンの喉元に矛を突きつけた。

「・・・別に私はこういう展開も嫌いじゃないわ。だって『円卓の騎士』たちってさ、劣等品なんですよ？ その劣等品同士が、殺り合った”らどうなるか・・・気にならない?”」

そしてルーカンも、何の恐れも無く喋り続ける。トリスタンはすぐに仕込み槍を下ろした。

「オツケイ、オツケイ。一回お互いにクールダウンしないか、じゃねえとき・・・本気(マジ)になっちゃう」

ズガッン！ と仕込み槍が近くにあった壁を貫いた。

「ふふふふ、そうね。それもまた、魅力的♪」

そしてルーカンは妖艶に笑う。

「でも死合(デート)はまた誘って、だって私の玩具が無いんだもん」  
ルーカンもそれだけ言うと、トリスタンの前から消えた。

「・・・また抑えられなかった、  
また『興奮』してやがる」

トリスタンは今の失態にショックする。何てことをしたのだろうか。

「・・・萌仁香も興奮してたな、口調が異様に変だった」

トリスタンは仕込み槍を仕舞い、校舎の方へと向かって行ったのであった。

騎士たちは狂っている

故に強かった

それが御伽に溺れた

騎士たちの『末路』

魔神はそれを、悲しんだ

## 第8話 「おおじ様とシンデレラ」

黒騎士こと黒軋くろぎしガウエインは今魔女さんことマジョーリカ・ル・フエイの魔女工房に互いを対するように机に座っていた。

前回の問題は魔女さんにあり！

と皆が思っていたのだが、毎度のことなので皆は何も言わないでいた。

だが御伽銀行の頭取である桐木リストが『ちよつとだけ黒軋君は魔女君をお説教してもらえないかな？ 流石に57回くらいこんな風に騒ぎ立てると僕も笑止千万に笑えないよ？ アハハ？』と言っていた。

ガウエインはムスツとしているマジョーリカを見る。

「何だヨー何だヨー！ 別に悪い事なんてしてないヨー！」

パタパタと腕から伸びている長いブレザーを揺さぶる。

「そうも言ってもな、今回で57回目だ、マカの発明品で失敗した仕事は。数を言った自分でも『そんなにやったのか・・・』と逆に関心するレベルだぞ」

「ふんっ、そんなの私のせいじゃ無いヨー」

「・・・自分で発明した物は責任を持つべきだと思うのだが？」

ガウエインとマジョーリカがこうして話している中で、他の人たちが何処に居るかと言うと地下本店である中央の大きな部屋に頭取や大神、亮士たちが居るのだ。

「あの時に明弘が灰原の顔を見ていなかったのが救いだっただが、かなり危なかったぞ」

「ううー・・・」

マジョーリカは机の上に頭を乗せてぐるぐると顔を右往左往に移動させた。

「頭取から聞いた話だともうすぐお昼の放送が流れる時間だ。何故か明弘が出るらしい。犯人探しでもするのかもしれない」

ガウエインはそう言って少し待っているとスピーカーから放送部の放送が始まった。

(ん？ 放送部と言えば「アイツ」も出るのか)

ガウエインがそんな事を思っていると、スピーカーから異常にハイテンションなアニメ声が流れてきた。

『どうもーこんにちは☆ 皆さんのお耳に舞い降りた天使のさえずり、下桐したきりすずめでーす☆』

そしてもう一つの声が流れてきた。

『そしてこのオレ！ 御伽学園放送部の長を務めている烏丸鴉鷺羽からすま・あろろがお送りします！ ハハハ！ 相変わらず変な名前だなど思ったお前・・・後で放送室直行な』

御伽学園高等部三年で放送部部長の烏丸鴉鷺羽と、ガウエインと同級生である下桐すずめ。この放送部のカラスとスズメコンビはもうすでにこの御伽学園のお昼の風物詩になっている。

『はい、今日の放送もお弁当と一緒にお耳からよくかくんておいしくいただいちやっってくださいね☆ でも夜のおかずにするのは勘弁してください★ でもすずめのプリチーな声を脳内でエロ漫画や今時ボイスの入ってないエロゲーでやられてる女の子に当てはまることはゆるしま・・・』

『・・・オイオイこらこら開始一分たってねーのに相変わらず要らん事まで喋しゃべねえ？ ん？ ん？ この口と舌か？ 舌が悪いのか？』

『いひやひやひや、ぶちよー舌ひっぴやらにやいで・・・』

『斑鳩いかるが、一旦止めろ』

ブツツ

放送が途切れる。どうやら烏丸が他の部員に言って止めさせたらしい。

そして一分後何事もなかったように再開した。

『というわけで今日も始まりました御伽ステーション☆☆ 毎回思いですが色々なところからインスパイヤしまくった挙句にパクリ丸出しになってしまったというのに、それを隠す意思さえ感じられないこの番組名はどうかならないものなのでしょう・・・』

『・・・アーハッハッハッハ！ ならんならん、まあったくこの女子おなじはあれやこれやと次々とオクまあったく』



『いひやひやひやひやひやく、ぶちよくおこんひやいでくらひやい』  
『……斑鳩』

ブツツ

放送が強制的に遮断され、再び何事もなかったかのよう復活。

『えくん乙女の頬を問答無用につねるってどーゆー神経してるんでしようかねーウチのぶちよくは☆ えーというわけで、今日はなんとお客様がいらっしやってます☆ おかげで皆さんがリクエストした曲を流してお茶を濁す真似しなくてもよくなってます★ というわけで、ここですずめとだべりたい方は自薦他薦は問いませんので最寄りの放送部員にご連絡ください☆ でもゲストと会話が弾まなかつたり、何かヤバげな空気が流れ出したらリクエスト曲流します★ あとリクエストしてくださる方、ありがたいですが毎回金●の大冒険送ってくる方がいるのはどうかと思います☆ 極付けお●の方でないだけマシかもしれませんけどお★ まー気持ちはわかりますけどね★ それに、どうにかしてエロゲー主題歌を流させようとする人よりはダメレベルはマシかもしれません★ まあ、本気で流したいなら放送室を占拠するとかしてくださーい☆ そうすればすずめとストックホルム症候群風味な恋が芽生えるかも☆☆☆ あっでもでもカラスぶちよーがずえつったい許しませんけどねー★

あの人今からあんなに怒っていると将来ハゲげますねえくぷくくく☆ というわけで内々に連絡いただけるならすずめが内部から招き入……』

『上等だああゴラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『うひやああああ!? マジでキレイないでくださいカラスぶちよー! 斑鳩先輩たすけてえー!』

『分かる! 分かるぞ烏丸! 俺も確かにイラツときたが今は止めろ! 本番ちゆううううう!!』

『きゃああああ!? 斑鳩先輩が間髪入れず殴られたあ!?』

もう、滅茶苦茶だった。

いつもはストッパーの為に居る部長の烏丸なのだが、たまに爆発する。これも御伽学園のお昼の風物詩だ。

『ぜえーぜえー。は、はい今日はゲストがいらっしやってます☆ ティスのおーじさまとして有名な大路明弘さんです☆☆☆ なんでも皆さんに重大な発表があるとか☆ 楽しみですね☆ では大路明弘さんです☆ どうぞ〜☆』

離せ！ アイツを一度たっぷりと説教せんと意味が成さない！と放送から少し聞こえて来たが斑鳩という少年が抑えていた。

『どうも』

『おーかつこいいお声ですねー☆ お顔も近くで見ると無茶苦茶かつこいいですー☆ 流石ミスター御伽学園のランキング七位ですねー☆ 怪我をしたと聞いてすずめも心配しましたよー☆ でも、これを聞いている方は分らないと思いますが、なぜか大路さんの顔にでっかい絆創膏がついているので、聴取者の皆さんすべてに代わってすずめが聞いてみます☆ 決してすずめが知りたいただけじゃないですよー★ というわけで、そのほつぺたの大きな絆創膏はなんですか☆☆』

『それはこれから話す』

『そうですか〜★ それで、今日はどのようなご用件ですか〜☆ 何か重大な発表があるとか☆☆』

『これだ』

ドンツ

『これですか☆ うーん、なんの変哲もなさそーなインラインスケートですな〜☆☆』

『俺はこれを履ける女性を捜している』

『え？ これを履ける人なんてたくさんいるとすずめは思いますけど☆☆ 大きさもそれほど小さくないですし☆ なぜこれを履ける方を捜してるんですか☆☆』

『先週の木曜の夕方のことだ。俺が廊下を歩いていると悲鳴が聞こえた』

『おおーバイオレンスな香りが漂ってきましたねー★ で、どなたの

悲鳴だったかとか分かるんですかー☆』

『分からない。振り向いた俺が見たのは、宙に舞う女子生徒だった』

『飛んでたんですか☆☆☆』

『たぶんこれで滑っていて、前のめりに転び、手についてそのまま前に一回転したんだろう』

『おおーそれは、すごい運動神経ですね☆』

『そして俺は……顔面に蹴りを食らい、気を失った』

『……それはまた災難でしたねー☆ 事件なのか事故なのか衝動的な犯行なのか怨恨なのか……すずめの好奇心がうずきますよー★』

『そうだ……ここに来た理由は犯人捜しですかあ☆』

『運命を感じた』

その衝撃の告白に、学校が静まりかえった。

『彼女こそ俺の夢のかけら。運命の女ひとに違いない。というわけでこの靴だ』

ドンつと靴を叩く。

『顔も知らない彼女が残した靴、この靴にぴったり合い、尚且つあの蹴りを繰り出せる人を捜している。そう、あの蹴りは素晴らしかった』

何処か陶酔したように夢見心地な声でつぶやく大路。かなりヤバい。

『あつ、新たな世界に目覚めてしまったのですかあ☆☆☆』

声から、どきどきと頬を染めているすずめさんの姿が見えるようだ。どうやら美形が織りなすアブノーマルな世界を想像してツボにはまったらしい。

『ああ、あの蹴り、まさに世界が……未来が開けたようだった』

『それはまた素敵ですね☆☆☆』

それで、その靴すずめにもっとよく見せていただけますかあ☆』

『ああ』

『あれ、思いのほか重たいですね。サイズは……あれ、すずめと同じ☆☆☆』

すずめがそうつぶやき黙り込んだあと……可愛く言った。

『てへっ、その蹴りの彼女、実はわたしだったんですよう☆』

そしてそのまま靴を履き……

『ほら、サイズだって……びっぎやあああああああああ  
ああああああ〜〜』

痺れた。

『このように、本来の持ち主以外が履くと、電気が流れるようになって  
いるらしい。というわけで、この靴を履ける人お願いだ、今日の放課  
後テニスコートの脇まで来てくれ。大事な話がある』

『……ハハハ……スズメ、お前は休んでいろ……』という  
わけだね！ はい以上、大路明弘さんからでした！ この後に予定さ  
れていた体育館の使用等の報告がありました。今日放送担当の下桐  
すずめ見事に痺れて動けなくなっている。今流行りの音楽をお楽  
しみください！ それでは午後も張り切って頑張りましょう〜！』

痺れているすずめを休ませ、代わりに部長の烏丸が放送を締めく  
くった。ラジオなどで良く聞く、DJ風の好青年の声を思わせた感じ  
だった。リクエストされていた曲が流れ始め、

今流行りの曲のくせに、むなし曲が鳴り響いた。

「……取りあえず、頭取たちのところに行くか」

ガウエインはマジョーリカの方を見ると、とても眠そうに目を擦っ  
ていた。自分のしでかした事なのに他人事のような反応のマージョ  
リカ、ガウエインは嘆息する。

「行くぞ」とガウエインがマジョーリカを促すと、スウつと両手を前に  
出す。

「……おんぶ」

マジョーリカはそれだけ言うと、眠たそうに瞼をぱちくりする。

「……ふう」

ガウエインは静かにマジョーリカの前に背中を差し出すと、マ  
ジョーリカは満足そうにふさつとガウエインの背中に身を預けた。

「むふふふふふふ」

さつきまで眠たそうだったマジョーリカが嬉しそうにガウエインの

背中に顔をすりすりとしていた。

ガウエインは苦の顔もせずひよいとマジョーリカを背負い、工房から出る。

「……………」

「……………」

ビクツといきなり艶のある声を聞いたガウエインは歩みを止めた。

「……………」

「……………」

声色ですぐに「いつもの」マジョーリカではない、魔法の長衣ローブを脱いだ素顔のマジョーリカは、自分の綺麗な金髪でガウエインの顔にチラつかせる。

「……………」

いきなりガクツと力を無くし、足の膝を折る。そんな幼馴染みで従兄妹で、大好きであるガウエインの反応に満足したのか、マジョーリカが先を促す。

「ほらほらー行くヨー♪」

「……………」

そんな紳士な言葉を吐いたガウエインだったが、物凄い勢いで見開いた目をして理性を保っていた。

願わくばこの黒軋ガウエインだけは、変人になってもらいたくないなかつた。

※

皆が集まっている中、ガウエインは堂々とマジョーリカをおぶりながら部屋に入って来たので、数名が驚きの表情で固まっていた。

「さつきカラス先輩出てましたね」

「烏丸君も大変だよー？ 僕と同じく？」

「はー」

「……………」

あと止めてその悲しい眼差し?」

何故かすぐにガウエインの背中で既に爆睡し始めたマジョーリカをソファに寝かせ、その隣にガウエインも座る。傍から見たら恋人にも兄妹にも見れた。

「これで一件落着じやないっすか?」

「灰原さま……恩を返せたのですね、よかったです」

「何の因果か、あのシックスセンスとかコスモとかそんな感じの不思議な感覚に目覚めてしまった七番目の王子様はシンデレラがご所望だそうだね? というわけで、灰原君がああ靴履いてもう一回蹴りを入れればそれで万事OKだね?」

「新しく夢中になれるものができたんっすから、テニスができなくなつた苦しみ、少しは薄れるっすよね?」

「いやー良かったね? 一件落着かな?」

総楽観な空気の中アリスさんが聞いた。

「それで、魔女さん。あの電気の細工はどうなっているのですか?」

「よく聞いてくれたヨー!! あれは資格を持った、選ばれし人間しか履くことができないんだヨー!!」

ガバツと寝ていたマジョーリカが起き上がった。

寝ながら聞いていたのか。

自信満々で胸を張る。古い言葉で言うと、トランジスタグラマーな魔女さんことマジョーリカ。その張りようが半端じゃない双丘がかなり目立つ。

「それはすごいね? それでその資格とは何かな?」

「それはヨー」

話によれば、マジョーリカは小さなペンダントらしき物体を灰原のポケットにこっそり忍ばせた事により電撃は流れないように作られているらしい。

一件落着いたので皆は一気に雑談モードに切り替わった。だがそこでまたもや事件が発生した。

靴の電撃のバッテリーの残りがあと十分らしい。  
それを聞いた頭取たちは一気に焦り出す。

「一年生だけに行かすのですか」

大路の靴主捜しをしている現場には一年の大神と林檎、そして亮士の三人を行かせた。

「確かに一年生だけでは心元ないと思うけどね？ これくらいはやらせないといけないよ〜？」

「ただ単に面倒なのでは？」

ガウエインが頭取にそう聞くと黙ってしまった。

代わりに隣に立っていたアリスが答える。

「頭取の言った通り、この仕事は一年生に任せてみましょう。これも御伽銀行の教えの一つです」

キリツと眼鏡を直しながら言うアリスに何も言わないでただ黙るガウエイン。

「黒軋君も優しいんだね？」

頭取がそう言うときガウエインは不思議そうな表情で頭取を見る。

「これが『優しい』という事ですか？」

「うん・・・君は優しいんだよ、黒軋君」

頭取はいつものふざけた感じの口調では無く、真剣な顔をしてガウエインに言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ガウエインさま、緑茶が入りましたよ。どうぞ」

鶴ヶ谷が緑茶の入った湯飲みを渡され、何かを思案しているガウエインをソファに座らせる。

(君は、優しいさ。黒軋ガウエイン君)

頭取は思っていた。

この感情を無くしてしまったような少年がどんな風にな変わっていかのかを。

ガウエインが考え込んでいる時、マジョーリカが静かにガウエイン

の袖を掴んでいたのは、誰も知らなかった。

後で聞いた話だと、見事に二人は互いの気持ちを通じあい、今では熱血王子様と熱血シンデレラの二人はテニス界に大きく踏み込んで行った。



## 第9話 「謙る戦魚（せんし）達」

ガウエインはいつもの通りの朝早い時間に御伽学園に登校しようと、朝食を村野邸にて取っていた。

基本朝食は皆で食べるがこの「おかし荘」の規則の一つでもあるのだがどうしても朝早く用事があるのなら先に食べても宜しいのだ。

ガウエインは基本に食している朝食は和食が中心で、ご飯は必ず食べないといけないと自分の中で決めているガウエイン。

この村野邸の家主である村野若人むらのわかとがもう既に電気炊飯器でご飯を沸かしている為、毎日おいしい白米を食しているガウエインは若人にその毎日を至極感謝しなから白米を咀嚼していれば、

「ん〜？・・・こんな早朝に起きているのは・・・ガウエインか」

ガウエインが丁度朝食を終え、自分が使った食器を洗っている時に若人の妻である村野雪女むらのゆきめが起きてきたらしく、瞼を重くさせながら台所に入ってきた。

「おはようございます、雪女さん」

「ん〜おはよう・・・寝みい」

「朝まで小説を書いていたんですか、それとも何か本でも読んでいたんですか？」

「ん〜いやなあ、私の尊敬している作家の新巻が出てな、朝まで読み更けてしまった」

雪女は眠たそうに冷蔵庫の中を見渡す。

「それでは俺は学校に行つて来ます」

「毎日こんな朝早くに出て行くなんて、何かあるのか？」

雪女は冷蔵庫の中にあつたスポーツドリンクを飲みながらガウエインに聞く。

「・・・朝練ですよ」

ガウエインはそれだけ告げて家から出て行った。

ブルルルツ！ と少し離れた場所からエンジン音が聞こえた。  
雪女は椅子に座り、飲み干したスポーツドリンクのペットボトルを  
机に置きながら、まだ日が登っていない外を眺めて思った。

ガウエイン<sup>あ</sup>、嘘下手だな。

と。

※

黒い宝石のように輝いている愛用の黒塗りバイクを走らせるガ  
ウエイン。

だが走行している線上に、黒服を着ている男二人組が通せんぼす  
るように両手を広げて立っていた。

見るからに怪しい。

もしこんな光景が日中にやられたら大変な騒ぎになるのだが、幸い  
今は日がまだ登っていない黒い空の下、誰も見ていない。

「……………」

ガウエインは兜<sup>ヘルメット</sup>越しからズバ抜けた視力で通せんぼしている男  
二人の顔を確認するや否や、

グイツとアクセルを踏み抜き、

ゴオオオオオン!!

と躊躇無く更にアクセルペダルを踏み込んだ。

ガウエインの愛用バイク “GALL—10”<sup>ガラテイオン</sup>の速度はかなり速く  
なり、

「危ねええええええええええええええええ!!」

キユゴオツ！ と黒服の男二人組は身体を思いきり捻らせて横に  
避けた。

「ちよ、コイツ鬼だ！ 問答無用に引き殺そうとしやがったよ兄貴！」

「当たり前前だ！ コイツはきつと地獄に落ちても閻魔大王の喉元を引き千切る程の冷酷さだぞ?! でも味方になりやあこれほどの大戦力は無え！」

黒服の男二人組は互いにガウエインの悪口を言いながら、止まっているガウエインの前まで迫ると、切羽詰まるように、

「どうかお力添えをお願いします！ 黒軋ガウエイン様あ！」

土下座されてしまった。

ガウエインの名前を知り、どうやらガウエインと面識があるらしい。ガウエインは相変わらず鎧のようなライダースーツに身に包みながら、土下座している二人の前まで近寄る。

「愧鮫きさめに、海蛇かいだか」

そう呼ばれた二人はガバッと顔を上げる。

「な、名前を覚えていたのか!?!」

黒服を着ていた黒髪を刺々しく逆立て、顔には無数の刀傷のような痕が残っている青年は、恐ろしいものを見たかのように目が物怖じしている。

「あ、兄貴。俺の名前も覚えていやがった」

そして『愧鮫』と呼ばれた青年を兄貴と呼び親しんでいる、もう一人の黒服スーツで紫色の髪をした男も隣程では無いが無数の傷が残っていた。

この二人はどこかのマフィアにでも所属してそんな身なりなのが、かなり腰が低そうだった。

「さつきは済みません、だがちゃんと避ける事を信じていましたよ」

「くっ！ 人の皮を被った鬼畜外道悪魔阿修羅マンが何を言ってるが……」

「それで、用件があるのですか？」

ガシッとガウエインは自分の方が背が高いことをいいことに、黒髪の青年の首を掴みながらそう言う。年上なのでガウエインは敬語を使って「礼儀正しい対応」した。

「ぐぶううう！ ぐるじぐがきがあ!?!」

「絞めてる！ 愧鮫の兄貴の首絞めてますってガウエインさん!!」

ゲホツゲホツと咳する愧鮫が恐らく海蛇と思われる青年に背中を摩られる。

「それはさて置きだ、ガウエイン！　お願い協力して欲しい！」

だが鍛え抜かれているのか、直ぐに体勢を整い、愧鮫はとても真剣な眼差しでガウエインを見る。

「浦島太郎」を捕まえるのに協力してくれ！」

「お願いしますっ！」

黒い騎士の前に、鮫と海蛇が助けを求めていた。

※

「という話があったんだ」

「……………」

御伽学園校門前、そこに黒いコート姿に身に包んだ長身の男と、白い学生服の肩や腰に鎧らしきプロテクターを装備し、綺麗な美脚を魅せる為の短いスカートにその美脚あしを掻き消すように腰には西洋剣サーベルを帯刀している。

美しいのにとても物騒なその白い長髪の美少女は、黒い長身が目立つガウエインと並ぶかのように立っていた。

「……………だから何だと言うのですか、ガウエイン殿？」

「いや……………浦島太郎なんて本名の奴が居たんだな、と」

「そうですか、私としては貴方の名前がまさか日本で聞くことになるとは思いませんでしたよ」

ガウエインは今朝起きた出来事を白髪の美少女・フェイルに話していた。

「そんな話はどうだって良いのですよ、今は通学する学生たちに元気

良く挨拶運動し、正しい服装かどうかを確認する仕事をやるだけです」

「いや、まさか本当に実在してたなんて……ブツブツ……」  
「ん……えっ、ちょ、話聞いていますか？」

というやり取りをやっている内に、真面目な学生の何人かが静かに通学し始め、見知った者たちもやって来ていた。

「お、おはようございます ッランスロット先輩！」

「はい、おはようございます。元気の良い挨拶ですね。今日も頑張ってくださいね」

「は、はいッ！ 例え血へド吐こうが、胃や肝臓が内部破裂しても頑張って乗り気って行きますッツ!!」

「それは病院に行ってくださいね」

御伽学園には何人の美少女さんが通っているのだが、このフェイルも上位に入る程の美少女だ。だが何分融通の利かない所や頑固で短気な所がある為に下がったり上がったりといった位にフェイルが位置している。

「おおおはようございます！ 黒軌先輩！」

「おはようございます。(騎士道の一つ『礼儀正しさ・親切心』だ)」

ガウエインは挨拶して来た後輩らしき女子生徒に挨拶を返す。すると女子生徒は「きやあくく／／／／」と頬を紅潮させて校内にダッシュで入って行った。

ガウエインは祖父から教わった『騎士道』と『武士道』を誠実に守っているのだが、基本女性には絶対的優しさで接しなさい。と祖父から固く約束されてはいるが、ガウエインはいまいち深く理解しているから分からないが、それを守りながら生活していた。そしてその教えから女子から結構な人気を誇っている。

「……ジロツ」

「ん……?……」

だがそこで何故かガウエインを睨むフェイル。

「そろそろ時間だ、我々も戻りましょう」

「そうだな、しかし何故ランスロットは俺を睨んでいるんだ？」

「……………」

「……………」

フェイルは凄いだスの効いた睨みをガウエインに向けて放つ。だがガウエインも無言で見つめ返すや否、

「……………／＼／＼／＼／＼／」

まさか見つめ返されるとは思わなかったらしく、フェイルはガウエインの顔を反らし、顔を紅潮させた。

そんな二人が学園に戻ろうとした時、背後から殺意の籠った視線が二人を襲った。

二人は瞬時に振り返る、するとそこには今朝ガウエインの前に現れた黒服を着た黒髪の青年・愧鯨。そして同じ恰好をしている紫色の髪をした青年、海蛇かいだの二人を従えてるように前に立つスキンヘッドの巨漢が二人を見ていた。

「…………すみません、ここはアナタ方が来るような場所では無いと思うのですが、それに御伽学園ごごがくえんは学生以外は立ち入り禁止なので」

フェイルはこの黒服三人を不審者か何かと思いつつ物怖じしないで、勇んで腰に帯刀していた模造剣である西洋剣サーベルの柄に手を伸ばす。

だが、

「今時の学園はこんな刃物使つとるのを許可してんかいの？」

黒服の一人、愧鯨が瞬時にフェイルの懐に入り、手にしようとしたフェイルの西洋剣に手を指し伸ばし「盗ろう」とした。

フェイルも『しまった！』といった感じにすぐに後方に下がろうとしたが、どうやら愧鯨の方も手練れらしく、フェイルの足に愧鯨の足を交差させるように捌くと、巧い具合に転ばせようとした、が、

ツガアッ！

黒い拳撃が愧鮫の横を貫いた。

「うおおおっ!？」

愧鮫もあの速さのパンチを片手で受け止めた。

その拳撃を放った人物は何者でも無い、ガウエインだった。

「大丈夫か、ランスロット」

「えっ、え、あ、ああ。大丈夫だ」

転びそうになったフェイルの肩に腕を回して支えていた。その状態にフェイルはすぐに気付き、赤面しながらガウエインから離れた。

「痛つくく、やっぱお前のパンチは痛えなあオイ」

「き、愧鮫兄貴を退けさせた!? やっぱこの人強い!」

「……………」

愧鮫はすぐに立ち上がり、手をぶらぶらさせながらそう言うと、黒服を着た巨漢の隣まで戻る。

ガウエインも長身だけあって、巨漢と丁度同じ目線だった。

「……………貴方が鯨良（くじら）さんですか？」

ガウエインがスキンヘッドの巨漢にそう言うと、今まで無表情だった巨漢がスツと薄い笑みを浮かばせた。

「そうじゃ、儂（わが）が竜宮の『暴魚（あばれぎかな）』の鯨良（くじら）じゃあ」

「そうですか、それで何用に？」

ガウエインは素っ気ない反応で鯨良に返す、すると鯨良は『ガツハツハツ!!』と大きな笑い声を詠嘆し、服越しで分かる筋肉質な腹を叩いた。

「いやあ済まんかったわい、コイツらが恐怖するつちゆう奴を一目見たくてのう、儂（わが）もわざわざ来きまつた訳じゃあ」

鯨良は中々な強面を笑顔にしながらフェイルに頭を下げた。

「いやあ本当に済まんかったのう、お嬢さん。愧鮫が任せろつちゆう言うから任せたんじゃが」

「済まねえな、女に手を出しやあガウエインが動くど確信してたからな」

愧鮫も申し訳無さそうにフェイルに頭を下げた。

フェイルはいきなり過ぎる展開に軽い混乱常態に陥っていたが、ガ

ウエインが間に入った。

「それで、用件は」

ガウエインは無表情なまま黒服の三人と対峙する。

鯨良は肩を竦（すく）めながら口を開く。

「コイツらも言ったようじゃがのう、あんたに協力してもらいたいんじゃない」

「浦島太郎、とか言う奴の捕獲にか？」

ガウエインがそう言うのと鯨良は肯定するように頷く。

「その浦島太郎様がどうやらこの御伽花市に入ったつちゆう情報を手に入れたんじゃない」

「木を隠すなら森へ、人が隠れるなら街へって意味ですよ。浦島太郎様は年代が近いこの学園にもしかしたら寄るのではと思いきりて……」

海蛇が深刻そうな顔でそう言うのと鯨良がガウエインの近くまで行き、慮（おもんぱか）るように頭を下げた。

「どうやら近隣の学校、学園、学院に調査しているのだろう。」

「頼む」

ガウエインはそんな鯨良を恬淡（てんたん）に見詰める。

「呻吟（しんぎん）だな、まるで暗澹（あんたん）しているかのような顔じゃないか」

ガウエインは怪訝（けげん）そうにそう呟く。

「……儂（わが）らも悔恨（かいこん）しとるんじゃない、学生にまで手伝わせると思うとな」

鯨良も思う所があるらしく、サングラス越しから伝わる眼光がガウエインを思わせた。

「この人も内心、忸怩（じくじ）たるものがあるのかと。」

「……分かりました、その件はまた今日連絡します。愧鯨（けいけい）の携帯に」  
「はあ!？」

愧鯨（けいけい）が驚いた表情をしてガウエインを見る。

「何でテメエが俺の携帯のアドレス知ってんだ!？」



するとガウエインはまた恬淡に言う。

「雷魚から聞いた」

ピシッ

「・・・えっ?」

その場に居たフェイルだけは聞いた。まるでガラスに罅(ひび)が入ったような音が鳴り響いたことに。

その後、時間が時間な為にガウエインとフェイルは黒服の三人組が学園から遠ざかって行ったのを確認した後、急いで教室にへと向かった。恐らく結構時間に遅れたので朝のホームルームが終り、一時間目の授業が始まった頃だとガウエインは予想する。

「・・・色々と貴方には聞きたい事が山のようにあるのですが、一つだけ聞いても宜しいですか?」

ガウエインがそんな風に考え込んでいたら、一緒に校内に戻っているフェイルが聞いてきた。

「答えられる範囲であれば答えるよ、ランスロット」

そう言ったガウエインの前にフェイルは立ちほだかる。

「それでは、さつき校門に居た黒服の方達が一気に、その、『雷魚』という言葉で物凄い怯えたような顔になったのは・・・何故ですか?」  
「雷魚と言うのは人名だ」

「いや、それは私でも分かります。何故その『雷魚』というワードであるの屈強な方達が恐怖の色に染まった表情になったのか聞いたのです!」

一瞬。

そう。たった一瞬だけなのにフェイルの懐に入った強者(つわもの)である愧鯨、そしてその愧鯨より強いであろう鯨良という強面で

スキンヘッドにサングラスを掛けた巨漢が一瞬で恐怖にさせた人物  
「雷魚」。

フェイルの頭の中には一瞬で間合いに入られた自分の弱さ、そして  
油断に苛立ちを露にしていた。

フェイルの苛立ちをぶつけるかのようにガウエインに喰って掛か  
る。

だがガウエインはそれを冷静に答える。

「雷魚(らいぎよ)とは昔知り合った人なんだ、あの黒服の人達の上  
司に当たる人で……喧嘩になるとかなり強い人で、一人で極道潰  
しとか出来る人なんだ」

「ご、極道潰し!?!」

「それが原因で二、三回くらい国外逃亡した人で、何でも外国でもマ  
フィアを潰してきたとか、きてないとか」

「……国外逃亡!?!」

危険極まりない単語が飛び出し、フェイルも段々と格の違いが分  
かって来たらしく。

「はあく、分かりました」

「……理解したか」

「していません! してませんが……この学園に関わる事らしいの  
で私も手伝います」

「何?..」

ガウエインは共に歩きだしたが、フェイルの一言によって驚いた表  
情をする。

「私も手伝うと申したのです」

「それは、駄目だ」

「何故ですか?..」

「わざわざランスロットまで手伝う必要性が無いからだ。それにまだ  
手伝うとも言っていない」

ガウエインがそう言うと、ランスロットは腰に差していた西洋剣を  
抜き、鋒をガウエインに向ける。

「ほう、貴方の騎士道に困った者には救いの手を差し伸べるといった

「教えは無いのですか？」

「……騎士道と来るか」

「来ます」

ガウエインは目前に剣先があると言うのに物怖じせず、フェイルの瞳を見る。

フェイルは『円卓の騎士』内で誰よりもこの学園を愛している。

ガウエインはそれも知っている、だからこそランスロットには《普通》の学園生活を送ってもらいたい。

そう思ってしまったガウエインは意識しないでフェイルの西洋剣の刀身を握ろうとしてきた。

「っんな!？」

フェイルも驚き、ガウエインに怪我させないように器用に鞘に収める。

「危ないじゃないですか!？」

ガウエインのいきなりの行動にフェイルは叱る。

「……危ないな、確かに」

だがガウエインも自分でやったことに驚いていた。フェイルも『コイツどうしら良いんだ……』といった感じに困っていた。

※

あの後ガウエインはフェイルと別クラスなので別れ、各教室に戻った。

何分黒コートに長身なだけに、教室に入った途端に教師が驚いてしまった。

正直に話す、訳にはいかなないので風紀委員の仕事の手伝いをして遅れたということでもとまり。授業に入った。

そして現在放課後。

バイトがある為にガウエインは一度御伽銀行地下本店に顔を出し、すぐに愛用のバイクでバイト先にへと向かっていた。

御伽学園から出て、御伽花市近辺に入った瞬間だった。

ヒュガアンツ!!!

まるで弾丸のような物体がガウエインの兜（ヘルメット）に直撃した。

ガウエインは一瞬揺らいだが、すぐに体勢を整えてバイクを止める。放たれた方向に向くとそこには、

「あわわわ、本当に投げちゃいましたあ……！」

「これくらいしないと気付かないんだよ、彼は」

綺麗な薄水色の髪に、長髪をストレートに伸ばし黒服を着た女の子と、黒服をまるでホストのように着崩した恰好に輝くようなしなやかな黄色い髪、そして鋭い眼光を隠すようなサングラスをした青年の二人が居た。

「……………！」

ガウエインはその青年を見た瞬間に、冷や汗がにじみ出してきた。

「久しぶりだね、黒靴ガウエインくん。この可愛い女の子は海月（くらげ）と言うんだ」

青年はガウエインの同い年のような女の子の紹介をしていたがガウエインの頭の中ではそれどころでは無かった。

「く、海月と申します！ ああ、すみませんでした！ すみませんでした！」

海月と名乗った薄水色の長髪の女の子はその長い髪を揺らしながら必死に何回もガウエインに謝る。だがガウエインは海月になど頭に入っていないかった。そう、今日の前に居る人物にだけ前神経を研ぎ積ませる。

「そう殺気立つなよ、黒靴」

そう言いながらも、黄髪の青年はまっすぐにガウエインに向かって歩き出す。

「いやあ、本当に久しぶりだな。俺が数年前の帰国した後だから……………四年振りかな」

楽しく、弾むような会話に、一切の情が無かった。

そして青年は軽い感じで答えた。

「俺の名前覚えてるか？ 俺は『海淵雷魚（かいえん・らいぎよ）』だ。

今の仕事は竜宮グループ荒事専門部署という仕事で位は『署長』だ」

ガウエインは物凄い嫌悪感に襲われる。

思い出したくなかった。その名前を、

「ちよくとばかし今イライラしていたんだよねえ……………」

そして思い出したくなかった、雷魚の性格を、

「なあ、ガウエイン……………」

思い出したくなかった、雷魚の質感を、

「殺（や）らないか？」

魚達は追う。

乙姫様の為に。

浦島太郎を追えや、捕まえ。

そこで会うは。

黒い騎士と雷の戦魚。

波乱はまた、波乱を呼ぶ。

第10話「騎士さん竜宮城の戦魚達に無理矢理手伝わされる」

かいえん・らいぎよ  
海淵雷魚

竜宮グループ荒事専門部署で「署長」を務めている男の名だ。

年齢は二十歳と思わせる顔立ちと体格、そして言葉遣い。だが実際その雷魚という男は日本や世界の死線を幾度も乗り越えて来た非現実な男。

その眼光は全ての餌を見逃さず。

その口は獲物を喰い。

その鱗は鎧の高強度の防御を誇り。

その鰭は全てを風ぎ払う。

※

「.....」

「なんだよ黒靴、相変わらず無表情な奴だね。だが『怒り』の感情は芽生えたみたいだねえ。それもこれもお前の祖父じいさんのお陰かな？」

冷気。

例えるならそれが一番合うだろうか、今ガウエインと雷魚との間には冷気が入り乱れているのが一番に表現が合う。

凍てつく風が二人を包み込むように吹きあれると雷魚の方が一気に陽気そうな顔になる。

「こんな市街の入口で喧嘩するのは良くないよね。『奥方様』に迷惑が掛かる」

さつきまで身体の温度が一気に下がりそうになるような殺気を放っていた男とは思えない揚々しく話す雷魚。ガウエインは相変わ

らず無表情のまま雷魚と向き合う。

「だがイライラしてるのは間違いの無い事実だ。マジでイライラだよ  
♪ 殺したくなりそうな程に、なア?」

「アンタの相手をするのはごめん被るぞ。俺はバイトに行くんだ」

「ああ別に良いさ、只お願いする為に待ってたんだからね」

カツカツとホストが着るような黒服の恰好をしている雷魚は懐に  
手を伸ばした。

その瞬間にガウエインは愛用バイク「GALL-10」の後部か  
ら隠されていた内蔵部から『刀』らしき武器を抜き、雷魚の首筋に添  
えた。

「反応は早いねえ、最早人間業じゃないよ、だが洞察力には欠けてる  
な」

「………何?」

「もし俺が懐に銃を忍ばせていたなら俺ならまず肢体全箇所膨らみ  
などが無いかを目を配り、その後の行動等を思案する」

まあ、それも洞察力とは言わん、ごく普通な対応だがな。と雷魚は  
首筋に刃物を添えられていると言うのにまるで怯えた様子など一片  
も見せずに語り出す。

ガウエインも長くなりそうだったので結局何が言いたいのかを聞  
くと、

「つまりはだ、俺は銃を取りだそうとしてる訳じゃない。これを見て  
もらいたい訳だ」

ぱらつと懐から出した物は写真だった。

そして少し離れていた場所から海月(くらげ)という少女がやつと  
声を掛ける。

「そそそそ、その写真に写っている人物に見覚えはあり、ありませんか  
? わ、私達は探してい、いるのですが見つからない、のです」

途切れ途切れだったが、

「名前は『浦島太郎』という男性で、優しく亀を助けてくれそうな人だ」  
「………竜宮城に行きそうな顔はしてるな」

雷魚が聞くとガウエインは刀を雷魚から離し、バイクにある鞆に収

めた。

写真の中には好青年にも見え美青年にも見える端麗な顔付きなのだが幾分か青臭さが混じった感じにも見える褐色肌の顔だった。

「知らん顔だ」

ガウエインは何とも素っ気ない返答をしてバイクにまたがる。

「そうかい、じゃあ見かけたら俺に電話かメールをしてくれたら助か……」

ブオオン！ とバイクをガウエインは雷魚の話を最後まで聞かないで走り去っていった。

雷魚は走っているガウエインの後ろ姿を見てると海月が冷や汗を垂らしながら近付く。

「あ、あれが唯一、海淵署長と『まともに戦える』黒軋ガウエインくん……なんですか?」

「ああ……そうさ」

『戦う』だなんて、マンガやアニメじゃあるまいしと思うだろうが、残念ながらこの雷魚という男はその『戦う』というものに取り憑かれた者なのだ。

雷魚はどこか嬉しそうな顔になりながらも行き場の無いイライラを発散する為、タバコに火を付けながら言う。

「スハア……戻るぞ」

「は、はいー」

雷魚は歩きながらタバコを吐き、御伽花市の市街地の内にへと足を進めた。海月はそんな雷魚の後をふわふわと付いて行った。

※

あれはガウエインはまだ中学生の時だった。

親からの身体的虐待と精神的苦痛を虐げられたことによる感情紛失。



子供の身体に受けるとは到底思えない程の刃物による傷痕、折ることなんて絶対にある筈も無いのに七カ所以上の骨折。

そして皮肉にも折れた骨はかなり丈夫な筋骨となり、ガウエインの武器ともなった。

だが如何に骨が丈夫になろうが筋肉も強くならなければ内側から肉を裂かれるような激痛にガウエインは毎日のように苦しんでいた。

いや、ガウエインに取って『苦』という感情は日常茶飯事であり、それを一々感じ取っていれば4日といわずに精神が破綻するだろう。だがそれは一番大切な感情であり、人間とつて必要不可欠な感情なのがガウエインは知らないのだ。

そんなガウエインがこのまま成長すればどのような大人になるのかを誰よりも早く気付いたのがガウエインの祖父に当たる老人だった。

一時フエイ家から離れ、祖父の下で住んでいたガウエインはそこで数多くの大切な教えをそこで学んだ。

そして祖父は御伽学園学長である荒神洋燈（あらがみ・らんぷ）と同期らしく、権力もかなりあるらしい。祖父の下には「壊れた強さ」を持つている人たちが数人住み込みで居て、その中に海淵雷魚という男もそこに居た。

祖父にみっちり鍛えられたその門下生たちは各々で戦い始め、ガウエインの始めて戦いを行なった対戦者が海淵雷魚だった。

当時中学生であったガウエインに問答無用に「殺し」に掛かる雷魚は正に鮫のように荒々しく、鯨の如く巨大な一撃を放つ雷魚は悪魔のようにガウエインには映っていただろう。

だがガウエインは生き残った。

だがそれは雷魚に一撃も放つことが出来なかったことも、心残った。

もう二度と戦いたくない。

もう二度と会いたくない。

あんな疲れる相手とは、もう二度と金輪際会いたくも話すことも嫌になった。

※

雷魚と会った次の日。

ガウエインはマジョーリカの部屋【魔女工房】に居た。

「今日は月曜……ということは」

「涼子たちが当番だヨー！」

グツグツとドデカイ鍋を掻き混ぜているトンガリ帽子を被ってマジョーリカは陽気にガウエインに返答するが、

「……日曜に会ったのか、雷魚（アイツ）と……最悪だ」  
部屋にあった机に項垂れるガウエイン。

「ありや、違ったのかヨー」

マジョーリカは気にしないで掻き混ぜる。

何かを。

（……絶対に面倒なことになりそうだ）

ガウエインが何かそんな風な予感をした途端に携帯電話のバイブレーションシステムが発動する。

ガウエインは片手で操作し、画面を見るとそこには『馬鹿魚』と出て居た。かなり怪訝そうな顔をするガウエインだったが一向に切れる様子がなかったので本当に面倒臭がりながら電話に出る。

『雷魚だ♪』

電話越しから聞こえた機嫌良さそうな声に若干の苛立ちを覚えるガウエイン。

『浦島太郎を見つけた手伝え』

何故俺が手伝う？

そうガウエインが言うのと雷魚はとんでもない言葉の剣をガウエインの胸を貫いた。

『御伽学園潰すぞ♪』

「ガウエインは返答をしないで通話を切る。だが何もしない訳じゃ無い。すぐに雷魚の下へとダツシユしなければいけない。」

あの男は決して冗談を言えるような面白い人間じゃ無い。ヤクザや外国のマフィアを幾つも潰して来た雷魚が潰すと言って潰してこなかったものなど一度も無かった。

「急に青い顔してどうしたヨー？」  
マジョーリカも心配そうにガウエインを上目遣いで見て来る。

「マカ……」  
そんな愛くるしいマジョーリカを見たガウエインはこれから海魔の手伝いしに行くのがかなり嫌になった。

「ちよつと、人助けに」  
嘘では無い。

「顔色優れないヨー？ 断っちゃえヨー」  
ガウエインは本当に断りたかったのだが、雷魚が学園を潰しに来るのを何としても止めさせないといけない。マジョーリカの頭を撫で、そして綺麗な金髪を優しく掴み、キスをする。

「え、あ、ちよ／＼／＼／＼」  
素に戻って赤面になりながらも髪をわしゃくしゃにしてガウエインから離れるマジョーリカ。

ガウエインはそれを見て微笑み、雷魚の下へと向かった。



「おわああああああああああ!!?」

不機嫌MAXのガウエインは雷魚の下に集まった戦魚たち(の内二名)を轢き殺せる程の速度で横切った。

「また殺され掛けたぞ!」

「何でまた愧鯨兄貴と俺が同時に引かれるんスか!!」

そしてガウエインが轢き殺そうとしたのは竜宮グループ荒事専門部署に所属している愧鯨と海蛇かいだだった。

不機嫌なガウエインはすぐにタバコを吸って花壇に腰掛けている雷魚に尋ねる。

「高校生を脅すとは、腐ったな雷魚」

「いやだね黒軋、アレは脅しじゃはなくて脅迫と言うんだよ」

「漢字読めるか? 意味は同じだ」

会って早々に雷魚に突っ掛かるガウエインを見ていたその場の黒服の人たち。

「すごい……あの雷魚さんにあんな態度を取る人は初めて見た」

「スゲースゲー♪」

そしてその黒服の中には青い髪をポニーテールに纏め上げ、モデルのような綺麗な体つきをしている女性と。まるで雷魚が怒られているのを喜んでいのように笑っている小さな桃色の短髪少女が居た。

「……誰だ、荒事専門部署には確か厳つい男共しか居なかったハズなんだが」

ガウエインは女が居た事に驚いていた、しかも二人だから尚驚いていただろう。

「別にこの部署は男だけが所属されているんじゃないよなあ」

「……なに?」

「竜宮グループ荒事専門部署、女性を守るため組織された部署なのは分かるな? そう、この部署に入ることは以外と簡単な事なんだ。軽

い面接とその面接時にどれ程の知識を持っているかを確認。そして本題が『実技』だ」

ガウエインは話しだした雷魚を無視することも出来たが気になる話だったので無言でいる。雷魚も微笑みながらタバコの煙を吐きながら話す。

「その実技の担当するのがこの俺、海淵雷魚が直接相手することだ」  
「……最悪だな」

クハハハ、と笑いながら雷魚は周りに居る黒服たちを見る。

「ここに居る奴らはほとんどは俺が相手して臆く（おさなかつた奴らだ」

「なんだと」

「まあかなりビビっている奴も居たけどな、臆しても挑む精神の強さ、そして精神面だけでは無く純粋な強さを持つ奴ら……そんな色々な奴らが竜宮グループ荒事専門部署に集められている」

ガウエインは純粋に驚いていた。この雷魚相手に恐怖しなかつた奴らが居たことに。

そして同時に、そんな恐怖さえ超える「何か」を構える者や、恐怖という大切な感情を無くした者でなければ勤まらない仕事に就いている黒服たちを見て何処か自分に似ている事に気付いたガウエインだった。

「説明してなかったな、昨日の海月クラゲと同期入所した入夏イルカと美鮫ミサメだ」

雷魚はタバコを口に加えながらクイクイツと二人を手招きすると礼儀正しく頭を下げて挨拶した黒服の青い髪の娘が鮪夏で、まだ大きめの黒服をぶかぶかにさせた桃色の短髪の少女が美鮫のようだ。

「い、入夏と申します！」

「は、い、美鮫って言います」

入夏は真面目そうな性格で美鮫はどこか楽天的な性格そうだった。

「因みに美鮫は愧鮫の妹だ」

「サメ繋がりが」

「違わいッ！　と言いたいがそうだよッ！」

そしてさつきまでガウエインにビビりながら遠くで海蛇と見てい

た愧鮫だったが携帯のマイク口を手で押さえながら雷魚に手渡した。  
「……俺だ」

雷魚はタバコを加えたまま電話に出る。  
因みにもう日が完全に落ちている。

『はあはあ……すみません。浦島さんを追い掛けていたのですが、ハアハア、まかれまたした』

「分かった、引き続き浦島太郎の追跡を――」

『うわああああああああああああああああああああああ』

雷魚がそう言おうとした瞬間、電話の向こうから叫び声を通り過ぎたのを聞こえた。

『うおあッ!? 浦島さん!? すみませんいきなり浦島さんを見つけてました、至急に応援頼みます、現在地の場所をメールで送りますので!』  
ツーツーと電話は切れて雷魚は好機! といった感じにニコ顔をする。

「出番だ、黒軋」

その時ガウエインは面倒な事に手伝ってしまったのを後悔していた。

※

浦島太郎は駆けていた。

黒服の男に捕まらないように、

「ちよ、まて、まて、まて下さい。浦島さん! てか足速っ!」

浦島は全力で走る。

黒服の男に捕まらないように、

「グオラア! 待ては肌黒野郎オオオオオオオ! この愧鮫サマが捕まえてやんよオオオオオオオ!!」

「ギャハハハは!! 愧鮫の兄貴がこう宣言しちゃったらもうお前捕まっちゃうよオ? マジで捕まっちゃうよオオオオオオ!!」

そう、例え鮫と海蛇が浦島を襲い掛かろうが駆ける。

「マジで美少年ムカつくんだよゴラアア!! モテてんじやねえぞゴ



浦島は打って変わって至福を得た子供のような笑顔を出しながら両手を広げて立ち上がる。

「イルカちゃんじゃないか♪ どうせ捕まるなら君に……」  
「はあ!? てめえ逃げる為に俺たち手伝ってんだろうが!」

「すみません、確かに涼子さんのその魅力的で綺麗な美脚を見れなくなるのは確かに嫌なのでやめにします、ですが……やはり、イルカちゃんも捨てがたい!」

「死んどけ!」

大神が浦島を殴っているとクスクスと微笑みを掛けてくる女性に気づく。

「大丈夫ですよ、浦島さんを渡してくれたら貴女の望み通りにして上げますから……」

そこで大神は気付いた、この鮪夏という女性から異様な威圧が掛かっているのに、手の汗が尋常じゃないほど溢れる。

「血祭りにして殺してあげますからその種馬渡してください♪」

ブワツと二人はすぐに逃走した。

「ああああ相変わらず変わった愛だなあ、イルカちゃんはああ♪」

「馬鹿野郎!! 死ぬほど怖かったぞあの人!」

大神も何故か一緒に浦島と逃げてしまっているのに気付いていないまま爆走する。無言で追い掛けてくる鮪がかなり怖いのだ。

「お、お前あの女（ヒト）に絶対何かしただろ!」

「いいーえ! 断じてそんな下郎がやるような真似は死んでもやったりはしません!」

「じゃあ何だつてんだよー!」

二人が街中を走っていると先回りしていたのか他の黒服の男たちを率いて走ってくる桃色の短髪少女、美鮫が居た。

「キャッチー……」

「おっ!」

美鮫は勢い良く飛んだと思いきや俊敏な動きで浦島の懐に入り、小



さい体なりで結構長身の浦島を抱き止める。浦島はかなり嬉しそうな顔だったが、

「ちッー」

「よしー」

そして浦島が捕まったのを大神が確認してすぐに二人を引き剥がそうとするが後ろから無表情なのに快気に満ちた声で喜んだ鮪夏を見て腰が引いてしまった。

鮪もこれを気に仕掛けようとするが、

「……アード、リリース☆」

「おっ……」

美鮫は魚を河に返すような感じで浦島をリリースした。浦島はかなり残念そうな顔をしたが他の黒服たちの厳ついお兄さん達を見て正気に戻り逃走する。

「リリースするなアアアアアアアア!!?」

鮪はまさかの事態に混乱して美鮫のぶかぶかな黒服の胸ぐらを掴みグラグラと揺らす。

「あいあうあえくアハハハハハー♪」

頭をがくんがくんさせながら楽しそうにしている美鮫を見て鮪はかなり頭を悩ませた。大神もその事態にすぐには理解出来なかったが浦島の後を追った。

「ハアハア、い、いくら何でも、しつこ過ぎるだろこれは」

あの後も海の生き物の名前を持つ黒服たちに追いかけられかなり御伽花市の街中を駆け釣り回っている大神と浦島。流石に大神も市を何周も走り回っていれば疲れる。だが黒服たちも飽きられめておらず只今も追い掛け回れている。

『これは全く予想外の出来事ですの、黒服の人たちをこんな大人数で探索に出させる竜宮グループも凄いです、竜宮グループに追いかけて回れているその浦島太郎とか言う人も、ある意味、凄いですの』

「もう嫌だ、こんな暗い街中走り回されるオレの身にもなってくれ」

『うくん、確かに涼子ちゃんをこれ以上夜遅くまで外出させているのは私が許しませんの、ですが一度受けた仕事を放棄するのは御伽銀行の名が落ちてしまいますの……うくん』

因みに電話相手はりんごであり、浦島と大神は誰も居ない夜の公園に居た。

『鬼ヶ島高校の人たちも黒服のお兄さんたちのお陰で劇的に減少しましたが、逆に追い詰められて来ますの。今さっき森野くんを応援に行かせました。森野くんの猟師的感覚で人の気配が無いルートで御伽学園に向かつてですの』

「分かった」

『気を付けてくださいですの、この黒服の人たちを纏め上げている人は絶対に只者じゃ無いですの』

林檎からとても意味深な言葉を受けた大神は携帯電話を切り、休んでいる浦島に言う。

「ここに応援が来っからそれまで隠れてっぞ」

「……………」

浦島に声を掛けるが何故が返事をしない浦島、大神が疑問に思って上がっていたジャングルジムから降りようとすると、

「ああッッ！ もうすぐで涼子さんのパンチラが！」

「っんな!!／／／／／／／／」

浦島はジャングルジムで電話していた大神の隙を突いてパンツを見ようとしていたらしく物静かにジャングルジムの中に入っていた。

「くおのクズ野郎がア！」

「ごはっ！ なかなかのお手前で！」

馬鹿な浦島は見事に身動きが出来なくなっており大神の右ストレートをクリーンヒット、気持良く失神しようとした。

だが、

「見イッつー、浦島太郎」

ジャリ、と現れたのはボサボサにした黄色い髪に、黒服を着崩し首にはチエーンを巻き、黒いサングラスを掛け、白いタバコから吸い上げ、そして気持ち良く吐き出す白煙混じりの声。

こんな夜にそんな恰好してればホストか何かをしている職業者だと大神は最初に思ったが浦島の名前を知っていたのですぐに黒服の人たちに関係する人物だと大神は判断した。

「チツ、しつこいな」

大神も逃げるのに疲れたのか、魔女さんが開発したメリケンサック型ねこねこナツクルを両手に装備する。

「え、何すんの？」

そして戦闘体勢に入っている大神を見て黄色い髪をした青年は不思議そうな声で尋ねる。

「悪いが引いて貰うぜ」

タンタンツとステップを足捌く大神。

「え、暴力なの？」

打って変わって青年は気怠きだるそうな声色でタバコを片指で挟みながら言う。

「ああ、だが大人しくどっか行くななら許してやら——」

ゾワツツツ!!!

大神は首を絞め上げられそうな「何か」の感覚に襲われる。一瞬にしてだ。

「止めようよ、痛いだけだから」

そしてその「何か」の感覚を放出させていたのが目の前でタバコを吸っている青年、海淵雷魚から出ているのに気付く大神は思わず腰が引けてしまった。

何故か急に戦意というモノがどこかに消えた。  
初めての感覚だった。

こんな次元の違う威圧感は何初めてで、大神は嫌な喪失感と共にどんどんと腰を地にへと近付き、そしてとうとうペタリと座り混んでしまった。

「……ちよつと俺がイラつとしたらこれだよ。オレの威圧にお圧されちまったんだな」

雷魚は面倒臭いようにそう言いながら歩いて近付いて来る。

「……あ……く……!」

頑張つて身構えようとするがやはり力が入らない。

「用があるのはソコで寝てる男だけだ、お前には手は出さない」

そう言つて雷魚はジャングルジムの中で気絶してる浦島を訝しげに見ながら掴み掛かろうとした時、

「?」

ヒュンツと雷魚の差し出した右手が何か金属の玉のような球体が物凄い速度で飛んで掠めた。

「はあ?」

雷魚は飛んで来た方向に目を向けるとそこにはパチンコを構えている男子高校生と、まるで西洋甲冑のようなライダースーツを着ている青年、ガウエインが居た。

「涼子さん!」

パチンコを構えていた男子高校生、森野亮士が大神の名を叫びながら近寄る。

そしてガウエインも雷魚に近寄る。

「雷魚、お前……」

「何もしてないさ、ただ俺の威圧に耐えられなかったただけだ」

ガウエインは今にも雷魚に殴りかかる勢いで睨む。

「……何だよ」

雷魚もいつまでも睨んでいるガウエインを不愉快そうに顔を歪ませながらサングラスを取る。

「殺すぞ?」

雷魚はさつきとは打って変わって限りない黠（おびただ）しい威圧感をガウエインに襲わせるが無表情に雷魚を睨み続ける。

「く、騎士先輩」

大神はなんとか亮士の肩を借りて立ち上がりガウエインに声を掛ける。

「その浦島も持って行け」

「ああ!？」

ガウエインはジャングルジムで気絶している浦島を連れて行くと大神たち指示する、だが大神も亮士も驚いていたが一番に驚いていたのがガウエインに協力を求めていた雷魚だった。

「黒軋、お前何言ってるんだ、そんなつまらない冗談はいらねえんだよ?」

完全に口調が変わっている海淵雷魚、これが本当の雷魚なのかもしれない。

「ここは俺の言う通りにして貰うぞ、雷魚」

ガウエインは無表情ながらも幽かな怒気を含んだ言い方で雷魚を見る。

だがその時、

「見つけたぞオオオオオオオ!!」

草むらいきなり現れたのは相当なにかで浦島を恨んでいる愧鮫だった。

愧鮫は浦島を捕まえるべく近くに居て邪魔だった大神、亮士をぶっ飛ばす為に攻撃しようと、したその瞬間<sup>とき</sup>。

「サメが……」

ガウエインの回し蹴りを後頭部をグシャッ! と強打し、一瞬にして地にへと俯せになる。そしてぴくりとも動かなくなる。

そんなガウエインを大神と亮士は単純に『強い』と思った。

なんと言えば良いのか、その『強さ』に何かを感じた二人だったがそれを大人しく見ていた雷魚は修羅の如き苛つきをを急に露にしてガウエインに殺しに掛かろうと、しようとした瞬間、プルループルル―と雷魚の携帯が鳴る。

雷魚は携帯を忌々しく思いながら携帯画面を見てみる、するとすぐに表情が変わり少々怯えた感じになった。

「はっ！．．．こちら海淵雷魚ですが何かあつたのですか？．．．．．  
ハイ、ハイ．．．．．いえそれは俺のせいでは．．．．い  
え何でもございません、すぐに部下を向かわせますのでどうかご無理  
をなさらないで下さい．．．．．ハイ．．．．．ハイ．．．．．  
分かりました、俺も戻ります」

ガウエインは初めて携帯を持ちながらサラリーマンのように頭を  
下げながら喋っている姿の雷魚を見た。

パターンツと携帯を折りたたみ懐にへと戻す。

「．．．．．その馬鹿野太郎に行つといて下さい、今回  
は見逃す、次．．．殺す!!!」

それだけをはっきり言つて気絶している愧鮫を引き釣れて歩いて  
行く。そして数歩歩つたと思えば振り返り、

「次、殺す!!!」

それだけ告げて闇夜の中にへと消えて行つた。

## 第11話 「雷の魚は哀愁の荒波を泳ぐ」

浦島太郎を無事に連れ帰った大神さんご一行。  
勿論ガウエインも一緒にだ。

雷魚との遭遇で一気に戦意を削り取られた大神は黙々とガウエインの後を付いて行くだけだった。

何を話せば良いのか良く分からない。

それが大神の頭に渦巻いているのだろう。

だからガウエインは簡単に率直に言う。

——考えるな、思考を巡らせた所である雷魚（バケモノ）の強さは理解出来ない。

（涼子は多分、まだ考えているのだろうか。涼子は何処か“強さ”という所に何かしら、しがみついているように見える）

ガウエインはそんな風に考えながら御伽銀行地下本店にへと歩いていった。

浦島を連れ戻したのが二日前のこと。外部の人間であること、且つ此処のことは漏らさないという誓約書を書かせることで、浦島は御伽銀行地下本店に匿（かくま）われていたのだ。

「確かに盲点だろうな、逃避した筈がまた元の場所に戻っているなんて」

誰か居るはずも無く、ガウエインは独り言を呟きながら人差し指で黒縁（くろぶち）メガネをカチャと直す。

黒長いコートを揺らしながら歩いて行くガウエインはピタリと歩を止める。

何故止まったかと言うと、目線の前に立っていた人物に驚いたからだ。

「……やあ、黒軋（くろぎし）」

「——ッ!!?」

そう、御伽銀行地上店の扉の前には黒服を着て、雷のように黄色い髪、そしてギラギラとした瞳を隠すように掛けているサングラス、学園内だから煙草を吸って折らず代わりにガムを噛んでいる青年のような顔立ちの男性、海淵雷魚（かいえん・らいぎよ）が立っていたのだ。

「構えないでくれよ、思わず……いや、何でもない。気にするな」

『ぶつ殺す!』。

絶対に思わず……の後に言おうとした言葉だ。

これはまた学園内なのか物騒な言葉を吐かない雷魚にガウエインは不気味極まり無く警戒する。

するとガウエインと同じくらいの背丈の雷魚の背後からひよこつと現れた人物にガウエインは目を丸くさせた。

「これはこれは、貴方様が『雷魚』の言っていたお方なのですか?」

出て来たのは純和風の美少女だった。

顔は小さく、鼻梁は整い、肌は白く、その黒髪は腰へとまっすぐに流れ、まるで人形のような美少女だった。左目の下にある泣きぼくろが色っぽい。

だがガウエインはそこでは無く彼女の放った言葉の中にとてつもなく気になる言葉があった。

——今、『雷魚』って呼び捨てにしなかったか? と。

「……」

ガウエインは呆然とする、雷魚の前では絶対にこんな無防備な体勢にはならないのだが、今は呆然とするしかない。

それほど驚いていたガウエインだった。



「・・・お嬢様、お早く用を済ませましょう。狩り立てる衝動が弾いて  
しまいます」

「そうですね、では中でお話しましょう。名前もそこで紹介します」  
そう言って純和風な美少女は御伽銀行地上店の扉を上品良くノックして中にへと入る。雷魚も後に続き、後ろに居たガウエインを怪訝そうに『早く入れ殺すぞ!!』的な念が入った睨みを当てながらガウエインを中に入れた。

※

コンコン

御伽銀行地上店で当番をしていた一年生の大神にりんご、そして亮士が中で浦島の事について話していた時だった。

扉から控えめなノックが響いた。

「はい、どうぞですの」

りんごのその声に答えたのは綺麗な声。

「失礼いたします」

入ってきた純和風な美少女に少しだけ驚いた三人だったが、後から入って来た人物にガタツと大神と亮士が反応した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二日前、黒服達から逃れたと思った時に現れた黄髪黒服の青年。

そして大神を、腰を抜かせる程の威圧を糸も簡単に放つ男、雷魚（ソイツ）だった。

「え、えーと、お名前を聞いてもよろしいのですの？」

いきなり異様な反応をした二人を一旦座らせ、客である二人を向かいのソファに座らせる。黒服の青年だけは少女の後ろにキシツと立つだけ。そして名前を聞くりんご。

「お初にお目にかかります。私の名は竜宮乙姫と申します」

そして、と乙姫と名乗った純和風の美少女は後ろにいる黒服の青年

に手を向ける。

「このサンングラスを掛けているのは海淵雷魚と申す者です」

雷魚は浅い礼をしてまたびしやりと突っ立つ。

動作や仕草、立ち振舞いの隅々から気品が少女から漂い、不機嫌MAXオーラをビンビンと漂わせる黒服青年。

「おい………」

大神はりんごの耳元で囁(ささや)く。

「はい、苗字から見て間違いなく竜宮グループの関係者だと思いますの。そしてあの黒服の人……ちよつと待って下さいの」

ノートパソコンでいろいろ調べ出すりんご、その間大神が会話をつなぐ。

「それでなんの用だ？」

「はい、人を探しています。名前は浦島太郎。ここに来たと伺っているのですけど………」

どうやら完璧に知られているようなので大神は肯定する。

「ああ、確かにここに来たな。だが、帰ってもらった。オレらは基本的に部外者の依頼は受けないんだよ。だからどこに行ったかは知らないな」

チラツと雷魚を見る大神、連れ去る所を見ていない筈なのでそう告げた大神。

この娘は浦島を見失いどうにもならなくなったので手がかりを求めてやって来たということだろうな。そう推測した大神、だったが、雷魚の口元がニツと微笑してるのを目撃する。

一瞬焦った大神だったが、

「そうなんですか」

とても残念そうな顔をする乙姫、そのしよぼーんとした雰囲気はさまざまに庇護欲をそそる。

「ううっ」

大神は可愛いもの好きの本能が身体を乗っ取ろうとする。もし理性が本能に敗北したら大神は、乙姫を抱きしめ、どんな依頼でも受けてやると叫び出すけと請け合いだ。

それほどまでに乙姫は可愛い美少女なのだ。

そんな脳内で色々死闘が行われている大神を横にりんごが調べ物を終えたのか、会話に復帰してきた。

「ごほん。それでは竜宮さん、すみませんがいくつか質問をしても宜しいですか?」

「はい、よろしいですけど・・・なんでしょう?」

「あなたは何故その方を追っているんですの? 竜宮グループ代表の一人娘であるあなたが、そしてその竜宮グループ荒事専門部署の署長を務めておられる海淵さん。それを聞かせていただければお力になれるかもしれませんの」

「やっぱり太郎様の居場所を知っているんですか!」

「いえ、涼子ちゃんの言ったように基本的に部外者には手を貸しませんの。ですから今は知りませんの。ただ、理由によっては協力する場合もあります。ですから理由を聞かせていただければ・・・」

「分かりました」

りんごの言葉に神妙に乙姫は頷く。そして大神と亮士はあの黒服達を纏め上げていた人物が雷魚だと知り、冷や汗を垂らす。

「ではその前なくつか質問を。それで、あなたと浦島さんの関係はなんですか?」

「恋人です」

迷いなく即答して言い切る乙姫。

そんな乙姫の回答にりんごの後ろで亮士と大神がぼそぼそと話している中、雷魚は静かに入ってずっと会話に参加せずに壁に寄りかかっていたガウエインを見る。

何やら嫌な顔をしている雷魚。

すると乙姫と浦島の関係をもっと良く知る為に二人のなれそめを聞くことになった。

雷魚はチツ! と聞こえない舌打ちをしてサングラス越しに見えた瞳が一気に温度が下がった感じだった。

ガウエインは祖父から聞いた事があった。



青年のような歳に見えるこの男、海淵雷魚には『娘』が居た。

まだ若そうに見える雷魚、まだ結婚はしていない、娘とは血の繋がりは無い、とは言い切れなく少しある。

極道に生きていた雷魚の家族は他の組に殺されてしまい天涯孤独となる筈だった。

だがそんな雷魚に数年後娘と名乗る女の子が現れたのだ。

母親の姉の娘、つまり従妹（いとこ）だった。

その女の子も組の奴らによって両親を殺されてしまい、身内は雷魚だけらしく歳が離れている事を良いことに娘と名乗ったのだ。

だが雷魚は何も言わずに『娘』としてその女の子を雷魚なりに育ててきた。

一緒に住んで行く内にその娘と仲良くなっていき、誰もが仲の良い『家族』だと思われた。

だが神は雷魚を海の淵へと叩き付けた。

誘拐。

テレビのニュースなどで良く示される言葉。

そんな出来事が雷魚との家族で起きた。

『極潰し』を何回もしてきた雷魚に恨みを持つ者の仕業だった。

娘を拐った、返して欲しくば一人で来い。

簡単な脅迫状だったが雷魚はすぐに向かった。

向かった場所で待っていたのは……、

無理矢理に、*「強姦」*された娘の姿だった。

きつと抵抗したのだろう、衣服がボロボロに破られており。抵抗の際に暴力（チカラ）で黙らせた誘拐した犯人な下卑た微笑みで強姦を止めない。

きつと嫌悪したのだろう、自殺を計（はか）ろうとした雷魚の娘は舌を噛み千切ろうと咀嚼しようとしたが、顎に指を挟んで死ぬことも許さんと誘拐犯は止めなかった。

その後の雷魚は最早人間の領域を超越した狂乱ぶりで荒れ狂った。ありとあらゆる人の形をした醜い生物をグチャグチャにする。たったそれだけを雷魚は一瞬にしてやって退けた。

意識が薄れて倒れている娘を泣き上げながら抱き上げる雷魚。だが雷魚にグチャグチャにされた組の生き残りが銃を取り出して雷魚の背後を撃った。

だが雷魚に弾は届かなかった。

意識が霞んでいた中、最愛の父親を護る為に、娘が盾となったのだ。

娘が生き残るのなら雷魚はいつ死んでも良かった。

だが、その娘はどうしようも無い駄目な父親を、大好きで愛していた父親を護る為に盾になり、死んでしまった。

実に呆気なく死んだ。

『死』を幾度無く見続けていた雷魚にとってそれは見馴れた光景であり、確実に見たくなかった光景であった。

もう駄目だ。

なんだこれは。

「世界はこんな灰色だったのか。」

その言葉を吐き捨てた雷魚は銃を撃った男を跡形も無く抹殺した。

それが壊（いか）れた雷魚（サカナ）の人生の始まりだった。



そして今、雷魚の前には「瓜二つ」に娘に似ている乙姫が楽しげに、幸せそうに浦島とのなれそめを話している。

「（生きていれば、もうこんな歳だな）」

本当に聞こえない。微かな声でそう言った言葉に誰も反応しない。だが聞こえた者が一人居た。

ガウエインだ。

ガウエインは目だけ雷魚に向けて、後は乙姫の話聞いた。

乙姫の浦島との過去の話を聞いた御伽銀行の一年生組とガウエイン。

「……そんなことがあって、私は頑張ったんです。痩せて身だしなみに気をつけました。いつも首を縮めて背中を丸めた亀みみたいだった姿勢を背筋を伸ばして、そしておしやれに気をつけて、いつも綺麗に笑っていることを目指しました。内面的にも綺麗であろうと努力し、困っている人を助けるように、人の悪口は言わないように、自分が自分を好きでいられるように、自信を持てるように」

そんな素敵なことを言う乙姫。

「おいおい、むちゃくちゃいい子じゃねえか」

「そうっスね」

大神と亮士もちよつと感動。

(・・・輝かしいじゃないか)

ガウエインも乙姫の頑張りに称賛を讃える。

雷魚は無表情のまま動かない。

そしてそんな風にどれだけ熱心に浦島を愛し、探しているのかを大神、亮士、りんごに熱弁している中。

————ブブー・・・ブブー・・・ブブー・・・!

雷魚の懐から携帯の震動音が鳴る。

「・・・・・・・・あア、俺だ。・・・・・・・・愧鮫と海蛇が車に跳ねられた？・・・・・・・・知るかほつとけ・・・・・・・・ああ、それじゃイルカと美鮫、あと鯨良(くじら)が・・・・・・・・今お嬢様に代わる」  
雷魚は逃げていた獲物が引つ掛かり、喰い殺しに向かいそうな表情で乙姫に携帯を渡す。

「はい乙姫です。・・・・・・・・本当ですか！ 太郎様が!!」

電話越しから聞こえてくるのは女性の声で、ガウエインはその声の主が先日会った鮪夏(イルカ)と名乗る青髪の女性の声だと認識する。  
(ん?・・・・・・・・太郎だと・・・・・・・・何故外に?)

「はい・・・・・・・・はい、そのまま私の下に連れてきてもらえますか。居場所は・・・・・・・・そうですね、感動の再会ですし・・・・・・・・この付近には確か竜宮城の十五号店がありましたわね。そこに連れてきてくださいまし。もちろん最上階ですよ?」

新たな展開に大神が耳を澄ますと電話口から幽かに声が聞こえてきた。

『うおー! 何をする! 放ひえ! 俺(おひえ)は男(おほろ)に触(ひゃふあ)られる趣味(ふゆい)はない! ふえか口(ふち)にネギを入(ひ)れるひやない! 苦(ひが) ッ!! 苦(ひが) いしハゲ





「女の子と新たな出会いがありそうな予感がしたので少し出てきます。晩ご飯までには戻ります。晩ご飯はもちろん君で。」

あなたの浦島太郎より」

そう紙に書いてあった。

因みにそれを読み上げたのはガウエインで、それを聞いたりんごは叫ぶ。

「アホなんですのあの方は！ しかも今日に限って誰も下に……  
あら、魔女先輩が居らしたのに何故浦島さんは外に!？」

「恐らくマカはずっと魔女工房に込もっていたからじゃないか？」

ガウエインの言葉にりんごは頭を押さえる。

「でも、どうやって抜け出したんっスか!？」

「たぶんここですよ!」

部長の席の後ろにある大きな掛け軸。りんごがずらすとそこには扉が。

「これ秘密の脱出口だな、何故この出口を浦島が……」

「女に対する執念じゃねえですか？」

ガウエインに変な敬語で返答する大神、あまりにも予想外すぎる出来事に固まるりんご。しかしりんごは打たれ強い。すぐさま復活すると指示を出す。

「騎士先輩、涼子ちゃん、森野君、騎士先輩の二輪自動車（バイク）で追いかけてくださいの——」

「済まん、サイドカーは今付いてない」

とそこにガウエインが付け加える。

「な、何故ですよ?」

「久しぶりに付けてみたんだが色々と錆びている場所があったので今知り合いに見てもらっているんだ」

ガウエインが申し訳無きそうにそう言うとすぐりんごは別の打開策を思い浮かべる。

「なら裏にある自転車で追いかけてくださいの！ 場所は竜宮城……ちよつと待ってくださいの」

パソコンをいじると右の棚に置かれたプリンターから紙が吐き出されてくる。

「地図です。この通りに行けば最短距離になりますの。ここから目的地までは車で行こうとすれば回り道になりますの。どこで捕まったか知りませんが、流石にここからあまり遠いということは無いと思いますの。だから急げばどうか先回り出来るかもしれないですね。乙姫さんがストーカーなのか、そうでないならどんな理由で逃げ回っているのか聞いてくださいの。それを聞いてその後どうするかは涼子ちゃんに一任しますの。馬鹿ですが一応それでも依頼人なのでベストを尽くしましょう。というか、一発殴りたいですの」

「任せろ、おまえの分までぶん殴ってやる」

「了解しましたっす」

走り出す二人、その二人の背中に向けりんごは叫んだ。

「私もすぐに追いかけますのよ」

「騎士先輩には先に行ってもらいたいですの、絶対に竜宮城付近に護衛として駐在している荒事専門部署の方々が居ると思うんですの」

「……竜宮グループ荒事専門部署《戦魚（いくざかな）》の奴らか」

「調べて分かったんですが部署の最高責任者はあの海淵雷魚という方みたいですが、前任の署長・海間海凶（かいま・みきよう）さんは現在《戦魚》の副署長を務めているらしいんですの」

りんごの言葉にガウエインは口が渴いていくのが分かった。

海間海凶（かいま・みきよう）。

通称『朱染（しゆぜん）』の海魔（クラーク）や『水淵（すいえん）』の海凶（リヴァイアサン）』と呼び慕われている屈強の老兵だ。

昔海兵として幾戦もの戦争に身を投じ、生き残った日本兵士の一人だ。

老人とは思えぬ筋力と思考力。

戦艦を体一つで落としたという話も上がっている程の化物だ。

ガウエインはその話は作り話だと祖父に何度も聞いたが、祖父の顔が引き吊っていたのが脳裏を横切る。

「ま、まさかその海間さんと雷魚が、待ち受けていると?」

かなり汗を流しているガウエインにりんごは無情にも頷いた。

ガウエインは後輩を見捨てる事も出来るハズが無く、これから戦魚たちと戦いを身を投じる騎士となった。



「オラ〜♪ さっさと歩けこの種馬〜♪」

「くあ、み、美鮫ちゃん、そんな肉食獣が腐った獲物を見ているような目で僕を見ないでくれー! . . . . 興奮してしまいます!!」

「骨の髄まで腐ってますねー♪」

そんな褐色の肌が目立つ青年・浦島太郎はブカブカの黒服を着ている女の子、美鮫に縄で引きずりながら竜宮城、つまりはラブホの十五階にへと連れて行っていた。

美鮫の兄、愧鮫はこの浦島（バカ）を追い掛けている途中車に跳ねられ、竜宮グループが営業している医療センターにへと運び込まれているのだ。

カツカツと若干苛立ち覚えの足音が美鮫と浦島の背後から聞こえた。

「チィッ! 関東支部荒事専門部署が潰されたっつー話は本当か天貝（あまが）い」

『はあー、何かそうらしいっすよ? 自分が確認しに行ったらどっかのクソガキ共が警察（サツ）に捕まってる所でしたわ、火炎ビンやら火炎放射器やらね、日本の何処に販売していやがったんだ的な武器チラホラとねえ、ああ後ですれ高層ビルの屋上からスナイパーらしき人

物を見たつー話も出てるんすよ、考えましたよねえ、電磁力を使つた狙撃銃を使用したみたいでスわ」

「んあア？ 多分そりや磁力式狙撃銃系だな、フランス辺りで俺に狙撃してきやがった銃（やつ）だ」

『はあく……まあよく生きていましたね……まあ、いいスわ、狙撃は繊細で距離はおよそ、600メートルくらいスかね、気流や突風も考えてこれだけ』

「オイ……」

『え、へっ！ な、なんスか……』

そこで美鮫と浦島は背後から聞こえた元を見た。

そこは暗い階段を照らす黄色い灯りしかなかったが、すぐに声の主が分かった。

「襲つた奴らを根絶やしにしろ、それ以外の命令は無（ね）えんだよ？

あア天貝？ テメエの身体（かい）の中の臓器（ぐ）を全部引きずり出されてえのか、ゴラア？」

声の主はそれだけ言つて通話を切つた。

「美鮫、早く太郎 “さん” を奥の間に入れろ、面倒を増やすな」

なんとも至極嫌そうに『さん』付けして浦島を行かすように指示する。

「アハハー、もうちつと待つて下さいよショチョー、イルカちゃんと鯨良のオヤジが掃除してますからー♪」

署長。

この竜宮グループが運営する人がいれば一番に思い浮かぶ人物、竜宮グループ荒事専門部署署長、海淵雷魚しか居なかつた。

雷魚はまだ苛立ちが収まっていないのか懐から煙草を取り出す。

そう、かなり苛立っているのだ。

サングラスを掛けているからまだ良いのか、サングラス越しに見える目はギラギラと輝いており、すぐに『誰かを殺してしまえそう』な意思を込めた睨みが空を泳がせる。

もう浦島は雷魚が前に居るだけで息が出来ずに居る、心拍数が莫大にかけ上がり、息を吸う回数も増えてもう口の中は乾燥しまくつてい

る。

が、そんな虎をも睨みだけで殺せそうな雷魚に命知らずが言った。「ちよつとちよつとシヨチョー！ たばこはちゃんと喫煙所に行つてやって下さいい」

ノオオオオオオ!!? 何を言っちゃったのこの可愛い娘ちゃん  
はアアア!!。

浦島が美鮫にそんな風に言おうとしたが、雷魚はピタツと手が止まる。

「……面倒臭え」

「じゃあ仕方ない♪」

「良いのかよっ!?!」

思わずツツコンでしまった浦島が青白くしながら雷魚を見ると、詰まらなそうな顔で、

「うるせえ」

「すみませんでしたアアアアアア!!」

雷魚が一瞥してジャツンピング土下座した浦島を横切り廊下に出る。

そんな雷魚にまた電話が掛かる。

雷魚は面倒臭そうに携帯を取り出し、画面を見ると【海月(くらげ)】の文字。

「……どうした」

『あひゃい！ はいあのそのですね、物凄い速さでこっち向かってくる黒いバイクを発見しました』

かなり焦った感じの少女の声が雷魚の耳に届く。

「黒い、バイク」

そして雷魚はそのバイクに乗る知り合いが一人居た。

『黒軋ガウエインさん、です、確認しました』

そして的の中、黒軋だった。

(……やつと見つけたんだ、お嬢様の願いが叶うんだぞ。邪魔する  
気か……)

雷魚は体を引き返す。

「俺が出る、海月も戻っておいで」

雷魚はいつの間にか穏やかな口調に戻っていた、いや、戻そうとしていた。

雷魚はパタンツと折り畳み式の携帯を折り、懐に入れ、吸い始めた煙草を指と指で挟み白煙を吐く。

横過ぎた美鮫と目障りな浦島をまた一瞥して外に出ようとしていた。

「邪魔はさせねえぞ、クソ騎士が」

雷の魚はそれだけ吐き捨てた。



街中をぶっ飛ばして走って来た黒い騎士の黒鉄馬、その黒鉄馬が止まったのは竜宮グループが運営しているラブホの少し離れた場所だった。

何故止まったか、それは単純に運転の邪魔を去れたからだ。

どうやって？

これも簡単。

走っていたバイクの横から爆撃並の衝撃波が襲われたからだ。

グガアドガワン!! とガウエインは黒鉄馬(バイク)GALLI-Oと共に売り地となっていた空いてあった土地にへと吹っ飛ばされ

た。

「死んだか？」

そして衝撃波が放たれた方向からそんな声が聞こえた。

「堪ったもんじゃねえよな、後輩の願い聞いただけでラブホの横でおっ破（ば）死ぬなんてよオ」

ガタンツ！ と何か重い金属が道路に落ちた音がした。

「超電磁力爆撃式大砲、俺が潰した闇会社の開発した『兵器』だ、名前からして一発屋よろしくの兵器。使い道がいつかあると思つたんで残してたが、チツ、ガキ殺すのに使ったア俺も老いたな、ああく嫌だね老い」

そしてその超電磁力爆撃式大砲（バズーカ）を放った男、雷魚は飛んで行った売り地に足を踏み込む。

バズーカのせいか黒煙が辺りを占めていた。

「死んでねえんだろ、出て来いクソ騎士が」

そう言った時だった。

ブワツと黒い煙を鎧のように胴体から撒き散らして歩いて来た騎士甲冑姿（ライダースーツ）の青年、黒軋ガウエインだった。

「モロに喰らって骨折無しか？ お前どんな仕組みになつて――」

グキイツ！

「――ツ!？」

衝撃。

雷魚の溝に一発の衝撃が走った。

「がああああああああああああああああああああああああああ!？」

雷魚は貫かれる衝撃に耐えきれず後ろに足をよろめかせる。

「確実に『普通』の人間だった死んでたぞ」

そして雷の魚の前に、騎士が立つ。

「ハアハア、何だあ？ テメエは『普通』じゃねえのかよ？」

雷魚は溝を摩りながら力強く踏み締める。

主の為に、何よりあの乙姫（こ）の為に雷魚は口に加えていた煙草を吐き捨てた。

「来いよ、雑魚が」

黒い騎士は黒き鎧を纏いながら、軋む体を鞭打ち立ち向かう。

「駄騎士が吠えろ」

騎士と化魚（ばけぎかな）の戦いが始まった。

そして無事ラブホ前に到着した大神と亮士。

「おい、何か向こうで工事やってんのか凄い音したぞ」

「なんか爆弾みたいな感じでしたっすよ!？」



## 第12話 「雷魚の哀苦」

ボロボロになった娘。

海淵咲奈（かいえん・サカナ）、それが雷魚の娘の名だった。

咲奈（サカナ）は雷魚の唯一の『家族』だった。

咲奈は雷魚を大変なついでにおり、いつも雷魚の側でテクテクと歩いて近寄ったり、手を握ったして不器用な雷魚を困らせたりしていた年頃だった。

そして、銃に撃たれた時の咲奈の年齢は僅か17歳、これから人生というものを経験していく始めだった娘の命が断たれた瞬間、本当の娘じゃない義理の娘を親愛していた雷魚は「壊れた」のだ。

青空——いや違う。

アレは灰色の空だ。

花畑——いや違う。

色褪せない灰色の花草原。

人顔——嗚呼。

壊したくなる——。



女性は何の抵抗も無しに雷魚の血塗られた手で首を締められる。雷魚の化物並の握力で喉を潰そうとしたのだが、殺さなかった。

女性は優しい顔で雷魚の頬に手を添えて、そして「手を握ってくれた」のだ。

娘の温かく柔らかい手のように、女性特有の柔らかかな優しく温かい手が雷魚の血塗られた手を止めたのだ。

雷魚はそこでやっと娘の死を受け入れたのだ。

雷魚は泣き崩れるようにその女性の胸で泣き叫んだ。

雷魚の慟哭に女性は優しく、温かく包み込んでくれる。

それが荒れ狂った化け魚と海の美しき姫との出会いだった。



ゴガアンツ!!

竜宮グループが運営しているホテルの横では人体では予想の出来ない動きで戦っている二人が居た。

「はあ〜——」

ヒュンツと弾丸の如き速さの打撃を放つ極潰しの海淵雷魚、そしてそれを受け流している。

「——ッがッッ!!」

もとい受けを徹底にして攻撃を向ける形で戦うのは御伽学園高等部二年の黒軋（くろきし）ガウエインの姿があった。

「固えな、黒軋」

スバンツとパンチを尽かさず繰り返す雷魚にガウエインは顔面に受ける。

ガシツ

「あん？」

「頭突きだ」

ガツァン！ と雷魚の脳を震動させる。

「——ッがッ！」

雷魚の頭に思いきり頭突きを食らわせたガウエインはすぐに後方に下がる。決してこちらから攻撃はせずに受けを待つ。

雷魚は頭突かれた額を押さえながら、血管がブチ切れそうになる程浮き上がりガウエインを睨む。

「く、くく……」

「………?……」

「くくくく、かかかかあ!!」

まるで何かに取り憑かれたように雷魚は高笑いを仕始める。そして、

「——ッ！」

ツカツと一瞬にしてガウエインの懐に入り、そして勢いを乗せた一撃がガウエインの溝に入る。

グシヤアツと音を立てて吹き飛ばした雷魚はガシツとガウエインの黒髪を掴むと筆（むし）り取るような勢いで引き寄せる。引き寄せた瞬間に左膝をガウエインの顔面に打ち付ける。

顔面に入った瞬間に骨が砕けた音がしたと思いきや雷魚はすぐにガウエインの横顔を手刀で払った。

普通の人間ならば死んでもおかしくないコンボなのだがガウエイ

ンは耐え込んでそして、再びガシツと雷魚の手刀を受け取り腹部にパンチを放つ。

「温（ぬり）いんだよ!!」

だが雷魚は苦しむ顔を見せる所か笑いながら拳をガウエインの顔面に打ち込む。

そして、殴り込まれた額から血が流れるガウエイン。

「騎士（ナイト）気取りもいい加減にしろよ、黒軋イ!!」

雷魚はそのまま掌でガウエインの腹部を双打する。ガウエインは衝撃を受け後方に吹っ飛ばされる。そして雷魚はすぐに疾駆して吹っ飛んだガウエインの、「飛んでいるガウエインの足」を掴んでまた強烈なパンチを繰り出す。

ズダアンツ！ とガウエインは固い地面に打ち付けられた。

だが攻撃していた雷魚がふと何かに気付いた。

「黒軋・・・・・・・・・・・・・・・・てめえ何で急に反撃してこない」

そう、ガウエインは確かに雷魚の攻撃を受けてから必ず反撃はしていたのだ、それなのに急にガウエインは攻撃してこなくなった。

雷魚がそう訪ねるが土煙でガウエインの姿が確認できない、雷魚は仕方ないように返答を待たずに帰ろうとするが、

「・・・・・・・・？」

ガシツと雷魚の足首を掴んだのはガウエインだった。

「チツ、まだ死んでねえのか」

完全に殺る気モードになっていた雷魚は生きていたガウエインを面倒臭そうな顔で見た。

とどめをささそうともう片方の足でガウエインの頭を潰そうとした瞬間。

スバツと力強くガウエインは雷魚の足を引き寄せ、そして一気に放り投げる。

グウワン！ と軽く重力を無視するような勢いで雷魚は吹き飛ば

される。

(ここのクソ力野郎がツ!!)

そして流石の雷魚でも空中では為す術も無く塀にグシャアツとぶつかる。

そして暗黙が間を占め、そして互い同時に立ち上がる。

ガウエインは頭から血を流しながらも平然と歩み雷魚に近付こうとする。もちろん雷魚はそんな事を許す筈も無いのだが、何故か雷魚は突っ立っているだけで後は煙で見えない。

ガウエインは雷魚の一步前まで近寄る、またあの強烈なパンチを食らえば内蔵やらグチャグチャになってもおかしくは無いのにガウエインは恐怖せずに近寄った。

「……………何で俺がお前に反撃してこなかったと思う」

「……………」

「……………お前、自分の目を触ってみろよ」

もちろんそれに応える筈も無い雷魚は拳を振り上げ、勢い良くガウエインの右頬に殴りつけようとした、だがガウエインは雷魚の拳を呆気なく掴み受け止めた。

「教えてやるよ、……………アンタはもう昔のアンタじゃなかったんだ。もうアンタは自分を見つけた。もう自分を傷つけて無いのが分かったからオレは急に反撃が出来なくなったんだ」

力強く押し込んでいる雷魚の拳が震える。ガウエインはそれを全て受け入れる。

「アンタは、もう人の為に……………あの乙姫(こ)の為に泣ける『人間』になつてたんだよ」

そして漸(ようや)く雷魚はガウエインが何を言っているのかを気付いた。雷魚はガウエインに向けていた拳を引き、そして己の目から真下にある頬を触る、すると「あの日」から決して流さなかった『涙』が流れていたのだ。

ガウエインは自分でも何故この雷魚（おとこ）をそんな事を言ったのか分からなかった。

だがガウエインは確かに、昔の雷魚とは何か違うのに気付いたのかもしれなかった。

※

そんな莫大なバトルが行われていたのに気付かないで竜宮グループが運営しているホテルの中にへと突き進む男女二人組も黒服の人たちと戦ったり、そして余りにも恥ずかしさに鬼気迫る気迫をぶつ放すオオカミさんこと大神涼子の『睨み』でビビりまくったりする黒服たちと会ったりして今は最上階の扉。

「………涼子さん、あ、あの、何でそんなにキレてるんすか？」

「うるせえ！」

ボカツと亮士の頭を殴る大神、亮士にはまだ乙女の気持ちから分からないらしい。

最上階は下の階とは売って変わって作りが違ったりしていた。そして違うと言えば扉の前に立ち塞がる黒服を着た少女二人組が立ち構えている。『だけ』だった。

「その長髪の方、またお会いしましたね。同じ憎むべき対象が一緒の」

その黒服を着ていた少女の一人は浦島をかなり憎んでいる青髪ポニーテールと凛々しい顔つきが特徴の少女。

「逆に意識し過ぎになんじゃナイのー？ キヤハハ♪」

そして少女、と言って良いのか分からない程幼い体型をして黒服をブカブカしている女の子はケラケラと笑いながら同僚の少女をから

かう。

「青海イルカ（あおうみ・イルカ）と申します、名前の漢字は鮪（イルカ）と夏で『鮪夏』書きます」

「荒波美鮫（あらなみ・ミサメ）だよ♪ そう海に豚って書いて海豚（イルカ）って言うんだもんねえー」

「そ、そっちの漢字では無い！ さかなへんの方の鮪（イルカ）だっ！」  
「正直どーでも良いー♪」

きききき貴様ア！ と勝手に仲間内で喧嘩を仕始めるイルカと美鮫。

そんな二人を見ていた亮士は不思議そうな顔で見ている。

「な、何で俺たちと同じくらいの年齢の人たちがこんな場所で黒服を着てるっすか？」

最もな意見なのだが大神の耳には入って来なかった。今日の前に居る少女から目が話せないで居たのだ。

「（間違い無く、イルカって奴は強い。もう片方の方が分からねえが絶対に油断しない方が良い、騎士先輩から教えだ）」

大神は言い争っている（片方からかわれている）二人が見てない隙にねこねこナツクルを装着させた。

だが見向きもしていなかった青髪ポニーテールのイルカは実に平然と口が開く。

「そんなふざけたグローブでなんとか出来るとでも？」

「——っ!？」

本当に突然だった。

正しく自然体のままでイルカがそう答えたのだ。大神はすぐにイルカを見ると正面から大神と亮士を見据える。

——なんて堂々しく立派なのだろうか。

大神は同じ女として見惚れた。男には無い気品がありしも荒々しい気迫、綺麗で隙が無い構えと瞳。あんなにも凛々しくなれるのかと



聞きたくなる程に青海イルカは凜々しく綺麗に映っていたのだ。

「なんの理由で竜宮グループに突つかかるか存じ知りませんが、お嬢様の邪魔立ては許しません、許す訳にはいきません」

そして黒服のポケットから黒い手袋を取り出して手にはめるイルカ。

「・・・オレと戦うのか？」

「貴女以外に誰と？ まさかその貧弱そうな男と戦わせるのですか？ 視線に臆する時点で勝負は目に見えています」

ギョツと黒手袋をはめたイルカは力強く握り拳を作り構える。美鮫は横で微笑んでいるだけだ。

「・・・いぎます」

そうイルカが答えると床下を蹴るように大神の目前に駆ける。

そして黒い線が伸びるように大神にパンチを繰り出すイルカ。だが、

「律義に忠告してから迫るって、待ち構えるのに十分だ！」

「・・・防いだのですか」

大神は直球に迫ってきたイルカのパンチをねこねこナツクルで防いだのだ。まさか塞がれるとは思わなかったイルカに数秒の隙が生む。

「オラアッ！」

「・・・んっ!？」

大神は尽かさず強烈なパンチをイルカに繰り出す、イルカも素早い反応で防いだ。

ザツと距離を置いた二人。

「大した反応速度ですね？」

「はっ、そっちなー！」

そして少し離れた場所で見えていた亮士。

嗚呼、なんか次元が違くない？ 的に呆然と見ていると横から美鮫が近寄って来た。

当然亮士はビビりまくるのだが、

「対人恐怖症と視線恐怖症ねー、それは本当に大変だねアハハハ♪」

美鮫は笑いながらそう言って亮士を直視しないように語りかける。

「対人恐怖症は近くに人が居たり話し掛けたりされるのが怖いんだよねえ、ごめんねごめんね。でも人間的にはやっぱり言葉というモノが一番相手に効率良く極簡単に伝わる方法なんだと思うんだー♪」

「は、はあ」

あどけない亮士の返答に美鮫は笑いながら進める。

「そっちに確か、黒軋ガウエイン、とか変わった名前を持った先輩居なかったー?」

「い、居ますけど・・・それがどうしたっスか?」

「今この竜宮城(ホテル)の近くの空き地で激闘繰り広げてるよお♪  
キャハハハ、あの署長と戦ってまだ生きてるってあの人も化物だねえ」

亮士はこの場面で同じ寮暮らしの良き先輩、ガウエインが出るとは思わなかった。だから純粋に亮士はビクビクしながらも美鮫に向き合った。

美鮫の顔、可愛い顔をしていた。だが何処か影のある表情で一体何を感じて、何を思っ言葉吐いているのか分からない顔をしていた。

だから亮士は一度一瞬にして“ある意味違う恐怖”が胸を横切った。

「さーとと、そろそろお嬢様も戻って来そうだし止めに入るかなー♪  
そっちはあのスケ番さんを止めてあげてー」

美鮫は幼ながらの笑みでバトルしまくっているイルカと大神を止めに入った。亮士は少し訳が分からない状態だったがすぐに指示を従った。



警察沙汰にならなかったのが本当に幸いだった。

水色の髪が珍しい黒服少女、海月（くらげ）は遠くからそう思つて雷魚とガウエインの戦いを見ていた。

「なかなか倒れんのじやのう、あの少年は」

見慣れている感じで呟いたのは海月の隣で堂々と立っているのは巨漢であり何処か古みのある顔をした鯨良（くじら）だった。

「ら、雷魚さんはッ！」

「ん……？」

「ら、雷魚さんは何であんな、あんなボロボロになるまでに頑張るんですか!? 私は雷魚さんの過去を知りません、何かしらの過去でああったのは私も深く理解しています！……私もそうだったように……」

「……海月」

「でも高校生を止める為にバズーカやら爆破やらつて、絶対に違います、間違ってます！」

雷魚の今回の行いに疑問を持っていた海月、海月は隠す事の無いように鯨良にそう言った。鯨良は哀しい顔になってポンつと海月の方に手を置いた。

「儂もちつとしか聞いとらん、署長があんなに大々的にやるとは思わんかった。じゃがのう、恐らく儂らじゃ理解出来んのかもしれんのう、あの人は深い、深い、深淵に居るのじゃからなあ……」

海月は鯨良にそう言われると半ば納得のいかない顔をしていたが

直ぐに雷魚とガウエインの戦闘を見た。

(じゃが、確かにもうそろそろ時間じゃのう)

鯨良は携帯を取り出し、ある人に電話を掛けた。



「きゃーいやー！ 助けてー！ 犯され……」

そんな声を後に無情に閉まるドア、悲鳴が途切れる。

イルカと大神の戦闘は美鮫の大胆不敵な行いにより終戦させ、亮士も殴られながらも大神を止めた。

そして止め終えた瞬間に竜宮乙姫が到着し、奥の部屋にへとダツシュ&ダイビングし浦島とやつとの再会。

助けを懇願する浦島を睨む付け殴り行きたくなくなる大神を亮士が抑えていると艶っぽい女性の声が聞こえると思えば竜宮グループの社長である乙姫の母、竜宮姫子が立っていたのだ。

乙姫に年齢と色っぽさを足したような美人さんで、とてもじゃないが三十歳を越えているようには見えなかった。

その姫子は互いを愛し始めようとする娘を後にして大神と亮士を別室に連れて行き、イルカや美鮫、そして黒服の人たちがお茶の用意を出してくれた。

「あなた達が太郎ちゃんを匿(かくま)ってたねえ、道理で見つからない訳よ」

「姫子様、角砂糖を持って来ました」

「あら、ありがとうイルカ」

大神と亮士は紅茶で姫子はコーヒーを飲んでいた。イルカや美鮫はお茶を用意するとすぐに外に出て行った。

「結構焦りながら出て行ったけど、何かあったのか？」

大神が紅茶を飲みながら姫子に聞く。

「そうねえ、ちよつとね」

姫子は艶かしい笑顔を見せながらそう言う。亮士は顔を赤くしていた。それを見た大神は若干不機嫌顔になっていた。

(・・・私が止めに入れば良いのだけど、ね。あの人は)

二人に笑顔を見せた姫子だったが内心は不安の気持ちだった。

その時だった。

「どおれ、儂が赴いてやろうか♪」



「オラアツ!!」

「・・・くっ!」

ドカアツ! と雷魚の突き足がガウエインの溝に入る、だがまたガウエインも突っ込んで来た足の首を掴み引き寄せ殴り落とす。

これの繰り返しだけなのだ、だがこの繰り返しだけで空き地だったこの場所はクレーターやコンクリートの壁などが大破している。

「ふう、ふう・・・がはっああ!」

「もう、止めたらどうだ、雷魚」

雷魚は己が攻撃を集中し過ぎで防御をしていないのに気付いていなかったのだ。

当然ガウエインの拳撃が雷魚の身体を攻撃され、ボロボロだ。だがガウエインもそれは同じ、ガウエインは通常の人よりも骨が強くちよつとやそつとじゃ壊れない。だが雷魚から受けるダメージはかなりのもの。

ガウエインの十発のパンチを雷魚は一発で放てるぐらいの実力差があるのだ。

だからガウエインも己の体力も限界を迎えるのを感じてはいたが感情を露にしないので相手は分からないだろう。

「チイツー！ うるせえんだよテメエはよう」

雷魚は相変わらずガウエインを睨みながらも立ち上がる。

そしてまた殴り掛かろうとした、だがその時。

「そこまでじゃ、雷魚よ」

停止。

その言葉で雷魚は止まったのだ。

これまたガウエインは驚いていた、まさか誰かの言葉で雷魚（コイツ）が動きを止めるなんて、と。

やって来たのは老体とは思えない巨大な体と服越しでも分かる筋肉。そして海に引き摺り込むようなビリビリと海魔（クラークン）のような威圧感、全てを飲み込んでしまいそうな海凶（リヴァイアサン）の眼光。

信じられない。

こんな人間がいるのかと。

この人の前だと化物が小動物に見えても可笑しく無い、と核心を言える、ガウエインはそう思った。

「……海間（かいま）さん」

「ちと暴れ過ぎじゃぜ？」

海間と呼ばれた老人はゆっくりと、そして重く深く近寄ってくる。

「姫（ひい）さんがお呼びじゃ、あそこでお前（めえ）らを止めに入る

うとした部下から訳を聞いたが、雷魚がワリイぞ」

「……邪魔をされるのが嫌だったので」

「ぼーか、お前（めえ）はそれでも署長か？ 確りしろやあ」

ドバンツと背を叩かれた雷魚は変な曲がり方をして崩れる。完全にくの字に曲がっていた。

「その若い者も着いて来い、話は中で聞けば良いじやろう」

そう言って促されたのでガウエインは下手に逆らわずに着いて行った。雷魚はそのまま倒れたままだったが放置。



「姫（ひい）さん、連れて来たぞ」

ガウエインは怪我しまくりのままホテルの最上階まで上がり、別室でお茶を飲んでくつろいでいた大神と亮士を見て安心するガウエイン。

「騎士先輩ツ!?!」

「ガウエインさん!!」

大神と亮士、そしてついさつき到着したばかりの赤井林檎もガウエインのポロポロの姿に驚いていた。

三人は先輩であるガウエインに近付こうとしたら、いつの間にか居た竜宮グループの最高責任者である竜宮姫子が長身であるガウエインに抱き着いた。

後輩三人組はもちろん驚いていたが、もっと驚いた事に姫子が泣きながら抱いていることだった。

「ごめんなさいね、本当にごめんなさい。……あの人の苦しみを貴方に無理矢理押し付けて」

長身なガウエインの胸板に泣きつく姫子は本当に謝罪以上の感情でガウエインに語りかけていた。

「あの人は、『自分は壊れている』とか言っているけど、そんな筈が無いわ。壊れていたりしたら強姦されそうになった私を助け出した

りしない。ヤクザの部署を壊し尽くしたりしないの………

あの人は、とても優しいの」

もしこの場に雷魚が居れば必ず『違うッ!』と絶叫するだろうだが生憎とこの場には雷魚は居ない。

姫子は人前を気にせずに涙を流して謝っていた。

海間も数分は姫子の好きなようにさせたが、姫子を慰めるように頭を撫で落ち着かせた。

「すまんのう、姫（ひい）さんは昔誘拐されての、誘拐した奴らの目的は竜宮グループの稼いだお金を身代金として要求してきたのじゃ。儂も単独で乗り込めば何とかなったんじゃが……何分老いてしまつてのう、大事な姫さんを傷付けたくなかつたんじゃ。じゃが奴らはそれを見通して、のう」

海間は実の娘のように姫子を抱き寄せた、泣きじゃくる娘を抱っこする父親のように優しく背中を摩る。

「姫さんを犯そうとしたのじゃよ、テレビ中継し、全局の面前での」

海間は己が握っていた拳から血が滲み流れているのを分からないように、力強く握り締めていた。

「じゃが、そこにアイツが乗り込んで行つたのじゃよ」

そこで、今まで黙っていたガウエインの口からポツリと出た一言で大神と亮士、りんごは納得する。

「海淵雷魚か」

コクリ、と海間は頷いた。

「そうじゃ、雷魚が乗り込んだお陰で儂らも乱入出来たのじゃ………あ奴のお陰で姫さんも汚されんかった」

それからじゃ、と海間は話を続けた。

その後には姫子を誘拐したのが《朱鯨（アカシヤチ）組》という極道一家がしたものだど判明すると雷魚は単身で《朱鯨組》に乗り込み、全焼させた。

《朱鯨組》は元は竜宮グループの荒事専門に計らっていた組だったのだが、行動が荒く、勝手に竜宮グループの女たちに手を出したり、金



を勝手に使ったりと大変迷惑していたのだが、当時竜宮グループ初めの男社長であった竜宮海神（りゅうぐう・かいじん）は親友であった海間海凶（かいま・みきょう）を雇い入れ、竜宮グループの『荒事専門部署』を設立させた事に《朱鯨組》との契約を切ったのだ。

だがそれを知った《朱鯨組》は竜宮海神の娘である姫子を誘拐し、億単位の身代金を要求してきたのだが、一匹の化け魚に滅ぼされたのだ。

だが《朱鯨組》は裏との繋がりが深く、雷魚は何十回、何千回と殺され掛けた。

だがアイツは死ななかつた。

「外国に行け、と儂が進めたのじゃ。アイツはすぐに外国に行ったのじゃが、さつそく空港でドンパチやりやがったのう。マフィア共の目の敵になって日の本に帰って来よったのじゃ」

「あ、あの人よく生き残れたな……」

姫子も落ち着きを取り戻し、今はゆっくりしている。机に並ばれた紅茶に手を伸ばす暇も無く大神や亮士、りんごは海間の話を真剣に聞いていた。

ガウエインは治療の為に医務室に連れて行かれた。

「それからじゃ、アイツを儂の席を譲った」

「荒事専門部署の最高責任者である署長、にですのね」

「そうじゃ」

そして海間は雷魚の補佐をする為に副署長の席に座ったのだ。

「まあアイツは滅法喧嘩強いからのう。いろいろと大変じゃったが、掃除するのには便利じゃったわ！　がっはっはっは！」

海間は話を進めて行くと、すぐに誰か来るのに気付いた。

「ははは、楽しい笑い声が聞こえてきましたね。乙姫さん」

「はい、太郎様あ」

部屋に入って来たのは真っ白に燃え尽きた浦島とツヤツヤな顔に

なつて浦島の腕に抱き着いている乙姫だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そういや居たなコイツ」

「あはは、灰になってますの」

浦島はニヒルに答える。

「ふっ、いろいろ吸い取られましたよ」

そのまま浦島は落ち着きを感じさせる優雅な態度で空いていた椅子に座る。もちろん自分が座る前に乙姫用の椅子を引くのを忘れない。

「なんかとても紳士的ですね」

「しかも、渋いな」

「これはいったいなんなんっスか？」

その皆の疑問に海間と姫子に視線が流れる。海間は『がっはっはっは！ 相変わらず元気な若造じゃなあ』と笑っていた。姫子が疑問に答える。

「あー、この太郎ちゃんね。性欲とかのよこしまな部分を全部吸い取られちゃったから、本来太郎ちゃんが持つてる素の部分が出てるのよ」

「おもしろいじやろう?」

「いや、おもしろいっていうか、気持ち悪い」

「ふふっ、ほめても何も出ませんよ、お嬢さん」

「ほめてねえよ」

変な浦島になつて話している所で海間は姫子に耳打ちして部屋から出て行った。

※

「ジツとしていて下さい・・・・・・・・・・・・・・・・署長と戦つて無事なん  
て」

ここは医務室、そこに上半身を裸にされ、何処か異常が無いかを確認していた。診ているのはイルカなのだが愧鮫と海蛇（かいだ）も居る。

「化物だ」

「愧鮫さん！ そんな言い方どうかと思います！」

「そうだけ兄貴いく、でもそんな負け犬、あ、いや、負け『鮫』の遠吠えのように食い付く兄貴もカツコ・・・ブガアツツツ!!」

海蛇は最後まで言えずに愧鮫に殴られる。イルカは鬱陶しそうな目で二人を見ながらガウエインの身体を診る。

（あの雷魚署長のパンチを受けて骨が『折れて』いない!? しかもただ赤く腫れ上がっているだけ!?）

イルカは信じられないような物を見るようにガウエインの上半身を凝視する。

それに気付いた愧鮫は、

「なんだよなんだよ、男の身体に興味を持つような年頃かあ〜?」

「やあ〜い、やあ〜い！ 変態なタイヘンだ〜」

中学生の如きはしゃぎようで騒ぐ愧鮫。そしてそれに便乗し意味の分からない言葉を発する蛇。

「・・・頬（うるさ）い雑魚だ」

ぴしゃりとイルカが無表情でそう言う二人は面白いように時が止まり、動かなくなる。

「・・・もう大丈夫だ」

ガウエインは再び診察しようとしたイルカにそう言う立ち上がり、服を着る。

「ま、待って下さい！ まだ治療が・・・」

「何も問題は無いですよ、自分の身体は自分が一番知っていますから」  
そう言うガウエインは直ぐに医務室から出て行った。愧鮫はそんなガウエインの反応を面白くなさそうに思いながら出て行ったガウエインの手にしたドアを睨んでいた。

※

竜宮グループの運営しているホテルから出て来るガウエイン。黒服たちの騒動もあつたせい客は居なかつた。

ガウエインは空き地に置いたまま、もといぶつ飛ばされたままの鉄馬（バイク）の元に向かう。

雷魚との喧嘩は決して楽な喧嘩では無かつた。軽く『戦闘』になつていただろう、よく警察沙汰にならなかつたのか知りたいくらい派手に喧嘩をした。片方はバズーカを放ち、化物染みた強さで殴り掛かつてくるに対して、ガウエインは本当に耐えきつた。

足取りが重い、果てしなく重い。

疲労。

雷魚との喧嘩で大量の体力、そして、

（骨・・・一ヶ所だけ折れてるな、背骨、あばら、腕骨？ ダメだ。全部のヶ所が軋んで痛い）

軋む痛さを我慢しながら重い足取りのまま空き地にへと着く。

「GALL—10（ガラティーン）・・・ねえ、名前にちなんでこうなつたつちまつたのかのう？」

だがその空き地には屈強な肉体をしているのが服越しでも分かる。老人がガウエインの漆黒に輝く鉄馬（バイク）を運んで来き。

ガウエインは軋む身体を強引に張り上げ、戦闘大勢を取る。だがすぐに“何か”に捕まれる感覚に襲われた。

（・・・・・・何ッ？）

目の前に“何が”居るんだ？

ずつしりと来る、やって来る。

「なんじゃ……」

バイクを運んで来た老人はガウエインが冷や汗を流しているのに気づく。するとポリポリと頭を掻きながら老人は言う。

「そんな身構えんでくれえ、昔の癖でこっちも気が重たくなるわい」  
「……」

ガウエインのバイクを運んで来てくれたのはどうやら竜宮グループ荒事専門部署で副署長を務めている海間海凶だった。海間は鍛え抜かれた片腕でバイクを、大型二輪自動車を片腕で横に移動させる。「……すまんかったのう、じゃが若いもん同士でぶつかり合った方が良いじゃろう?」

何が良いのだろうか、ガウエインはそう思ったが口にしないでバイクを受け取る。

「乙姫ちゃんもこの件をいつかは知るじゃろう。その時はきつと謝りに来る、その時もよろしくお願いしますぞ」

ニヤツと深みのある笑みを浮かべながら海間はガウエインに言う。

ガウエインは話を聞きながらバイクの点検をする、そして何も問題が無いと分かるとすぐに西洋兜（ヘルメット）を被り海間と向き合い口を開く。

「海凶さん、二度とそんな事をしないで下さい。自分が言えることはそれだけです」

ただそれだけ。

それだけを言うとガウエインはエンジンを蒸かし、そして直ぐに走らせて帰路に進んだ。

『二度とそんな事をしないで下さい』ねえ、それはお前が雷魚（アイツ）と二度と戦いたくないのか、それとも……雷魚（アイツ）を

これ以上苦しめるな、という意味が含まれておるのかのう……」

海間はもうすぐ日が暮れる空を観ながら、そう呟いた。

### 第13話 「白馬の王子とその従騎士」

今日の地上店は一年生が担当という事でガウエインは地下にある大きな部屋で地上店を映しているモニターを見ながら緑茶を啜りながら見ていた。

そして目の端に少しだけ映るのは同じ御伽銀行メンバー。

頭取はパソコン画面を使ってシューティングゲームをしているのか、なかなか奮闘中で、桐木アリスは御伽銀行に関する情報をパソコンを使って整理したりしている。同じパソコンを使っているのにも関わらずここまで差が丸わかりなのは頭取の非労働意欲から湧き出ているのからか？ とガウエインは思いながらまた目を泳がす。

つつがなくメイドな鶴ヶ谷が部屋を掃除をしていた。

ガウエインは緑茶を一気に飲み干し、掃除をしている鶴ヶ谷を呼ぶ。

すると鶴ヶ谷は直ぐに反応してニコニコ笑顔でガウエインから湯飲みを預かる。

「おつう、緑茶を二つだ」

「?.....誰かお飲みになるのですか?」

「そうだ」

鶴ヶ谷は可愛いらしく小首を傾げ、疑問を抱きながら湯飲みで緑茶を入れる。

「緑茶です」

鶴ヶ谷はわざわざお盆に湯飲みを置いてガウエインの元に持って来た。ガウエインは緑茶が入った二つの湯飲みを取り、テーブルに置くと鶴ヶ谷に『座れ』とジェスチャーするガウエイン。

「.....?.....」

鶴ヶ谷は不思議がりながらも座る、するとガウエインは緑茶の二つの内一つを鶴ヶ谷の目の前まで移動させる。

「休めよ、地下は設備が良いから外との温度が極端に違う。掃除ばかりやっていれば体が持たない」

そうやってガウエインは入れてくれた緑茶を飲む。

そして座っている鶴ヶ谷に微かに聞こえる『……うまい』と呟く。すると鶴ヶ谷もガウエインの気遣いに気付き、目の前に置かれた湯飲みを上品に両手で掴み取ってガウエインに顔を向けると。

「ふふふ、ありがとうございます。ガウエインさま」

可愛らしい微笑みで礼を言う鶴ヶ谷、メイドスキーマな人ならば理性を吹き飛ばしてしまいそうな笑顔だったのだが、ガウエインは無表情な顔のままコクリと頷いてモニターに眼を向ける。

鶴ヶ谷もガウエインと一緒にモニターを見ていると、地上店のボロボロ部にトレーニングウェア姿の王子が部室へ入ってきた。

「あの方は王子さまですね」

「白馬王子か……」

鶴ヶ谷は緑茶を半分まで飲むと太股の上に両手で掴みながら置いてモニターに入ってきた人物の名を言うと、ガウエインは虚ろのような目をしながら名を呟く。

「どうやら王子は前に作った『貸し』を返しにきてもらったらしく、りんごが話を進めていく。」

王子はどうやらもうすぐ始まる対抗戦の為に減量をしているらしく、初夏の入ったこの季節に厚手のトレーニングウェアをきっちり着込んで走り込みをしていたらしい。

御伽花市にある三つの私立高校の運動部は定期的に対抗戦を行うらしく、会場はそれぞれの高校が持ち回りで担当している。以前は御伽花市唯一の公立高校も加盟していたらしいが、参加しなくなって久しい。

そして今回の会場となるのが御伽学園と決まっており、会場となれば応援も増えるので負けたくないというのが王子の気持ちらしい。

そこで王子は大神をスパーリングパートナーとして来て欲しい、と言うことでこの御伽銀行まで来ていた。

と、そこまで話をモニター越しで聞いていたガウエインだったが、立ち上がり地上店へと繋ぐ階段にへと向かう。

「何かご用事なのですか？」

鶴ヶ谷はガウエインに聞くと、



「少し、王子の『近衛騎士』ガーディアンナイトを会いに行ってくる」

ただそれだけを伝えてガウエインは上がって行つた。

「ガーディアン……、ナイトさまですか？」

鶴ヶ谷がガウエインの言った言葉を疑問に思いながら頭取やアリスに顔を向けると、頭取は相変わらずゲームに夢中で代わりにアリスが鶴ヶ谷の質問に答えた。

「『近衛騎士』と漢字で書き、読みはガーディアンナイトと読みます。このえきし

データでは……鶴ヶ谷さんと同じ高等部二年生の――――

「……」

「えっ！」

鶴ヶ谷はその名前を聞いて驚いていた。

その王子近衛騎士の人物の名は、



ガウエインは地下本店をバレないように別の入口から出て、また地上店であるボロ部屋に向かうと、入口の所には王子を待っている二人組が居た。ガウエインはその二人組の近くまで近寄ろうと足を一歩踏もうとした瞬間だった。

「おやおや、これはこれはあ、御伽学園名物の『黒騎士』ではないかあ」

「……本当だ、ガウエインだ」

二人組はガウエインの微かな気配を感じてすぐに振り向く。

そこには王子と同じトレーニングウェアを着ている男子高生と女子高生の二人が居た。男子高生の方は背がガウエインと同じくらいの長身であるのだが、見事に不釣り合いな小さい身長をしている女子高生と共に王子を待っているらしい。

それぞれ色違いのトレーニングウェアで、男子高生の方は紫色の線が入ったトレーニングウェア。女子高生の方は桃色の線が入ってあ

るのだが男子高生のトレーニングウェアより洒落気があり『最近の若いスポーツ少女風』な感じのトレーニングウェアだった。恐らくこの御伽花市で一番売られているのは間違い無く女子専用の物が多い。

単にこの御伽花市を牛耳っている御伽学園学園長である一荒神洋燈（あらがみらんぷ）が大の女好きだからか、それとも何か狙いがあって女子専用の物を集中的に力を入れてやっているのか……謎のままである。

そんな洒落気のある桃色の線が入ったトレーニングウェアを来ていた女子高生は服の線の色と同じ髪色を靡かせながらガウエインの元まで近寄る。

「ガウエイン、何か用？」

小さな身長なので自然と上目遣いになってしまうその少女にガウエインは男子高生の方を向いたまま答える。

「確かに用があつて来た。同じ『円卓の騎士』としてな」

ガウエインがそう言うのと男子高生は薄ら笑いを浮かばせて足を運ぶ。

因みにこの男子高生はトレーニングウェアに入つてある紫色の線と同じ髪色が特徴的である。

「ほほう……それで何用かな黒騎士？」

紫髪の男子高生は狂気染みた眼差しでガウエインに近づいていく、もし普通の人間ならば尋常じゃないこの紫髪の男子高生の眼差しには耐えられないだろう。素人でも分かるような「狂ったような目でどんどんと詰め寄せられれば恐怖が自然と流れ出るものなのだが生、憎とガウエインは『普通の人間』では無いので怯む筈も無く平然と立ったまま喋り続ける。

「あの白馬王子と言う人物についてだ」

そこまで言つた瞬間だった。

スウーと何かが静かに「切れて」いた。

切れた場所はガウエインの喉元で、綺麗に横線に切られている。

ガウエインは紫髪の男子高生の手元を見てみると、彼の脈の所に小さなナイフを仕舞う所だった。

「残ア念な事に人を殺してはいけないと王子と約束しているのでなあ。殺さない程度に忠告してやったぞ?」

彼は物の数秒でナイフを取り出し、そして綺麗に喉元を<sup>かす</sup>掠り切る行為をしてやったのだ。そして見えなかった『仕舞う動作』も並の人間神経でやれる筈も無い。

これが『円卓の騎士』の一人の実力。明らかに高校生がする行動から掛け離れていた。

「王子に関わるなよ? 王子の邪魔をしようと言うのなら黒騎士、貴様を刺し殺す」

「ダメ、そういう危ない言葉も使っちゃダメって王子言ってた」

「おつとそうだったなあ、如何せん言葉と言うのは本当に難しいなあ。やはり話すより殺した方が良い、殺した方が話さくて良いじゃないか、殺しは楽だ。よく言うじゃないか『死人は口無し』とな? クハハハ」

やはり壊れている。

ガウエインはすぐにそう思うと同時に、自分もその部類に入っているんだと認識させられる。するとボロ部屋から出てきた王子は話をしているガウエイン達の輪に入っていく。

「やあ、黒軋君。何の楽しい話をしてたんだい?」

王子の笑顔にはガウエインは少なくとも気が引くような感覚に陥った。

壊れた騎士を従える王子。

(少なくとも、この二人の性格は分かっている筈だ)

ガウエインは疑問に思ったこの二人の性格の取り扱いと、何処か陰険な感じがする王子にもう一度話を振ろうとすると、

「話は今終わった、走り込みを続けようか、王子よ」

「うん、そうだね。それじゃ二人共行こうか」

「競争」

紫髪の男子高生が話を終えたと王子に伝え、王子もそれを確認して走り込みを続けに御伽学園の校門まで走って行った。勿論走っている王子を見ていた女の子たちは黄色い歓声を上げていた。

「……………」

ガウエインは王子を守るように走る騎士二人組を後ろから見ながら思想を巡らせていた。



御伽学園は運動施設も充実している。

グラウンドも第五まであり体育館は三つ、武道館、弓道場などもある。そんな豪華施設の中でボクシング部も専用の施設が用意されているのだが、ボクシング部のジムの外観はボロい。

そんなボロいボクシング部のジムの前に立っているのは、上は大きめのTシャツ、手にはバンテージを既に巻いてあり、小脇にグローブを抱えている大神涼子。そしてその隣に立っていたのは黒いコート姿の黒靴ガウエインだった。

「……………どうして騎士先輩が居るんですか？」

「…………それは偶然重なっただけだ、俺も用事があつてここに来た」

まあ良いですけどね、と大神が呟きながらノックをして扉を開ける。

すると中から熱気と汗のにおいが流れってくる。

「失礼します」

「…………失礼します」

先に大神が入り後からガウエインが入って扉を閉める。大神とガウエインが入るとボクシング部員が近寄ってきて聞いた。

「あれ、黒靴じゃねえか。それと君は……………新入部員？」

どうやらガウエインと同じ二年生なのか、ガウエインを気軽に苗字

で呼び掛けてから横に居る大神に気付く。

大神が説明しようとしたときに聞き覚えのある声が聞こえた。

「その女性は王子の練習相手として来てくれた娘だよ、そしてそこで黒く突っ立っている奴は、知らん」

「部長の？……て、スパーリングパートナーって」

「その娘だ。おい、王子っ、姫様の到着だ」

その声主は王子近衛騎士の一人であるあの紫髪の男子高生だった。「あのッ！」

そして紫髪の男子高生の言葉が気に入らなかったのか、大神はズンズンと物怖じしないで彼の目の前で来るとギンツと睨みながら、「姫様とか、言わないでもらえますか？」

「……?……騎士先輩？」  
大神の態度に周りのボクシング部員たちがシンツと急激に静かになった。何故か温度も下がったような気がした。

(まさかアイツッ！)  
ガウエインは最悪な予想を浮かばせて一気に駆け出す。  
なんとかアイツをつ！

その考えでガウエインはすぐに大神の間まで来るとすぐにガウエインは大神を守るように後方にへと下がらせた。

「……?……騎士先輩？」  
大神も流石に急に静かになったボクシング部員たちに気付いて疑問がっていたが今は紫髪の男子高生だ。

「……言葉というのは本当ほんとうに、実に面倒だ……」  
ガウエインはグローブを着けている紫髪の男子高生を注意しながら言葉を発する。

「この間のような真似は止せ、”王子に迷惑”を掛けて良いのか？」  
ガウエインは一か八かの賭けでその王子の話を出すと紫髪の男子高生はチツと舌打ちをし、ガウエインの背後ろに居る大神に顔を向け  
て笑顔で、

「いや済まない、以後気をつける事を誓おう」



「そんなにも、自分が苦しんでも王子の為に己を抑えるのか」

## 第14話 「騎士と王子を護る騎士」

ドスツ!

ドスツツ!!

誰も居ないボクシングジムに響くは余りにも鈍い音。

拳を思いきりサンドバッグを殴り付けた音だった。

その殴り付けた本人の後ろには付き従う『騎士』のように立つ二人組。

「……その腕はどうしたんだい、《パーシヴァル》」

《パーシヴァル》と呼ばれた紫髪の男子高生はヒラリと自らの愛用するナイフで綺麗に突き刺した跡を見せる。

「いやなーに、少し自分の『殺意』が暴走しかけたから、自ら突き刺しただけだ」

異常。

まるで端から何も疑問に思っていないように話すパーシヴァル。

「……そうかい」

そして聞いた本人も無関心のように聞き流す。

ドスツ!

そして再び鈍い音が響く。

「計画進行中……?」

「ああ……」

そして桃色の髪を小さいサイドポニーにした少女が静かに聞くと、聞かれた本人・白馬王子は苦り切った声が二人の脳裏に焼き付く。

「思い通りにいかない狼を狩りに行くのか」





黒靴（くろきし）ガウエインは今、マジヨーリカが居る『魔女工房』で暇を持て余していた。

それは何故か。

『ねこねこナツクル改』ですの？」

「そうだヨー！ このグローブから伸びたコードは電気が流れてて、人を殴るとビリビリになるヨー☆」

「おぉー！ ですよー！」

「もちろん手は絶縁体で守られてるから安心と大丈夫のダブルセットなのヨー☆」

「凄い強力ですよ、今回のねこねこナツクルはっ！」

「・・・最早、女子高生が持つような代物じゃ無くなってきてるな」

ガウエインは魔女工房にある不思議な形をした椅子に座り、マジヨーリカが嬉々（奇々？）とした笑顔でねこねこナツクル改を赤井林檎（あかい・りんご）に渡している途中で話に割り込む。

「確かに荒事専門になって下さっている騎士先輩が居るので、涼子ちゃんにこのような可愛くもえげつないきょうき・・・・・・・・・・もとい凶器を持たせるのは私も納得はしていませんの」

「ノリノリでマカにアイディアを笑顔で提供していた者の発言とは思わせない口だな。それともいと言っておきながらハッキリと凶器と発言してるぞ」

「大丈夫だヨー！」

「何が大丈夫なんだ、マカ」

マジヨーリカが元気良くヒラリと長いブレザーと共に回転してからピツと人差し指を立ててガウエインに言う。

「たかが五十万ボルトの電流が流れるだけだヨー☆」

「流された相手は、たかが、で済まされない危害だな」

だが生憎と感情が余り無いガウエインにとってその危害さも良く

分かっていない状態なので『まあ・・・良いか』で済まされた。

その後はまた別の開発について話が発展していき、ガウエインはマジョーリカに断ってから御伽学園を彷徨（さまよ）う。

「酔（よ）う？ ガーイン邪（じゃ）ないカ」

「また俺の呼び名が変わっているな “ケイ” よ」

そして本当にやる事が無いガウエインの前に現れたのはまた奇天烈な恰好をした『円卓の騎士』の一人でもある本名不明である “ケイ” だった。

今日は何故か袴の上にブレザーを着て、鰐（ワニ）の覆面を被っている、何故か。

背後から声を掛けられたので一目見れば仰天ものだったのがガウエインは相変わらず何も反応しないでいつも通りの対応する。

ケイもその変わらない対応につまらなそうに溜め息を吐く。

「何だ、その妻羅無（つまらな）い犯能（はんのう）は」

「何か反応すれば良かったのか？」

「・・・妻羅乱（つまらん）」

鰐の覆面のアゴをフガフガとしながら袴の懐からプリントを取り出す。

プリントがグシャグシャに折り曲がっていた。

「副会长からだ」

「・・・」

ケイの “変舌” は無くなっており、ざわめくような不愉快な発音をしないでまともな口調で話すケイ。

ガウエインもそのグシャグシャに折り曲がったプリントを受け取る。

「亡妖（ないよう）は素手に訊かされてると重（おも）うが、 “霊（れい）の嫌（けん）” “だ”」

（ “例の件” …… ）

副会长という名を聞いたガウエインはすぐに顔色を変え（大した変わって居ないが）、グシャグシャになったプリントを綺麗に両手で折

り畳みケイに返す。

「……南（なん）だ？」

「……副会長には分かったと伝えてくれ、そして現代文はちゃんと勉強しといた方が良くぞ、ケイ」

それを言い残し、ガウエインは御伽学園の校門にへと向かって行った。

残されたケイは覆面であるワニの大きな顎を揺らし、綺麗に折り畳まれたプリントを開くとそこには。

「……！……島った……之（これ）は現代文のテストプリントだっ多！」

赤い字で『0点』と清々しく書かれてあった。

教師のコメントらしきものあり、そこには『ちゃんとした日本語でお願いします……』と泣く泣く書かれてあった。



「よお、あんた大神さんかい？」

振り向いた瞬間に見えた柄の悪い集団。

まずったか、大神は心の中で舌打ちをする。ここには依頼で来たはずだ、なのに来たのはこいつら。完璧に嵌められた。

大神は男たちの数を数える。合計十五人か、流星にこれは多すぎる。今ここにいるのは大神と亮士だけ。

しかも、最悪なことに大神の目の前にいる男たちの制服は悪名高き鬼ヶ島高校のものだ。御伽花市立鬼ヶ島高校、それは市内唯一の公立校。御伽学園が創立される以前から御伽花市にあったこの高校は、御伽学園やその他の私立高ができたことにより様変わりした。

ほとんどの人間はそれらの高校の流れ、貧しい家でも、そこそこの成績があるか、素行がまずなければ奨学金を受け取ることによって、

それらの私立に通うことができたのだ。

そしてそれらの学校に通うことが出来なかった、もしくは素行の悪さにより拒否された者たちが鬼ヶ島高校に流れ込むようになった。

そして今、鬼ヶ島高校は不良の吹きだまりとして近隣高校に恐れられる存在になっている。

「涼子さん、どうしましょう」

亮士がビクビクしながらもどうにか大神の前に出ようとする。視線の多さにやられ物凄いスローモーションで遅々（ちち）として進んでいないが。

どうする、どうする？　大神は内心焦りつつも強気な態度を崩さない。

ここは奴らのテリトリーじゃないはずだ。なのにここまで出張ってくるとは。

「これまたわいたもんだな、一匹見たらくっつてやつか？」

「ビビヒツ、強がっちゃって可愛（かわウイ）くねえー！」

馬鹿一人が前に出て来た。

この馬鹿は前にガウエインにコンビニの前で群がっていた所を注意され、衝撃の場面を目の当たりにした高山（たかやま）だった。佐林（さはやし）と言う先輩とよく一緒にいる鬼ヶ島高校生だ。

「……で、鬼ヶ島の連中がいったいオレになんの用だ」

大神は当然のように無視して他の鬼ヶ島高校生の奴に聞く。無視された高山は不良とは思えない程純粋に無視されて落ち込んでしまいい口を閉ざした。

「いやね、うちのボスがお前のこと欲しいらしいんだよ。あとちよつとは反応してやってくれよ……可哀想だろ」

そして答えたのは高山と仲の良い佐林（さはやし）だった。佐林が言った言葉を聞いた大神はまた焦りが総毛立つ。

「というわけで、ついてきてくれないかなー」

他の不良が嫌らしい笑顔でそう言う。大神は考えて考えて――

――結論が出た。逃げられない。何もまして人数が多いのだ。この数に打ち勝てる程大神は強くない。

「……用があるのはオレだけか？」

大神さんは静かに聞いた。

「そうだな、野郎が居たってしょうがねえだろ。ほんとはもう一人女が来る予定だったらしいがいねえし」

りんごを連れて来なくて正解だった。大神は少しだけ安堵の溜め息。

「分かった。というわけだ。亮士、お前は帰れ。どうせお前がいてもなんの役にもたたないしな」

大神は亮士の顔を見ずに言う。

——な

「えっ?」

信じられないと大神を窺（うかが）う亮士。

「だから消えろ、邪魔だ」

——くな

「でも」

食い下がる亮士。

——ないで

「帰れって言うてんだろが!! お前がここにいるても盾にすらならねえんだよ!!」

とうとう怒鳴る大神。唇を噛み締め、拳を握りしめ、これ以上ないほど悔しさに顔を歪めた亮士は絞り出すようにして言った。

「……………分かった……………っス」

亮士は大神に背を向け走り出した。

それを見ながら大神は、

——行かないでっ!!

安堵し、絶望し、心の隙間からかすかに漏れてきた本音に愕然とした。

『行かないで!!』……………か。

「……………ははっ」

思わず自嘲する大神。

「……………はははっ」

昔とまったく変わってなかった自分に苦笑いが漏れる。

大神は気がついた。強くなったと思っていたが、ただ自分が強いと自分に嘘をついていただけだったことに。

大神は気がついた。亮士がいなくなるだけで嘘を突き通せなくなるほど亮士を頼りにしていたのに、自分は一人で大丈夫だと自分に嘘をついていたことに。

大神は気がついた。自分の嘘に気がつきながら、それを押し込めて自分を騙して見てみぬふりをしていたことに。

大神のついていた嘘。自分に偽るための嘘。

あまりに情けなさに笑いが漏れる。

「ははははっ」

笑いながら大神は亮士に向けた言葉を思い出す。

『帰れ』……………か。かつこいいいな。

「ははははっ」

この自嘲も、どう猛な笑みに見えているだろう。

・・・なんだ、オレは嘘つきじゃないか。

認めようオレは嘘つきだ。大神さんがぎよろりと視線を向けると、視線を向けられた男たちはビクツツとして一步下がる。

ほら、みんな騙されてる。

大神が嘘と嘘の間に来たわずかな隙間を嘘で埋めている中。

むさい男たちだけの中に小柄な身長をして桃色の髪をした女の子が立っていることに大神は気付いていないまま、オレは強いと嘘の毛皮を被る。

「おいおいこっこいいな本当に彼氏いつちまったぞ」

「ふん、はなからあんなやつ頼りにしてねえよ（こっこいいな？）」

「高山、高山っ！ お前カツコつける為に早口で言ったから噛んでこっこいいな」をこっこいいな」と言ってるぞ！」

「うえっ!! マジでスカ佐林さん!? オレそんな事言ったんスカ!」

「言ったからツツコんでじゃねえか。あと大神も不思議そうに考え込んでるぞ」

そう言われて高山は大神を見て、数秒の間を挟んでから。

「やっ・・・んのかゴラアアアアっ!!」

『『えっキレたっ!?!』』

鬼ヶ島高校生の皆はハモるように高山のキレ加減が分からず、思わずツツコミを入れてしまい。各々赤面しながら高山の後に続いて大神に襲いに掛かる。

「はっ、ただの女だと思ってる痛い目見るぞ」

嘘つき大神（オオカミ）さんは自分は一人で大丈夫だと嘘をつき、頼る者も誰もいないと嘘をつき、自分は強いと嘘をついて・・・

「てめえら、・・・オレを怒らせたんだ。ただで帰ると思うなよっ!!」

・・・大声で<rb>吠え（ない）た

「オラアアアア!!」

まず一番に突っ込んで来たのは大声を張り上げて素人丸出しで殴り掛かってきたのは高山だった。

「ふっ!」

問答無用の文字が一番しつくりくる殴る音が高山の溝に入る。

「ぐはははは!! 俺には効かねえぞ大神いいいい」

と叫ぶ高山だが、顔は気持ち悪い程紫色に染まり、何か症状が発病したみたい蒼白になっていく。殴った大神（ほんにん）も少しビクツとして後ずさる。

「高山ああああ!!」

愛する後輩が倒れてしまい佐林はすぐに駆けつける。

「大丈夫か高山っ! うわっ気持ち悪ッ!」

佐林は弱々しく横になった高山を抱き抱えるように浮かせたが、余りにも蒼白になり過ぎていた高山が気持ち悪過ぎてゴンツ! とコンクリートの地面に後頭部を打つ。

溝と後頭部の強打で自然に高山は倒れた。

「よくも高山おとおおとおおとおおおっ!!」

「お前がやったんだらうがっ!」

コントかつ、と大神がツツコミしながらも他の不良もとい鬼ヶ島高校生の連中を相手する。

佐林は後頭部を押さえて悶えている後輩を椅子にしてその乱闘を見物する。決して佐林は強いから高みの見物に洒落込んでいる訳では無く、あんなバトル漫画みたいな展開の中に突っ込む程自分が強くないことくらい理解している。だから見物するしか佐林のやる事は無いのだ。後輩を治療するという選択肢もあるが面倒なので快く却下する。

「強えな、大神。鬼ヶ島高校の連中相手に食いついてくるなんてよ」



悶えて椅子になっている高山に返ってくる返答を期待しないで話す佐林。

三人目が丁度大神のパンチを顔面に食らって気絶した。

「つんとうに女かよ、大神」

佐林が暢気にそんな風に言っていると、女に殴られて尻を地に着かされた事で完全に頭に血が登り、懐からバタフライナイフを取り出していた。それに気付いた佐林はすぐに血相変えてそいつを止めようと駆け出す。だが間に合わない。

だがその時だった。

——ジャラリツ……

佐林が聞いたのは鉄の摩り合う鈍り音だった。

そしてその聞いた瞬間にバタフライナイフを持っていた鬼ヶ島高校生は腕に鎖が絡まれていた。

その一瞬の出来事にその場に静寂に包まれた。

大神もそこで逃避すればなんとかなったもののだが、鎖が繋がれている元を見て思考が停止してしまったのだ。

「喧々囂々（けんけんごうごう）」

そう言ったのは桃色の髪が似合うとても可愛らしい小さな女の子だった。

立っているだけで等身大の人形なのではと思わせてしまう程表情が固まっていて、その固まった表情の少女の腕にはとても可愛らしい少女には似気（にげ）ない鈍りの鎖がジャラジャラと巻き付けていた。ジャラツと鎖が鳴る。

（あの制服、御伽学園（ウチ）のやつだ！）

大神は可愛らしい少女と不釣り合い過ぎる鎖を巻き付けている女の子に目を向けて声を掛けようとするが。

「それ……なに？」

腕に鎖を巻き付けた少女がバタフライナイフを持っている鬼ヶ島

高校生に問う。

だがその鬼ヶ島高校生は答えない。不審がった大神がその男子に目を向けるとそこにはガタガタと震えている「鬼ヶ島高校生」が居た。

よく周りを見渡すと全員が口を閉ざして俯いていた。  
なんだこの状況？

大神がそう思っていると、鎖で繋がれていた鬼ヶ島高校生が震える口で答える。

「あああ、いや、そのこれは……………」

「それ……………」

また同じ問いにビクツと少女より大きな身体をした男子高生が戦（おのの）く。

そして何とかこの状況を打破しようと、バタフライナイフを持っていた男子高生が口を開こうとした瞬間だった。

「短刀禁止……………」

それを咄いたと思ったら少女は勢い良く男子高生の腕に絡まれて鎖を『引き戻した』のだ。

「ぎやあああああああああああああああああああああああああああああーっツツツ!!」

グチャツア！ と絡まれていた鎖を男子高生の腕の衣服と共に『皮膚』を千切（ちぎ）り戻したのだ。男子高生は苦痛で絶叫しながら肉が剥がれた腕を押さえ込んで踞（うづくま）る。

ジャラツと少女の腕には相変わらず似気（にげ）ない鎖が巻いてある。

その鎖を良く見れば所々に腐敗した『何かの肉』が挟まっており、かなり不気味と言うより『気持ち悪い』が一番に当てはまった。

彼女が気持ち悪いのでは無く、彼女の周りに漂う空気・空間・感覚が人を気持ち悪くさせるのだ。

彼女が現れた瞬間に鬼ヶ島高校の不良たちは驚くほど大人しくなった。彼女の異様な雰囲気と壊（イカ）れ具合が鬼ヶ島高校にいる生徒たちを黙らせたのだ。

どう考えてもあの小さな女の子が行なった行為は絶対に楽しくなるような行為では無いことくらいは馬鹿な佐林や高山でも理解しているつもりだった。

だがその残酷な行為を最愛のように至高の微笑みを浮かばせている少女が鎖を鳴らしていた。

「クスクスクス・・・楽しいなあ・・・壊すの楽しい」  
ブツブツと鎖にこびりついた腐肉を見つめながらうつとりとしていた。

おかし過ぎる。

そして果てしなく気持ち悪い。

それを今この場を支配していた。

やがて鎖から目を離すのを勿体無さそうにして、大神を見た。

ビクツ!! と大神は一瞬にして心臓が跳ね上がった。鎖に対しての恐怖なのか、それとも人の肉を愛しそうにして削り抉（えぐ）ったあの小さな可愛らしい女の子に対しての恐怖なのか分からなかった、判断出来なかった。

「アナタの顔を傷つけては駄目なの」

今の大神にはあの近寄ってくる少女の言葉を聞き取る事で精一杯だった。構えすら出来ないでいるのだ。

「アナタの顔・・・綺麗」

ググツと少女は大神の顔を覗き込む。

「人品骨柄（じんぴんこつがら）」

「・・・えっ？」

「知らない？ 人品骨柄——その人にそなわっている品性」

大神はなぜこの無垢そうで純粹そうな少女が人を『物』みたいな目で見れているのか理解出来なかった。

「サハヤシ、タカヤマ」

「えっ!?!」

急に少女から自分たちの名が出るとは思わなかったのか、佐林と高山は変な声で返事をする。

「サハヤシタカヤマ」

「は、はい！」

「ななな何でしようスカ！」

佐林と高山はすぐにその少女の“辺り”まで近寄る。佐林が繋げて呼ばないで下さいと空気を読まずにツツコミを入れようとしたが、そうすれば次に肉を抉られるのが己になるかもしれないので言わないでいた。

高山は少女の両腕に巻かれている鎖を見てガタガタと震えていた。

「どーしたタカヤマ？」

「あふえっ!?! ななな何がでしようなんでしようスね!?!」

（死んだな）

佐林はビビりまくりの高山を心の中で合掌した。だがそんな高山の変な言葉に少女は声を上げて笑った。

「アハハハハッ、タカヤマ変な言葉」

「はひいっ!! ずみまぜん！」

高山はもう涙声と涙目でまともで居られなかった。

「じゃあ、この子を連れて先に行く」

「お、俺たちが連れて行くと?」

「サハヤシ、そう」

少女はそう言って佐林に早く行くように促した。

「あ、あの・・・あなたは？」

佐林は高山と一緒に大神を挟むように立って小さな可愛らしい少女に聞いた。すると少女は至福に満ちた顔と声で返答する。

「私は、これから人骨柄に値しない『物』を壊すから先に行つて欲しい・・・♪」

それを聞いた佐林はすぐに血相を変えた。意味を分かったからだ。

「早く行かないなら・・・サハヤシタカヤマも壊す♪」

本当に幸せそうにして少女は佐林に腕に巻かれた鎖を見せる。鎖から漂う肉の腐敗臭を嗅ぐとすぐに大神の腕を掴んで目的地へと向かった。

背後から『あとで『パルツイ』が迎えに来る・・・』と同時に悲鳴と絶叫が聞こえてきた。

「クソツクソツクソツ！　こんなつ、こんなヤバい事なんて聞いてねえぞ!!」

「うぶう、はあはあ・・・おえあ・・・おぶうう!!」

「バカ山もちやんとしやがれツ！　大神を絶対に逃がすなよ！　逃がしたら腕じゃなく顔の肉を抉り取られるか、下手すれば殺される！」

佐林は涙目になりながら必死に大神の腕を掴んで連れて行き、背後からはまた蒼白の顔になりながらも必死に着いて来ている高山が目的地へと向かった。

大神は必死に嘘の毛皮を深く何度も被り直して、佐林と高山の言う通りに連れて行かれた。

もう・・・毛皮を深く被るしかなかった。



御伽学園生徒会副会長がケイを通してからの言付け。

“例の件”

ガウエインはそれを懸念に抱きながら御伽花市を歩いていた。

長身で黒いフードを着ていれば本当に目立っていた。

ピピピピピッ♪

無表情のまま歩いていたガウエインは懐から何の特徴も無い電子音が鳴り響く。

歩きながら携帯を取り出して電話に出る。

「……もしもし」

『僕だよ、黒軋くん』

その声を聞いた瞬間に動きをすべて停止するガウエイン。

「……副会長」

“副会長”と呼ぶガウエインは道路の通行に邪魔にならないように端に寄って、耳をしっかりと立て副会長の声を聞く。副会長から流れる通話マイクから元気な子供たちの声が聞こえてきた。

「……初等部か幼等部に居られるのですか？」

『ハハハ、今日は初等部だよ。体育館で皆とバスケットを勤しんでいた所さ』

陽気な副会長の声にガウエインは溜め息を漏らした。それを聞き逃さなかった副会長はガウエインに労う。

『本当に済まないね、初等部に関する書類を届けに来ただけだったんだけど子供たちの元気な声を耳にしてね。遊び心が見事に回帰してきたんだよ』

「はあ……」

そんなガウエインに副会長は急に静かな、重さのある言葉を耳にする。

『西区153の7番地』

「……」

『それじゃあ、僕はバスケットから鬼ごっこに勤しむ事にするよ。元気な子供を見るとこっちまで元気になってくるよ♪』

それじゃあ、と言って副会長は電話を切る。

ある事言ったら速終了といった感じだった。

「.....」

ガウエインは無言のまま携帯をまた懐に戻して、副会長が言い残した場所にへと向かった。



—— 足りない。

—— まだ壊し足りない。

壊して壊して“彼”の道を開かせたい、邪魔にならぬよう無(ゼロ)に壊(もど)したい。

ジャラジャラと血だらけになった鎖を引き摺りながら少女は思った。

### 『破壊衝動』

人間の様々な事柄により発作的に沸き起こる衝動。物事を壊し尽くしたりしないと“我慢”という苦痛のストレスを味わう。

少女は目にうつる“全ての者・物”を壊さないといけないという衝動に襲われるのだ。自分でもそれはいけない事だと分かっている抑えきることが苦痛でしかなく、我慢すればするほど病的なまでに狂い苦しむのだ。少女は自殺を何回も行なった。こんな衝動に刈り立たされて“モノ”を壊すのが嫌だったのだ。

だが実際に壊していけばいくほどそれは至高なまでにストレスの発散と苦痛から救われる唯一の方法だったのだ。

だが唯一、唯一少女が壊さずに見れた“モノ”があった。

白馬王子。

天から授けられた色々なものを詰め仕込まれた王子は壊す対象として衝動が沸き起こらなかつた。そして驚くことに彼と一緒に居るだけで我慢というストレスと苦痛が無くなっていたのだ。彼の近くに居れば「普通の女の子」として居られる。生きていけるんだと喜んだのだ。

命を救われたと同じだ。

少女は彼の為ならこの救われた命さえ捧げよう。

彼に害する『モノ』があれば喜んで「壊し尽くそう」。

彼の願いを叶えられるものであれば喜んで全てをあげよう。

この鎖で全部「破壊」する。

王子（かれ）の近衛騎士として破道（みち）を切り開きたい。

少女は鎖をジャラツと鈍り音を鳴らして西区にある廃工場にへと向かった。

「大丈夫、……王子は、ただ座ってれば良いんだよ………  
破道（みち）を作るのが、私と「パルツイ」の騎士としての務め」

可愛いらしい小さな少女騎士は、駆けた。



場所を見つけるのに以外と時間が掛かったガウエインはよつとの  
思いで着く。

ガウエインの目の前には大きな廃工場があり、そこから騒がしい乱



闘の声が聞こえていた。

鬼ヶ島高校の奴らか？ ガウエインはそう思いながら廃工場の上の階に上がる階段を静かに登り、上から様子を窺うと。そこにはマジョーリカによって改造されたねこねこナツクル改をはめて殴り飛ばし、電流を浴びせている大神涼子の姿とスリングショットで大神を見事に援護射撃を繰り返している森野亮士が上の階から射っていた。

鬼ヶ島高校生の連中は突っ込んで来る大神を飛んで火にいる夏の虫と、困もうとするが亮士の鉛玉が邪魔をする。一対一ならば大神も後れをとることはない。しかも今の大神には新兵器を身につけている。パンチ一発で気絶ものだ。

どんどんと男たちを一撃で沈めていく二人。

そしえガウエインは前髪で隠れていない片目で大神の表情を見た。とても気分の良さそうな動きで相手を沈めていってる大神にガウエインは少し安堵の溜め息を吐く。

「……良いコンビじゃないか」

無表情ながらもガウエインは少し嬉しそうな顔でそう呟いた。

確かに大神の背後を守るように狙撃していつてる亮士は凄かった。的確な狙撃で相手の邪魔をしているのに関心していたガウエインだったが、新しき不良が赤井林檎を人質にしていた。会話を聞き取ることまで出来なかったが色々マジョーリカから弱い女の子として護身用の『兵器』を幾つか持たせていることを思い出して、一応飛び出す準備をしていたがバチバチバチイイイ!! と電流が流れる音がしたと思えばりんごを人質にしていた不良がどすんと倒れ、尚も倒れた不良にスタンガンらしき物で再び向けているりんごが居た。

「えげつない、という言葉が合うか？」

一人ボソリと呟くと、ぴくぴくと痙攣している不良を横にすつきりした良い笑顔で汗を拭くりんごを見て間違いないではないな、と再び頷く。

このままなら大丈夫だな、とガウエインは判断すると身を回れ右し

て戻ろうとした。  
だが、

「いやー大丈夫だったかい？」

そんな声を聞いた瞬間にある “騎士” 二人を思い出した。



「……白馬先輩？」

大神が王子に目をやる。すると王子は心配そう顔で大神に話し掛ける。するとりんごが警戒感を隠そうとせずにスタンガン片手に大神の前に庇うように立った。

「佐藤君が君たちの所に行ったんだろう？ 彼女はね、ボクシング部のマネージャーなんだよ。だからね、僕が振られた所を見てたらしいんだ。彼女は僕が好きだったらしくて、僕を振った大神さんが許せなかつたそうだよ。ほんとに巻き込んでごめん」

頭を下げる王子。

「じゃあ、この場所がわかったのは？」

「佐藤君に教えてもらったんだ。彼女が罪の意識に耐えかねて告白してきたんだよ」

「それでは、彼女とそこで転がっている彼らとの接点はなんですか？」

「それには僕にも分からないよ。彼女は真面目な人だったから」

王子は本当に残念そうに言う。その王子にりんごは笑って言った。

「じゃあ、私が教えてあげましょうか？」

その言葉に固まる王子。がどうにか持ち直す笑顔で聞いた。

「どういうことだい？」

「ここだけの話、あの支店は防犯カメラが仕掛けられてるんですよ。」

だから、彼女が来たときから暇人の頭取さんが一部始終見てたんですの。で、なんとなくきな臭く感じた頭取さんはいろいろ調べてみたんですの。私たちに集まってくる情報はかなり多いですし、貸しを使えば聞き込みもスムーズですし、一步も出ないでその場で調べられたらしいですよ？ 奇妙な特技を持っていますし」

流石ですな〜と人事のように言うりんご。

「それなんですの。彼女が嫉妬を感じたのは本当、彼氏と別れたのも本当ですの。ただ、彼氏の方がしつこく迫っているというのは嘘。そして、彼女の嫉妬を煽ったのはあなた。彼女はあの場面を見てません。見たというのは嘘で、実際はあなたが落ち込んだ様子を見せて、心配した彼女に振られたことを悲しそうに話した。さらに調子を崩した『ふり』をして対抗戦で苦戦してみせて、涼子ちゃんへの心配を憎しみに変えさせる。どうせ、そこまでやるなら負ければよかったですの。やっぱプライドですの?」

可愛らしく小首をかしげて聞くりんご。王子は笑顔で返事をしない

りんごの推理は次々との射ていく。

王子が全ての計画を企てていたことを見抜かれたのだ。

「まったく……。せつかく、限界まで追いつめられた大神くんを颯爽と助けて惚れさせようとしたのになあ」

「びつくりすると陳腐な作戦ですのね」

「まーね。僕もそう思うよ。でもね、とても効果的ではあるんだよ。実際大神君は追いつめられてあと一步で崩れるってところまで行つたしね。そこでかつこよく助けだし、その折れた心を優しく支えてあげれば一丁上がりだ」

ずつと見ていた王子に興味の悪さがすぐに分かる。

「うーん、僕の敗因は君たちの情報収集能力を侮つたことだねえ」

「それもあるんですけど、一番は森野君ですよ。でないと間に合わなかったですよ」

「ん〜あのヘタレ君がこんな特技を持っていたとはね」

「正直言えば私もびつくりですよ」

りんごと王子の会話が終わったところで、大神は聞いた。  
なぜオレなのだ。

王子は大神の素材が最高で、磨けば光る容姿に、その強い心。強気な大神を自分の思いのたたにできたら、それは素晴らしいことだと思うらしい。

「僕はね、自分で言うのもなんだけど努力家なんだ。客観的に見ると容姿家柄才能すべてに恵まれているように見えるだろう？ 確かに欲しいものはだいたい手に入れてきた。それでも僕はこの世が思い通りにならないと知っている。それが嫌なので僕は努力する。この世が僕の望み通りに回るように。すべてが僕の思い通りに行くように。そして努力でできないことをなくしていった結果、今の僕があるわけだよ」

「ふん、こいつらもその努力の成果というわけか？ 確かに努力家なんだろうがはつきり言って反吐（へど）が出る」

「いいねいいね、その反抗的な態度。最初から思い通りになるもの、それはそれでいいんだよ、ただね、やっぱり自分の思い通りにならないものか思い通りになる、その喜びに勝るものはない」

「だから、おまになびかなかったオレを努力で自分のものにしようとしたわけか」

「ま、そういう訳だよ。ちなみに君の質問答えると、そこに転がっている彼らも僕が努力して人脈を作った成果だよ。そう、人脈も力なんだよ。表だけでなく裏でも力を持ってないと、なかなかすべてを思い通りにはできないよね。ただ、そこに転がっている役立たずたち、これは努力というまでのことでもなかったんだけど。金であつたという間に懐柔されちゃったし。ま、その分使えなさすぎだけど」

全くとあきれ顔の王子は肩をすくめ、そして急に笑顔に戻ると言った。

「で、君たち。時間稼ぎはこの辺までにしてもらおうか。助けが来る前に、君たちを動けなくして大神君と赤井君を持って帰るよ。ま、そのあとは楽しい一時を過ごさせてもらう」

「断る。作戦が失敗したら、今度は無理矢理に自分のものにしようっ

てか？」

「その通りだよ。力づくでも自分の思い通りにするには変わり無い。さつきも言ったように僕は、この世のすべてが都合良く回るわけがないと知っている。理解している。ただ、理解するのと、納得するのは別物だよ。腹が立つものは腹が立つんだよ、僕の思い通りに行かないと」

「とんだ我儘おぼっちゃまですの。それでなぜ連れ帰るリストに私が加わってますの？」

「いや、君もなかなか反抗的だから、思い通りにすることができたら、とても気持ち良いだろうなと」

「・・・最悪ですの」

げんなりと本気で嫌な顔をするりんご。

「りんご下がれ、こいつはオレがぶん殴る」

「できるつもりかい？ 一週間もスパリングしてたんだから、僕の力はわかってるだろう？」

「一人ならな・・・亮士!!」

大神はそう叫びながら走り出す。が、

「おっと、させないよ」

王子は大神の懐に入り込んだ。

「なっ！」

驚く大神。しかし、反射的に殴りかかる。

「当たらないよ」

いったんバックステップで下がりパンチン避けると、再び接近し大神の腹を思い切り殴る。

「ぐはっ」

たったの一撃でよろめく大神。

「確かに、その物騒なものをつけている君のパンチが当たってしまつたら一撃でおしまいだ。だけど当たらなければ意味が無い。ちなみに僕はボディしか殴らないから。顔殴ると手が痛いし、顔が壊れるとしらせるしね。ちなみにボディでダウンするのは苦しいらしいよ。僕は経験ないけど」

「うるせえよ」

その様子を見て二匹の犬は王子に襲いかかり、

「邪魔だよ」

その一言ともに吹き飛ばされた。

「っ！ エリザベスちゃん！ フランソワちゃん！ 森野君、援護は？」

上手く大神を盾にして亮士の狙撃をさせないようにして王子はボディにパンチを叩き込む。

「がつ！」

ほとんど気力だけで崩れ落ちるのをこらえる大神。

「どうだい？ お腹が重くなってきたかな？ でもあまり屈まないで欲しいなあ、盾にならないし、まあ、もう一発くらいかな」

王子は笑顔を絶すことなく止めを刺しにはいる。が、その時だった。

カバツ！！ と突如王子は黒い何かに押さえ込まれた。

「くあつ！」

いきなり上からの襲撃により、王子は抵抗しようも無いようにその襲撃者に目を向けるとそこには、黒いフードに片目を隠すほど長い前髪に、無表情な顔をした御伽学園の通称『黒騎士』、黒軋ガウエインだった。

「堕ちたな、白馬王子」

「「騎士先輩っ！」」

思わぬ助け舟にりんごと大神、亮士は誰よりも強く、信頼する助っ人が来たことにより安堵の息を吐く。

だが、それがいけなかった

王子が笑っていることを気付いていないことに――。

「<rb><rp></rp></rb><rt>パ<rt><rp></rp></rb></rt></rp></rb><rt>モ<rt><rp></rp></rb></rt></rp></rb><rt>ル<rt><rp></rp></rb></rt></rp></rb><rt>ド<rt><rp></rp></rb></rt></rp></rb><rt>レ<rt><rp></rp></rb></rt></rp></rb><rt>ット」

「はっ」

王子がその騎士名を呟くと同時にガウエインは廃工場から引き摺らすように「引かれ」たのだ。

ガウエインの視界に映った後輩たちの顔。  
希望から絶望に変わる瞬間。

それはあつてはいけない。

ガウエインはすぐに廃工場の外にある錆びた部品を掴む。

「パルツイ、今」

「ああ、分かっているさあ！」

そして言葉を聞いたと同時にガウエインは身を捻るように曲げ暴れるように足を回す。

「こオのっ！」

ガウエインの足が丁度良く相手の手に掴まれていたナイフを弾いた。

「プリンス・ナイトか」

ガウエインは未だに身体に巻かれた鎖をなんとか力で押さえ込みながら相手を確認した。

「《パーシヴァル》、《モルドレット》」

パーシヴァルと呼ばれたのは紫色の髪をオールバックにした少年、そして小さな身体がとても可愛らしく桃色の髪をした少女はモルドレットと呼ばれた。

「王子の邪魔をするなど、アレ程言ったのだがなああ!!」

パーシヴァルはどこからともなく表したナイフを次々とガウエインの急所に狙い飛ばす。ガウエイン自分の身体に巻き付かれた鎖を激しく揺らして直線上に向かってくるナイフを次々と落として、次に鎖を思いきり引く。所詮は男と女と力なのでモルドレットは苦い顔をして引かれる。

「馬鹿がっ！」

だがパーシヴァルが引かれるモルドレットの鎖を途中で掴み、ガウエインと綱引きの如き引き合いをする。

片手で鎖を引いたパーシヴァルはもう片方にナイフ三本を指に挟み、軌道を読んで今度は正確に狙いを定め。

「死ねッ！」

ヒュンツと凶刃がガウエインに向かう。

「ぐっ」

ガウエインは片腕を盾にして急所を守るようにする。グチュツ!! とナイフがガウエインの腕と肩に突き刺さる。思わず痛みで声を漏らす顔は全然変わっておらず、無表情でナイフを刺されたまま鎖を引こうとした瞬間だった。

ガクツと身体がバランスを崩す。引つ張られたのでは無く、引こうとした瞬間に弛(ゆる)まれたのだ。

「・・・っ!?!」

そしてガウエインの前から迫って来たのは片腕を鎖で巻き、まるでボクサーグローブのようにして駆け抜ける勢いでガウエインの顔をぶん殴った。

グチャアツ!! と顔の皮膚が鎖によつて抉られる感触がガウエインを襲う。

そして次に襲って来たのは。

「ふんッ！」

ブチュアツツ! と両方の太股にナイフを突き刺されたのだ。皮膚と筋を綺麗に突き刺されていく感覚が何故か聡明に感じられた。

「・・・ツツツツ!!」

声を押し殺しながらもまだ移動して行つたモルドレットは上手い具合に鎖でガウエインを捕縛した。

「何が円卓の騎士『最強』の名を持つ黒騎士だ・・・雑魚が王子の邪魔をするんじゃねえぞ」

パーシヴァルはガウエインの太股に突き刺したままのナイフを勢い良く蹴る。

ギチャアツ! また筋を断つ音が生々しく聞こえた。ナイフの柄まで太股に深く突き刺さってしまった。



「……ッ!!」

「チツ、悲痛の叫びも上げられないか」

パーシヴァルは鎖で巻かれたガウエインを侮蔑の含んだ目で見たあと直ぐに見向きもしないで王子の元に向かった。

「ガウエイン、我慢」

それだけを言い残し、片腕の鎖を全部使いガウエインを錆びた工場  
の柱に縛り付けた。そしてジャラジャラと鎖を引き摺りながらモル  
ドレットも王子の元に向かった。

※

パーシヴァルとモルドレットが戻った時には白馬王子は惨めにも  
横に倒されていた。

「王子ッ!?!」

二人は焦りながら王子の身を心配して近寄る。すると顔に殴られ、  
電流が流された形跡があった。それをみたパーシヴァルは人間とは思  
えない程の『殺意』が大神たち向けられた。

「貴様ラァア!!! 死ぬ覚悟は出来てるかッッ!!」

またも数本のナイフを取り出して大神と対峙するが、

「待て、パーシヴァル」

王子がモルドレットに支えられながら立ち上がる。

「おお! 王子よ! 大丈夫か!」

パーシヴァルはナイフをすぐに捨てて王子に肩を貸す。王子は  
パーシヴァルの言葉に耳を貸さずに大神たちに言う。

「トドメは刺しておくべきだったね。おっと動かない方が良いよ。身  
体が痺れてふらふらするけど、半死半生の大神君に今の僕でも勝てる  
し、パーシヴァルやモルドレットが居る。その彼、名前は忘れたけ  
ど視線が怖いんだったよね。今僕の視線を受けて固まっちゃってる

し」

「そこお二人方は」

「赤井君は知ってそうだけど、この二人は王子近衛騎士（プリンス・ナイト）であるパーシヴァルとモルドレットだよ。本名は流石に言わないけどね、全く、うれしいねえ」

「うれしいだあ」

「当たり前だよ。苦労すればするほど、努力すればするほど、願いが叶ったときは嬉しいものだろう？ いや、しぶりだよこんな苦労したのは。ほんと楽しみで楽しみで仕方ないよ。君たちを僕の思い通りに出来たら、どれだけ楽しくて気持ちいいのかな？ どれだけの感動があるのかな？ 全然想像もできないよ」

そう言つて、心のそこから笑みを浮かべる王子。

「いやいや、強い女の子はいいねえ。ほんと征服しがいがあるというか」

その王子の様子に、大神とりんごは悔しきで顔を歪め、憎しみの瞳で王子を睨む。パーシヴァルとモルドレットは満足そうに、そして何か王子を心配そうに見ていた。

そして大神が口を開こうとしたそのとき、

「ふざけるな!!」

それよりも先にそう言う叫び声が響いた。

「ん？ なんだい？ 邪魔なんでそこで固まってよ」

王子は亮士を殺気を込めた瞳で睨み付ける。パーシヴァルはその殺気を感じ取り王子を横から静かに見る。

「ふざ……ける……な」

その視線を受けながらも亮士は足を一步踏み出した。

「この……馬鹿野郎が……涼子さんはな……強いんじゃない」

また一步踏み出す。

「……強くあろうとしてるんだよ!!」

もう一步。

「必死に努力して」

一步。

「誰にも助けを求めずに」

一步。

「二人で」

一步。

大神は一步ずつ王子に向かっていく亮士を見る。りんごはその大神の手をそつと握る。

「初めて涼子さんを見たとき、おれは見た目と中身が合っていないような変な違和感を覚えた。最初はなんでか分からなかった」

亮士は顔を上げ、王子の視線を真つ正面から受け止める。

「でも、側にいるようになって理由がわかってきた。涼子さん……：……本当はかわいい女の子なんだよ。かわいいものが好きで恥ずかしがり屋で赤面症で素直じゃない。そんな普通の女の子なんだよ」

「普通の女の子」

モルドレットはぎゅつと王子の服を掴みながら大神を見る。

「なのに、嘘をついて自分を隠して強がっている。自分に、嘘ついて嘘ついて嘘ついて……そうしないと強がれないほど、涼子さんは弱いんだ」

王子の視線をさらされつつもいつの間にか亮士は王子の前、そして亮士は大きく拳を振り上げる

「でもそんな自分が嫌でがんばってるから、嘘ついてでも強くあろうとしてるから、だから……だから涼子さんは強いんだよこのボケがっ!!」

視線にさらされているため、ぎこちなく弱いパンチ。パーシヴァルとモルドレットに離れろ、と命令する。ふらふらの王子にも避けられる。そして王子はカウンターで殴り飛ばされる亮士。しかし唇から流れた血をぬぐいながら立ち上がる。

「なんだい、君は彼女の騎士(ナイト)のつもりかい？ さっきまで彼女の後ろでこそそそ隠れていたくせに」

馬鹿にするように笑う王子。亮士はその王子の目をまっすぐ見つめ返す。

「……おれは騎士なんかじゃないよ。……盾にも剣にもなれない、……ただ後ろに隠れてちまちま援護するしか能がない……おれはね」

視線を耐えつつ、再びゆっくりとした動きで王子に向かっていく亮士。少しずつぎこちなさが消えていく亮士の身体。

「でも……だからこそできることもある」

そして再び王子の前へと進んで行く。その亮士の顔に王子のパンチが突き刺さる。

「ぐっ」

吹き飛ばされる亮士、しかし亮士は倒れない。

「なら、なんだというんだ君は!」

全く自分の思い通りにならない亮士に王子は初めて怒りをあらわにした。

そして怒りのまま亮士を殴り、そのパンチは狙い変わらず亮士の顔に

めり込む。が、亮士は倒れずその腕を掴んだ。

無意識だった。

何をしたいのかわからない内に王子に従う騎士二人が駆け抜けた。あの亮士とかいう奴がやることを逸早く理解して無意識に反応してしまったのだ。

二人はもう分かっていたかもしれない。

今この場でこの亮士を倒してしまえば王子がこれから進む人生に何か欠けることになることを。

パーシヴアルの『殺人衝動』とモルドレットの『破壊衝動』は既に抑えられていた。王子が近くに居ただけでこんなにも落ち着き、余裕が生まれ、王子のこれからの事まで考えられるようにまでなっていた。

パーシヴアルはナイフを、モルドレットは鎖を亮士目掛けて放とうとした時だった。

黒い流星の如き速さでパーシヴアルとモルドレットを亮士から引き剥がした人物が二人を抑え込んだ。

黒靴ガウエイン。

無理矢理鎖を千切ったのか肩に刺さっていたナイフから血液が流血し、太股は大量に血が流れていた。

「黒騎士……」

「……ガウエイン」

ガウエインはモルドレットの鎖を使い二人を捕まえ、亮士に目を向ける。

「おれは……涼子さんを……自分が出来る方法で守る。おれは、涼子さんの……」

そして王子の腕をつかんだまま残った右腕を振り上げ、  
「くっ離せ」

「狩人だっ!!!」

渾身の力で降り下ろした。

「ぐはっ」

ぎこちなさの消えた亮士渾身の一撃は、見事に王子の顔に突き刺さり、そしてそのまま王子は崩れ落ちた。

その様子を見届けた亮士は……

「それに……涼子さんを仕留めるのは……おれだ」

問題発言とともに前のめりに倒れた。

ガウエインは男前に王子を倒した亮士を見て微笑んでいた。それを間近で見たパーシヴァルとモルドレットはかなり驚いた様子でゆっくりと立ち上がった。

「まさか黒騎士が微笑む日が来ようとはな」

「とても貴重」

既にガウエインが二人を押さえ込む力無いのに気付いていたのかガウエインと向かい合う。

「気付いているだろうが、パーシヴァルの『殺人衝動』はかなり薄れてきた筈だ。現にオレはお前に殺されていない、全て急所を狙ったの攻撃だったが俺の動きを計算して放ったことで『上手く急所を外す箇所』をナイフで狙ったことになる。まあ太股は完全に感覚が無くなる程深く突き刺したがな」

「知ったような口を開くな黒騎士、オレは本気で貴様を殺しにいったのだ」

パーシヴァルはナイフを取り出し、不気味な微笑み浮かばせてガウエインに向ける。モルドレットはりんごと何やら話している大神に目を向けていた。

（『普通の女の子』……）

モルドレットが感じたように、大神も本当は普通の女の子みたいになりたいんだ。と腕に巻かれた鎖をジャラリと地面に落とした。

そして同時に倉庫の扉が開き始める。

「間に合わなかったか!!」

「そんな……」

悔やむ大神たちに王子の声がかかる。

「ぐっ、はは、どうやら僕の……勝ちみたいだね」

「てめえ、まだ生きてやがったのか。往生際がわりい!!」

大神は立ち上がり、もう一度電撃を食らわせようとする。が、間に合わない。

錆びた音を立てながら扉は開ききり大神は………現れた人影に絶句した。

そこにいたのは、ガスマスクをつけ、はたきを持ったメイドと、ガスマスクをつけほうきを持った魔女と、ガスマスクをつけたなんの変哲もないこともない燕尾服の少年。そしてガスマスクをつけドレスと西洋の甲冑が組み合わされた感じに改造された征服を着た騎士とオレンジ色をした長い髪をして白い服装に身に包んだ女性がそこに居た。

「せつ、先輩?」

大神がその五人に恐る恐る聞いてみる。それ以外考えられないが、それでも思わず疑問系。

「お待たせしました」

「ちよつとおくれちやったかナー? かナー?」

「いやいや、大丈夫かい? どうか大丈夫なようだね? よかったよかった?」

「……あの適當副会長めえ……」

「ふふふふ、凄い展開ねえ」

大当たり。この異次元からやってきたような五人にりんごは叫ぶ。

「頭取さん、おつう先輩、魔女先輩、外に誰かいませんでしたの!? いらないなら迎え撃つか逃げないといけませんの!!」

「ああ、その方たちでしたらそこで皆さんよく寝てらっしゃいます」

外がよく見えるように脇に避ける五人。すると地面に倒れ込んだ六人ほどの男の姿が見えた。咳き込んだり涙を流したりして呻いて

いる。

良く見てみればその六人の中にトリスタンが混ざっており物凄い勢い涙を流しながら咳き込んでいた。

「えっと……」

「あやしいし、この中に入ろうとしてたからやつつけちゃったのヨー」  
ハイテンションなマジョーリカが答える。

「なっ、そいつらはそれなりに使える奴らだぞ!？」

王子が驚きの声を上げる。その間に入ってきたのは『円卓の騎士』の一人にして『最強』の名を持つフェイル・サーベル・ド・ランスロットだった。

「私の前ではそんなものは意味を成さないのです」

「トリスタンは単なる巻き添えだけどねえ、うふふふ」

「そしてフェイルが倒した後はトドメのあちき特製、催涙弾、涙ぼろぼろあもひでぼろぼろ君一号でやつつけたヨー!!」

その様子と恰好を見て何をしたか悟る。

そして頭取が大神たちに説明をすると同時にフェイルは王子の前までカツンカツンツと歩み寄ろうとしたが、

「……なんの真似です……?」

フェイルの前には王子を守るようにパーシヴァルとモルドレットが立っていた。

「主君を護るのが騎士（ナイト）の務めだろう?」

「王子は護る」

「パーシヴァル……モルドレット……」

最後まで着いて来てくれた騎士。パーシヴァル、騎士モルドレット。

王子は二人の背を見た。

「……私は『円卓の騎士』の纏め役として使命があります。主君を護るといふ騎士道精神は立派ですが、今回の件は……」

なら、とパーシヴァルはナイフを取り出す。フェイルも腰に差してある愛用のサーベルに手に掛けようとした時だった。

「どうして」



声が出た発した元を見てみると、そこにはボロボロの王子がパーシヴァルとモルドレットを見て眩く。

「どうして、だい？ どうしてそんなに僕を守ろうとするんだ？ そんな、そんな傷だらけの背中中!!」

パーシヴァルとモルドレットの背中を、いや、傷だらけの姿を見て王子は素直にそう思った。二人がどんな理由でここまで自分の為に何をしてきたのか王子は分からないでいた。

「僕がどれだけ我儘をやってきたのか、僕がどれだけグズのやるようなことをしてきたのか一番分かっているのは君たちだろ!?!」

王子は今の自分を再確認する。

「今の僕を見ろ……これが本当の僕なんだ。いくら努力を積み重ねてきても所詮はこの程度……何も僕は持っていないのさ!」

王子は立ち上がる。

そしてパーシヴァルとモルドレットの間を通りすぎようとした瞬間だった。

がしっ

王子は服を掴まれてしまう。振り返ればそこには涙を流しているモルドレットの姿があった。

「王子、持つてるよ、王子……は、私を『普通の女の子』にしてくれ。王子が居たから、わ、私は『普通』になれたんだ。なにも……持っていないなんて言わないでよう……」

まるで子供のように小さな声ですすり泣くようにゆっくり、ゆっくりと王子のお腹に顔を埋もらせる。

こんな小さな女の子が僕を守ってくれたのか。

王子は自分がやってきた数々を思い出す。

パーシヴァルも王子の横に立つ。

「王子よ、オレも王子が居たから人を殺さずに済んだ、暴走した時も王子が止めに入ってこれたから怪我で済ませさせた。普通の人間の生活を送れてこれたんだ!」

パーシヴァルはナイフを地面に捨てる。

「恐らく、オレたちは『主君と騎士』という間柄では無く、『友達』という絆で繋がれていたのかもしれない」

パーシヴァルは全ての武器を捨て、抵抗の無い意思を見せた。

「……ありがとう」

王子は誰よりも思ってくれる小さな女の子の騎士を背負い、横には誰よりも頼りになる長身の男の騎士を連れて、御伽学園にへと帰った

フェイルも三人を連れ学園に戻ると頭取に言い残し、ルーカンとはトリストランを引き摺りながらフェイルと一緒に戻って行った。

大神とりんごは何とも言えない感じに終わったことに少し不満だった。

だがカツコイイ亮士と一発は殴れたから少しだけ、本当に少しだけ気が晴れた大神は倒れている亮士の元に向かう。

猟師は狼を仕留めることが出来るのかは、赤頭巾ちゃんが暖かく見守ることになった。



パーシヴァルから受けたナイフを全部抜き取り、止血をしているガウエインは今廃工場の裏に居た。

大神やりんご、亮士には自分に大量の血液とナイフが刺さっているのは上手い具合に隠していたのでバレずに済み。今も一人でなんとか止血している。

だが肩の方はなんとか止血出来たが、太股の方はまだ血が止まらな  
いでいた。

子供の頃に親からナイフで切られた感覚を思い出したガウエイン

は不愉快と、片目が疼く感覚に襲われながら。さて、どうしようかと悩んでいた時だった。

「……ガーくん」

ピクツとガウエインは反応して、声が出た方向に目を向けると、いつもの魔女の恰好をしたマジョーリカが立っていた。

「ガーくんが途中で居なくなってたのは知ってたヨ」

そう言つてマジョーリカはどこからともなく取り出した救急箱を開き、的確な止血方法をして行った。

そして止血をやっている間、マジョーリカは黙々と作業をする。ガウエインも何も言わず止血されていると、ふわあつとガウエインの顔を抱くようにマジョーリカは抱きつく。ガウエインは腰を下ろしているのでマジョーリカでも余裕でガウエインの首に手を回せる位置だった。

そして数秒そうした後、マジョーリカは手をガウエインの両頬に添えると真つ直ぐに目をガウエインと合わせた。

「また、身体をボロボロにさせて……死にたいの？」

口調はいつもガウエインと二人で居る時だけ使う普通の口調で話した。それだけマジョーリカは真剣にガウエインに語りかけているのだ。

ガウエインはマジョーリカの瞳に涙が少しだけ溜まっているのが分かった。

「ガーくんが後輩たちの為に身体を張るのは確かにカッコイイし、強いし、……私も嬉しくなる。でもそれでこんな、こんな傷だらけになっちゃうなら私は……嫌だなあ……」

マジョーリカはガウエインの横に座り背中に手を優しく回して抱き着く。顔をガウエインの顔にくつつく程近い位置に落とし、ぎゅつとガウエインの服を掴むマジョーリカ。

「……マカ」

マジョーリカはもうそれ以上喋らず、静かにガウエインに抱き着いていた。ガウエインもマジョーリカの背中に手を回す。マジョーリ

カの綺麗で長い金髪が当たる。

「泣かないで、マカ」

「……泣いてないもん」

ガウエインの首に顔を踞（うづくま）せるマジョーリカ。

心配してくれてありがとう。

そして泣かせてごめん。

眩くようにガウエインは言った。

## 第二章 「オオカミさんとおつう先輩の恩返し」 第15話 「再・騎士とメイド」

それはなんの変哲もない放課後のこと。

御伽学園学生相互扶助協会に書かれたボロい看板のついた、これまたボロい建物の前でメイドさんが箒とダンスを踊っていた。

るんるんとかの擬音——間違ってもレレレではない——を周囲にちりばめたくなりそうなほどご機嫌なメイドさんが、くるくると箒と一緒に回っている。ボリユームのあるメイド服のスカートがふわりと広がる。翼のように二つに縛られた黒髪が風に舞う。

「るんるんるん♪」

とうとう鶴ヶ谷は口でるんるん言い出した。似合っているから大いに良いのだが、ボロい建物——もとい誰も正式名称を知らないというか長いので正式名称を憶えようとしないう御伽学園学生相互扶助協会、通称御伽銀行の地上支店の前にはメイドな鶴ヶ谷おつうさんがお掃除をしていた。

メイデスキーなカメラ小僧たちと、メイドフィールド（一般人は近づけない素敵空間）に阻まれ、近づけないおおかみさんご一行。

「おつう先輩ごきげんですのね。ご奉仕の喜びに恍惚としてますの」  
「だな。おかげで近づきツライ事この上ねー。いつものことだけだよ」

いつも通りコンパクトで可愛らしい赤井林檎の言葉に、いつも通り男らしい大神涼子がため息をつく。大神たちが立ち止まっているのは、鶴ヶ谷が本当に嬉しそうにお掃除しているの、その邪魔をしたくないから。・・・というのは表向きの理由で、本音の理由はまた別となっている。

「まあ、良い人なんだけどな。あれはあれでありがたいし」  
「そうっすよねー、料理も上手いっすし」

腰巾着、金魚のフンの名を欲しいままにしている森野亮士が続い

た。

実際、御伽銀行所属メンバーで鶴ヶ谷のお世話になっっていない人はいないのだ。御伽銀行の地上地下の施設がいつも綺麗で清潔なのは、炊事洗濯掃除など家事大好きな鶴ヶ谷のおかげなのだ。恩返しという行為に目がなくて時たま奉仕の喜びにトリップするのさえ無視すれば、鶴ヶ谷は完璧なメイドさんなのだ。

そういう訳で毎週火曜と木曜にここで見れる鶴ヶ谷のお掃除は名物となり、かなり本物っぽいメイドが見れる素敵スポットとして、メイド目当てのカメラ小僧が集まってくるのだ。

そして地上支店からガラガラと扉を開いて現れたのは。長身で黒一色でまとめ上げられた制服を着た『騎士としての風格』を持った少年、黒靴ガウエインが出て来た。

メイドスキーな人たちはメイドさんメインでここに居るのだが、騎士とメイドという絶妙なコラボレーションがマッチしていて、お似合いである二人を見に来ている人たちも居るのだ。

「騎士先輩ですの」

「今日は当番だったな」

当番制で決まっている二年生組は、鶴ヶ谷と同じクラスであり同じ二年生でもあるガウエインは小屋の中に居たみたいだった。

「まあ、いつまでもこんな所でこうしている訳にもいきませんので、行きましようですの」

「おう」

大神たちは今日は当番で無いが、何も無いときにも地下本店に入り浸っている。茶も出てくることだし、おやつもあるし、テレビもあるしと至れり尽くせりでありにも居心地がよいのだ。

そういう訳でくると回り続けていた鶴ヶ谷は出てきたガウエインと何か話をして、また再び小屋の中に戻ったガウエイン。そして大神たちは鶴ヶ谷に向かって歩いていくと。大神のつり上がり気味できつめの瞳が視界の隅にいつも通りでない飛行物体を捉えた。

「あれは・・・?」

その小さく丸い何かは鶴ヶ谷の方へと・・・

「あつ、あぶねえっ!!」

叫び走り出す大神。

大神の目には謎の飛行物体が今の軌道だと鶴ヶ谷に直撃することに気がついたのだ。

「え?」

鶴ヶ谷はその大神の様子に?マークを浮かべつつ、大神の視線の方向に何事かと視線をやり、目前まで迫った丸い飛行物体を目撃した。しかし突然の出来事に反応できない。

「きやつ」

反射的に目をつむり、身をすくませる鶴ヶ谷。そして今にもその飛行物体が鶴ヶ谷に当たろうとしたとき……

ゴガツ

と何かが当たる音を立て、謎の飛行物体——野球のボールが地面へと重力に従って落ちた。羽根のように柔らかな髪を摩る感覚が鶴ヶ谷に感じさせる。

なんだ? と大神が今起きた出来事に反応出来ずに居た。

鶴ヶ谷を覆うように盾となった黒軋ガウエインが撫でるように手を置いていた。

ガウエインは小屋に戻り、再び鶴ヶ谷に話を振ろうとした時には野球のボールが鶴ヶ谷に向かっていているのを目にし、理解する前に行動、長身の身でありながら人間技とは思えない飛躍的速度で鶴ヶ谷の前に「駆けた」のだ。

ボールは鶴ヶ谷に当たる寸前にボールの回転を逆にするように手刀の平面で撫でるように止め。最後に掌(てのひら)でボールを覆うように驚掴みした。

その速技(はやわざ)と妙技(みょうぎ)にりんごと大神、亮士は声を上げて感激した。

「もはや人技(じんぎ)を通り超した瞬間でしたの!」

「流石だぜ騎士先輩っ!」

「凄過ぎっス！」

ガウエインは鶴ヶ谷に怪我が無いか（ここぞどの場面ですつと触りたかった鶴ヶ谷の髪を思い存分に）確認していた。

「ビデオカメラがあれば今のテレビ局に送る事ができましたの」

「その考えに行き着くお前にも驚きだが、いやマジで凄かった騎士先輩」

「か、かつこ良すぎっス!!」

後輩が先輩の凄さを目の辺りにしている中、未だ心配そうに（恍惚に）して焦燥な面持ちで（無表情のまま）優しく鶴ヶ谷の怪我をしていなかの最終確認する。

何が起こったのか分からずしばらくきよとんとしていた鶴ヶ谷だが、ガウエインが目の前で、しかも顔と顔の距離が数センチの間で髪を撫でられている事に気付くと同じタイミングで自分の身に何が起きたのか理解した。

若干赤面になり恥ずかしながらもガウエインと一歩距離を起き、頭を下げる鶴ヶ谷。

「あつ、ありがとうございます」

鶴ヶ谷のまっすぐな視線がガウエインに向かう。キラキラ輝く感謝の視線。

もし亮士（りょうし）がこの視線を浴びていれば哀れに身を縮み込ませていたかもしれない、とガウエインが思いながら至極名残惜しそうに撫でていた鶴ヶ谷の綺麗で柔らかかった髪から手を放した。

「騎士以前に、男として女性を守るのは当たり前だ。・・・そして何より」

そう言っつてガウエインはまっすぐな視線を向けている鶴ヶ谷に返すように視線を合わせ。

「姫（プリンセス）を護るのが騎士の務めだ」

この場面でにこやかに微笑んで見せれば女を落とすスカしたイケメン野郎にでも変身できたのだが、落とす気を微塵に思っていないかったガウエインは真剣な顔でそう言った。

「わわ、わたくしはメイドで、決して姫などとは」



そして当然、真剣な眼差しでこう打ち返されてしまつて鶴ヶ谷も反応に困っていた。だがそんなモノ騎士は問答無用に踏み潰し、

「女性は皆、お姫様だ（そう祖父に教えられたしな）」

そんな事を思いながら言っている事は本人のみぞ知る事で、鶴ヶ谷は耳まで赤くしていた。

そんな鶴ヶ谷おつうと黒軋ガウエインの周りに桃色なオーラが滲み出そうになつた瞬間。

「どこぞのギャルゲーかッ!!」

ツツコミが入ってきた。

「あつ、トリスタン先輩ですの」

りんごが空気を見事に打ち壊した人物の名を呼んだ。

ガウエインと同じ『円卓の騎士』の一人である取須弾（トリス・タン）は金髪を揺らしながら見入っていたメイドスキーの人達から湧いて出た。

「オイオイ君は鶴ヶ谷おつうちゃんを取つて食べようとする獣にでもなるつもりかい、ガウエインくん？」

「（何か口調おかしくないっすか？）」

「だいたい『女性は皆、お姫様だ』？ こオんなこつ恥ずかしい台詞を言うなんてどんな神経してるんだよ、フッフ、笑つちやうね!!」

「（そんな言い方ダメですよ森野君、ああやって個性を出さないと出番が減つちやうんですの）」

「だ、ダメダメ、全くなつてないよガウエインくん……ここは一つ、この俺トリスタンがッ！」

「（個性っつーか、ありや完全に主人公の親友的位置じゃねえか？）」

「……………」

「（うーん、その位置でもしっくりこないですの）」

「……………」

「（じゃ、アレだアレ。うーんなんだつたっけなあ？）」

「主人公に突つかかるモブキャラ的位置じゃないのですの？」

「それだッ！」



確かにやっています、と鶴ヶ谷はまだ赤くなりながら頷く。  
「だがまだそれは良かった範囲だったかもしれないな……」  
「良かった範囲って、まだ酷いことがあったんスか!？」  
ああ、とガウエインは言いながら疲れた顔で、  
「帰ろうとした瞬間」

※

『じゃあまた明日な、黒軋〜』

『ああ、また明日』

『またね〜』

『また明日……………ふう、早く俺も部屋に…………』

ガラガラー

『おお、おお、まだ居たかガウエインちゃん!』

『なんだお前は』

『いやトリスタンだけど、いい加減よそそしいのやめにしようぜ!』

『分かった』

『それでよ、ガウエイン』

『なんだお前は』

『えっ、よそそしいの治ってねえけど!?!』

『これがお前に対する友情表現だ』

『おおう、ま、マジかよ、嬉しいじゃねえかー／／／／／』

『(コイツ馬鹿だ)』

『それでよガウエイン、見てくれよコレ、俺が書いたサインなんだ。うひよおマジで恥ずかしい、でも初めて見せるのはガウエインにとって決めてたん、だぜ／／／／／』

『(コイツ馬鹿だ)』

『これ上げるから』

『……………』

『いやよお、俺もなかなか顔立ちだからモテちゃんだよねえ。だから付き合う変わりにサインあげて「それ俺だと思って何でも好きなようにしてくれ（キメ顔）」ってやるんだあ』

『……………』

『いやハツハツハ、モテるのはツライねガウエインちゃん（ドヤ顔）♪

それではアドユ〜♪』

『……………』

※

「不快に愉を付けて不愉快だ」

それは痛々しい話だ、と後輩達は可哀想な目でトリスタンを見た。

「どう反応すれば良いのか分からなかったから“仕方無く”トリスタンのサインを鞆に入れるしか無いという屈辱的な経験をした」

「優しいんですね、騎士先輩は。私だったら破ってゴミ箱にポイですの」

ものすごい笑顔でもものすごい事を言うりんご。可愛らしい姿をしていて中身はドスく……ドス黒いです。

「何で言い直したのにまた言ってるんですのー!!」

「うおっ、どうしたりんご？ 空に向かって」

「い、いえ。何でもありませんの、オオカミさんでお馴染みですの」

「それ言っちゃ駄目っス！」

「あらら、ストップが入っちゃうのですの？」

「見事に入ったっス」

後輩のやり取りを横目にガウエインはトリスタンに声を掛ける。

「それで言い寄ってくる女性は居たのか？」

それを聞いたトリスタンはクワツとガウエインに顔を向けると、確かに整った顔立ちのトリスタンの顔が歪みに歪んだ泣き顔になっていた。

「イケメンなのに、こんな残念な顔になるんですね……」  
「うわ、ホントひどえ」

酷いのは先輩の泣き顔見て感想言ってるアンタらじゃ、と他の人達は思ったであろう。

「結果は聞くまでもないか」

「聞いて構って罵ってえええええ!!」

「ト、トリスタン先輩はマゾだったみたいですよ……この情報を手く利用して借りを作ることが出来るかもしれ——ブツブツ——ブツブツ」

「りんごが利用価値があるかを判定仕始めやがった」

その後、数分によるトリスタンの絡みに時間を割くことになるとは思ってもしなかつただろう。

そして同時に鶴ヶ谷の様子もおかしいことにも気付いていなかった。



日が沈みかけ、辺りを赤く染めた夕方。おかし荘に帰ってきた黒靴ガウエイン。相変わらず騎士甲冑姿のライダースーツに注目されながらの帰宅だ。愛用のバイクである黒色に染まった大型自動二輪車『GALL—10』の後部から買い物袋を取り出した。荷物などを入れるスペースがGALL—10の後部にあるのだ。他にも科学の力で超進化させたバイクの性能もあるらしいが、今は関係ない。

ガウエインは宿主である村野夫婦の夫である村野若人（むらの・わかと）が大きくて邪魔になるにも関わらず駐車出来る場所を提供してくださったらしい。ガウエインも深い礼を何度もした記憶がまだ残っている。

そうやってガウエインはバイクを駐車し、買い物袋を掴んでおかし

荘の横に建てられてある庭付きの比較的大きな家の玄関に向かう。

すると足下に寄り添う気配を感じ、長身の目線から見下げると、可愛らしく甘えてくる亮士の猟犬であるフランソラとエリザベスが居た。絶対に重そうな程に詰め込まれた買い物袋を片手で両方掴み、空いた片方の手でエリザベスとフランソラを撫でるガウエイン。

ハツハツハツともっと求めるようにゴロンとお腹を見せて『もつと撫でて♪』アピールを仕始めた。

ガウエインは小さく微笑みながら再度エリザベスとフランソラを撫でまくる。

愛でまくったガウエインは一人満足してポンポンと二匹の頭に軽く叩いてあげ、終了の合図を送る。

すると少し名残惜しそうな目をするも聞き分け良く引き下がった。そして、いぎ中へ、と玄関の前に立つと、ガラガラと扉が開いた。「あつ、ガウエインさんじゃないっすか。今買い出しの終わりっすか？」

出て来たのは村野夫婦の親戚であり、同じおかし荘に住んでいる亮士だった。

「ああ、亮士はこれから犬の散歩か？」

「そうっす、そう言えば若人さんが調味料欲しがってたっすよ？」  
「分かった」

それでは行ってきまっす！ と口調こそヘタレのままだがオドオドとした感じではない学校とは違う落ち着いた亮士がリードを持って外に出て行った。

ガウエインは買い物袋を持って邸内の奥にへと向かうと台所で主夫パワーフルスロツトルの村野若人の姿があった。最初見た時から『こんな優しそうな表情をもった男性』は見た事が無かったガウエインは本当に色々してもらっている。

「若人さん、すみません。遅れてしまいました」

「ああ、ガウエインくん、全然大丈夫だよ、寧ろ逆で早かったよ？」

「いえ、そんなことは……」

「ふふふ、僕は別に気にしてないから大丈夫！ それより雪女がガ

ウエインくんに話あるって言っていたよ。そっちに行つてあげて」

本当に仏様でも見ているかのように優しい若人にガウエインは感涙（もちろん無表情）しながら荷を若人に預け、ダイニングにいる雪女の所に向かう。

ダイニングで氷を沢山入れたサイダーをがぶ飲みするこのおかし荘の宿主にして若人の妻である村野雪女が座っていた。大きなテーブルの上には何やら資料に関する本が二、三冊置かれてある。

「ぶつはあー！ やつぱ冷たいサイダーは良い！ 喉を潤わせてくれるわ」

豪快な飲みっぷりを見せた見事な男気溢れるこの女性（ひと）を見て、やつぱり元気な人だ、と思いつつながら雪女の近くにあるイスに腰かけた。

「・・・？・・・小説読んでいたのですか？」

「ああ、私以外の奴らがどんな文章で気持の流れや思いで小説を生かしてんのか研究中だ」

と美しく整った大人の笑顔で返事を返してくれた雪女にガウエインは『なるほど・・・奥深い』と頷いて見せた。

そこで何やらずっとニヤニヤしながらガウエインを見ている雪女の視線に気付く。

「いやなーに、お前は意外にモテるんだなって思つてよ」

「・・・？」

「いや買物に出して悪かったな、部屋に戻つて休んで良いぞ♪」

（いつも問答無用に買い出しをさせていた「あの雪女さん」が俺に氣遣いの言葉だとツツ）

「・・・んん？ 今なんか失礼なこと思わなかったか？」

「すみません、いつ見ても綺麗な女性だな、と思つてしまいました。そうですね、結婚なされた女性をそんなふしだらな考えを向けるなんて失礼以外何ありません。すみません」

「綺麗な女性か、ふふふ、口達者になったじゃないか」

「ありがとうございます」

違う考えだな、と鋭い洞察でそう思つた雪女だったが、このおかし

荘に入った時から随分と喋るようになったガウエインの成長に少し嬉しかったようで、まあ良いや、と深く突っ込まなかった。

その後は雪女と軽い雑談をしてガウエインは自室にへと向かった。  
「ふう………」

溜め息とは、そんなに疲れたのか今日は？ と一日のやり取りを思い出し、トリスタンのせいだな、と疲労の原因を思い出していた。

辺りも暗くなったし、部屋で勉強やらをやらなければと自室の扉を開けると……

「お帰りなさいませ〜ご主人様♪」

黒と白とちよつとの赤で構成された男を惑わせる魅惑の存在。

扉の向こうにはメイドが居た。



## 第16話 「次・騎士とメイド」

トリスタンこと取須弾とりす・たんに色々騒がれ、あんな馬鹿な先輩も居たんだな。と勝手に思っていた大神涼子はいつも通りに教室で赤井林檎と話をしていた。

トリスタン先輩がガウエイン、騎士先輩に構ってくれなかったから。の理由も凄かったがガウエインの対応も案外ぞんざいだったな、とりんごと話に花を咲かしていると、

「おはようっス」  
「おう」

教室に現れた亮士に大神はいつも通りの挨拶を返す。亮士が奇妙な顔で悩んでいる素振りをしていた。

「何かあったんですの?」

りんごは珍しく悩んでいる、いや結構色々悩んでいる亮士に好奇心四割、なんかおもしろそうな展開ですの四割、と優しき一割五分、心配五分のその言葉。その酷い割合に気付かぬ亮士は悩み、というより疑問を二人に聞いた。

「あのっスね……今日の朝食の時、メイドさんが料理を運んで来たんスよ」

なんだその男の夢……もとい、たわごとをほざき始めた亮士にりんごと大神は少し痛い目で亮士を見た。

視線恐怖症である亮士はすぐこれに気付き、あたふたとしはじめ、そして自分の言葉が足りないのにも気付き、弁解する。

「ち、違うっスよ! これマジ話なんス!」

「……ヘタレだと思っていたが、

とうとう妄想と現実を混同しちまったのか」

大神はなんてこつたいと天井を仰ぐ。

「いやだから本当なんっスよ!」

「涼子ちゃん、こうなったら涼子が森野君に三次元のすばらしさを教えてあげないといけませんの! 責任重大ですよ!?!」

「って、なんでオレが出てくるんだよ!」

「……みなまで言わせる気ですか？」

「なっ！ お前は絶対に何か勘違いしてんぞ!!」

「あのー、話進みますっすけど、良いスか？」

「むむ……森野君が話を促すなんて……分かりました、話を進めて下さいですの（これは結構重大でおもしろそうですの、クスクス）りんごが内心クスクスと黒い微笑みをしているにも関わらず、分からないまま話を進める亮士。」

「はい、それがっスね……」



「えっ、メイド付き騎士さまってトコ？」

「……なんかいきなりぶっ飛んだな」

場所が変わり御伽学園高等部二年のガウエインが在籍している二年教室に個性豊かな生徒たちが彩っている中、黒一色に統一している生徒、黒軋ガウエインが同じクラスにして『円卓の騎士』の仲間でもあるトリスタンと話をしていたのだ。

ガウエインの斜め横には主に仕えるメイドの如く鶴ヶ谷おつうが立っていた。

「ガウエインさまには女の命とも言える顔を守って下さったご恩があります、この恩を返す為、この鶴ヶ谷おつう。全身全霊全てを捧げ尽くさせ、返させて頂きます！」

「めっちゃ力強く言っちゃってますこのメイドさんに、この黒い騎士さまはどのよーな心境で居られますか？」

トリスタンは『なんだこのエロゲの主人公属性野郎はあぁん？』と睨みながらガウエインに聞くと、なんとも言えない表情で溜め息を漏らした。

「今の心境は知られたくない人に知られてたらどうしよう、という感じだ。特に“あの人”には知られたくない」

ガウエインはグツと机に置いた両手を握りしめながら青い顔になる、無表情のまま。

「おつうちちゃんの趣味は相変わらず凄いよな、『恩返し』が趣味だなんて」

トリスタンは前もって作ってあったのか、自分の机から折紙で折った紙飛行機を手に持って俯せになったガウエインの頭に突つつく。

昨夜は流石のガウエインも驚いた。

鶴ヶ谷の性格も知っているし、『恩返し』の義理堅さも理解していた、だが行動力が尋常じゃない程速いのに驚いたのだ。

#### ◇ガウエインの回想◆

まさか部屋の中に居るとは……

ガウエインは風呂上がり、髪をタオルで乾かしながら廊下を歩いていた。どうするか考えながら自室の扉を開き……

「ふつつか者ですがどうぞよろしくお願いいたします」

布団の上で三つ指ついてそんなことを言うメイドに騎士は、

「泊まるのか……？」

恐らく亮士だったら間違いなくヘタレモードになっていたであろう今の状況で、この騎士さんは真顔で結構重要なことを鶴ヶ谷に質問した。

「ご主人様の側に控えるのはメイドとして当然でありましょう。しかし、ここは一部屋しかありませんので、隣で眠る不作法をお許してください」

答えは肯定。と判断したガウエインはまだ湿っている髪を中途半端にして真っ直ぐに鶴ヶ谷の正面に正座で座った。

「おつう、男と女が一つ部屋の中で一緒に寝るなどと、そんな軽率な事を口走ってらいけない」

鶴ヶ谷はガウエインの言った言葉に反応した。

『軽率』……？』

「ん……」

「わたくしは『軽率』等と簡単な言葉で言い表すような行為はおこなっておりません」

「……」

「この『恩返し』は、わたくしにとってッ——ッ！」

そこでガウエインは掌を鶴ヶ谷の目前に浮かせて静止させた。

——言わなくて良い……

ガウエインがそう言ったように鶴ヶ谷が感じとった。

掌を戻すとガウエインは綺麗に敷いてくれた布団の上でピシッと背筋を伸ばし、日本男児として恥じない綺麗な正座になって口を開く。

「俺を信用してくれてる、と自意識過剰に思うことにする」

そう言つてガウエインは横になった。

「夜も遅い、そろそろ休もう」

そんなガウエインに鶴ヶ谷は少し困惑しなからもメイドパワーを発動させる。

「ふふ、なんでしたら子守歌などを聞かせてあげましょうか？」

「子守歌」のワードに反応するガウエイン。

（子守歌、か……マカから聞いたあの初めての子守歌は……）

身も心も痛み軋んだガウエインを優しく包み混んでくれた。

優しく頭を胸に寄せてくれたマカの温もりを思い出していた。両親から殺人未遂に届く位置までに痛め傷つけられたガウエインはマカの温もりや優しさが本当に天国のように優しい世界だった。

そんな事を思いながらガウエインは少し嬉しそうな声色で、

「……そうだな、おつうの子守歌を、聞いてみたい」

鶴ヶ谷は優しく、そして温かい子守歌を聞かせて貰った。

◆ガウエイン回想終わり◇

ガウエインは一人昨夜のことを思い出していると、がらがらから！と教室のドアが開く音がした。その方向に目を向けるとそこには、

『いやああー、聞いたよトリスタンくん!! 今ガウエイン 面白そう  
“なんだってねー♪”』

「……………」

一番知られたくない人物が入ってきた。

「おお……相変わらず変な格好ですね『副会長』♪」

ズイズイと問答無用に入ってきたのはこの御伽学園高等部の生徒会『副会長』だ。何より大抵生徒たちはこの人を『マスク副会長』と呼んでいる。理由は至極簡単で、全身を包む長いマントに桐木リストとまた違う上級そうに見える燕尾服、そして顔には目も鼻も無ければ口も無い仮面（マスク）を被っていた。

『ありがとう、トリスタンくん』

肩に手を置かれ、もう片方の手でトリスタンと握手するマスクな副会長。トリスタンも『え、あ、ど、どうも』と返され困惑していた。

『こんな奇抜な学園の中でガウエインくん程楽しい生徒が面白（たいへん）そうだと言うんだ！ ここで立ち上がらなければどこで立ち上がる言うんだそうだと！ この生徒会『副会長』の名が廃ると言うものだよガウエインくん!!』

「そんな力強く言われても困ります、あとまた仮面変えたんですか？それと奇抜の塊である副会長が言うと言葉の重み＋説得力がありますね」

副会長はバツとマントを翻す。その翻したマントに思いつきり巻き添えを食らったトリスタンはマントに絡まり上半身が隠れた。

『仮面は“ケイ”に上げたよ、ふふふ。あの子も“仮面の良さ”が分かってくるようだね。仮面カッコいい……………そうは思わ——

「思いません」

ふっ、いけずな子だな。と演劇でもやってそんな動きでそう言う副会長。モゾモゾと絡まっているトリスタンは変な生き物みたいに動いている。

『そんな事よりガウエインくん!』

「くっ」

バンツとガウエインに詰め寄る副会長、顔が無い仮面をグイグイと押し寄せられ、妙に気迫が押ししてきた。

『メイドを召し仕えたという噂は本当かい?』

「嘘偽りだ」

ガウエインがそう言うがキョロつと斜め横を見てみる副会長、そこには初めてみた副会長の姿に困惑しているメイドな鶴ヶ谷。

『ほお〜お』

「……………くっ……………」

顔が見えない分どんな表情しているのか分からないが、声色だけでガウエインの脳に刺激する。

『ま、頑張れ』よ。はいコレ、仮面上げるから頑張りなさい。仮面ライダーシリーズなら大丈夫でしょ? あっ、〇〇〇(オ〇ズ)が良かったかい? ……つて〇に〇やつても意味無いか、ぷっ』

シーン

ただの静けさがクラスを漂わせる。

それもその筈で、あんなコスプレとしか言えない改造制服を着て、そしてこの学園の手本となるべく生徒会の『副会長』を任されている人物。とまずこのダブルトップピングされたフリーズだけで大抵の生徒は興味を奪われる。だがそれだけで終わらせないこの副会長はこれまた仮面ライダーを見てる人しか分からないような意味不明な笑えない冗談をぶちかましたのだ。

女子からすれば異常としか見れないだろう。

だが当の副会長はその静かさを感じとるように両手を広げ、

『嗚呼……良い感じに静けたなあ。この静けさが僕の心を良いチヨイス具合に抉（えぐ）っているよ。まるで仮面の飾りが落ちた時、弾け飛んだ感じだ、おおお感じる、静けてる』

何でもかんでも仮面ワード出してくるし『くみたいな感じ』と常人には感じ取れない『感じ』を勝手に感じ取っているこのマスクな副会長にはそろそろご退場してもらおう。

ガウエインは立ち上がり副会長の仮面の端（頭上の横ら辺、だから髪みたいな所）を掴んで廊下に出した、マントに絡まれたトリスタンははずると引き摺られながら『モゴメゴーツツ!!』と叫んで副会長と一緒に外に出した。

廊下から『君がうるさくしたからガウエインに吊るし出されてしまったよ!』と副会長がバシバシとマントに絡まれたトリスタンを叩き、やつとこさ脱出したトリスタンは『うるせええええ! こつちは巻き添えだ!』だ返す。

ぎやーぎやーと廊下で騒いでいる奇人と変人。

この御伽学園ではこれが日常なのかもしれない。



「騎士先輩の部屋におつう先輩が同居中!」

所変わって大神たちが居る教室。そこで亮士からとても気になる話を聞いたのだ。

りんごなんかは目を光らせている。大神も少し興味があるらしく亮士の言葉に耳を傾ける。

「ガウエインさん本人から聞いたんで本当だと思っス」

「今日放課後すぐに騎士先輩の元に行きましようですの!」

「決断早えな!？」

好奇心五割に絶対になんか面白そうですの五割の分割になった考えを持ってしまったりんごはバンツ! と大神の机を叩きつけながら生き生きとした瞳で提案、では無く決断した。

「えー、こほんこほん、これは興味本意で騎士先輩の所に行くんじやないですの。これは同じ御伽銀行の仲間として困ってらっしやる騎士先輩を助けるべく、その件の話を包み隠さず聞いてみる、という考えあつての行動ですの!」

「まだ別に困ってるかどうかは分からねえけどな・・・」

「ガウエインさん相ツツ変わらず普通でしたっスよ?」

「先輩が困っていたら後輩が助ける・・・これって『助け合い』になつていくんですの・・・。今まで先輩は後輩が困っていたら助けてくれませんでしたか? いいえ! 先輩は躊躇無く助けてきてくれましたの! その恩を! ましてや社会にへと繋がる一步に変わるかもしれないの!」

キラキラと何か奇妙な浮遊物を撒き散らしながら素敵笑顔で言うりんご。

この笑顔を見れば誰でも面白本意だと分かるだろう。

という訳で、オオカミさんと赤頭巾ちゃん、そして森の猟師くんは鶴に恩返しされている騎士さんの元に行く事になったのだ。

※

「さーて、早速騎士先輩の所に行きましょーですの」

「は、張り切ってるっスね!」

「本当にりんごはこういう事に関して好きだな」

三人は二年生が居るフロアの廊下でそんな事を言いながらガウエインと鶴ヶ谷、そして魔女さんことマジョーリカが在籍している教室に向かっていた。他の生徒を横切れば『オオカミさんと赤頭巾ちゃん』と有名な二人組が歩いているので普通ならば目を持っていかれ



る、のだが。

「なんか普通ですわね」

「ああ」

そうなのだ、何故か大神とりんごに注目ともいかないが、多少は目が奪われる興味となる筈だ。だが実際今の状態は『ああ、一年生だ、珍しい』と普通の視線だった。なので横切る二年生はただ一目見て終わりだ。

まるで『慣れて』いるかのような優しい眼差しだった。逆にそれが居心地が悪い。

そして廊下を歩いていると、そこには奇妙な光景が広がっていた。

「違う！ 違うないが待ってくれマカ!!」

「ハッハッハ、……何がだヨー……」

「うおおおおお、火いっ火!! 火吹いてるそのバズーカ!」

「ちよ、ちよつとこつち来ないでよダメン・トリスタン!」

「何その不名誉過ぎの二つ名?」

『アアハッハッハッハッハッハ!!! 何やらお祭り騒ぎのようだねヒヤッ

ハー!!♪♪♪』

「クソツッ! また面倒なのが来たツツ!!」

「紅茶はいかがでしょうか?」

「これ主に貴女のせいなんですよメイドオオツツ!!」

黒い騎士に向かって魔法の杖を振りかざす魔女、そしてその破壊の杖の餌食となる悲哀の騎士が橙色長髪の騎士に嫌がれ、この騒ぎを嗅ぎ付けた仮面の副会長が交ざる、その中には落ち着いたメイドが紅茶を運んでいる。

もう、何が何やらである。

「……………」

流石のりんごも困り果てた顔になって、関わるのが嫌になってきていた。

「何ですかこの騒ぎはああー!!」

「フェイル先輩ですの」

白い光を輝かせるように長い白髪を靡かせながら仲裁する生徒会

役員のフェイル。彼女の役職上では騒いでいるあの中に上司も交じっているのだが、関係無く愛用のサーベルを振りかざす。

「危ない！ 生徒会員が普通に刃物を振り回すのがあるかい！」

「そうよバカフェイル！」

「取須弾（トリスタン）に萌仁香（モニカ）・ルーカンか。黙れ」

主にルーカンは巻き込まれた方なのにサーベルの鋒を向けられて黙れの命令。この扱いは不当過ぎる。でもサーベルあるから逆らえないのよね、ルーカンは笑顔になりながら廊下に正座をし。トリスタンとルーカンは黙るしかなかった。

「コソコソ（ね、何きっきのダメン・トリスタンって？ 超聞きたい）」

「ちよ、今話す所じゃないでしょバカ」

「コソコソ（いやいやいやいや、超気になって駄目なんだよマジで、教えて！）」

「はあく……えとつ、ダメなイケメンで『ダメン』だよ」

「チキショー!! 何か他にもちやんと理由とかあんだろうなあくとか淡い希望を乗せて聞いてみれば泡となって消えたよキチショー!! 淡（あわ）いだけに泡（あわ）ばあツツツ!」

ゴツンと本物まで行かない模造刀もとい模造剣の峰に叩かれたトリスタンは舌を噛むような勢いで冷たい廊下に打ち付けられた。

ルーカンはガタガタツと震えながら再び沈黙。

危ない廊下に居る一年の大神とりんご、亮士は唾然としながら見ていると次にフェイルはガウエイン、マジョーリカ、鶴ヶ谷に口頭で注意。そして最後はコスプレ紛いの服装と仮面の副会長をフェイルは見る。

『いや駄目だねフェイルくん、生徒の模範となる生徒会が刃物を振り回すなんて！ 本当に駄目な娘だツ——ぐふっ!?!』

ドスツ！ と副会長をサーベルの柄尻で鳩尾を叩き込めば軽く気絶した。そしてヒョイツと肩に抱き抱え、そして『それじゃ』と手を上げて消えた。

騒がしいと思えばすぐ解決してはちやつちやと消えていった。

残ったのはマジョーリカにバズーカの砲口をグイグイと押し付け

られているガウエインと、そのガウエインの一步下がった後ろにはメイドの鶴ヶ谷が立っており、未だに冷たい廊下に項垂れているトリスタン。もういい加減一人でもキレそうになっているルーカンも侘しそうになりながら教室に戻っていつていた。

取り敢えず。

「帰りましようですの」

※

何故あのような騒ぎになっていたかと言うと、遅れて登校してきたマジョーリカはガウエインにびったりと付き従う鶴ヶ谷に疑問に思い、ガウエインと鶴ヶ谷の二人に聞いてみたのだ。するとガウエインは恥ずかしい台詞を言いながら鶴ヶ谷を助けた事を包み隠さずマジョーリカに伝えれば、最初こそ普通の対応だったが、授業を終えればガウエインの側に居て『お飲み物はいかがでしょうか?』やら『次は体育の時間です、お召し物を変えましょう』とガウエインの服を脱がせようとする鶴ヶ谷やガウエインの光景を見たマジョーリカは段々と苛々ボルテージが上がっていき、あのような結果となったのだ。

因みに体育の時の対応は、男子の着替える部屋まで付いて来てしまった鶴ヶ谷に『自分の事は自分でやる』と決めているガウエインは鶴ヶ谷の攻めを受け流し、逆に反撃と言わんばかりに鶴ヶ谷を女子たちが着替えている教室まで『お姫様抱っこ』をして戻したのだ。

勿論、女子が着替える前に返した。

そして現在、二年生のガウエインとマジョーリカの二人、一年生の大神とりんご、亮士の三人、合わせて五人はガウエインと亮士が住んでいる家への道を歩いていた。

学生の御伽花市内での移動はもっぱら徒歩か自転車かバスだ。場所によってはかなり歩くことになるが、学生はそんな時間も楽しむので問題なし。そんな正しい学生の下校風景を演出しつつ……いやしていないかもしれない。

「魔女先輩。帰る時くらいその魔法の杖しまいしようよ」

「嫌だヨー、この魔法の杖を押し付けていないと落ち着かないヨー」  
「こつちも落ち着かないですわ」

歩くガウエインの広い背中に魔法の杖とあるが実質バズーカを押し付けているので全然落ち着いて会話もままならない。本物では無いだらう、と確信出来ないがかなり危なっかしい状態なのは変わりない。

「……因みにマカ、その魔法の杖は何の魔法が使えるんだ？」

背中をバズーカで押して歩くマジョーリカにガウエインは思った事を口にする。

「んー………使えば、分かるヨ？」  
「やめておこう」

マジョーリカの語尾が短くなった事でガウエインは久々に真剣（マジ）に少し怒っていることに気づき、完全拒否することにした。

まあ、絶対とは言わないが『破壊系魔法』だというのはあの一魔法の杖（バズーカ）を見れば分かるだろう。

「簡単に言うならヨー、アニメとかの魔法少女が使えるような魔法が使えるヨー？」

「……魔砲少女、か……」

「そうそう♪ 魔法少女ヨー☆」  
（（絶対に危ない魔法だ!!!））

案外攻撃的な魔法しか使わない魔法少女しか思い出せないガウエインは少しばかり冷や汗を流しながらも、この後の早めに帰宅した鶴ヶ谷とマジョーリカの事しか頭に無かった。

「そう言えばアニメも魔法少女というフレーズが多くなったような気がするのです」

「まあ確かに、だが魔法にも色々な魔法がある。破壊だけじゃなく

再生、創造、戦闘だけの魔法なんてどこに……も——」

「涼子ちゃん、まるで魔法を知っているかのような口振りですよ」

まるでどこぞの『とある十字凄教の女教皇』が魔術を語るかのよう  
に大神が喋った後、自分でも『何言ってるんだ／＼／＼』と恥ずかし  
そうにしている大神にりんごはニコニコと笑顔で見っていた。亮士も  
訳は分からなかったが大神の語り具合に嵌まったのか『物静かに語る  
涼子さんも、良いつス!』と頬を赤くしていた。

帰るだけでも苦勞するガウエインがやっとなと亮士と同じ下宿先であ  
る《おかし荘》に到着した。

相変わらず庭付きの比較的大きな家にガウエインは詠嘆（えいた  
ん）するように眺めた。

「……広いな」

大神が思わず声を漏らす。

「ええ、下宿をやってるんスよね。だからおれ以外にも住人はいるん  
スよ」

「その住人に騎士先輩も含まれているんですのね?」

「そうっスよ」

「最初は下宿なのか? アパートなんじゃないのか? と俺は少し考  
えたな」

ガウエインがあそこ、と二階建ての住宅のすぐ横に接近した。全八  
戸ほどの部屋数のアパート風の建物を指差した。

「そうなんスよ、建物的にはアパートなんスけど、どうにも下宿といっ  
た方がしっくり来るんスよ」

ほら、と亮士が指をさした所を見ると、そのアパートと住宅は渡り  
廊下で繋がっていた。

「部屋には小さなユニットバスはついてるんスけど、本邸の方に大き  
な風呂があるんでほとんどの住人がそこを使ってるんスよ」

「そしてご飯もついてくる。朝と夜はみんなで食べ、お弁当も頼めば  
作ってもらえる」

若人さんには本当に助けて貰ってばかりだな、とガウエインは頭の中  
で思いながら亮士の説明に付け足しをする。

「へえ、そりや確かにアパートってより下宿だな。……それで名前は……おかし荘？」

大神が建物にかかっている看板を目を細めて読む。

「おかしそうなの？」

「お菓子とおもしろそうって意味の「おかしそう」が、かかっているらしいっすよ」

「ふーん」

「八つ部屋はあるんすけど、今埋まっているのは五部屋っすかね、おれやガウエイン先輩を入れて」

それを聞いたりんごは疑問を口にする。

「それで商売になってるんですの？」

「はつきり言っつて下宿は道楽なんすよね。食事付きなのに値段は安くほとんど採算度外視、借りの側としては暮らしやすくともいいんすけどね。あと、叔母さんの気に入った人じゃないと入居認めないんすよ。だから入居者が少ないんすよ」

「……そんなんで暮らしていきますの？　というか、それ以外に収入があるんですのね？　こんなに立派な家を建てれるほど」

「叔母さん……雪女さんがそこそこ売れてる小説家してて」

「なるほど、だから暮らしていけるんですのね。でもなんでそんな道楽を……」

「なんでも、若いエキスを吸い取っていると創作意欲がわくとか何とか言っつてたっす。あとネタにもなるとか。だからおかし荘なんすよ。雪女さんがただおもしろそうだからという理由で作られたという」

とここまで亮士が説明をして、りんごがとある興味あるワードを亮士に聞くと同時に未だ背中に魔法の杖を押し付けているマジョーリカがガウエインに聞く。

「ここに住んでいたのかヨー」

「ん……？　確か話した筈だが」

「……フェツフェツ……！」

(なぜ笑う!?)

何やら黒い何か思い出したかのように笑いだすマジョーリカ。良

い魔女と悪い魔女とおとぎ話などで出てくるが、今のマジョーリカなら恐らくは後者の方の魔女だろう。

大神たちも亮士から聞いた重要な単語に驚いては、またりんごと大神の漫才のようなやり取りをしていた。

どうやら大神は隠していた少女小説が大好きな事をりんごにバレて、またりんごにからかわれる。

りんごの巧妙な口撃（こうげき）と亮士の率直な口撃により大神はついに観念したようにやけくそ気味に大声でカミングアウトしていた。

そんな大神を散々からかって気が満足したのか至福の表情になっているりんご。

それを見計らってからガウエインは『中に入るか』と四人に促した。

「先輩方も助けてくれても良かったじゃありませんか」

「仲睦まじく、良い光景だった」

「涼子可愛いヨー♪」

「ぐぐぐっ……」

先輩二人は本当に悪気無くそう思ってたから大神も何も言えないし、騎士先輩は荒事の仕事で何回も助けてくれたし、魔女先輩も「ねこねこナツクル」を作って貰った、実質大神はこの二人に何も言えないのだ。

まあ、そんな感じでりんごと大神の漫才を交えつつ、ガウエインたちが門を開き敷地内に入ると、二匹の犬が大神に飛び付いてきた。

「おお！ エリザベス！ フランソワ！」

その二匹と嬉しそうに抱き合う大神。いつも突っ張った空気を全く感じさせない嬉しそうな顔で犬たちを撫でる大神。犬たちもわふわふと嬉しそうだ。

亮士がそれをうらやましそうに指をくわえて見ている。やっぱり亮士は犬に完敗。

嬉しそうに笑いながら犬に構う大神を見ているガウエインとマジョーリカ。ガウエインは少しでも「本物の大神涼子」の姿を微笑

ましく見ていた、口を少し曲げた小さな笑みだったが。

そこでマジョーリカがガウエイン以外に聞こえないような、もしかしたらガウエインも聞き取れなさそうな程小さな声で、

「……やっぱりそっちの涼子の方が、可愛いよ」

優しく、そしてガウエインに何回も見せてくれたあの優しい笑顔で大神を見ながら囁いていた。

さながら『不器用な妹を優しく遠回りに見守る姉』のような表情をしていた。

そんな風に皆で若干大神を微笑ましく見守っていたのだが、今日の要件は別にあることにりんごがいち早く気付いた。

「涼子ちゃん、感動の再会はそのへんにして、まずはおつう先輩の方をどうにかしましょうですよ」

「うー……しゃーねーな、わかったよ……またあとでな」

大神は渋々犬二匹とお別れし、そして玄関前に立つ。そこには緊張……とは程遠い、とも言えない、というか何考えているのか読めない無表情のガウエインが突っ立ったままドアノブに手をかけた。

そして勢い良く、そう、躊躇無く開けようとしたので後ろに居る後輩たちは『え、あ、ちよっ！』と身構える瞬間をずらしてしまい、開いた先に目に入った光景が、

「おかえりなさいませご主人様」

「ただいま」

相変わらずメイドな鶴ヶ谷おつうが笑顔で出迎えてくれた。

「おお……ですの、開ける側のくるものでは無く、この騎士先輩とおつう先輩のやり取りに、何か、こう、高校生のやり取りじゃなく新婚さんのやり取りに見えてしまい、くるものがありましたの」

「う……わあ、凄え／＼／＼／」

「ガウエインさん、男っス！」

ガウエインの動揺無しの対応に後輩たちは讚えるかのように鶴ヶ谷とガウエインを見ていた。そしてその直後、ヴォンツツツ!!! と空を撃つ音がその場に居た者全員の鼓膜に響いた。



しゅうくく……とガウエインの背中から白煙が静かに上へ上へと舞い上がっていた。

ガウエイン以外の視線がマジョーリカに向けられる。

「テヘッ♪ 撃っちまったヨー♪」

（「いやいやいやいやいッツツ?!?!」）

可愛らしく小首を傾げて言うマジョーリカだが、片手にはもう魔法の杖よろしくバズーカから砲口から白煙が虚しく舞い上がっていた。

先輩ですけどテヘッじゃねえよ！ とツツコミ入れるべきだが常識をまず考えましょう。

日本の玄関先でバズーカ撃つ人は居ません。居たとしても危険人物認定されるのは時間の問題。

「ただ大丈夫ですの騎士先輩!?!」

「すげえ音だったぞ!?!」

「ガウエインさん!?!」

三人共にガウエインの心配をするが当の本人は『大丈夫』と目で語りながら靴を脱いでいた。

「いや何気にスルーしようとしなくてくださいよ!?!」

大神が焦るようにガウエインに言うと、ガウエインはきちんと靴を手で揃えて綺麗に並べると、

「ちゃんと並べろよ?」

「はいヨー」

「あ、ハイ」

「分かりましたの」

「了解っス」

と皆綺麗に靴を揃えて並べてから上がる。

「……さて、行くか」

「「いやいやいやいやい!?!」」

今日これから『いやいや』って何回言うんだろう、と軽く呟く三人組。

「マカは作った武器を考えて使うから大丈夫だ」

「いやものすごい音響きましたけど!?!」



「こう、押し積もらす感じ……？」

まあ、とりあえず。

フリーズしたオオカミさんとまた何か背中に魔法の杖を押し付けてきた魔女さんをどうにかするか……。とまた考えていた。

※

居間に通されたガウエインや大神たち。とりあえず座るのだが、ガウエインの隣には当たり前のようにマジョーリカが座っていた。

雪女はそんなマジョーリカに微笑みながら大神たちの向かいに座る。

「初めまして、私は森野君のクラスメイトの赤井林檎と申しますの」  
「……おつ、大神涼子です」

「マジョーリカ・ル・フェイだヨー!!」

ニコニコなりんごとカチコチな大神、そしてバリバリのマジョーリカ。

「亮士の叔母の村野雪女だ。呼ぶなら雪女と呼んでくれ。にしても……亮士もガウエインもやるじゃねえか。こんな可愛い子を二人ずつはべらかすなんてな」

「ほほほほ、ご冗談をですの」

「まったくだ」

「ガークンはまだそんな事してないヨー」

りんごと大神は頬を染めること無く全くの素で返し、マジョーリカで素で現状の報告をする。

「亮士の方はやっぱりかで終わるんだが……。ガウエインの方はマジョーリカか？」

「さて、紅茶の用意しているおつうの手伝いでも――」

「お飲み物を持って参りました」

「………ありがとう、おつう」

婦人からの質問を逃れようとした騎士がメイドの手伝いをしようと思えば、メイドが早速持つて来ていたので見事逃げ口を潰され、渋々とメイドからの紅茶を受け取る騎士ガウエイン。

「あつはつはつは！ 初めて逃げようとすつからだガウエイン！」

「そうですの騎士先輩！ ここで一気に吐いた方が楽ですよ!!」

「なんか、酒を飲みすぎた人に対する言い掛けだな」

聞きたくてしようがないりんごは上半身を乗り出してガウエインに聞く。

逃げ道を失ったガウエインは素直に話すしかないか、と若干疲れたような表情になりながら話す。

昨日、鶴ヶ谷を助けたことにより、わざわざ家に来てまで恩返しをする行動力の凄まじさなどを大神やりんご、亮士に話した。

大神とりんごは前から話には聞いていたのか『あゝそのことか』といった感じに納得したが亮士の方は啞然呆然と驚いていた。

鶴ヶ谷の義理堅さに驚いたのか、はたまた行動力の凄まじさに驚いたのか。亮士はただ啞然としていた。

「そういう事でしたのね」

「まさかおつう先輩の恩返しだったとはな」

「凄まじいっス」

三者三様に反応する大神たちにガウエインは少し荷が降りた感じだった。だが何故かまだマジョーリカは不満顔だった。

牛乳瓶底型の眼鏡で隠れた瞳にどんな色でガウエインを見ているのか、気になってしまふガウエイン。

とその時、空になったガウエインのカップに鶴ヶ谷が紅茶を淹れてくれる。ガウエインの後ろに控えていた鶴ヶ谷が目を配っていたのだ。

マジョーリカも紅茶をおかわりするように『こっちにもヨ』とカップを浮かす。

にこやかに微笑みながら鶴ヶ谷はマジョーリカのカップに紅茶を

淹れる、すると丈が大きすぎるブレザーで上手くカップを掴めなかったマジョーリカは紅茶を淹れたカップを落としてしまう。

変な体勢で受け取ろうとしたので落下する場所はマジョーリカの身体の一部。淹れたての紅茶を被れば火傷とまでいかないかもしれないが女の子の肌にとつて良い方向にいかないだろう。

だがその落下するカップからマジョーリカを庇うように覆い被さるガウエイン。

隣に座っていたので素早くマジョーリカを抱くように庇い、ガウエインの横腹辺りにカップは落下する。

その間わずか1.5秒くらいだった。

その数秒の間にガウエインの尋常では無い反応速度でマジョーリカを庇ったのだ。

「早過ぎですの!?!」

「早えな!!」

「早いっス!!……って、ガウエインさん大丈夫っスか!?!」

とその場に居た者全員が驚いている中、ガウエインは床に頭をぶつけないようにマジョーリカの後頭部に腕を回して横になっていたのだ、マジョーリカとの顔の距離がかなり近かったりする。

端からみれば顔同士近付いているのでキスしてる感じに見えていた。

「おおっとおー！ T O L O V E 的瞬間ですの!」

「うおおおっ！ マジか!」

りんごと大神はガウエインの火傷より、押し倒してる感じになって微動に動かない二人にテンションが急に上がった。

亮士は一人あたふたとして、雪女も口笛を吹いてこのハプニングに笑みを浮かばせていた。

ガウエイン本人はというと、

(……意外と………熱い………)

一人熱さにもがいていた。

微動にも動かないで。

そしてマジョーリカはと言うと、恥ずかしがる事も嫌がる事も無

く、ただジツとガウエインの顔を見ていた。至近距離である。唇と唇がくつつきそうになりそうでならない微妙な間がある。

「ああ、とんだ粗相を。申し訳ありません。早くこちらに」

なんにもしていないのに何故か畏(かしこ)まってガウエインに近寄り、連れ出そうとする。

(助かった)

ガウエインは熱さより目前の問題(二つの意味で)をどうしようとして困っていたので鶴ヶ谷の誘いは今までに無い助け船だった。

ガウエインは遠慮なくその助け船に乗るべくマジョーリカに回していないもう片方の腕を使って起き上がろうとする。

だがその立てたもう片方の腕で丁度良くマジョーリカとガウエインの顔が隠れ。

その僅かな瞬間に、ペロツとガウエインの唇に温かくて柔らかく、そしてどこか蠱惑的過ぎる感覚がガウエインの脳を雷に打たれたように刺激された。

「ヴハアガツツ!!!」

「ガウエインさま!?!」

瞬速の如く直立するガウエイン。危うくぶつかりそうになった鶴ヶ谷はいきなり過ぎたガウエインの反応に数歩下がってしまった。

だがガウエインは鶴ヶ谷のことまで頭が回らないでいた。

ガウエインはすぐにマジョーリカを見てみると、厚い牛乳瓶底型眼鏡を少しずらし、白く玉のような柔らかい唇に舌を舐め回すようにしてから薄く笑った。

カチコチと不動に固まってしまったガウエインを今だと鶴ヶ谷がガウエインの腕を引く。

長身ゆえにか鶴ヶ谷の力では動かないガウエイン、それを見かねたマジョーリカは『手伝うヨー!』とずれた眼鏡を戻してガウエインの背を押す。

すると微動にだが段々と動くガウエインに同級生二人は頑張つて風呂場にへと連れて行つた。

居なくなつた先輩三人に、残つた大神たちと雪女たちは互いに顔を合わせて、

「きやあああ〜！ 見ましたの見ましたの!? あの生真面目過ぎる騎士先輩が、動揺しちゃつてましたの！」

「かなり焦つてたぞ、オレもあんな騎士先輩見たの初めてだ」

「ガウエインさん、大丈夫つスカね・・・」

「火傷の心配ですか？ それとも男の心境として心配してるんですの？」

亮士以外は全員女性だつたのがガウエインにとって痛かつたんじゃないのか？ と亮士は思つていた。火傷の方は無事に直立した時に『えつ、あ、大丈夫だったの?』くらいにまで心配度は下がつたので今の心配はやっぱりトラブルはいえ女性にキスしてしまつたガウエインが心配だつた。

「まあ、ガウエインは真面目だからなあ。庇つたとはいえ無断でキスはなあ〜(ニヤニヤ)」

「心配してるんならそのニヤニヤやめるつスよ、あとキスしたかは分からないつスよ?」

「いやあ〜。あのマジョーリカつていう娘の顔見たらニヤ顔になつてもおかしくないぞ? あとガウエインの反応からすれば・・・まあそれは各々のご想像で、だな」

「たばこいい? と聞いたあと、たばこに火をつける雪女。」

「おれ、心配なんで見に行つて来るつス!」

亮士がやはりガウエインの状態が気になつたのか連れていた所へと向かつた。

残る大神とりんご、そして雪女。

「じゃあま、ガウエインやおつうの事もあるが、ちょうど良く亮士もいなくなつたことだし、学校でのあいつの話なんかしてくれねえか? あのヘタレを預かつているあたしとしてはそこんところ把握しておきたいんだよ」

「わかりましたの、騎士先輩には悪いですけど」

りんごはガウエインに合掌を送りながら、とりあえず、亮士くんの

おおかみさんストーキング事件のあたりから。  
必然的に大神は羞恥プレイに突入した。

その後は亮士や大神について話せば大神の理想とする男像がどうか雪女がそれを言い当て、りんごがそれを褒め称え、大神が再び真っ赤に染まる。それを見て嬉しそうに笑っている雪女、かわいい甥っ子の惚れた相手が大神であったことがとても嬉しいのだろう。話を聞いたあと雪女は二人を気に入り晩御飯を食べていけ、と勧める。

「えっでも……」

恐縮する大神だが……

「いいから、いいから。まあそれまで適当に過ごしてな。外で犬ころと遊んでても良いぞ」

「ご馳走になります」

見事に犬につられた。あと、鶴ヶ谷をどうにかしに来た……という訳じゃないが、最初の目的を完全に忘れていた。

日も沈み辺りは薄暗くなってきている。時間は夜七時。大神が時間も忘れて犬たちと戯れていると、どこからか声が聞こえてきた。

『てめーら、飯だぞー』

家に至る所にスピーカーが取り付けられているらしい。

「あ、はい」

「わかりましたのー」

大神はまたもや名残惜しそうに犬たちと別れ家に入る。

無茶苦茶広いダイニングに大神とりんごが行くと、初めて窠(やつ)れた姿のガウエインを目にした。ガウエインが座っている傍らにはもちろん鶴ヶ谷にマジョーリカ。

「……よう、亮士。騎士先輩どうしんだんだ？」

「……………」

「……おい、亮士。なに顔赤くしてんだ？」

「……………ガウエインさんは、勇者っス……………」

大神が少し離れた場所でガウエインを心配そうに見ているのかと



思えば敬意を払っていた。

あれからガウエインは全身を綺麗に「洗われそう」になったのだ。マジョーリカの雷撃的な行動によって見事に脳内をショートしていたガウエインだったのだが必死に脳内を治し、意識を戻らせたと思えば制服が既に脱がされており、目の前では『ガーくんをお風呂に入れさせるのはあちきだヨー!』とマジョーリカが言い放てば『いいえ! ここはメイドであるわたくしめの役目です、信念です!』と見事に打ち返され『し、信念とまできたらちと困っちゃうヨー』と優しいキヤットフアイトを繰り広げていた。

ガウエインはゆっくりと脱出する。だがすぐに捕まりお風呂に直行される、鶴ヶ谷はガウエインの腕を引っ張るのだが微動だにしない。しかし頑張っている鶴ヶ谷に悪いかな、と罪悪感が生まれたガウエインは取り敢えず服だけを着替える。そして風呂には入らなかったのだが膝枕をさせられ、耳掃除までされてしまった。二人順番にだ。

よくマジョーリカに鼓膜を破かずに耳掃除できな、と感心しつつ、普通ならばまるで夢のようなひとときだったのに違うのだが、真面目、というより素直に《騎士道》や《武士道》といったルールを自分で決めているガウエイン、そうしてやっとなる倫理規範を築けていっているのだ。

そんなガウエインはどのようにしてこの二人を相手をしり反応すれば良いのか分からぬまま苦悩に陥ってしまい。今の現状に当たった。

「わはははは、まあ、こいつは真面目だからな!」

十人がけの大きなダイニングテーブル、一番端の上座というか特等席とあうかお誕生日席に座った雪女が快哉(かいさい)に笑っていた。「じゃまーおまえらも適当に座りな。みんな揃ったら飯にすつから!」すると、ダイニングにブラウンの髪をした男女二人組が仲良く入ってきた。

「こいつらは、ヘンゼルとグレーテル。見た目は外人だがずっと日本に住んでるから中身は日本人だ。ドイツと日本のハーフだよ。兄

妹でこのこの一号室と二号室に住んでる。おまえらと同じ学校だったはずだぞ」

その説明を聞きながら二人を見たりんごは声を上げた。

「あらまあ、生徒会長じゃないのですの？」

「ん？ 新しい顔だね」

興味深そうにりんごたちを見るヘンゼルにグレーテルが耳打ち。

「お兄様、御伽学園学生相互扶助協会の……」

「……ああ、桐木君のところの。興味ないから憶えてなかったよ」

「んもう、お兄様！ 失礼ですよ！」

「おまえのことならなんだって憶えてるんだけどね、グレーテル？」

「まあ、ヘンゼルお兄様ったら……」

ヘンゼルの言葉に頬を染めるグレーテル。どう見ても兄妹の壁を飛び越えてしまっている。

「わははは、おもしろいだろこいつら」

雪女が相変わらず笑っている。おもしろいなんて言葉でながしちやいけない気がします。雪女的には面白いからOKなのだろう。

次に現れたのは……

「おう、真昼（まひる）。相変わらず暗いな！」

「……すいません」

真昼と呼ばれたのは魔女さんことマジョーリカに匹敵しようとかというぐるぐる分厚いレンズの黒縁メガネで三つ編みの少女。しかし、印象はマジョーリカとはまったく違う。暗い、暗すぎる。無茶苦茶名前負けしている真昼。猫背で身体を丸め、そのまま黙って椅子に座る。それを見届けた雪女はキッチンの方に声をかける。

「おう、若人（わかと）揃ったぞ」

「じゃあ、人数多いし何人が配膳手伝ってくれるかな？」

ひとのよさそーなにーちゃんが現れた。これが雪女の旦那さん、村野若人。雪女に代わり炊事洗濯等々家事全般を難なく楽勝にこなすスーパー主夫。近所付き合ひも大良好。最近近所のお婆さんから梨（なし）を貰っていたのを見かけた。

「あ、ハイわかりましたの」

「はい」

大神とりんごが立ち上がろうとするが。

「い．．．や、ここは俺が．．．」

と耳掃除（いくさ）に負けた騎士の姿は痛々しくも、若人の手伝いに名乗りを上げるガウエイン。だがそこを鶴ヶ谷に押さえつけられる。

「いいえ．．．ここはわたくしに．．．お任せください」

鶴ヶ谷に押しとどめられたガウエインは力なく椅子に凭（もた）れる。

椅子に戻ったガウエインを見届けた後に配膳に移る鶴ヶ谷。

「いやあ、ありがとう」

にここにこ礼を言う若人に鶴ヶ谷も笑顔で返す。

だがガウエインはそこで鶴ヶ谷の表情に“何か”あるのに気付くまですぐには掛からなかった。

移動する鶴ヶ谷の足取りが怪しく見えたガウエインは静かに立ち上がる、今度はさつきまでとは別格に違う芯のある立ち方だった。

そして鶴ヶ谷が配膳を始めようとして、

「いえ．．．当たり前前のことを．．．しているだけ．．．です」

そして鶴ヶ谷はふらついたかと思うと、糸が切れたように倒れた。

## 第17話 「結・騎士とメイド」

「おつう！」

ガウエインは糸が切れたように倒れそうになった鶴ヶ谷を見事に抱き押さえた。

「おつ、おつう先輩!？」

「大丈夫かっ!？」

「どどどどどどうしたんっすかっ!？」

ガウエインの腕の中で力なく項垂れている鶴ヶ谷に後輩の赤井林檎、大神涼子、森野亮士が慌てながらその場集まる。

そして同時にガウエインはマジョーリカに目配せを送れば、後輩達を掻き分けて鶴ヶ谷の顔をマジョーリカが確かめると、

「気を失ってるヨー」

「・・・身体が少し暑い感じがする」

マジョーリカはそのまま鶴ヶ谷の額に掌を添える。

「・・・すごい熱だヨー」

マジョーリカの言葉にパニックになる大神と亮士、だがそんな大神たちに雪女（ゆきめ）が一喝する。

「落ち着け!!」

雪女の声にハッ! とパニック状態になっている事を自覚させられた大神と亮士、それと同時に雪女はテキパキと指示を下す。

雪女の夫である若人（わかと）には車の手配をさせて、雪女が鶴ヶ谷をガウエインの代わりに抱き抱えようとするが、

「俺が運びます」

無表情ながらも、何処か焦燥の色に染まっているガウエイン。だがそんなガウエインに雪女はダメだ、とはっきりと答えた。

「ガウエイン、お前らは待ってる」

何故ですかッ!? と思わず叫びそうになったガウエインだったが、マジョーリカが袖を引いて目で訴える。

———いくら力があるガウエインでも、いくら医療知識を少し齧（かじ）っているマジョーリカでもやはり所詮は【子供】なのだ。

高校生といえど多少なりとも知識も常識も付けたが、まだ子供だ。余計な手間を掛させる。

マジョーリカの瞳と、袖をギュツと掴み続けている彼女の行動でそう受け取ったガウエインは、悔しそうな顔になりながらも『……なら、せめて車まで運ばせて下さい……』と答える。

雪女もそこまで伝えたかった訳では無かったのだが、結果的にはそういう訳なのだから、車まで運ぶ手伝いを許可をする。

こうして鶴ヶ谷を乗せた村野夫妻の車は御伽花市（おとぎばなし）の大きな病院にへと急行した。

※

病院にへと向かい、一時間半くらいした後には帰宅して、まず鶴ヶ谷を布団に寝かせてきた雪女たちに鶴ヶ谷の診察結果を聞いたガウエインたち。

過労で身体が弱ったところに、また過労をと、積み重なったことによつて風邪をひいたそうだ。

鶴ヶ谷を心配しながらも、もう夜も遅い事と明日も学校があるのでから寮に帰れ、と雪女に言われた大神とりんご。

若人が車で送って行く、と言つてくれたが大神たちはそれを断り、徒歩で帰路に着いて行った。

亮士も勿論、ガウエインが『なら一緒に送って行く』と言い出していたがそれも断つた大神とりんご、マジョーリカはチラツと鶴ヶ谷の様子を確かめてから大神たち共に女子寮に帰って行った。女子同士だけで何か話すこともあるのかもしれない。

しかし、大神たち帰って行った後からガウエインは早速鶴ヶ谷の看病しようとして切り出したのだが、やはり止めに入る雪女さん。

「何故ですか？」

珍しくガウエインは食い下がらない態度で雪女と対峙している。

「何故ですかだとお？」

ぷはあくくとタバコの煙を吐きながら流麗なのにどこか鋭さがある雪女の睨みにガウエインは無表情に見詰める。

「高二になつてそれを理解出来ねーのかガウエイン？」

「……勉強に支障が出るから、と言いたいんですか」

珍し過ぎるガウエインの反抗に雪女は内面驚きながらも、外面は大人として叱るしかない雪女。亮士も先ほどまで居たのだが雪女との目配せにより若人が亮士を部屋まで連れて行ったのだ。

「……すみません、我が儘を言っているのは、承知しています、ですが、」

「ですが、でも何でもねーよ。お前がそこまで気に病む事はない。もしここでお前をおつうの看病に付けてしまえば、今度はお前に支障が出る。するとどうだ？ またおつうも気に病むぞ？」

ガウエインは苦々しい表情になる。

雪女もガウエインがそれを重々理解しているのが肌で感じる程に分かつていた。

「はあく、良いから寝れ。はよ寝れ」

もう何も言わせんぞ、とキツと鋭い睨みをガウエインに放つ。

重々理解している訳でもあるガウエインは、雪女に軽い一礼をして自室にへと戻って行った。

だが雪女は数秒経つてから村野夫妻が住む本宅に設けられた和室―そこに鶴ヶ谷が休んでいる場所―に向かえば、襖の前に佇むガウエインを発見。

雪女は再び深い煙を吐きながら、スリッパを片手に持ち、スパーン！ とガウエインの後頭部を叩く。

「はよ寝れ」

気付かなかつたのかガウエインは背から聞こえた雪女の声を素直に聞いて、今度こそ自室にへと戻って行った。

雪女はそれを遠くから見て確認してから、ダイニングに戻る。

するとそこには雪女が好きな氷を沢山に入れられた炭酸飲料のサイダーがダイニングテーブルに置いてあった。

「若人、か」

「うん、サイダー入れといたよ」

雪女は夫のこの気遣いに少し微笑みを零して、冷や冷やと水滴が硝子のコップから滴るのを眺めて椅子に座る。

若人は台所で後片付けと、明日の朝食の準備をしていた。

「……はあ」

コップに入れられたサイダーを一飲みして、思わず溜め息を吐いてしまう雪女。

雪女も雪女で鶴ヶ谷の状態に気づけなかったことを悔やんでいたのだ。

前向きな考えを持つ雪女なので、そんなに深く思い詰めていなかったが、やはり雪女も気に病んでいた。

台所で一区切り終えて、小休憩に入った若人が、少し暗いダイニングに入ってくる。

「明日は晴れて暑くなりそうだから皆にはスタミナが付く弁当を作らなきゃいけないね」

優しい微笑みを浮かばせて若人は雪女の背に回り、肩をほぐすように優しく揉んでくれる。

他愛の無い話だが、若人がこうやって雪女の気を紛（まぎ）らわせてくれる事を分かっているから、雪女も、

「ふふっ、そうだな」

思わず小さく笑い、若人が揉んでくれている片方の手に、自分の手も添えるようにして重ねていた。



鶴ヶ谷が風邪で休みを取り、欠席した日。つまり次の日に御伽学園

に設置もとい設備された御伽銀行の地下本店にメンバーが鶴ヶ谷以外全員集まっていた。

「なるほど、鶴ヶ谷君の欠席はそういう事だったんだね？」

御伽銀行の頭取を務める三年生の桐木リストが大神たちから事情を聞いて納得する。

「……ハイ」

ガウエインはいつもと変わらないように無表情のまま答える。

だがやはりどこか元気が無い。

りんごが『ゆつくりと眠れたのですの？』と聞かれればガウエインは首を横に振る。

「……あの後、雪女さんが何度も和室で寝ているおつうの看病をしていたらしいんだが、魘（うな）されるように『せめてメイドとして側に居たい』という事で、雪女さんが折れ、おつうはまた自分の部屋で寝た」

雪女がガウエインにあんな言い方をしたのに結局は迷惑を掛けてしまった事を悔いていたが、ガウエインは全く持って雪女にそんな感情を抱く筈も無く、朝本人に直接それを聞かされ、なるべく長年学んだ笑顔で『大丈夫ですよ』と答えてみせたが、雪女にどう伝わったかガウエインには分からない。

ガウエインが思考を巡らせる中、それを見ているマジョーリカ。

ペロペロキャンディーをチロチロと舌を可愛らしく上下させながら舐めている。

またガウエインが変な考えをしないか、をマジョーリカが観察しているのだ。

そして一同、というより鶴ヶ谷をまだよく知らない一年生メンバーは三年生であり、名義上は上司且つ取り締まっている頭取、桐木リストに何故あんなに鶴ヶ谷が『恩返し』に執着してるのか？ を聞いていた。

「知らない事はない……よね？」

そう言いながら頭取は副頭取でイトコでもある桐木アリスに顔を



向ける。

するとアリスは端麗な顔つきに少し曇りが漂う。

そのまた何とも言えない受け答えに大神は知っていると判断し、昨日から頭の中で渦巻く鶴ヶ谷の『恩返し』について聞こうとするが、「話すかどうかは別だよ?」

また曖昧で断言しない口調のようにも聞こえたが、大神には少し芯が籠(こも)った声で言った頭取に、己の意思でこれは聞いちゃいけないんだ、と判断する。

頭取も大神が良い子なのを分かっていたからこそ曖昧で断言しない口調で言ったのかもしれない。

そして、先ほどまで黙っていたアリスが静かに立ち上がり、ガウエインや亮士に顔を向けて口を開く。

「おつうさんは、今夜も黒軋さんや森野くんの家に居られるんですね?」

「え、あつ、ハイっス」

「.....」

アリスに聞かれ、ガウエインは思考を巡らせながら器用に話も聞いていたらしく、肯定の意味を含め首を縦に振る。

亮士も戸惑いながらもガウエインと同時に答えた。

それを聞いたアリスはというと、

「でしたら私たちも、黒軋さんの所に伺います」

※

場所が変わり、現在御伽銀行面々はというと、

「だからと言って、全員で来ることは無かったんじゃないですか?」

情けない声を出してそう言ったのは他でも無い、森野亮士だった。

御伽銀行メンバー総員十名。

おかし荘はそんなに広く無い筈なのだが、窮屈と言うほどに狭くも無いと、なんとも言えない広さだった。

ガウエインの部屋に寝ている鶴ヶ谷の周りに、メンバーが正座をして様子を見ている。

「いやあくついね、やっぱり心配だよね、アリスくん？」

「そうですね、だから私が行こうと、言ったのですが」

「いやあく僕たちも鶴ヶ谷先輩が心配だったので看病もといお見舞いをと」

「歳は同じだがな」

ガウエインにつっこまれ、浦島が『確かにそうだが、いや、そうですが・・・』と歳が同じど学年は上のガウエインに上手い具合に言い返せない浦島に、隣に当然のように座っている竜宮乙姫にまあまあ、と宥められている。

そんな風に軽い雑談のような事をしていると、ガウエインはずっと顔色を見ていた鶴ヶ谷の顔に瞳を静かに開けたのを確かめた。

「まあ、みなさん・・・お帰りなさいませ・・・」

動じない鶴ヶ谷はきちんと挨拶をする。

そんな鶴ヶ谷を心配して大神が尋ねる。

「大丈夫か、おつう先輩？」

「ええ、すみません。すぐにお茶をご用意しますので・・・」

まさかの鶴ヶ谷の行動に一同は驚く、と言ってもそれは鶴ヶ谷をよく知らない者たちだけで、頭取とアリスは『やっぱりか・・・』といった顔になってマジョーリカとガウエインはすぐに鶴ヶ谷の両脇に寄る。

「無理するなヨー」

「そうだ」

「いいえ、わたくしは“恩を返さなければいけません”」

マジョーリカに押さえられるが鶴ヶ谷はマジョーリカの手を握って堅くそう言う。ガウエインはそんな鶴ヶ谷に困りながらも思考を巡らせる、どうやって鶴ヶ谷を止めれるかを、そして妙にその『恩』に対して執着して離れない鶴ヶ谷を“助けたい”と思っただのだ。

『恩』という足枷（ワナ）に引つ掛かった鶴を、助けたかった。

※

あの後、無理に奉仕活動をしようとする鶴ヶ谷を止めたのは部屋に入ってきた雪女によって静止できた。

鶴ヶ谷をまた寝かせ、一同は村野邸にへと移動した。

雪女は御伽銀行メンバーをにダイニングに集めさせ、自由に使えと言つて居なくなつた。

「やはり話さないといけないみたいだね？　鶴ヶ谷くんの……子供の頃のこと」

ダイニングテーブルに各々座り、頭取が立つたままそう言う壁に寄つ掛かるように立っていたガウエインが反応する。

「話すのですか」

ガウエインは片目に隠れた前髪を揺らして頭取に聞く。

「何故あそこまでする鶴ヶ谷くんの理由は、御伽銀行の同じ“仲間”である大神くんたちも知る権利はあるんじゃないかな？　まあ確かは無許可に話すのはいけないことだよな？」

何分真面目なガウエインである彼は鶴ヶ谷の過去を勝手に話して良いのか、と思つたのだろう。頭取はガウエインの問いに肯定する事も否定する事もない曖昧な答えで返す。だがそれは変に真面目なガウエインは頭取が“わざと”曖昧な答えを返すことによつて『考えてごらん？』と改めて自分で考えさせているのでは、と解釈した。

（おつうの、子供の頃……）

ガウエインは知っていた、鶴ヶ谷の過去を、もちろん本人の口から聞いてだ。そして少なくともその事を聞いてガウエインは鶴ヶ谷の“【恩返し】を受け入れる”という答えに辿り着き、今に至つた。

ガウエインは数秒だけ考えて頭取に返事する。

「……俺が辿り着いた『答え』が鶴ヶ谷をあんな風にしてしまいました」

「でもそれは仕方が無い話じゃないかな？　これはやっぱり本人がど

うにかしないといけない、事だからね？」

頭取は微笑しながらガウエインの返事を返すと、静かに口を閉じて話を聞く体勢になった彼を見て、タイミングを見計らいアリスが口を開く。

「これは本当に大事な事ですが、これ以上踏み込むということは、扉を開けておつうさんの心を無断で覗き込むということです。私たちに隠しておきたい……覗かないで欲しいと思っていること。その事を重々理解して聞けますか？」

確認するようにアリスは一人ひとりを順番に見る。

「……おつう先輩にはみんなお世話になってるんですの！ だからおつう先輩が苦しんでいるならどうにかしてあげたいんですのよ」

「そうっす、それに何かおかしいっすよ！ 恩を返すとか、他人に迷惑をかけないとか、自分のこと全く考えてないじゃないっすか!!」

「ああ、おかしいな。それにオレが何より腹が立つのはオレたち相手に恩を返そうなんてしてるところだ。オレたちはおつう先輩を仲間だと思ってるのに、おつう先輩はそうじゃないってことだろ？ 亮士は別に恩を返してもらいたいから助けたわけじゃないだろ？」

「もちろんっすよ！ 仲間が恩だの借りだの気にするのはおかしいっすよ!!」

「そうだな、俺もおつうさんに恩だけの関係ってだけは頂けないな非常に。もっと濃密で恍惚とする関係に……いえ、本当に仲間として僕もおつうさんをなんとかしてあげたいです」

「私も同感です、恩だの借りだのという関係だけなんて寂しいです」  
鶴ヶ谷の過去を知らない五人は真剣な眼差しでアリスにそう伝える。若干一人だけ空気を読まずに何かをほざこうとしたがアリスの絶対零度の睨みで焦りながら急いで言い直した。

そして鶴ヶ谷と同じ学年であるマジョーリカとガウエインにも目を向ければ、ここまで鶴ヶ谷の事を思ってた言ってくれている後輩たちに微笑んでいるマジョーリカ、そしてガウエインも真剣に聞くと言っている後輩たちに無表情で眺めている。何を思っているのかは彼にしか分からない。

そして、アリスも内心は安心して話せる事に安堵しながら顔を引き締め、口を開く。

「分かりました、ただ、その後の行動には責任をちきんと持つてもらいます」

そして一つ間を空け、再び話す。

「……おつうさんには、もう二度と返せない恩があるんです」



幼少のみぎりの可愛らしい小さな女の子・鶴ヶ谷おつうが赤いランドセルを背負って信号を待っていた。

横断歩道で、信号が青くなるのを今か今かと待っていたら、向こう側に大好きな近所のお兄ちゃんがいた。

黒い髪に高校の制服を着崩し、鞆を脇に抱えている少年は横断歩道の信号をちゃんと守っている小さな女の子のおつうが居ることに気付く、おつうは手を上げて、

「おにいちゃんー！」

と元気良く呼んできた。少年・よひようは可愛らしく手を振っている女の子に微笑みながら手を振り返してあげる、するとおつうは心底嬉しそうにパアツと笑顔になる。

手を振り返したただけであんなに喜んでくれるおつうによひようも心が暖まる。だがすぐにそれは驚掴みされたように心臓が冷え縮んだ。

ちゃんといつも通り、教えられたように、信号が変わるのを待っていたおつうは、大好きなお兄ちゃんに会えたことで、いつもならしていた左右確認をしなかった。

青になった瞬間、おつうはお兄ちゃんに向かって走りだす。

普段ならば全く問題はなかった。

ここは車の通りが少ない道だ。

だが、その日は違った。

猛スピードで横断歩道に突っ込む車、しかもただの車では無く大型車であるトラックだった。

それに気付いた小さなおつうは逃げようにも恐怖で固まり動けない。鉄の塊に小さな小さなおつうに襲い掛かろうとしているのだ。

轢かれれば即死なのは周囲に居た人たちは皆思っただろう。悲鳴を上げる人や目を瞑る人、誰一人動けなかったのだ。これから起こる悲惨な光景しか頭に無かった周囲の人たち。

そして小さなおつうは今にもトラックに轢かれそうになったその時、何か大きなものがおつうを抱きかかえた。

強く、物凄く強く抱きかかえられたおつうは視界が真っ黒になった。

次の瞬間おつうを襲う衝撃。しかし、何かがおつうさんの身体を柔らかく受け止めていた。

どこか安心して、覚えのある匂い。

これは、この匂いは、よく隣に遊びに行つた時に優しく抱っこしてくれた「お兄ちゃん」の服の匂いだった。

「大丈夫かい？」

その声に、聞き覚えのあるこの声に何が起こつたのか理解してないおつうは啞然としたまま答える。

「……うん、大丈夫」

そこで視界が明るくなり、初めて自分を抱きしめている大好きなお兄ちゃんに気がついた。

よひようは咄嗟の行動だった。

トラックに轢かれそうになっている小さな女の子、おつう。

完全におつうを助ければ自分は只じゃ済まない事くらいは理解していた。

——死ぬかも。

人間誰しも我が身の命が大事だ、わざわざ投げ出すような馬鹿な行動をする奴が何処に居る？ だがよひようは本当に咄嗟に駆け出し

ていた。

何でだろう、でも確実によひようはあの小さくて可愛くて、か弱い女の子を助けたかった。

名前も関係あっておつうに何度も『鶴の恩返し』を読んで聞かせていた事を何故か脳内に走った。

言うことを素直に聞いて、お手伝いを自分から進んでやって、褒めて頭を撫でて上げれば心の底から喜ぶおつうが可愛くて可愛くて、愛しかった。

——自ら家事を進んでやる、この娘ならきつと良い女房（おくさん）になるな。

もしこの娘に好きな男の子が出来たら応援してあげたいな、ずっと仲睦まじい人生を楽しんで欲しい。

そんなまだ数年の時しか歩んでいない青年は年寄りのような考えがいつもよひようの頭の中に流れていたのだ。

そしてよひようは小さい女の子を大事に、守るように強く胸に抱きしめた。

——きつと痛いだろうな。

痛い、どころじゃない。

『死ぬ』かも、しれない。

怖くない筈が無かった。

怖くて怖くて、死ぬほど恐ろしかった。

でも、今胸の中にいる女の子を抱きしめた瞬間に、また一層強く抱きしめた。

——ああ、この娘だけでも……。

次に襲った衝撃によひようは、簡単に人間は飛べんだな、と意外に関係ない事を思い浮かばせていた。

「おにいちゃん、血が出てるよっ。」

「ああ……こんなのかすり傷だよ」  
「でも」

血が出てとても痛そうに見えるよひようにおつうは自分がしてしまった事に身体を震わせていた。

「ご、ごめんなさい。おつうが、おつうが」

泣きながらおつうはよひように謝る、だがよひようは弱々しくも笑いかける。

「……ありがとう」

「え、なに？」

「ありがとうの……方が良いな、……ごめんなさいより」

「うん……うん、おにいちゃんありがとう」

「どういたしまして。あと……横断歩道を渡るときは左右を確認しないと、いけないね」

周囲が騒がしくなってきた。事故に気がついた人たちが集まってきたのだろう。小さなおつうは大好きなお兄ちゃんの頭から大量に流れる血を見て泣いている。

泣いているおつうによひようはガンガンと脳や身体に激痛が走りながらも優しくおつうの頭に手を乗せる。おつうは泣きながらもよひように答える。

「グスツ……うん、うん、今度からちゃんとするから、グスツ……うう、おつう、良い子にしてるから……うあ、だから、だから、もう人に迷惑かけないようにするからあ、だから、だからあ……!!」

おつうはよひようの服を強く、小さな手で強く服を掴み、胸に顔をうもらせる。

「おにいちゃん、しんじやいやだよおー!!」

「……大丈夫だよ」

「ほんとうに？」

「……ヒュー、ファー……あ……ああ……ううん」

呼吸のリズムが完全に普通では無く、苦しそう息をするよひよう。だがよひようは激痛を走る脳内に鞭打って意識を保たせる、いや保た



せた。

——何を答えてんだ、自分。

何考えてんだ、自分。

よひようは小さなおつうの頭をずっと弱々しくも撫で続けた。

「やくそくだよ？ おつう、いっぱいありがとうするから。おかあさんがおしえてくれたの。助けられたツルさんはあるがとうっておヨメさんになるの。おつう、おヨメさんになっていっぱいいっぱいありがとうするから……だから、だから……！」  
顔を上げ、瞳には涙を溜め、それでも大好きなお兄ちゃんの答えに小さい笑顔で答えるおつう。

よひようの心の中には深く、淵深く沁み入った。

自然とよひようの目から涙が流れそうになった、だが決して流さない。  
い。

よひようは舌を噛み千切る程に我慢して涙を流さずにおつうの頭を撫で続けた。

何でそんな事を言うんだ、おつうちちゃん。

お兄ちゃん——死にきれないよ。

おつうちちゃんを守れただけで、良かったのに。

そんな事言ったら、本当に、

よひようは舌を噛み千切りそうになりながらも言葉を、一言一句を大切に口から伝える。

言っでは、駄目だ。

でも、欲が出てきてしまう。

こんなに愛しい娘から、離れたくなかったのだ。

「そう……かい？ じゃあ、楽しみに……待っておくよ」

「やくそくだよ？」

おつうはよひようの激痛を吹き飛ばしてしまうような笑顔で、そう

言った。

——駄目だ、やめろ。

考えると、口が合わない。

吐いてしまう。

言っただけじゃないと、それがこの娘の人生を変えてしまうのではと、必死に脳内を巡らせるが、口が勝手に動いてしまう。

抱き締めたい、でももう身体は動かない。

もつと話したい、でももう口の筋肉も言うことを聞かなくなってきた。

一緒に、居たい。

でも……もう、それは絶対に叶えられない事になった。

だから、さつきまで抑えていた理性を丸めて捨てて、せめて最後までらい良いだろ？ と自分に言い聞かせた。

恨まれても良い、憎まれても良い、だから、最後まで自分勝手に、我儘言っても良いだろう？

神様も仏様も文句を言わないだろ。言ってきたら直接面と向かって戦ってやるよ。

——丁度、今向かうところだから。

だからよひようは、五感がある内に必死に刻む。

おつうの暖かい体温。

おつうの優しい香り。

おつうの愛しい声。

よひようは失った三つの感覚を記憶に刻み、そして相手に伝えることの出来る方法で、つたえた。

「ああ、……やくそくだ」

今のもう声は無くなった。

男が愛しい女に約束して何が悪い？

必死によひようはもうすぐ停止する脳の中で叫ぶ。

大好きな女と一緒に居たい。

でも叶わない。

だから、せめて神様仏様、自分の自慢の女の姿を目に焼き付かせ、光を失ってもその娘の愛しい姿を記憶に刻み、神様仏様（あんた）達に見せてやるよ。

この娘は、自分（よひよう）を好きになってくれたんだよ？

おつうちゃん、神様仏様に、沢山自慢話してあげるよ。

いや、もしかしたら話す相手は閻魔様かもしれないね？

残酷な逝き方をした、自分を報いる為に。

ありがとう。

そして、ごめん。

おつうは弱々しく撫でてくれていたお兄ちゃんの手が、力無く落ちたことに気付いた時には、大好きで優しいお兄ちゃんは、眠ってしまった。



静まり返った室内で各々がかなり暗い面持ちになっていた。

「そんな重い話だったんですね」

浦島はダイニングテーブルに両腕を置いて、鶴ヶ谷の気持ちを男なりに考えて呟いた。

「彼女は恩を返せなくなることが何より『怖い』のです。過剰とも言える恩返しぶりはそのせいなのです」

話をしていたアリスもつらそうに顔を軽く俯かせ、眉も下がったま

まだった。

ガウエインは約束して鶴ヶ谷の許(もと)から去った青年がどんな思いだったのか、感情があまり芳しくないガウエインにとって分からないだらけである。

だがそこで大神が言った言葉にガウエインは少し考えが変わっていった。

『おつう先輩を庇った人も望んでない』

確かに、自分を蔑(ないがし)ろにして【恩返し】の為に体を壊して、更に拗(こじ)ればもつと悪い方向にへと向かう。しかもそれは自分から向かっているのだ。

そして大神の言葉にりんごも同意しながらも悲しい顔になる。

「でも、先輩はそう思ってますんの」

望む望まないか、それはやはり本人にしか分からない事だろう。

だから鶴ヶ谷は鶴ヶ谷の思いでやっている、鶴ヶ谷を庇った青年がどう望もうが、死人は口無し。鶴ヶ谷にどう伝わったかは本人の考え次第なのだ。

「恩返しの、呪縛ですね・・・」

大好きな人が亡くなるのは本当に辛い、乙姫は最愛の恋人である浦島の事を考えながらそう呟いた。

そしてそれを聞いたガウエインは思い出したように頭に浮かんだのは昨夜、雪女には寝ろと言われたがやはり看病してしまったとき、魘(うな)されるように呟いていた鶴ヶ谷の言葉。

『雪女さんにも恩を返さきや・・・若人さんにも・・・恩を・・・』

その姿にガウエインは無表情ながらも何処かつらそうに目を厳しくさせていたのだ。

「返す恩が貯まる一方ですね」

アリスはどうしたものか、といったように考えながらそう呟く。

「・・・人に迷惑をかけることを恐れ、少しでも迷惑をかければそれを恩として返そうとする」

そこで一同が静まりかえった中、マジョーリカがふとそんな事を言いだす。

大神と亮士、浦島と乙姫はマジョーリカに顔が向き、りんごどガウエインは顔の向きは変えずに耳は話に傾き、頭取とアリスはマジョーリカの言葉の内容を聞きながら黙然（もくねん）としている。「恩返し」ができなくなることを怖がり、返せるときに一気呵成（いっきかせい）に返そうとする。恩を返せなかった鶴は、それ故に「恩返し」に固執して、恩を返す相手を捜している、ヨー」

マジョーリカがそれを語り終えればまたの沈黙。

ガウエインは思考の流れを急かすように思索する。

だが、やはり、ガウエインには何も思い付かなかった。

自分のこの考え無さと、経験が疎い事を今日まで悔やんだ事は無い。

もつと自分に何かしら経験をしていれば、鶴ヶ谷を助けられたかもしれない。

そんな風にどんどんと下へ下へと考えと自分に対する非難が絶えなくなってきた時、突然と赤い髪を揺らしたりんごがバンツ！と机を叩いて立ち上がった。

「そうですの!!」

『うおっ!』『うひっ!』と同じ一年生で隣に座っていた大神と亮士が驚いた声にガウエインはやつと考えを中断して意識がりんごに集められた。

りんごは何かを思いついたらしく、大神や亮士、そして他の御伽銀行のメンバーたちの顔を見て言った。

「良いことを思いつきましたの。これならば少なくとも私たちに対する恩返しはやめさせることが出来るかもしれませんの。明日はちようど土曜日で学校は休みですし・・・」

そして、御伽銀行でもつとも可愛らしく、そしてもつとも策士でもある赤井林檎はニヤリと何かを企んでいる笑顔を浮かべた。

彼の有名な中国の軍師・孔明や策士・太公望も気味悪がるであろうりんごの笑顔に、実はガウエインは馳せる気持ちになるのをまだ知らなかった。



まぶしい光で鶴ヶ谷は目を覚ました。

「……………」

きよろきよろと左右を確認したあと、ゆっくりと上半身を起き上がる。起き上がった拍子に額に載っていた濡れタオルが落ちる。それを見て鶴ヶ谷は思い出した。

(……………そうです、確か倒れてしまつて)

そこではつと、我に返り周囲を見回していた鶴ヶ谷に声がかかった。

「おはようございますの、おつうさま!」

「お……………おはようございます」

「おはようございますっス」

鶴ヶ谷が見たのは、メイド姿の御伽銀行女子メンバー、そして執事姿の御伽銀行男子メンバーであった。

「なつ、皆さまその姿は?」

その格好に流石の鶴ヶ谷も驚愕。りんごなら何か利益になる話を持ちかければ、乙姫は浦島に一言いえばメイド服を着てくれそうだが、アリスと大神はまず着ないだろう。

マジョーリカは……………気分次第と事情に依(よ)るだろう。

そして男性陣は、頼り無さげに見える執事の亮士、なかなか様になつている執事の浦島、何か普段通りに見える、何ら変わつてるのか分からん御伽銀行の頭取(トップ)、執事の桐木リスト。

そして一番様になつていると言えは、

「本日は私たちがお嬢様のお世話をに参りました。お嬢様はただ寝ているだけで良いのですよ?」

「そうだヨー♪」

違和感が感じられるが、口調が執事になつているガウエイン。普段は黒いコートを着てるから分からなかったが、長身も加わっている為

かとても黒い執事服が似合っていた。

そしてマジョーリカが後に続くように片手を元気良く上げてガウエインと同意する。

「そつ、そんな、それでは皆さまにご迷惑が!!」

「いえいえ、全然迷惑なんかじゃないですよ。おつう先輩的に言うならば、今までお世話になった分の恩を返しましょうって事ですよ？」

おつう先輩は恩返しを止めるんですの?」

「そ、それは……」

恩返しを出されて言葉に詰まる鶴ヶ谷。

「ですので、おつうさんは病人なのですから存分に寝てください」

アリスは眼鏡をクイツと直し、それを言い終えれば女性陣が立ち上がる。

「なっ……なにを?」

鶴ヶ谷は立ち上がった女性陣たちがニヤニヤ(ごく一部)としているのに嫌な予感が過(よぎ)る。

「ふふふ、でもその前にお身体を拭いて着替えなさいといけませんね」

「ですね、なので男性陣はおつうさんの朝食の準備をお願いします」

メイド乙姫が片手でオホホと口の前に手を覆うようにしてそう言えば、アリスがメイド長の名が相応しい指示を繰り出す。

「了解」

口を揃えるように言うと、ガウエインを筆頭に男性陣は部屋から出て、村野夫妻が住まう本宅に設けられた台所に向かう。

朝食の準備となっているが、話を前もって聞いていた村野夫妻が完全バックアップしているので、若人さんが朝食を準備している。

ただ取りに行くのだが、早く戻らないようにするのも聞いている。

「くっ!!」

「う、浦島さん一体どうしたんスカね?」

「恐らくだろうけど、やっぱり鶴ヶ谷くんのお着替えの手伝いでもしたかったんじゃないかな?」

「それやったら乙姫さんを筆頭に女性陣に殺されますっス」

「そこを“ボコられる”じゃなくて“殺される”と完全な表現を表し

たのは実に合ってるね〜？ 意味的に」

そんな事を言いながら執事服の裾など気にしながら話す亮士と頭取、そしてその話を聞いていた浦島は悪寒を感じられながら乙姫に『お仕置き♪』をされる自分を想像して軽く灰色になっていた。

そしてガウエインはと言うと、三人の後を追うように歩き、りんごの提案に感服と詠嘆の声を上げそうになっていた。

りんご発案の『返せないほどひたすら恩を与えて破産させてやろう大作戦』を実行している御伽銀行メンバー。

実にりんごらしい趣味と実益を兼ねた作戦だと思ったガウエインは台所に着いて、若人が作ってくれた朝食を四人で確かめた。

頭取がタイミングを見計らい、鶴ヶ谷をお着替えしているであろう部屋の前まで来れば四人は一度立ち止まる。

「ま、まだ着替えてるかもしれないぞ！」

「そそそそそんなことは、無いっスよきつと多分！」

「ハハハ、確かに多分大丈夫だと思っただけど、流石に許可が無いと開ける勇氣はないよね？」

そんな風に浦島はせっかく紳士らしい執事服を身に纏っているのに行動が変態過ぎて変質者に見えてしまい、亮士と頭取もどうするか迷っている様子だった。

「チャツチャツと入りますか？」

「うわっ！ 一言言わなそうなガウエインさんが言ったっス!？」

「テンションが上がってるんだね？」

「・・・ふっ・・・」

「・・・意外にも浦島が俺の肩に手を置いているのが不愉快だ」

と言う訳で、やはりりんごの作戦が思いの他気に入ってしまったのかドアを開ける（頭取が確認済み）。

と、そこにあっただのは、

「ああ・・・もう、お嫁に行けません」

気が弱った鶴ヶ谷がメイド服では無い、ただの可愛らしい少女にへ



と変身していた。

体調を崩して微妙に弱っている鶴ヶ谷はものすごい衰れで、それ故に妖艶に見えてしまった。

例えるなら時代劇に出てくる貧しい病人みたいであった。借金取りに家財道具を持つていかれるような感じだ。

「こ、これは！」

「……確かにこれは実に妙な気分になるねえ？」

入ってきた男性陣に女子たちは少し怪訝な眼差しをビシバシを受けられるが、それを受けられても尚見してしまう程に今の鶴ヶ谷は無防備過ぎて、男たちの胸の中に眠っている狼が騒ぎ立つ。それまでにメイド服という翼を剥がされた鶴ヶ谷（ツル）は蠱惑的なのだ。

「あ、朝ご飯用意できましたっす。熱いから気をつけてくださいっす」そんな鶴ヶ谷に現（うつつ）を抜かしていた亮士だったが、すぐに意識を戻して朝食を鶴ヶ谷の前まで持ってくる。

「それでは赤井さんと大神さんはおつうさんがする筈だった清掃を、浦島さんと竜宮さんは洗濯をお願いします。私と頭取は買い物に向かいます」

やはりメイド長よろしくアリスが指示を出せば、皆すぐに配置に付いて行った。

残ったマジョーリカとガウエインにアリスは顔を向けて、

「それでは黒軋さんと魔女さんにはおつうさんに朝食を食べさせるお世話をお願いします」

そう言つてアリスは亮士が持っていた朝食をガウエインに渡してそそくさ居なくなつた。

「……では」

そう言つて動き出した執事ガウエイン。真面目なだけあり鶴ヶ谷の隣まで移動すれば朝食であるお粥（かゆ）をスプーンで掬（すく）い、

「……」  
食べさせようとして一時停止のガウエイン。

このままでは熱いのではないか？

そう思つた瞬間、ガウエインはマジョーリカを見た。するとナイス

なタイミングで何をやらせるのかジェスチャーで伝える。

マジョーリカはスプーンを掬い上げた動作をやった後、それをスプーンを掴んでいない片方の手で零れないようにしなら口の前に持って行き、口先を尖らせてフーフーと息を吹き掛け、熱を冷ますジェスチャー。

それをやれ、と言わんばかりどや顔のマジョーリカ。

やれ、と言っているのは分かるがマジョーリカの姿は今メイドな訳で、髪を完全に下ろし、綺麗な金髪が床に触れながら可愛いフリー動作をやられてしまつてはガウエインは少しの間惚けてしまう。だがそんな事で元来の目的を霧散してはいけない。

ガウエインはマジョーリカの動作を真似てスプーンに掬われた熱々のお粥に、

「・・・では」

と声を掛けてから勢い良く吹き掛けるようには決してやらないよう、小さく、でも力強い息で早く熱を冷ますよう吹き掛けた。

だがマジョーリカがジェスチャーをしていた中ずつと見ていた鶴ヶ谷がまさかガウエインがやるとは思わなかったのか慌ててしまう。

「そつ、そんなことまでさせるわけには！」

「(フーフー)」

ガウエインは至極真面目、というより無表情に近い顔ながらも聞く耳持たずに続行。

「よし」

そして一人納得して、スツと真面目な眼差しで『出来たぞ』と伝わり、鶴ヶ谷はまたしてもたじろいでしまう。

「あ〜んだヨ〜♪」

横からニコニコと微笑んだままマジョーリカが鶴ヶ谷に食べるよう促す。

「だ、だから・・・」

「あ〜んだヨ〜」

差し出しているのはガウエインなのだが何故かマジョーリカが頑張って促している。

ふと鶴ヶ谷がガウエインに目を向けると、さっきまで意気揚々にしていた眼差しが急に光を失っていくかのようにテンションが下がっているのに気付く。

そんな初めて見たガウエインの反応に思わず鶴ヶ谷、折れる。

「……………あ〜ん」

ぱくりとスプーンに食いつく鶴ヶ谷。

それを一部始終を見ていたのは……………

「どうですか？ あの騎士と姫の禁断の恋模様……………的な光景は」

「う、うらやましいっす、おれも涼子さんといつかー!!」

りんごと亮士が隙間から覗いていた。

「ぬっふっふっふ！ お前から暇してるのかヨー」

その様子をマジョーリカが発見し、不気味な微笑みを送らせれば『ヒイツ!』と二人共背筋を震わせてからそそくさ居なくなる。

そんなこんなで鶴ヶ谷の受難の一日は過ぎていった。



午後六時、夕方である。

「今日は何から何までお世話になり、ありがとうございます」

部屋には元気になった鶴ヶ谷が元のメイド服に着込み、腰を下ろし、頭を下げて感謝の気持ち伝えていた。

「このご恩は絶対にお返しします」

やはりか、とガウエインは一人苦い顔をしていたが、御伽銀行メンバー全員が顔を合わせて頷いていた。

マジョーリカがガウエインの腕に掴み微笑む。

「えーコホン、そうは言いますけどこれだけやってあげましたのよ。

もう幾ら返しても返しきれないんですのよっ。」

「それでもお返しします！ 皆さまお一人ずつ御納得頂くまで……」

「だったらオレたちは、またその分恩をお返しするぜ」

「えっ？」

「そりやあ良い、俺もだ」

「私（わたくし）も」

「私もです」

「お、おれもっス」

「右に同じョー！」

「もうこれは多重債務者って感じだねー？」

大神を筆頭に、浦島に乙姫、アリスに亮士、マジョーリカに頭取とフツフツと笑みを浮かばせながらそう言う。

「みなさん……では、わたくしはどうすれば……」

と、そこでマジョーリカに背中を押され、前に出るガウエイン。鶴ヶ谷は恩返しの対象でもあるガウエインに目を向ければ、彼が真剣な様子になっっている事に気付く。

そして答える、鶴ヶ谷の問いに。

「そんなもの簡単な事だ。貸し借りなんて気にしなれば良い」

「そんなこと出来るはずがありません！」

鶴ヶ谷が叫ぶ。

「だって、だって……恩を返せるときに返しておかないと、返せなくなっちゃうかもしれないじゃないですか!!」

そこまで叫んで鶴ヶ谷は我に返る。

その鶴ヶ谷にガウエインは言う。

「……俺はおつうが恩返しに拘（こだわ）っている理由を知っている」

そうなのだ、鶴ヶ谷本人からガウエインは聞いていた。とても悲しそうな表情で話していた鶴ヶ谷の顔がまだ鮮明に覚えている。

その悲哀に満ちた顔が、また今の鶴ヶ谷に染められる。

「……そうです、ガウエインさまは話を聞いて、わたくしの気持ちを分かっていただけではないですか？ わたくし

は恩を返せなかった、だからこそ恩を感じたら恩を返すようにしているのです」

それが鶴ヶ谷が恩返しをする人間をサポートする時に繋がる根源だった。

恩を返せない、返す相手が居ないのはとても辛くて悲しいこと。

鶴ヶ谷は表情を陰に落とす。過去を思い出しているんだろう。

「だから……だからこそわたくしは返せるうちに恩を返そうと……お兄ちゃんに返せなかった分まで……」

それでもその悲しみを振り払うようにして、鶴ヶ谷は気丈に言った。

しかし、ガウエインはただただ冷静に鶴ヶ谷と視線を合わせるように腰を落とす。

そして、ガウエインは思いのままに口に出す。

「……俺は、おつうが好きな『お兄ちゃん』の変わりになれない」

ガバツと鶴ヶ谷は目を見開きながらガウエインを見る。

『お兄ちゃんに返せなかった分まで……』とおつうは言うが、そのお兄ちゃんはこの世にはもう居ない、だから恩を返す相手が居ない」

恐らくガウエインだからこそ言える言葉かもしれない。

他の人が言えば多少とも暈（ぼか）したりするかもしれないが、ガウエインはただただ真っ直ぐに言う。

「恩返しをする相手が居ない事によっておつうは苦しんでいる」

「いいえ！ わたくしはっ！」

「苦しんでやっている訳では無い、そう言いたいんだろう？」

鶴ヶ谷の言葉はガウエインの舌剣（ぜっけん）で切り伏せられる。

「現実（いま）を見ろ」

まるで現実から逃避する者に対しての絶対的に逃がさない言葉。

震える鶴ヶ谷にガウエインは確りと両肩に手を添えた。

「現実（いま）を見れば、未来（さき）も見える。現実ではお兄ちゃん  
は居ないだろう・・・。。。。。。」

「そう言つてガウエインは後ろを向けば、一斉に微笑む御伽銀行メン  
バー。」

「そのお兄ちゃんも、きつと恩を返してもらいたくて助けたんじゃない。  
い。理屈じゃないんだ」

自分だつてよく分からない、でも口から紡がれるその言葉が、妙に  
自分勝手に満たされる。

「俺たちは仲間だ。仲間なのに恩を持ち出すなんて例えが出てこない  
位に聞いた事が無いな」

今自分はどんな顔をしながら鶴ヶ谷に喋っているんだろうか。

「なのにおつうは恩を返すと言う。恩人と恩を返す人の関係は対等  
じゃない。まあ当たり前だろうな、確実に恩人の方が立場が上だ」

でも、きつと伝わってる筈だ。

「仲間なのに、対等な者同士なのに無理に恩返しなんてしなくて良い  
んだ、ちよつとした小さな範囲でも良い。自然に感謝の気持ちを伝え  
れば良い・・・。。。。」

鶴ヶ谷の瞳に、

「こんな華奢な身体をしてるのに、倒れるまで恩返しするなんてもつ  
てのほか、問題外だ」

「でも・・・。。。。」

「でもじゃない、でもじゃないんだ。俺たちは仲間だ。別に俺たちに助けられても恩を感じる必要もないし、恩返しをする必要もないんだ。もう一度言う、俺たちは……『仲間』なんだ」

綺麗な雫が溜まっていたから。

鶴ヶ谷はガウエインから伝わる真剣な言葉と意思に、自然に心に沁（し）み渡った。

———そうか、恩返しとか言ってるうちはこの人たち、黒軋ガウエインという人物とも本当の仲間になっていないってことかもしれない。いや、この黒軋ガウエインという人や御伽銀行のみなさんは仲間だと思ってくれているのにわたくしだけが、みんなを仲間だと思っていなかった。

この人たちは恩を着せようなんて全く思っていなかったのに、わたくしが勝手に恩を作り出して恩人として扱い、みんなを仲間扱いしていなかった。

なんて……なんて馬鹿だったんだろうか。

それなのにこの人たちは、この黒軋ガウエインという人はわたくしなどのことを思い、諭してくれた。

この人たちはなんて温かいんだろうか。

自分の馬鹿さとガウエインたちの優しさに目を潤ませていた鶴ヶ谷を逸早くマジョーリカが目敏（めぎと）く声を出す。

「あー！ 泣かしちゃったヨー」

「女泣かしは大罪ですよ騎士先輩♪」  
「だな」

「そうなんスか涼子さん？」

「女を泣かすなんて最低だ」

「えっ、あ、そうですね、女性を泣かすなんて……いけませんよね」

「もしもし太郎様？ 何故冷や汗を流して居られるのでしょうか？」  
「そうですね、女性を泣かすのはどうかと思いますよ。ねえ頭取？」

「いやいやいや、大変だねえ、ガウエインくん？　アハハ、アハハハ」  
好き放題に言ってくる仲間たちの言葉も何処か温かく感じられた  
鶴ヶ谷は、不意に目に溜まっていた雫が払われる感覚を感じる。

ガウエインが指で涙を拭いてくれたのだ。

感情の無い顔に見える表情だが、何処か嬉しそうに見えたガウエイ  
ンの顔に鶴ヶ谷は思わず涙をまた流して微笑む。

恩を返すなんて理由じゃなくて、

ただ仲間だから、

気に入っているから、

好きだから、

特別だから、

親友だから、

気が合ったから、

家族だから、

楽しかったから、

やっぱり好きだから、

例を出すならこんなにもそんな風に助け合えることがある。でも  
ほら、皆が笑って幸せになっているこの現実（いま）も、きつと笑い  
ながら未来（さき）を見て飛んでいく。

鶴は足枷（ワナ）から抜け出して、純白な翼でやつと空へと飛翔し  
た。

おそろくきつと、鶴を助けた青年も、空から見守り、風で笑った。



## 第18話 「兎と亀の時ならぬ争い」

『争いからは何も生まない』……そう断言出来るかな？ 断言出来ると言うのなら、戯言では無いと言い切ることが出来るなら！ ましてや哲言や世迷い言などでも無いと大きな口を開けて発言出来ると言うのなら……是非、このマスクでナイスな《仮面副会長》の前に出てきて欲しい！』

「……………」

『否ッッ！ 戦争とは確かに憎悪嫌悪を生むシステムに等しい、だが、その戦争で醜くも人という愚直な生き物は新たな“モノ”を見出すものさー！』

「……………」

『だがね、愚凶愚凶な争い程醜いものは無い』

「……………」

『争いを長引かせれば、引き摺ることも長くなる。まったく愚直な生き物だね、人間様は』

「……………」

『でも……愚直だからこそ人間は愚者（バカモノ）になれる』

「……………」

『皆がバカになっちゃえば、バカなことやってバカ騒ぎしてれば良い。そうすれば争いなんて無くなる筈さ……』

「……………いい加減無視されてるって自覚持つて下さい副会長」

開始からずっと語り口を振る舞っていたのは、この御伽学園高等部の『生徒会』に所属し、副会長位に着いている奇抜な格好姿のマスクマンだった。

姿は前回と変わらずの目無し口無し鼻無しの『無』を象徴しているような漆黒の仮面。

身を包む程に広く靡（なび）いている黒いマント。

改造学生服には程遠い西洋に模したような服。

とにかく子供には受けそうな格好だ、特に日曜の朝とかに。

そんな奇抜な格好を恥ずかし気無く着こなし、しかも芝居染みた発言ばかりしているこの副会長には、いつの間にか昼休憩にやってきて話し掛けられ、一時間くらい語られていた黒軋（くろきし）ガウエインはうんざり〴〵したような〴〵表情を作った。

『いやあくやつと喋ったねガウエイン！ わざわざ二年生の教室に来たのというのに、君はずつと本に夢中だねえ〜！ 何読んでるのを見せてみッ！』

「くっ！」

ガバツと子供のように相手の物を奪う動作をやる副会長に、ガウエインは顔は無表情なのに目が面倒くさっ！ と言わんばかりに光が伏せていた。

と、そこに、

「ぬおおおオ!!? そのガウエインとじゃれつく立ち位置はオレのハズだああああああああ!!!!」

『おおおう!? トリスタンか!?!』

(また面倒なのが……)

ガウエインが居る教室に入るまで、至極普通な状態だったトリスタンだったのだが、ガウエインとじゃれあう副会長に目が入った瞬間、何を焦ったのか全くもってガウエインは知らなかったが、急いで間に入ってきた。

ガウエインは人が良いからなのか、はたまたただ介入・関心・関係を築きたくなかったのかまた副会長とトリスタンのやり取りを片手にある文庫本を読みつつ、静観していた。

そうしていると、御伽学園二年生棟廊下から何やら騒がしい声が聞こえてきた。

だがガウエインは野次馬に身を焦がす程今は動きたくなかった。動けば目の前で面倒な奴らが面倒な事を言いながら面倒な動作で迫り来ることを予知したから。

だから、再び双眸が文庫本に羅列された文字に意識が集中し、面倒な奴らが面倒な展開になりかけたのだが、生徒会に所属し、ガウエイ

ンやトリスタンと同じ『円卓の騎士』メンバーでもある白髪長髪の美少女、フェイル・サーベル・ド・ランスロットに介入され、二人に横造剣で正義の鉄槌を食らわせ、平和的に終止符を討った騎士にガウエインは感謝を念を送る。

感謝されたフェイルは小さくも可愛らしく『ふんっ／＼／＼』と鼻で返答する。

そして、ガウエインはいつも通りに放課後まで授業を受けて、いつも通りに御伽銀行の地下本店に来てみれば、

「アリスさま、噂の方はどうつていますでしょうか？」

「はい、宇佐見さんエンコー疑惑の認知率が50%を超えました。しかし、敵もさるもの乙姫さんヤリマン疑惑の認知率が50%に迫る勢いです

「これはやるね？　じゃあ、僕は久しぶりに噂好きのよつちゃんにでも変装して噂を振り撒いてこようかな？　腕が鳴るねー？」

「なんですの？　黒板に誹謗中傷(ひぼうちゅうしょう)の落書き？

上履きはずた？　精神攻撃できましたのね。ちつ、やられましたの。ではこちらは、ノートに落書きでいきましようです。あと、画鋏、不幸の手紙、偽のラブレターを筆跡を変えてダース単位で送ることにしてしましよう。ああ、魔女先輩、コラージュの進行具合はどうですか？」

「ちようどできたヨー、我ながらイイ出来ヨー、夜のおかずにピツタリヨー」

「皆さん、お飲み物を用意しました。一息入れませんか？」

(何だこれ)

今のガウエインの気持ちはそれしか無かった。

皆が忙しい中、立ち尽くすガウエインに近寄って来たのは一年生メンバーの大神と亮士だった。

「騎士先輩、今ちよつと凄いことになってきた」

「……両陣営ともに自分を高めずに、相手を引き摺り下ろそうとしているこの状況がこわいっス」

「一体何事だ、これは」

ガウエインが今一番に聞きたいことを後輩に聞く、詳しく大神と亮士が話そうとするが、

「ゆっくりと話すのであれば、上で話した方が宜しいのでは？」

各々に小休憩の為に置かれたお茶に目が入ったガウエイン、メイドな同級生、鶴ヶ谷おつうが差し出したことを理解するが、以前と何か変わったのか？ と問われれば、ガウエインが首を傾げてしまうかもしれない。

だが、ガウエインは今日の前でニコニコと微笑みながら、どこかスツキリしている鶴ヶ谷の表情を見て、やはり何処か変わったのだろうと勝手に自己解釈をする。

そして、地下では何やら怪しい作業をする忙しい仲間たちが変わって、御伽銀行地上支店という名のボロいプレハブ小屋に四人が椅子に座りお茶を啜る。

「おつう、体の方は問題無いか？」

ガウエインは片手でしっかりと湯飲みを掴みながら鶴ヶ谷に聞く、すると鶴ヶ谷は嬉しそうな顔でガウエインに向き合おうと、

「はい、先日は本当にありがとうございます」

満面な笑顔でそう言ってきた鶴ヶ谷にガウエインは『そうか』と答え再びお茶を喉に通す。

「おつう先輩が元気になって良かったっす！」

「ああ、本当にな」

大神と亮士が笑みを浮かばせて鶴ヶ谷の万全な体調に安堵の息を吐いていた。

ではそろそろ、とガウエインは湯飲みを机に置き、対面に座っている大神と亮士に聞く。

「宇佐見と乙姫は元同級生だったのか」

「いじめっ子といじめられっ子だったみたいっす」

「そんでその宇佐美つつう先輩が乙姫があんなに綺麗になったもんだから面白くない、だからケンカ勃発、そこに御伽銀行便乗と」

「乙姫さまからも依頼がありましたので」

話の内容からすると、竜宮乙姫が小学校を通っていた際に、容姿と

行動、性格が転じてしまったのか渾名を『亀子』と呼ばれいじめられていたらしい。

だがそのいじめっ子の宇佐見美々（うさみ・みみ）は、美人でお淑（しと）やかで気だてが良く頭も良くスタイルも良くお金持ちで全身全霊で愛してくれて床上手の竜宮乙姫が大変気に入らないらしく、やはり突っ掛かってきた宇佐見。

二人は青筋浮かべたままひとしきり笑い合ったあと、二人は挨拶をして別れたらしい。

「昼間か、確かに廊下で何か騒いでいたが……」

「ふふふ、ガウエインさまは確かまた『あのお二方』とお話をしていましたね」

「……ああ」

「……？……『あのお二方』？」

大神が疑問に思っただけ聞いてみると、ガウエインは少し疲れたような顔になり、代わりに鶴ヶ谷が教えてくれる。

「トリスタンさまと副会長さまです」

「ああ、この前廊下でフェイル先輩に怒られてた先輩たちっすね」

妙な覚えかたをしていた亮士にガウエインは苦笑のような表情を浮かべた。

「そのお二方のせいで見には行けなかったが、そうか、そんな事になっていたんだな」

ガウエインはお茶を再び飲む。

飲む時に少し湯飲みと首を傾けないといけないので視線が一瞬机から離れるのだが、その一瞬の間にさっきまで無かった和菓子が綺麗に揃えて机に置かれてあった。

恐らくメイドパワーを発揮させた鶴ヶ谷が用意したらしいが、速業過ぎる。

何処かの大会にでも出場できるのではないかとガウエインが思っていたら、相変わらずな速業を繰り出した鶴ヶ谷に何か対応が出来たのか大神が何食わぬ顔で和菓子に手が伸びたまま口を開く。

「それで乙姫は、宇佐見の性格が褒められたモノじゃなく、自身の容姿

に驕り、容姿のみで他人を判断し容姿の劣る者は見下す、そんな自分の手を汚さず人を使って他人を貶（おとし）める宇佐見に負けたくない……この饅頭茶色過ぎねえか？」

「いやそれが本来の饅頭の色っスよ……乙姫さんは宇佐見先輩がある意味、過去の象徴と言ってたっス」

「今の乙姫さまは『亀子』では無く、浦島さまに相応しいと自負できるほどに成長したと仰っていました」

和菓子に手にして大神がふと思ったことを口にしてみれば亮士がちやんと答え、大神に続くように話の内容を話す。鶴ヶ谷は無くなつたお茶を淹れる為に急須を両手で持ち、各々に淹れる。

「……まさか、『貸し』を作ったのか？」

「あ、いえ『菓子（かし）』は流石に作るのに手間を掛けてしまいますから、街の方の御伽花モールで和菓子と洋菓子をそれぞれ購入を――

「あ、いや違う。お菓子の方の菓子じゃなく、借りる方の『貸し』だ。おつうよ、ダジャレじゃないぞ？ 涼子も亮士も頑張つて笑おうとするな」

横で急須を微睡（まどろ）み無くお茶を淹れていた鶴ヶ谷に反応され、まさか鶴ヶ谷がそんな返しをしてくるとは思つて居なかつたらしくガウエインは思わず狼狽。

御伽銀行に貸しを作ったのは流石に驚いたガウエイン。

この御伽銀行の、御伽学園学生相互扶助協会の貸しについては働いている行員が一番良く分かる筈だ。

《御伽学園学生相互扶助協会は慈善事業な団体では無い》

慈善事業ならば決して見返りを求めない聖者様になるだろうが、銀行の名を持つものだから聖者になる筈がない。

ちゃんとした対価が必要なのだ。

ガウエインが所属する御伽学園学生相互扶助協会は、その業務形態が故に《御伽銀行》という通称を持っている。

改めて説明するなら、御伽銀行の活動内容は、困っている人間に力を“貸し”を作り、御伽銀行並びに御伽銀行への依頼者が助けを必要としたときは“貸し”の徴収の名目で以前助けた者に助力を願う。貸しを貯め情報を蓄積し、必要なときに必要な人にそれを貸し出すことで助け合いを仲介斡旋（ちゅうかいあっせん）し、学生が学園生活をなんの愁（うれ）いもなく送れるよう手助けする組織。

それが《御伽銀行》なのだ。

御伽銀行は御伽学園創立者、荒神洋燈（あらがみ・らんぷ）の小飼いで、この御伽学園を愉快で楽しく混沌とした世界にするために貯めた貸しを使って暗躍する組織でもある。

御伽学園学生相互扶助協会の初代・頭取はその御伽銀行の威名（いめい）を掌を転がすように、御伽銀行という名を威風堂々と馳せさせたらしい。

貸し借りというシステムが「最悪」なこと到大変得意だったのか、初代頭取は荒神洋燈に大変気に入られ、今現在は荒神財閥で働いているらしい。

「それで引き受けたのか」

饅頭を二人で食べ、甘味に合うお茶の啜りながらコクリと頷く。

基本的に請け負った者が依頼を解決することとなっているため、乙姫たちと同学年である一年生メンバーの大神と亮士、そしてりんごが請け負ったらしい。

だがあの様子からして、「事態が大きくなったら他学年のメンバーも力を貸すと聞いているが」

地下で見た頭取やアリス、マジョーリカが奮闘していた姿にガウエインは溜め息を吐く。

「あの強力体勢を見ると、宇佐見に勝つ何かがあるらしいな」

そうガウエインが言うと、

「はあ、何か今度のミス御伽学園コンテストという催しがあるじゃないですか？」

「まさか」

「そのまさかみたいですよ、ミスコンで宇佐見に勝つ、それが今回の依頼みたいで」

基本的に学期ごとに行われるミスコンが一学期も半ばというこんな中途半端な時期に行われることになったのは……

「この中途半端な時期になった原因っていいのは——」

バアンツ！

「この僕のせいさッ！」

お茶をしていた四人が居るプレハブ小屋に、突如ドアを勢い良く開き入ってきたのは、

「白馬王子ッ!?!」

そう、入ってきたのは以前大神を誘拐しようとして試み、失敗に終わった白馬王子だった。

だが、白馬王子なのは王子だったのだが、

「だ、誰だ?」

そうなのだ、今の王子は誰がどう見ようと、

「……そうだよ、僕は白馬王子だ!」

世間一般的に野球部やらが主に進んで散髪してもらおう「スポーツ刈り」。

いやそれ以上なのか数ミリ単位の坊主頭になっている白馬王子が恥ずかし気も無く仁王立ちしていた。

自分は王子だ! とそう言った坊主頭の好青年は真面目な顔になって大神や亮士、そしてガウエインや鶴ヶ谷たちが座っている前まで来れば、ザツと腰を下ろし、頭を床に付ける勢いで土下座する王子。「大神さん、それに森野亮士くん……本当に、本当に済まなかった!!」

いきなり過ぎる白馬王子の行動に大神と亮士が啞然としている中、



ガウエインが反応する。

「頭取やアリス先輩、そして特にりんごが流した王子の恥ずかしい写真、悪行をばらまき、拉致事件も含め『裏』に繋がる事も全て御伽学園に垂れ流しにされても尚、学園を辞めなかった白馬王子が一体どうしたんだ?」

土下座をしているのだからどんな意味を示しているのか誰でも分かる行為だったのだが、やはり突然過ぎる登場と行動で頭の整理が追いつかない後輩と同級生の為にガウエインが説明染みた言い方をすると、王子は土下座をしたまま口を開く。

「僕が仕出かしてしまった罪の贖罪を改めて御伽銀行に申し立てしようと……ここに来た」

未だに口を開き啞然としている被害者の大神涼子に王子は決して面（おもて）を上げず、侘びる姿勢を崩さない。

「御伽銀行に……いや、大神くんに贖罪したい」

そう言つて土下座の姿勢を貫く王子に、ガウエインに視線を向けられてやつと意識を取り戻した大神がやつと声を出す。

「やり過ぎだろツツ!」

「いいや、そんなことは決して無いよ」

「いやでも、おまつ……頭が」

まさか真正面からこんな方法を現代でやつてくるとは思わなかった大神だったが、やられた本人より大神を大切に想う亮士やりんごからすればまだ軽い許しの乞いだらう。

だが大神は基本は『優しい少女』なのだ。

過去の事もあり今はこんなだが、きちんと反省の意思と覚悟を持ち、隠蔽一つもしないで謝りにきた王子と、学園から受ける邪険な眼差しを真正面から受けても尚学園に居続ける王子にもう正直大神は許すも何も、逆に同情してしまうという結果になっていたのだ。

「……ミスター御伽学園コンテストのランキング堂々一位の白馬王子が、坊主刈り……か」

どれほどの覚悟だったのだろうか。

マンモス校とも言える御伽学園で男子ランキングの一位の男が、ボ

クシング部高校チャンピオンの男が、自分のプライドを何より重んじてきた男が丸坊主にしてきた。

そして土下座までしている。

りんごからすればまだ序の口とまでいかない位に怒っていると思うが、この覚悟は相当な物だと、勝手に一人の人間としても、一人の男としてもガウエインは思ってしまった。

「赦して貰えるとは思っていないよ……これは僕の勝手な自己満足、そして君に返したい贖罪だ」

赦して貰おうなどと忸怩（じくじ）たる思いで言っただけではない。そんな面持ちで王子は土下座から立ち上がり、

「君の許可無く土下座を解いた事に謝る、すみません。だが何時までも君の前でやっていては不愉快になるだろうし、御伽銀行の邪魔になるだろう……」

最後にまた深く頭を下げ、謝罪していった白馬王子は御伽銀行地上支店から出て行った。

そして数秒、

「……何だったんだ、今の」

「……謝りにきたんす」

「いやそれは分かる、分かるが……」

「涼子は……」

大神が軽い混乱のまま亮士に聞けば、亮士も混乱したままでありのままの事を告げる。

二人がまだ混乱しているままだった為にガウエインは湯飲みに入っている緑茶を眺めながら仲介者よろしく言葉を吐く。

「涼子は今、白馬王子が呵責（かしゃく）に……責め苦しむことを望んでるか？」

勿論、返ってくる返事はガウエインは知っている。

NOだろう。

だがガウエインはまだ続けるように紡ぐ。

「お前は望んでいないだろうが、悔恨（かいこん）に打ち据えている者もいる。」

拉致されそうになったのだ、被害者は批難する資格があるだろう。「宇佐見の話もそうだが、『やる側』と『やられる側』……白馬王子と大神涼子、宇佐見美々と竜宮乙姫——」  
そして、ガウエインからすれば『両親』と『子供（ガウエイン）』だ。

「許すか許すまいかは、やはり被害者が決めるしか無い。そして決めても尚、憂慮する者も居るだろう」

「憂慮……心を痛み嘆くことですね」

鶴ヶ谷は真面目な顔をしてガウエインの話に聞き入っていた。

もしかしたら、鶴ヶ谷はその憂慮する者を知ったのかもしれない。

ガウエインも先ほど知ったのだ。その『憂慮する者』を。

「罪を知って、後悔するって事っスか？」

静かに、そして僅かに頷くガウエイン。

断言する事は出来ないが、そうなんじゃないか、と顎先だけで示す。

「涼子も乙姫も許すか否か、それは本人次第であり、やった側である白馬王子や宇佐見美々が後先に憂慮するの否かは、やはり本人次第」  
大神は拉致され掛けた時に、一度は殴ったのだ。それだけで本のちよつとだけ満足したのだから許すかは否か大神が決める。

乙姫はやはりあの自分の容姿を驕り、己の手を汚さず他人を使役し貶めるあの性格が改善されるまでは許さない、と断言しているしやはり本人が決めている。

そこでガウエインは一人立ち上がり、

「つまりも何も、在々所々（あっちこっち）も、後先にも、『本人』が結局決めると言うことを伝えたかっただけだ、こんな面倒な言い方になつてしまったが……」

長身なガウエインは湯飲みに注がれた緑茶を飲み干し、御伽銀行地上支店から出ていこうとしていた。

「何処に行かれるのですか？」

鶴ヶ谷がガウエインが飲み干した湯飲みをお盆に乗せながら行き先を尋ねる。

ガウエインは黒い髪と制服であろう黒コートを見事にマッチさせ

た出で立ちでプレハブ小屋の少々壊れてるドアを開きながら答える。  
「白馬王子が気になる、それにお互いに妨害仕事を勤しんでいる人たちにとって俺たちはあまり必要としないと思う……から困ってる者が居ないかパトロールしてくる」

他にもきつとやりようがあると思うのだが、この黒軋ガウエインは『それは悪のやることだ！ 正々堂々切磋琢磨し、己が実力で勝ちにいくべきだ！』と言おうものならきつとやる事は決まってる。

だが生憎とそこまではガウエインも関わりようとは思わなかった、それにそんな言葉を吐ける者など人間の『愚』を知らぬ若者の戯言に決まっている。

ガウエインは幼少の頃から人間という生き物は、愚かしく、醜悪で醜態、穢らわしいにも程がある生き物だと「理解させられたのだ」。

人は醜さを見たが故に麗しさを求める。

『普通』なら汚い所に居たいとは思わないだろう。

掃除せず虫という虫が蠢き悪臭好む生き物が犇（ひし）めくゴミ置場で寝ろ、と言われて寝る奴が居るだろうか？

好んで寝る者はきつと少ないだろう。

ガウエインは何処まで行っても、結局はやはり汚くなりたくないだろう自分も含め、人の子らは「堕ちきれない」だろう。

綺麗好きが良いのだ、結局。

だからガウエインは汚くなってはいるが醜くはならないだろう御伽銀行メンバーのやりように何も言わない。

でもせめて困ってる者の助ける、という綺麗好きなことをする許可が欲しい。

誰に許可を？

頭取に？

違う。

「結局『ソレ』も逃げだ。

自分だけ逃げてるだろ？ 許可を許した者に責任を擦り付けたいだけだろ？ と言われればそうなるだろうが、はつきり言っておれば頭取たちが始めたことだとガウエインは推測し、今御伽銀行地上支店の前に広がる場所で立っていた。

後ろを振り返る。

「……………」

見事に大神、亮士、鶴ヶ谷と三人が一緒にガウエインの後ろに構えていた。

構えていた、となっっているが実際は立っているだけ、だが何故立っている？

答えは簡単だ。

「ついてくるのか？」

コクリと三者共に頷かれてしまったガウエイン。

「……………」

溜め息を吐く事もなく、喜怒哀楽のどの顔にあてはまらない無なる顔のままガウエインは黙然のまま数分。

ガウエインはスツと前に歩み出す。

すると大神たちもやはり歩を進む。

(まあ……………良いか)

ガウエインは数分黙ってままだいたのは、一人である白馬王子と、王子近衛騎士である狂いに喜色を彩る《パーシヴァル》と破壊つ娘《モルドレット》に会いに行こうとしたからだった。

絶対に危険だから連れていけないと思っていたのだが、あの白馬王子からして恐らく自制は出来るであろう、恐らく自制が利くだろうと願いたい騎士二人に思いを馳せて。

「王子の所に、行くか」

騎士は『仲間』と共に歩を進む。

異質な『仲間』なのに、馴染み深い。

私は強いと嘘の皮を被る優しい異質な狼少女と、

狼少女を恋い焦がれ、心配する異質な猟師。

そしてその騎士と狼と猟師を優しい温もりの風を扇ぐ白翼の異質

(メイド)な鶴。

騎士は異質でありながら頼もしい『仲間』と共に、

贖罪求む王子の元に向かう。

譬(たと)え狂った騎士が居ようと、

譬え壊れた騎士が居ようと、

やはり歩みは止めない。

## 第19話 「白馬の王子さまと奏でる間奏曲」

### 『白馬家』

この家名を聞けば御伽花市に住んで居られる住民たちは『ああ、あの家の・・・』などと呟き、詠嘆の声を漏らすだろう。

荒神財閥という大手企業が手を加えている市街地で、『荒神』以外にも名門中の名門の名家が御伽花市に多々住み渡っていたのだ。

その氷山の一角が『白馬家』である。

「随分と・・・削ぎ落としたようだろう・・・王子や」

そう呟いた場所は、宮殿と思わせるような建物の中。

映画などで使われていそうなセットの一面が今正に目の前に広がっている。

その宮殿に横してあるある紅いカーペットが敷かれた豪奢な階段に、一人の老人が杖を支えに立っていた。

白みが掛かり、だが少し金髪だった事を残すように黄色い髪がちらほらと見える髪。

歳相応の垂れた肌に、曲がった腰。

だがそれが揃った所で、この老人には何処か『他者を寄せ付けぬ雰囲気』が纏っていた。

頑として相手を舐めさせず、獅子の如く相手を怯ませるような眼力が今、その老人から放たれていたのだ。

“白馬汪馬”

それがこの老傑の名だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・黙りかのう、あの聡い王子がが随分と愚鈍な対応方を覚えた

ものだ」

「・・・お祖父（じい）様、僕は・・・」

カンツ!!!

白馬家の老傑たる汪馬は手にしていた杖を重く、そして揺るぎない力で床を突いた。

突いたことによるその鳴動が王子に、白馬王子（はくば・おうじ）の耳に届いた時にはもう言葉は掻き消された。

それはまるで『発言することを許さない』ように。

「王子や、この汪馬はお前に『過去のことを申せ』と言ったか？」

汪馬は仇でも見るようなその眼力で自らの孫を見る。

王子は立っていた足が勝手に跪（ひざまず）きそうになりながらも意識を保たせて直した。

それ程までにこの老傑は勇ましさと恐ろしさを放っていたのだ。

「い、いいえ・・・」

「ならば申せ、お前の悔恨など訊きとう無い」

祖父と孫の関係でここまで突け離すことがあるだろうか、そんな事を聯想させる言葉だった。

王子は身を削る思いで開口する。

「僕は、僕が仕出かした罪を贖罪する為に髪を切りました」

「・・・」

「でもそれだけの事で罪を消した訳じゃありません。僕はこれからも罪を償いでいこうと・・・」

「もう・・・良い」

揺るがないように、虚言ではないように、妄言でもないように王子は心を込めた言葉を祖父・汪馬に送る。だが結果は、

「もう・・・良い、王子」

祖父から出た言葉はそれだけだった。

一体何が良いのですか？

もう良いって、一体何がですか？

王子が追うような言葉を漏らそうとするが、

「開くな駄馬がツツ!!」



絶句。

「駄馬(だば)」

それは一般的にも褒められるような言葉でも、況(ま)してや【家族】に向けて放つ言葉じゃなかった。

そして、『白馬家』にとってそれは罵詈雑言によって罵(の)のしられる雨よりも、深く抉り突き刺さる一言(・・)なのだ。

役に立たない馬、下等な馬、覚えが悪く言うことを聞かない馬。

下手すれば乗馬を楽しみ、馬を愛する者にとって最大の悪口になるであろうその言葉に王子は、声が出なくなった。

心臓が早くなった。

鼓動だろうか、何を言われたのか理解出来ない程に脈拍が激しくなる。

「お、祖父、様……?」

王子は階段の上で見下ろす汪馬に視線を向ければ、もう汪馬は王子を「見ていなかった」。

「罪を消していない、だと? 贖罪をしたいだと? よくぞこの汪馬の前で吐けたものだな王子」

「お、じい、」

「黙れと言った筈だ、訊く耳など無い。今更になって罪を償いたいとは、甚だしいにも程がある」

王子に背を向けた汪馬の背に、言葉を吐く気負いさえ殺(そ)がれた。

だが王子は、その後に来た言葉で更に抉られた。

「王子、お前が『築いた人脈のお陰で狼を狩る』のでは無かったのか?」

ガバツと王子は王子を見る。

相変わず背を向けていたが、おもむろに怒りが動く。

「確かにこの、『人脈は力だ』と垂れよっただけはある。鬼ヶ島の孺子(こごう)を巧く利用した。だが、やはり甘いだけの利用だった。利用

するならとことん利用しろ！ 中途半端な利用など愚鈍がすることだ！」

王子は大神涼子という少女を手に入れる為に赤井林檎（あかい・りんご）に陳腐な作戦だと言われたが、中々な作戦だったとも言えたものだった。

「・・・そんな愚策を仕出かした駄馬が、あの荒神（・・・）に頭（こうべ）を下げおって・・・この白馬家の恥さらしがツツ!!」

罵詈（ばり）が王子に劈（つんざ）く、だが王子は学園では見せぬ憂慮の顔になりながら祖父の言葉を受ける。

御伽学園の理事長でもある『荒神洋燈（あらがみ・ランプ）』と、御伽花市に少なからず影響を持つ権力者である『白馬汪馬（はくば・おうま）』は昔からの険悪の仲だ。

そもそもこの御伽花市という市街地さえも『荒神』が関わっているのだ。実質この御伽花市を牛耳っているのは荒神洋燈のただ一人。

それを快く思わない者の一人が白馬汪馬だ。

荒神財閥という突発的な経済力がこの日本（くに）の経済界に少なからず影響を及ぼす。そんな荒神が治める街に何故住み着いているのかと言えば、地元民だという簡単な理由だった。

だから、地元民だからこそ荒神が許せなかったのかもしれない。

あらゆる施設を建設させ、自然を焦土にしたあの荒神洋燈（おとこ）が単純に許せなかったのか、家族であり昔から一緒に居た王子でさえその真実は分からないでいた。

分からないでいたからこそ、理解しようと王子も努力してきたのだ。

どれだけ罵倒されようと、どれだけ駄馬扱いを受けようと、王子は高みの為に日々ひたすら努力を勤しんでこれたのだ。

王子の努力の理由の一つが【祖父の考えの理解】だった。

だが、王子にも耐えられないものがあつた。

ある意味、王子の趣味の悪さなどはこれに教唆（きょうそう）されたのかもしれない。

耐えられないもの、それが、

「ふん……これもあの『雑種の血』のせいかな?」

「……」——「ツツツ?」

ドツツン!! と王子の中で何かが爆発する。

「『雑種の血』……です、って……?」

「何だ? それとも『薄汚れた血』と解りやすい言い換えれば良  
いかな?」

「止めろっ!!!」

さつきまで身を震わす程にあの老傑の悍(おず)しに当てられてい  
た王子の姿は無く、ただ怒りだけに身を震わせた。

「母の侮蔑(ぶべつ)は許さない!!」

耐えられない理由、それは汪馬が王子の母、つまりは娘の罵りだっ  
た。

そして汪馬の発言から、自らの娘ならば高貴な血統等と言うだろ  
う、だがはつきりと汪馬は言ったのだ『雑種の血』と。

孫の食付きに汪馬はやつと振り向いた。

老傑、それはあの豪傑(ごうけつ)な文武を兼ね備えた者が老いた  
だけの者に付けられた称(しょう)だ。

その老傑の眼力が王子を捉える。

「ほう……止めろと、嘶(いなな)くか?」

まるで『ならばどうする?』と挑戦的な眼差しで王子に送る。

王子が出した答えは糾弾を浴びせることでも無い。

ただ黙然と祖父を視る。

眼(まなこ)に秘める思いを伝えるかのように、

「……」

「……」

互いを視る、否、睨み合う(……)。

長い時間が過ぎるように、黙然と互いを睨み合う二人は、直ぐに持ち  
直した。

老傑たる白馬汪馬は王子を一瞥し、

「ならば、『雑種の血』では無いのならば証明すれば良からう。この汪馬の耳に、目に、口で吐かせる。お前が『雑種の血』では無いと……」

耳に、つまりは聞かせろとこの老傑は言った。

目に、つまりは見せてみるとこの老人は言った。

口に、つまりは言わせてみるとこの老馬は嘶（い）ったのだ。

「言わせてみせますよ、暈（ぼか）すこと無い潔白な真実で、お祖父様を嘶かせてもらいます!!」

王子も最大の意思を込めた眼差しを祖父に送れば、それを正面から受けるように汪馬は『聞いたぞ、確かに』と呟いてその場から居なくなった。

居なくなった祖父に安心か、それとも怒りか、何物でもないその不慣れな感情に王子はその場構わず床に座る。

座り、そして数分経った後に頭を触る。

「……削ぎ落とした、か。いいえお祖父様、落とさきれてませんよ」

それを呟いた王子は、端麗な顔付きに、憤りと悲しみが沸き上がる。

（大神涼子、あの娘がいけないんだ、あんな、あんな娘が居たから）

心の内だけでも零す、零したくてしょうがない。零さないと破裂する。

だけどそれは許されない。

反吐（ヘド）が出るような行為を行なったのだから。

「……………」

王子は立ち上がり、ある場所にへと向かった。

※

白馬家は数ある屋敷のいずれかもまるで中世ヨーロッパに聳（そび）える城と思わせる建物だ。学園都市として御伽花市を築き上げた荒神洋燈さえ、このような建物は建設しなかったのだが、汪馬が挑発するように建てたのだ。

そんな大きなお城から出てきたのはこの家主の家族にして跡取りたる白馬王子だった。

その王子の後から従うかのように、いつの間にか歩いていた『円卓の騎士』パーシヴァルとモルドレットだった。

「王子……行く所があるのか？」

そう声を掛けてきたのは紫色の髪が目立つ男、パーシヴァルだった。

「……ああ、ちよつとね」

そう呟いた王子に桃色をした髪をサイドポニーにしてある少女、モルドレットが心配そうな表情をしていた。

それを見た王子は、今までその小さな背中を守ってきた勤労騎士の頭に掌を乗せる。

「大丈夫だよ、モルドレット。……ああ、済まないパーシヴァル、群馬（ぐんま）に車の手配を頼むよ」

微笑んだ王子に、どこか陰りがあるのを気付くモルドレットだったが、王子はそれを気にせず、パーシヴァルに車の手配をすることを告げる。

モルドレットは頭に乗せられた掌から暖かさを感じられた。

その掌に、モルドレットの掌を合わせる。

「……？……モルドレット？」

「……大丈夫」

「えっ」

「……王子は、一人じゃないよ」

そんなモルドレットに王子は啞然としてしまう。急に言い出したことだったから、とかでは無く。あの何事にも余り興味を示さなかったモルドレットがそんな事を言ったので王子は困惑した。

だがそんなモルドレットの言葉に、王子は嘘偽りの無い、本当の笑顔で、

「まるで漫画みたいな決め言葉じゃないか」

「……たしかに」

「でも……」

「う……ん？」

「何処か、スツキリしたよ」

そう言つて王子は昔からモルドレットにやっていた【遊び】をする。撫でていた掌をモルドレットの小さく小柄の顔まで移動して、そして顔のパーツの一つである鼻を摘まむ。柔らかくてプニプニしているモルドレットの鼻を摘まんだ王子は、思わず昔のように可笑しくしてしまうがなくなる。

ほら、そろそろだ。

王子は暫し固まって、というより余り反応を示さないモルドレットが反応するタイミングを見計らい、鼻から手を離す。

「ふひゃ……」

口から息をすれば良いものを、モルドレットは正直に鼻を摘まんだと同時に口も閉じるのだ。そうなつては息が出来ないのが原理なんだが、それを一寸忘れてしまうのがモルドレットだ。

モルドレットは鼻を離された際に一気に息を吸い上げる。

可愛い顔で必死に息を吸うモルドレットに王子は笑みを浮かばせてしまう。

そして王子は群馬という昔から王子専用の送り向かい役をしている運転手に行き先を伝え、白馬家を表しているのか白い高級車に乗り込む。

「ありがとう二人、また」

礼を言つた王子が車の発進と共に笑顔を浮かばせていた。

もう行ってしまったそんな王子に、驚きの顔をしているパーシヴァルがモルドレットに問い掛けるが、

「王子が戻るよ、元の優しい王子に」

『殺人衝動』を持つ騎士パーシヴァルは首を傾げ、『破壊衝動』を持つ騎士モルドレットは首を頷く。

優しい、白馬の王子様に。



王子が向かった場所、それは御伽花市にある大きな病院【寓和（ぐわ）中央総合病院】だった。

病院の受付の人とはもう顔見知りだ。

「いらっしやい、相変わらずイケメンね。王子くん」

「……?……よく分かりましたね。髪を切ったのに」

「分かるわよ。イケメンなんだから♪」

イケメン押しをしてくるこの受付の女性とは結構な古い関係である。それは、

「白馬さん、病室で暇してると思うから。行ってあげて」

「……はい」

白馬王子の母が、この寓和中央総合病院に入院しているからだっ  
た。

※

見慣れた病棟、見慣れた廊下、そして、

「会いに来たよ、母さん」

見慣れた病室の背景だった。

変わる事ない病室。

それはつまり「治る兆しが無い」ことを示していた。

王子がなるべく元気な声を出して中に入れば、そこにはとても綺麗な女性がベッドの上で文庫本を読んでいた。

その出で立ちはとても絵になる程に綺麗だった、清らかでお淑やか、そしてどこか安心させてくれそうな優しい眼差し。あの祖父とは大違いな眼差しだった。

そして、もしこの場に御伽銀行のメンバーが居れば一番に驚いたであろう女性だった。

何より一年生メンバー、大神と亮士、そしてりんごは大声を張り上げる程に驚くだろうその女性に。

「ああ、元気にしてたか？ 子馬の王子」

さつきまでであったお淑やかは何処へやら。

他者を余り寄せ付けぬ凛々しい目で清らかさが薄まった顔で王子を迎えた母親は、茶色い長髪が似合う、大神涼子（・・・）と瓜二つの母、白馬愛馬（はくば・まなま）だった。



## 第20話 「オオカミさんと白馬の王子さま、とついでに騎士」

【寓和中央総合病院】

御伽花市にある大きな病院だ。

緊急を要する場合はいつもこの寓和病院に宛てられる。

そんな病院のとあるナースステーションに屯（たむろ）する看護婦たちの何気無い会話に耳を傾ける。

「白馬さんの息子さん、また来たみたいね。高校生なのに大変」

「まあアレなんじゃない？ 学生といっても今のご時世、授業受けなくても大丈夫とか言われる特別カリキュラム」

「ああ、聞いたことがあるけど、それ本当なのかしら？」

「ありきたり〜とか言えないわよ？ 何たって『白馬家』なんだし。ああ〜良いわよね、お金持ち」

看護婦たちの何気無い会話にも聞こえるが、業務的に手を動かしている所は流石であった。会話をしながらも手掌は書類にペンを走らせ、口も手も休んでなどいない。

「はいはいは〜い！ 先輩たち余計な事言つてるとまた患者さんたちに突つかれますよ〜？」

仕事はしているが口が怠けていたのが後輩にバレ、先輩の看護婦たちは『分かっているわよ〜』と口でそう言つて、内心実は確かに危ないな、と焦りを思っていたのか各自担当された病室にへと向かう。

「・・・白馬さん、息子さんの為にも、治さないといけませんね」

そう言ったのはナースステーションに残った一人の後輩である看護婦、受付をしていた女性だった。

受付をする人は義務的に決まっている人なのだが、人員を確保するまで繋いでいたらしい。

「息子さんの為に・・・」

その『白馬家』という名に苦しんでいるのが、この看護婦には分かつ

ていた。

ちよつと話したけど優しい人だった。

幸せになつてもらい、早くあの病室から抜け出せる日を、実はこの看護婦さんが一番に思っていたのかもしれない。

寓和中央総合病院の三階にあるナースステーションで、一人の看護婦はふとそう思いながら、薬品の在庫確認の書類をカラフルなボックスから取り出して、再び仕事を再開した。



「髪を切ったのか？」

そう訪ねてきた時、王子はお土産で持ってきていたリンゴを剥いている最中だった。

二三会話をして席に着いた王子は颯爽にリンゴを剥き始めていたのだ。そんな王子を訝（いぶか）しげな眼差しをする訳も無く、高校生になつてもまだお見舞いに来る世話焼きの息子を微笑みながら言葉を漏らすのは、白馬家に嫁いだ白馬愛馬（はくば・まなま）だった。

容姿は完全にオオカミさんこと大神涼子を大人にしたような体型で、唯一異なつていたのが幸か不幸か胸であり、実に豊満だった。顔立ちも小皺など見当たり無く、高校生の息子を持つている母親にしては若すぎている。

身体的病気を抱えている、という訳では無く。精神的な病気での寓和病院に入院している。

「うん、さっぱりしたろ？」

王子は笑顔でそう答えれば、母・愛馬も一緒に微笑む。

日常会話的におかしいという訳では無く、傷心に因（よ）る精神的

な病気だった。

心が脆くなっているのだ。

白馬愛馬のような容姿、それが有る意味、大神涼子を欲した最大の理由だったのかもしれない。

マザコンという訳じゃない。

ただ、似ていたから。

嘘という毛皮を被っている所と容姿が似ていたからの理由で欲したのかもしれない。

どんな手を使ってでも。

「ああ、前のも良かったが、こつちの子馬も良いかもしれない」

そう言いながら愛馬は王子の髪に手を伸ばす。

愛馬は王子を「子馬」と呼ぶ癖がある。これは父親と共に幼い頃に付けられた愛称のようなものだった。成長につれ馬鹿にされてるんじゃないか？ と思つた時も当然あつたが、今じゃ然程気にしない。寧ろ少し嬉しい気持ちだ。

王子は手を伸ばしてくる母親に綺麗に短くなった金髪を触らせる。

とても優しく、温かく、慈愛のある手であつた。

失いたくない。

王子は剥き終えたリングを置いて、母の手を自らの手で掴む。

「母さん、こんな頭になった理由……聞かないのかい？」

包み込むように愛馬の手を握ると、指を曲げて力無い握力で王子の手を握り返す。

「話したいなら聞くぞ？」

本当に病気なんてしてるのか、と思う程に男らしい言い方で返してきた愛馬に王子は苦笑する。

話せば聞いてくれると言ってくれている母に、王子は御伽学園で、御伽銀行と大神涼子についてまで話したのだ、包み隠さず全部。

全てを話し終えた王子は恐る恐る愛馬の顔色を窺うと、少し考え込みながらもしっかりと王子の手を握つたまま、次第に口を開いてい

く。

「その子……大神涼子さんにはちゃんと謝ったのか？」

ああ、と返事する王子。

「誠意を込めて、謝ったか？」

……ハイ、と力強く王子は頷いてみせる。

「……何故そんな事をしたのか、何てことをお前は仕出かしたんだ、とか、そんな事を糾弾するつもりは微塵も無い。それは、犯行した理由を私は……理解しているかもしれないからだ」

少し肩を震わす母に王子は心臓を鷲掴みされる思いに駆られた。

「……その理由は、……私”だろ？」

ビクツツ!!! と王子は一気に鼓動が激しくなる衝動を必死に抑えようとし、笑顔で愛馬に『違うよ?』と安心して答えねばならぬ事を脳内で走らせていた王子だったが、親は子に遅れを取る事も無く、愛馬は目から雫を溢して言った。

「……そう、なんだな」

「ち、違うよ!」

しまった、と内心王子は舌打ちを鳴らす。

これでは肯定すると自分で言ったような反応だ。

何故気付いた? と王子が焦りながら考えて、ふと自分の手を見れば、

(——ツ!!——しまった!)

愛馬は王子の手を握っている。つまり王子が焦ったことにより生じた手汗と、心臓の鼓動が激しくなれば規則的に収縮して血液が押し出されていた動脈に、激しく伝わる脈拍で嘘を見抜いた愛馬だったのだ。

「私が、弱いから……王子を」

「違うツ!」

ガバツ!! と立ち上がった王子は愛馬を抱き寄せた。

「違うよ母さん、違うんだ。これは僕自身が傲慢で強欲に成り下がっていた自分の所業だ。母さんは関係してないんだ」

「・・・あうう、ああ、違うだろ王子、私が、私が『白馬家』でしつかりとしていればお前はそうならなかった、私がお義父様(とうさま)の言う通りにしていればお前は——」

「何で？ 違うよ、母さん。お祖父様(じいさま)は母さんに期待しているんだ。だから寓和病院でももつとも設備に充実な部屋で——」

「違わないツツ!!」

グシイツツ!! と王子の背中が鉤爪で引き裂かれるような激痛が走る。

愛馬が叫びに似た声で王子の背中を爪を立てるようにして握り締めていたのだ。

「違わない!!! お義父様は私に期待なんてする筈が無いんだ! いつもいつも目を合わせる度に『雑種』『売女』『駄馬』と罵られ、同じ家に居るだけでお義父様は私を恫喝してきていた!!! “あの人”が!!!

“あの人”さえ生きていれば私はこんなツツ!! こんなツツ!!」  
「母さんツツ!!」

発狂したかのように愛馬は大量に涙を流して吐き叫ぶ。

ガタアングオン!! とベッドを揺らして王子から離れようと両手を滅裂になるほどに振るう。痛さなど感じられないほどに色んな箇所とその華奢な両手を無造作にぶつけ、叩き、弾き、掴む。

女性とは思えぬ力で王子を突き離す。

「あいああああああああ!!! いあやああああああああああああああ!!!」  
「うぐうツツ!!」

最早言葉さえ発することを捨て、内側から消えることの無い黒く暗い感情を愛馬はただ吐き出すようにするしかない状況に、王子はなんとか落ち着かせようとするが、愛馬の意識ない手で睨み越したが目を容赦無く叩かれる。

愛馬を抑え、ナースコールのボタンを押し、看護婦と医師が来るまで、王子は発狂する母を、唇を噛み絞めながら待つしか出来なかった。

※

父が死んだのは小学校に上がるか上がらないかの境目だった。

父を愛してやまなかった母は、喪失感と絶望感、そして「責任感」の闘（せめ）ぎ合いで精神を病んでしまったのだ。

父という存在が母の抛り所だったのだ、家にあるのは嫁として嫁いだ責任感。『白馬家』として恥ずかしくない者として、義父・汪馬の言うことは何でも聞いていた。

だが如何せん義父・汪馬は義理の娘・愛馬を「雑種」としか視ていなかった。

気品・言葉遣い・動作。全てを汪馬は愛馬に叩き込むように命じた。きた。

雑種なりに『白馬家』としての教育という名の躰。

愛馬も息子である王子の為、息子の為だけに人間としての、女性としての、プライド全てを捧げてきた。

だが、汪馬は一切合切の期待など愛馬に持たず、二人の息子である王子に目を向けた。

まだそれは母親として嬉しいことだったと言えるが、ここでもう精神を蝕む勢いが着いたと言っても過言じゃなかった。

王子が中学校に上がった時、母は床に伏せるようになった。

原因はやはり、祖父・汪馬だった。

一人息子が死んだのはお前のせいだ！ と日々糾弾され続け。愛する夫が死んだのは自分のせいなんだ、と汪馬に誘導されるよう己を責めるようになった母は、とうとう床から起き上がることが出来なくなってしまうのだ。

そうなってしまえば汪馬は払い箱のように【寓和病院】に愛馬を入院させ、あとは何も無干渉のまま年月が経ってしまった。

見舞いに行く王子だが、何かと自分が行なった悪い行為は『私のせいだ』と愛馬はまるで独り言のように呟いたと思えば、次は決まって

発狂だった。

中学生ながらも王子は、母の気が狂う姿に、絶望的な感情と、悲嘆と怠（だる）さに陥るようになった。

※

「鎮静剤で落ち着かせましたが、余り無茶をさせないでください。白馬さんの異常興奮を取り除く際に何かしら大脳に負担が掛かってしまいますので」

「……すみません」

愛馬が居る病室から出て、廊下を突っ切った先にある広間で、愛馬の担当医師である先生に王子は頭を下げて謝っていた。

医師も頭を上げるよう促し、

「点滴注射で睡眠鎮静剤を投与していますので、部屋ではお静かにお願いしますね」

「……何から何までありがとうございます」

「いえいえ、と医師はそこまで言うのと、忙しいのか次の患者の所に向かった。

医師の背中が見えなくなった頃、広間に置かれた長椅子に腰を下ろして手を額に当てた。

チカチカと近くにあった自動販売機に電気が点灯しはじめ、少し暗くなっていた広間に光が差す。

祖父には嘶（な）かせると誓った王子だったが、早くも誓いが脆く砕け散りそうになっていた。

母があなると分かっていたじゃないか、分かっていたのに話してしまっただ。

少しでも自分の弱みを見せれば母はそれを自分のせいだ、と決めつけ、最後己を責め呵責する。

「僕が、変わらなきゃ、いけないんだ」

それは小さくも、確りとした言葉だった。

王子は額に手を当てていた掌を握り締め、拳に色々な決意、思い、失意、誓いを包み込むと、頭を上げた。

「そうだと思わないか、黒軋ガウエインくん」

頭を上げた先には、漆黒の衣を纏ったかようなコートに身を包み、黒縁メガネから見える瞳から王子をとう見ているのか想像しようとする、すぐに意味など無いと霧散させ、立ち上がる。

「どうやってこの寓和病院に？」

「意外と、いや、やはりと言うか貴方は良い意味も悪い意味でも有名なんですよ」

「……そうだね、正しくその通りだ。僕の屋敷から乗車する車まできつと御伽花市に住んでいる人たちは分かっているだろうな」

「それだけじゃ無い。モルドレットにも協力してもらった」

「……そうかい、まあモルドレットと仲が良かったらしいよね、君は」  
だから寓和病院（ここ）だと一番最初に来たのか、と御伽銀行地上店と会った時間からこの病院に着いた時間を繋ぎ合わせて計算したらしく、王子は納得したような顔で自動販売機の前立ち、結構メジャーな缶コーヒーを二本買った。

よくテレビのCMなどで見たことのある缶コーヒーだった。

「飲むかい？　と言ってももう買ったんだけどね」

笑みを浮かばせて、王子は缶コーヒーをガウエインに手渡す。ガウエインも『ありがとうございます』と下手に断るより誠意を持って有り難く貰うことにしたらしい。

「苦いね、最近缶コーヒーなんて飲まなかったからなあ」

「……美味しいですよ」

ガウエインは缶コーヒーを一口飲むと、すぐ王子と真正面に立った。

「すみません、率直に言いますが、貴方がこの病院に入る所からもう居ました」

「ぶっ……！」

思わず含んでいたコーヒーを吐き飛ばしそうになったが、なんとか



堪（こら）えた。

まさか病院に入る時点で既に居たなんてなあ、王子はまだ残っている微量な重さを残す缶コーヒーを揺らして、ガウエインを見た。

「そして、俺だけじゃ無いです」

相変わらず表情を変えずに喋るガウエインを見て、僅かながら申し訳無さそうな雰囲気醸し出しているのには気付いた王子。

「……御伽銀行の、確か今は二年生の宇佐見くんと一年生の竜宮くんとで何かあったみたいで忙しいと聞いたんだけど」

「そのようです」

「と、すると……」あの手”の作業が苦手な人。うん、大神くんに亮士くんは確実に居そうだね」

”あの手”の作業と口走った王子は、意外と抜け目なく御伽銀行の事情を知っていたことに不思議に思ったガウエインだったが、一緒に来た人を言い当てたことに驚いていた。

「驚きました」

「え、いや、驚いてるのかい？　かなり無表情だよ？」

はい驚いています、と答えて先ほど飲み干した缶コーヒーを空き缶入れのゴミ箱に入れる。

「涼子と亮士、あとおつう……鶴ヶ谷も居ます」

「ああ、あのメイドさんか。意外だな」

何故です？　と質問すれば、王子はやはりまだ苦味に慣れず残った缶コーヒーを見つめながら言う。

「あの子も意外と黒いものを持つている感じがしたんだけどな」

黒いもの、という言葉に反応するガウエイン。その反応を見た王子は慌てて言い変える。

「ああー、違うよ？　ただ彼女の中にも何か黒い靄のようなものがあるんじゃないのかな、と僕が勝手に思ったただだから実際どうなのかは僕も分からないさ」

「……何故おつうに感じたのですか？」

そう言った王子は、何処か沈んだ表情で呟く。

「ああ、僕の間近にさ、居るんだ。真っ黒に染め上がった靄じゃなく、

くつきりとした雨。まあ例えだよ？」

意を決して缶コーヒを飲み干して、王子も空き缶を捨てて、外が暗くなってきた窓に顔を向ける。

「だから、かな。敏感になっちゃったんだ。人の『黒さ』を」

王子の祖父、白馬汪馬が憎き荒神洋燈にどれだけ憎げ言を吐いてきたか。その憎しみを糧にどれだけ社会的スレスレな仕事をしてきたか目の前で、幼い頃から見てきてしまったのだ。

そして母、白馬愛馬の発狂。祖父や『白馬家』の重圧に押し潰されそうになり、互いに支え合おうと誓い結婚した夫の突然の【死】に、母は狂（ふ）れた意識でも懸命に王子を育ててきた愛馬。だが、懸命になって王子を育てようとした母が発狂する姿は小さかった王子にとって、いとも簡単に精神を蝕（むしば）むのには最適過ぎていた。

ある意味弱さから現れた『黒さ』だった。

皮肉にも『白馬』というのに、真っ白で純白な心なんて綺麗なモノは持っていない。黒さを隠す白。黒を覆う白。

「そして、そうした黒さを見つけられたのは……僕も黒かったからだ」

ギョツと拳を握り締め、鬼ヶ島高校の連中と人脈を築き上げ、襲わせるように命令し、その襲われた大神を助け、鬼ヶ島高校の連中を利用した挙句に大神涼子を惚れさせようとした。

（情けないっ！ 自分が嫌で嫌で仕方無かった『黒さ』を！ 僕は何も躊躇無しにやって遂げてきた！）

過去の自分を、王子は殴り殺したい衝動に駆り出しそうになる。

しかもその所業を祖父は知っていた。仕舞いにはやり方が温（ぬる）いとまで王子に言ってきたのだ。

フルフルと腕から肩まで震え出し、憤怒（ふんぬ）の火山が噴火しそうになったがすぐに悲嘆の雨で鎮火していく。

そう、悲しみと嘆きしかない。

気持ち悪いほど気分が下がり、気分も悪くなってくるほど自己嫌悪に陥りそうになった王子だった。

王子は頭を押さえ、ガウエインにこの事を誰にも言わないでくれ、

と口約束をしようと開口する直前、

「じゃあ貴方はその黒さに『負けた』のですね」

「……なに……?」

今何と……言った?

「貴方はその『黒さ』に抵抗したのですか?」

王子は振り向き、ガウエインの顔を覗き込む。

やはり普通の無表情顔だった。だが、何処かその口から出てくる言葉に意思が滲み込んでいるのに気付く。

「その頭髮は? その意思は? その謝罪は? その自己嫌悪は? 全て『黒さ』から出た行為ですか?」

——違う。

「謝罪する意思さえ見せれば関係無いだろう、学園の連中も『自分は反省しています』という謝罪姿勢を見せれば見る目も変わる。……確かにこれは『黒さ』から来る行為ですね、微塵に反省していない」

——違うッ。

「涼子の方も簡単に赦して貰えた、だからもう後は少しだけ良い子を演じていけば問題無く終わる。なるほど、これは黒々と白々しい、正しく今の『白馬家』そのものを体現したような行為です」

——違うッ!

「結局、貴方は……『黒い』んじゃないですか?」

「違うッ!!!」

ガシッ!! とガウエインの胸ぐらを掴み、普段の王子のにこやかフェイスなど捨てて、笑顔を無くした怒りの顔だけで叫ぶ王子。

「違うッ!!! 負けてなどいない! 僕は絶対に『黒』に染まってなんていない!」

あんな祖父みたいに!

『白馬家』は! 純白な意思を持つ気高き白馬なんだ! 僕までが黒くなってしまうては……母さん一人だけになってしまう!」

狂(ふ)れた母だが、発狂する以前は、綺麗な純白さで優しいくも強かった母・愛馬だったのだ。

「僕が変わるんだ!! 僕の代で『白馬家』を『真の白馬家』にしてみせる!!」

王子は思わず口に出してしまう。

そうだ、そうだったんだ。と王子は自分が口走った言葉で、自分が探していた答えを見つけてしまったのだ。

王子はガウエインの胸ぐらを掴んだまま思い耽（ふけ）る。

（そう・・・だ。そうだ、簡単な話だ。あ、いや、簡単じゃないが、十分過ぎる『可能性』じゃないか!）

父亡き今、『白馬家』の当主は実質的、祖父である白馬汪馬だ。

その汪馬から当主の座を奪えば、何もかも、もう何もかも言わせないことが出来る。

余りにも威風堂々たる汪馬の存在が強大過ぎて気付かなかった。

「実は端から見れば簡単にその答えが浮かんでいたんだ」

そこでガウエインが口を開くと、王子もすぐに胸ぐらから手を離し、慌て始めた。

「貴方が家長になれば良い」

「・・・君は・・・」

一体、何故そのことを僕に? そう続けようとした王子だったが、ガウエインは何も無かったかのように王子に礼一つすると、エレベーターの方にへと向かう。

「あ、ちよつと!」

「余り病院で騒がないようにしないといけませんね。すみません、俺から喉（けし）かけといて、それでは」

そう言つてガウエインはスタスタ! と王子を背にエレベーターへと向かう。当然、王子も後から追うとすると、

「「あつ」」

「あつ」

白く長い廊下から、三人の男女と鉢合わせとなる。

「涼子、亮士、おつう。済まない。時間を掛けすぎたな」

ガウエインは『済まない』と謝っている中、『いえいえ、構いませんよ』と鶴ヶ谷が相変わらずにこやかな笑顔を向けられながら、大神と

亮士は困惑していた。

「(あれえー！ 見つかって良かったのかこれ!?)」

「(いやいやっ！ ヤバいっスよ!)」

大神と亮士がコソコソと二人で話していると、ふとある病室のドアが空いてあるのに気付いた。

空いてて良いのか？ と大神がドアを閉めようと取っ手に掴もうとした瞬間だった。

「ありがとう、大神くん」

そう言つて王子が代わりにその病室のドアに閉める。ふと大神は病室プレートに目を向けると、

「白馬、愛馬(あいば)?」

「・・・あー」

王子は病室プレートに名前が書かれてあるのを完全に忘れていた。

「はあ、個人情報保護の為に最近のネームプレートには配慮された形になってるけど、寓和病院のはもう少し改良して欲しいな」

カチャリ、と普段は情報保護として隠してあるプレートに、透明アクリルプレートを上スライドさせることで確認出来るプレートを王子は自然と元に直す。面会時だけに名前を確認する為のプレートが上がっていたので名前が分かってしまったのだ。

「残念だけど、愛馬(あいば)じゃなくて愛馬(まなま)と読むんだ」  
小さな笑みで王子が言うと、大神は苗字が気掛かりで聞くか聞くまいかと戸惑っていると、

「大神くんが思っている通り、僕の親族さ」

王子が笑ってみせるが、何処か哀しみに満ちているのが充分に伝わった。

「僕の、母親だ」

「・・・えっ?」

「中学校辺りでかな、少し・・・病気でね」

王子はドアを閉めた向こうで、一人だけでベッドに居る母親の姿を思い出し、大神たちを見る。

「今日僕が君たちに会いに行つたことで、様変わりした自分をどうし

てこうなったのか、探りにきた……って所かな？ 目的は果たされたかい？」

王子は今までの嘘の笑顔を向けず、真剣な顔で大神たちを見て聞いた。

「ああ……いや、その、探るっつーか、なんっつーか……その」大神はまさか王子の母親が入院してるなんて思っていなかったのか、勝手に王子のプライベートを覗き込んでしまった罪悪感で少し返答を濁してしう。亮士も大神と同じくだが、真剣な眼差しも受けているので単に動けなくなっているだけだった。鶴ヶ谷に対しては「病院」は余り良い印象が無く、大切な人が亡くなってしまった思い出から最初から気分が下がっていた。

三人が俯きそうになっていたのを見計らい、ガウエインが代表として答える。

「勝手なのは理解しながらやりました。ですが、やはり気になってしまい伺った次第です。そして答えはイエス。果たされました」

うおゝ行つちやつたよ騎士先輩、と後輩二人が王子の反応を伺っていると、王子が肩から震えているのに気付いた。

(やべっ！ やっぱり怒るか!?)

(ヒ、ヒイ！ 怒られるっス！)

素直に王子の怒りを受け止めよう、相手が怒ってしまうほどのことをしたのだから。

そう思いながら王子の叱責を快く受けようとした大神たちであったが、

「アツハツハツ!!」

「えっ?」

まさかの叱責じゃなく、笑いだった。

「アツハツハツ! はあはあゝ……ああゝ本当に君たちは眩しいくらい誠実に生きているなあ。ああ、本当に眩しいよ」

付いて来れない状況に、大神たちが首を傾げてしまっていると、ガウエインは不思議そうに、だがやはり無表情のまま王子に尋ねる。

「眩しいのか?」

「ああ、眩しいね。でも、懐かしい感覚だ」  
純粹で、純白で、綺麗な心だ。王子（じぶん）も昔がそうだったよ  
うに。

「ありがとう」

王子の感謝の言葉に戸惑う二人。

王子の変わり様に喜ぶメイド。

王子の覚悟に興味を示す騎士。

王子の覚悟を感じたオオカミさんたち一行は、それを深く記憶に  
刻み、再び兎と亀の争いに身を投じることになった。

第21話「騎士は兎と亀の醜い争いに再び巻き込まれる」

——御伽花市、御伽銀行地下本店隠視カメラより——

『いやいや、まさか間に王子くんまの話を入れてくるなんて思わずの展開だったね?』

『頭取、何の話ですか?』

『アリスちゃん、アリスちゃん。二人だけの時はボクのことを“リつくん”と言ってくれなきや?』

『……』

『冷たい眼まなこと漢字で書くと“冷眼れいがん”と読むらしいよ? いやー冷眼つてちよつと響きがかっこいいよね?』

『かっこよくありません』

『うんそうだね、ボクもそう思った所だったよ? まあ要するにボクが言いたい事はね——』

『高等部三年の白馬王子さんの件ですね。ええ、存じています。こちらはこちらでやりますのでそちらは自由にして構わない、と副頭取権限で伝えました』

『あらー? そうだったんだ。——あれ、知らなかったよボク?』  
『今伝えました』

『おわーやるねえ、アリスちゃん? もう実質御伽銀行を牛耳つてると言っても過言じゃないよ』

『……』



『悲しい悲しくないと問われたらそりやあ悲しいとボクは答えないとイケないねえ?』

『………ミスミスター御伽学園コンテストの決行も間近です』

『あらー? 面倒になった? 面倒になっちゃって話戻しちやつた?』

『致命的なまでに策略謀略に向かない大神さんや亮士くん、そして謀り事が嫌いな黒軋くろぎしさんが別行動をしたことで、暇を与えないようしたのですが。お陰で“計画”は進んでいます』

『宇佐見君たちに喧嘩売りに行ってくれたのが赤井君と竜宮君、それと警護に浦島君を行かせたけど、これまた良い具合に挑発してくれたよ? ガウエイン君たちもそろそろ帰ってくるみたいだし……』

『ハイ、我らも——』

『動くとしますか?』



「騎士先輩、まだ宇佐見に対しての妨害工作が行われてるらしい」「らしいな」

「貸しの徴収の名目で呼び集めた人たちも使つての工作みたいっす」

「……みたいだな」

「どうぞ、人数分のカフェ・アロンジエです」

「ありがと……うお?」

辛気くさかったあの寓和総合病院から離れ、御伽花市の街中にあるカフェで休憩していた。

街路に面し、歩道に迫り出したテーブルや椅子が置かれてあり、ガウエインたちは店内のテーブル席に着いていた。

カフェにメイド姿でいる鶴ヶ谷おつうに他のお客の視線が集中するのにもそろそろ慣れたが、まさか鶴ヶ谷が店員の代わりにメニュー

を運んで来たのには大変驚いたガウエインに、鶴ヶ谷はにこやかな笑顔顔を絶やさないうで芳しい香を漂わせたカフェを渡した。

だが流石にカフェの店員さんに悪いから止めなさい、と三人に宥め賺すかされた鶴ヶ谷は同じテーブル椅子に座りコーヒーを飲む。

鶴ヶ谷を落ち着かせたガウエインはコーヒーを飲みながら携帯を華麗に操作させていく。

「・・・どうやら順調のようだ」

「りんご達のですか？」

「ああ」

そう言つてガウエインは携帯を懐に仕舞い、中々旨いカフェをまた一口喉に通す。

鶴ヶ谷のメイド姿により注目され続けられている為、亮士は半硬直化したままカフェ片手にしており、それを呆れながら見ていた大神が長いスカートの切れ目から見せる美脚をチラつかせながら（多分恐らく無意識）ガウエインに質問する。

「騎士先輩、ミスコンの投票日つて何日まででしたっけ？ オレたちも流石に控えた方が良くと思つたんですけど・・・」

「まだ日にはある・・・が、謀り事には時間が必要だろう。頭取や林檎には俺から言つておくから先に帰宅して良いと思うが、どうする？」

「ああ・・・じゃあ、お言葉に甘えて帰るとします、オレも謀略とか策略とか苦手だし」

相変わらず男らしい口調の大神だったのだが、若干熱かったカフェに『あちゆっ!!・・・／／／／』と可愛い女の子な反応をした瞬間顔を真っ赤にして何故か亮士を睨む大神。

そして大神に睨まれてビクウツツ!! と体振るわしながら反応する亮士だったが、可愛い大神の仕草と羞恥に染まった顔の大神に思わず睨まれても嬉しそうな表情をしてしまった。

「承った、それではな」

男子目掛けて殴り掛かろうとしている後輩を一瞥し、ガウエインは黒いコートを翻しながら席を立った。

メイド服ほどでは無いにしろ、長身にこの黒い服は目立っていた。だがガウエインが気にする筈も無く、店から出て行こうとすると後から鶴ヶ谷も付いてきた。

「どうした、おっう」

「また学園にお戻りになられるのですか？」

「ああ・・・確かに謀り事が嫌いだが、気にならない訳でも無い」

「ふふふ、そうですか」

やはり仲間の事を心配しているガウエインに鶴ヶ谷は微笑みを浮かべて後を付いて来ると、

「お供しますよ？」

そう言つて鶴ヶ谷と一緒に店内から外に出れば、外は茜色に染まった夕日が随分と高い所から眺めていた。

そのお高く見下げてくる夕日をガウエインは眩しそうに見ながら、横に並ぶ鶴ヶ谷に視線を移すガウエイン。

優雅に微笑む鶴ヶ谷は何処か開放的で、同時に嬉しさに満ち溢れていた。それを疑問に思つたガウエインは率直に聞いてみる。

「機嫌が良いな、何かあつたのか？」

本当に不思議そうに、でも顔は相変わらず無表情なままの同級生の彼に鶴ヶ谷は内心溜め息を吐いて、笑顔でガウエインに答えた。

「いいえ、何もありませんよ。うふふふ」

そうなのか？ と深く聞いて来ないガウエインに、暗に興味が無いから聞いて来ないのか、それともこちらに気を遣つて聞いて来ないのか、と両方から意味を捉えることのできる言動でガウエインは変わらぬ表情で大神や亮士に別れ告げて歩き出した。

※

街中にあつたカフェから大分歩き、民家が広がる川添の道路を歩きながら他愛の無い話をして歩く男女二人組。

「それではその鶴ヶ島という女子と鶴繋がりの苗字で仲良くなったという訳か」

「はい、同じクラスでは無いのですが、美化委員会のゴミ袋の分別の手伝いの時に」

「ゴミ袋の分別？」

「御伽花市でも指定袋方式が強化されたみたいでしたので、学園のゴミ箱の区別などで話していました」

「指定袋方式か、．．．．．確か指定された袋を用いることを義務づけられた方法だったか？ 自治体の設定したゴミの区分と出し方に応じた指定袋があると若人さんと話した記憶がある」

「鶴ヶ島さまも美化委員会でそういった会議が沢山あったと話しておりました。学園での指定袋も自治体と同じでしたので」

「．．．．．御伽学園がか？」

「は、はい。確かに理事長である荒神洋燈さまは地元の人たち一部と険悪な仲だと聞いていましたが、流石に指定袋は国の教育委員会が決めたことでもありましたので」

「ほうほう」

「学園でミスコンがあるから尚ゴミの対処が大変だと嘆いておりました」

クスクス、と笑う鶴ヶ谷にガウエインは再びミスコンについて話が戻ってきているのに気が付いた。

健全な高校生がゴミやゴミ袋に関する清掃関連の話を楽しく会話するなんて聞いたこと無いと思うが、楽しそうに話す鶴ヶ谷にガウエインは自然な流れに流れたといった感じだったので、特に気にしてはいなかったが、やはり話はミスコンに戻る。

「ミスコンか．．．．．何か頭取がやっているみたいだが、．．．ん？ 確かおつうも頭取たちに何か言われていなかったか？」

そこでガウエインは夕日で照らされた川に、反射する茜色の光を直視しないよう気をつけて歩きながら鶴ヶ谷に聞けば、

「言われましたよ、ですがガウエインさまの手伝いに行っても構わないと許可が下りましたので」

来ちゃいました、と微笑んでガウエインを見る。

健全たる肉体と健全たる精神を宿す高校生ならば一撃必殺の言葉

と仕草だったのだが、ガウエインは真正面から男らしく受け止め、「そうか、ありがとう」

と口角を吊り上げ、小さな笑みを一つ浮かばせるだけだった。

ガウエインにすればやはり誠心誠意の言葉なのだから、鶴ヶ谷は直球に受けてしまったことで顔を赤くする。

「……むう／＼卑怯です／＼／＼」

だが鶴ヶ谷はそんなガウエインの反応にやはり嬉しく思ってしまった。気恥ずかしくなりながら小声でガウエインに文句を洩らしていた。

「何か言ったか？」

「い、いえ／＼なんでもありません」

と気丈にして言い放ったつもりの鶴ヶ谷だったが、ガウエインから見た鶴ヶ谷の顔は若干赤くなっているのに気付き、その事に関して聞こうとしたのだが、目的地に着いたのでガウエインは歩を止める方を優先したのだった。

「？」と不思議がり、止まった周囲に鶴ヶ谷が見渡せばそこは御伽学園学生女子寮の地区だった。

そこで鶴ヶ谷は気が付いた。

「……そういえば御伽学園の方向じゃありませんでした」

覚えのある通学路に、覚えのある交通信号、そして覚えのある夕方の女子寮への帰り道。

「学園に行こうと思ったが、もう遅いことだしな」

「そ、それでわざわざ女子寮まで？」

そうだ、と言わんばかりにガウエインの目が語っていた。

何気ないこの気遣いに、鶴ヶ谷は仄かに胸の辺りが熱くなる。

恐らくだが、ガウエインは僅かに鶴ヶ谷の話を持ち上げ、話題を絶やさず、徐々に熱を上げたりして語らせたことで道程をこの女子寮に向けていたのだろう。

鶴ヶ谷の通学路も、学園生活の何気ない日々の会話から拾い集めた情報だろう。鶴ヶ谷は推測する。

「その……ありがとう、ございますー！」

鶴ヶ谷は感謝の念を込めてガウエインにそう言えば、気にするな、と言わんばかりに静かな仕草で親指をビシッ！と出し、

「気にするな」

言ってしまった。

ガウエインは臆面無く堂々とした無表情顔でその行為をブチかます。

だが鶴ヶ谷はやはり微笑みを浮かばせて、ガウエインにお礼を言う。

そんな感じに二人のやり取りが長く続いた。

他愛のない、何のこともない、普通の高校生のやり取りだ。

格好は気にはならないが………。

今日が終われば明日が来る、そんな日々かたちを作りながら、あつという間にミスコンの日にへと近付いていた。



ミスミスター御伽学園コンテスト投票日を翌日に控え、御伽学園地下本店で主要メンバーによる作戦会議、というより最終報告会が開かれた。

いつも通りに豪華な地下施設、そこで一人の少女が頭取が座るであろう指定席に座っていた。そばかす赤毛で三つ編みのやんちゃな印象を受ける少女は、

「いやーいろんな所で聞いてみたけど、順調に高感度が下がってるみたいだね？」

頭取が変身した噂好きのよっちゃんだ。

「そうっすね、いろいろ聞いて回りましたが、その噂で持ちきりでしたっす」

亮士のいう聞いて回るといふのは勿論、正面切ってズバツ！と男前に聞く場合では無く、盗み聞きして回るといふこと。亮士が赤の他人と会話を成立させる訳が無く、目と目を合わせて会話なんてしたら亮士はいつもの発作を起こしてしまう。

「はい、両者の高感度はもうすごいことになっているようです。噂だけではなく、醜い女の戦い故に双方がその噂を広め合ったという認識が後押しとなったようです」

桐木アリスの報告に頭取よっちゃんバージョンは嬉しそうに頷いた。

「うんうん、流石僕ら、良い仕事してるね〜?」

「はい、うまく人目のある場所で二人が出会うように仕向けましたので、かなり効率よく噂が浸透しました」

見た目が少女なのに、頭取の声が聞こえてくるのに気持ち悪がる後輩たちを見ながら、ガウエインは謀略を巡らせているマジョーリカの横に立ちながら話を聞く。

「というか、乙姫の高感度も下がりがくってんだがいいのか?」

確かに、とガウエインは大神と同じく今回はあまり役に立たないということで、全然働いていない状態になっていた。マジョーリカから詳しく策謀の内容を聞けば簡単だったが、ガウエインは聞かずに今日まで居た。

理由は頭取とりんごが大神と同様に面白がって隠していたからだ。だが亮士は意外と影の薄さを最大限に利用して情報収集に徹していたらしい。

大神が頭取に聞いたので一緒に話話を聞くと、

「いいんだよ? あ、そうそう森野君、明日の投票は竜宮君に入れちゃダメだよ?」

「了解っス」

その言葉にも物の見事に反応する大神とガウエイン。疑問が浮上するに決まっている。

「おいおい、いいのかよ。票が必要なんじゃねえのか?」

「これもいいんだよ? 大丈夫大丈夫、作戦は順調だから? そのために、宇佐見君の竜宮君への誹謗中傷を妨害しなかったんだからね?」

まあ、これは竜宮君は知らないことだけどね?」

確かに地下本店に浦島太郎と竜宮乙姫の姿が見当たらなかった。

誹謗中傷の話は二年生でも噂立っているのにガウエインは心苦し

く聞いていた。何もそこまで罵りあわなくて良いのでは無いか？と。

だがそんな事など露知らず、頭取は楽しくて楽しくて仕方がないっ  
て感じに少女姿で微笑んでいる。

「はしゃ燥いでますね頭取、一体何を謀っているのですか？」

大神も『そうだーそうだー』と便乗してくる。

「あー黒軋君くろまきしに大神君？ どうせここまで知らなかったのなら、最後  
まで知らない方が面白いかもしれないよ？」

「……そうか？ 騎士先輩はどうスか？」

「……ノーコメントだな」

「喋ってるヨー」

「そこは敢えてツツコまないんですのよ魔女先輩！」

頭取の曖昧で断言しない言葉のせいで、これまた曖昧な返答のせいで大神が首を傾げてしまい、思わず先輩のガウエインに意見を聞いてみれば何も答えないと言ってきた。

結局は大神の意思で『楽しみにしとくか』という結果で終わりを告げた。

実は大神とガウエインの考えは共通しており、どうせろくでもないことなんだろうから、知らない方が精神衛生上良さそうだと結論つけていた。



『やあやあ、お早う諸君！ 今日生徒会も仕切るミスミスター御伽  
学園コンテスト当日だよー！』

「だよー」

『という訳で生徒会役員少ないからさあ、君達に来て貰ったんだよ、御  
伽学園の騎士ナイトなキミ達にイツ！ 朝だよ朝、朝6時だよ！』

「ハハハ、相変わらず殺したいほど五月蠅い副会長だ、奇抜な格好で奇  
抜な行動を控えろ」

『あんだよあんだよパーシヴァル！ 紫な髪が垂れ下がっているぞ！』



モルドレットはこんなに元気なの!』

「ルーカン、随分久しぶりな気がするんだ、私」

「そうねフェイル、忘れられていたと思うわ。でも貴女は結構重要な役割を持っているのに本当に活躍してなかったわね」

「はうツ!!」

『大丈夫だよ、ルーちゃんにランスローちゃん。私は君たちを見ているから、ニコニコ』

「口では言っていますが、仮面しているので表情分かりません、あしからず」

『ガウエインCOOLツ!』

「いたっ痛い!! 何でオレ叩くの!? 何でパーシヴァルさんオレにナイフ向けて投げようとしてんの!? 苛々してるから? それでオレ刺殺されそうになつてんの? ナニコレ!!」

御伽学園に設けられた広大な校庭には、既にミスミスター御伽学園コンテスト会場が建設されていた。

業者の方々がわざわざ作って下さつたらしいが、『普通』は学校の行事ぐらいで建設会社（結構有名な企業）がわざわざ全社員フル稼働で建設してくれていたのに対し、生徒たちは啞然としていたのを忘れない。

あの学園理事長本<sup>オ</sup>当<sup>ヤ</sup>に半端な事はしねえな的に恐れおののいていたのだ。

だが会場だけ作ってくれたので、後の作業などは流石に生徒達が受け持った。

『生徒会は当然、御伽学園コンテストの為に働く訳だが、人員が不足している。会長のヘンゼルくんは放送部やコンテスト実行委員会やらの打ち合わせ、グレーテルちゃんもコンテスト実行委員の人と投票用紙を揃えて貰ってる』

朝早くから生徒達は登校しており、楽しみであったミスミスター御伽学園コンテストの為に働いていた。

まさかの一日使つての校内行事、学期ごとに行われるミスコンが一学期半場という中途半端な時期になったのが痛恨だったのが生徒た

ちを動かしている。

『あ、ちなみに知られてないけど会計には風紀委員長に兼任してもらっているよ』

「……あの桃先輩が会計か」

「計算が意外と得意だぞ」

「だが大変なんだろう、フェイル」

「……ああ、大変過ぎて胃が持たない」

胃薬上げようか、とルーカンが半分心配そうに、半分哀れみに思いながらフェイルの肩に手を置くがフェイルはプルプルと震えることよって返事した。

『桃ちゃんにはねー、今頑張ってもらってる』

内容を話さない副会長は漆黒に染め上げられた仮面をなぞりながら言うと、少し気まずさを滲ませていた。

『君達に、やってもらいたいことがある……』

覆面みたいに顔全体を、いや『頭』全てを覆うように隠した仮面を被った副会長は、劇団員のように大袈裟に身体を使い、“騎士”たちに伝えた。

『第一体育館の地下倉庫、まあ壇上の下からパイプ椅子を……持つて来おおおおおおい!!』

ランスロットとルーカンは溜め息を吐き、トリスタンとパーシヴァルは既に姿を眩まし、モルドレッドとガウエインは無表情同士言われた事を素直に聞き第一体育館にへと向かった。

『どうよ、見事な統率力!』

『よく吐けましたねその言葉』

『仮面してるから悲しい顔なのか分かんないのよねえ。ズルいわ』

その後も邪魔過ぎるマントを気にもせず、せつせと使用する分だけのパイプ椅子をガウエイン、モルドレッドと共に運び終えていた。

異観過ぎる光景だったが、然も毎日のように見ている御伽学園の生徒たちは差当りなく作業に取り掛かっていた。

『グレテルちゃんや、君のお兄様は何処に行っただい?』

「……」

「グレーテルちゃん♪ ヘンゼルは何処に行っちゃったのかしら」

「ヘンゼルお兄様なら実行委員会の方々と先生を呼びに行きました。何か報告した筈の備品が無かったとか」

『おっと新手の無視かい？ 視えて無い？ アウトオブ眼中？ グレるなよ、グレーテルなダケにく』

「吉備津先輩、この日曜朝にやる戦隊ヒーローの敵役などが着る仮面貴公子然とした奇格好野郎を何とかして頂けませんでしょうか。主に消し去る方面で」

「あら、〃奇格好〃なんて聞いたことない言葉言っちゃうほどウザつたらしいのかしら！ でもそこが可愛いわグレーテルちゃん!!」

チイこつちも面倒だッ！ とグレーテルは抱き着こうとする吉備津桃子から全力で逃避行した後、扱いが雑な副会長は黒く長いマントを翻し、待っていた『円卓の騎士』たちに向き合った。

『諸君！ 大に助かった！ パイプ椅子だけだったけど大に助かった！ ありがとう！』

「それは良かったです」

「良かった」

『うん！ あれ？ 二人しか居ない？ ぶっ飛んだ恥ずかしがり屋だなアイツらは！』

「幾ら扱られ筆(むし)り取られても決して無くならない副会長のポジション、凄いいと思います」

『ありがとう、ガウエイン!!』

結局、フェイルとルーカンは一本分だけパイプ椅子を運んだ後、用事があるのでという典型的嘘でその場から逃げていたので、実質三人だけで運び終えてしまったのだ。とはいえマンモス校である御伽学園の全生徒分を運んだ訳では無く、使用する生徒会やミスコン実行委員会の仮設テントで使う分だけだったので三人でも間に合ったのだ。

ただそれは午前中一杯を使えばの話なのだが、三人の異常なまでの身体能力で、数時間の僅かで終えた仕事ぶりには、準備を終えたグレーテルと吉備津が啞然とするくらい驚かされていた。



「放送部の下桐すずめさんがMCを務めるのですか？」

午前中に会場の準備を終わったことで、まだかまだかと楽しみにやって来た御伽学園の男子生徒たちによって校庭は群集となり活気盛んに騒いでいた。

すぐにミスミスター御伽学園コンテストを開催するべくミスコン実行委員会が身を乗りだした頃、ガウエインは一度自分のクラスにへと戻っていた。

「そうのですよ☆ まさかまさかの私がミスコンのMCを任せられるとは思いませんでした★」

相変わらずなアニメ声の下桐すずめはガウエインと廊下で話していた。

「これからカラス部長とヘンゼル会長とで打ち合わせがあるので☆ ガウくんも楽しみにしてて下さいね」

にこやかスマイルで言って手を振る下桐はすぐに放送部が使用する仮設テントへ向かうべく、校庭にへと向かって行った。

（・・・そう言えば『ガウくん』と呼ばれたが、ガウエインだから『ガウ』なのか？）

日本人らしからぬ名前だけに、自己紹介をする度に質問攻めを強いられた時を思い出す。

名前の方に意識が向いてしまったが、下桐が向かった辺り、もうすぐ審査が始まるかもしれない。

一度クラスに戻り荷物を持ってから御伽銀行にへと向かおうとしたガウエインの前に、竜宮乙姫の怨敵である宇佐見美々の姿があった。何やら一人の少年と話し込んでいた。

「私頑張るから応援宜しくね白兎くん！——見

てなあさい、あアのクソ生意気な粹（いき）がり女ア・・・まだ深海から這い上がらせねえからなあ」

「ハハハ、黒さが滲み出てるよ、美々」

宇佐見と一緒に居たのはガウエインと同じクラスだった因幡白兎

という少年だった。

宇佐見と並ぶとやはり白兔の方が高かったが、白兔もどちらかと言うと虚弱そうなイメージが大きかったが、優しく微笑む彼の顔にはその虚弱さを僅かながらに細緻に薄めさせていた。

「宇佐見、もうすぐ審査じゃないのか」

「アラア、これはこれは『御伽銀行』の黒軋ガウエインくんじゃない。アナタこそ仕事をしなくても構わないのかしらあ？」

妙に刺々しい物言いだが仕方無い、それだけのことをしたのだから。

「あからさまに失礼だよ美々？ 黒軋くんが聞いただけじゃないか」

「ふん、それじゃ私は準備があるので」

そう言つて長いピンク色のツインテールをピョコピョコと揺らしながらコンテスト会場にへと向かった。

そしてふと白兔と目が合うガウエイン。

「気を悪くしちゃったかな？」

「いや、大丈夫だ」

それは良かった、と穏やかに微笑んだ白兔はガウエインと共に教室にへと入る。教室には数人の生徒しか居らず、恐らくもう半数以上(男子生徒)は校庭に向かったのだろう。学園の教室から校庭までの距離が意外と長くある為に早めに向かったのだろう、とガウエインは結論付く。

「御伽銀行もそうだけど、美々たちも凄いことになってるみたいだね」

そこで白兔が鞆を持ちながらガウエインに話を切り出す。

「それは・・・その、済まない」

「何で謝るのさ。無表情だから怖いなあ」

色々と策略謀略巡らせまくった御伽銀行と宇佐見組、廊下を歩けば嫌でも耳に入ってくる謀略戦に、ガウエインは苦い顔を浮かべるしか無かった。

「僕と美々は幼なじみなんだ」

「・・・そうだったのか、だから名前を」

「うん、人が居なければ美々も呼び捨てで僕のことを呼ぶよ」

にこやかに笑う白兔にガウエインも理由が分かり頷いた。

「実はね、今回のことは御伽銀行のお陰で『良い方向』に向かうと思うんだ。あと感謝かな？」

「・・・!?!?・・・」

「あからさまに驚くね、しかも器用に無表情ながらで」

『良い方向』と『感謝』という言葉に驚いていたガウエインに思わず語った方の白兔もたじろぐ。

「美々の性格は薄々と分かってきているんじゃないかな？」

「・・・言動やらでな」

頭取の指示で何やら乙姫と御伽銀行一年生メンバーで宇佐見を陥れたような話を鶴ヶ谷から聞いたが、もしかしたらその時から宇佐見もスイツチが入ったのかもしれないと予想する。

「・・・美々も色々と大変なんだ、過去むかしのせいで早く大人になってるんだよ。もちろん心がね」

ガウエインと一緒に教室に出て、廊下を歩く。

「なんて言うんだろう、早く大人が何なのか、大人という責任とかを知っちゃった、て言うのかな。とにかく、間違えた。僕がとやかかく言える程目に見えているわけじゃなけど、確かに言えるんだよ。間違えてるって」

廊下から階段へと降りる。

「猫を被るって言葉があるけど、美々は本当にそうだ。上辺だけを大人しく、可愛く、清潔に見せる。でもいつまでも『化けの皮』を被ってはいられない。剥むがされる日が必ず来るって僕はずっと思ってた」

「僕が剥むがそうと思えば剥むがせることはいつだって出来た、でもしなかった」

「・・・巧うまく事が運うばない、から？」

階段を降りた辺りで、先に歩いていた白兔がガウエインに振り向き、小さく頷いた。

「僕も策略とか得意じゃないんだ、一度臨み込もうとしたけど、失敗が確実に予想出来た・・・なんとも情けない話だけど」

アハハ、と失笑する白兔だがガウエインは真面目に聞いていた。ガウエインも策略や謀略など得意な方で無いから共感する部分があったのだ。

奇策も無いし頭のキレも早くは無い、発想も無い、何も無い。

「失敗するのが確実に分かったのは、僕よりも美々の方が策略戦が得意だったから、かな」

確かに宇佐見の謀略戦を見る限り、場数は踏んでいる様子だった。だから御伽銀行も総力を上げて謀略戦に挑んだ。

マンモス校である御伽学園に噂を広げ上げたのも御伽銀行だ。

「機会を窺っていた……剥がそうと思えば剥がせると言ったのは、仲を拗（こじ）らせる可能性があったから、しなかった」

「……下手をすれば絶交もあり得たか」

「……うん、結局我が身が大切でやらなかった臆病者さ」

「そんな事は無いと思う、誰だって仲が良い友を失うリスクを負ってまでやろうとは思わない」

「でもそのせいで美々が傷付いてしまうかもしれない、それは嫌だ」  
その言葉で下駄箱で靴を手に取りろうとしたガウエインが停止する。

「我が身が大切で、友も大切とは……それは我儘だと思うぞ」

思わず呟いてしまったガウエインだったが、ふと頭の中にマジョーリカが浮かんだ。

例えマジョーリカとの関係を壊してしまっても、彼女を正しくする為に敢えて壊す覚悟。

彼女が傷付くくらいなら、自分が傷を負えば良い。

何て男々（おお）しくも美しく、尊く、清らかなで、やけに「甚だしい話」だ。

美談として及第点だろう。だが実際ともなれば、難点であり汚点じゃないか。

思考を巡らせるガウエインに、我儘と言われた白兔は、特に憤慨することも無く素直に反応する。

「ハハハ！ 確かに！ これは紛れもなく我儘だ」

責めた言い方をしたのだが、意外と芯が強い少年なのかもしれない

因幡白兔に、ガウエインは向き合つて瞳を見る。そこには真つ直ぐな眼差しで、虚弱とは思わせない強い意思で伝えてくる。

「でも僕は、美々の為ならその我儘を棄てるよ」

「……………」

「あ、いや、棄てられるように、なりたくない…かな?」

「……………そこが曖昧では締まりが無いな」

同級生に真顔でクサイ台詞を吐いたことで羞恥心が浮上してしまつたのか、白兔は白い肌を赤くして指で顔を掻いていた。

だがガウエインには、白兔が騎士のように一気高(つよ)く見えた。上品があるとか、気品があるとか、品性とかでは無く、自信強く頂上高い存在に見えた。

自分を犠牲して守る強さ。

いざとなれば我が身を盾に宇佐見を守ると言つた白兔に、ガウエインは敬意を示した。

「強いよ、白兔」

「そんな事ない、ただの臆病な白い兔ただけだよ僕は」

本当に締まりが無いな、ガウエインは珍しく、口角が吊り上がった。



『さあーやって参りました! ミス御伽学園コンテスト☆ 学園の美少女たちが今日この日に為に己を磨き、輝ける原石となって登場しますっ★ 刮目せよ男子ども! 司会はわたくし、天使のさえずり下桐すずめでくす☆』

始まつたミス御伽学園コンテスト、壇上の上では見事な陽気なMCを演じる下桐すずめが司会進行していた。ガウエインは白兔と最前列まで行こうと、男子生徒を掻き分けながら進んで行くと、途中で『御伽銀行特等席』と書かれた看板の前に座っている御伽銀行男子メンバーが鎮座していた。

どうやらガウエインの分まで席を用意してくれていたらしいが、虚弱体質である白兔に席を譲ろうと振り向けば、もう因幡白兔が消えて



いた。

「・・・聞きたいんだが」

「ん？ うおツでかつ！ 黒軋じゃん」

「俺の背後からくつついて来ていた奴は・・・」

「えっ？ そいつなら顔色悪そうにして口押さえながら校舎に戻ってったぞ？ ホラ階段上がってる」

「・・・本当だ」

人の群れに酔ったか白兔よ！ とガウエインは先程垣間見た白兔の雄々しき姿を早くも霧散しそうになったが、教えてくれた同級生にまず礼を言ってから、やはり記憶に留めて置くことにした。

ガウエインは御伽銀行の特等席に向かえば、頭取と亮士が向かい入れた。

「生徒会のお手伝いご苦労様だねガウエインくん？」

「お疲れさまっス」

ただ唯一、浦島太郎だけは真剣にコンテスト会場を見ていた。

浦島の隣にパイプ椅子があつた為、ゆつくりと席に着いたガウエインはふと浦島に聞いた。

「乙姫が心配か？」

「・・・ああ」

珍しい言葉数少ない浦島にガウエインは心配そうに思えたが、すぐに意識が会場にへと向いた。

エントリーした美少女たちが会場に現れ始めたのだ。

「残念、アリス君は出てないみたいだね？」

「・・・吉備津先輩もエントリーしてたんですね。知らなかった」

「いや、部室で言っただっスよ騎士先輩」

水着審査なだけにエントリーした女子たちの水着はどれも男子生徒たちの心を燃えさせるものだった。特に風紀委員長でもある吉備津桃子の水着は高校生として大丈夫なのか？ と鼻息荒れる男子たちが目に血が走るギリセーフなまでに危ないライン。

様々な水着を着た少女たちが各々のアピールタイムのスタートが下桐すずめの発言により始まった。



んなこんなでアピールタイム終了でつす★ それでは男子生徒諸君？ 一人一票の投票お願いしまあす★ 一人一票ですからねえ？」

※

『いやあ良かったよMC！ また頼むね、すずめちゃん♪』

「はいイ、是非また放送部をお願いしますねえ☆ 部活予算とか諸々」

『いやあ致し方ない！ これは致し方ない！ 考えて上げようじゃないか御伽学園放送部めい！』

「きやあアー☆ ありがとうございます♪ 副会長お★ 仮面とマント超イケてますう☆」

『アツハツハツハ！ ワツシヨイ上手いな君はまったくアツハツハツハ！』

「吉備津先輩イイ！ またあの副会長が権力振りかざして生徒会予算を破産させようとしてまアアす!!」

「あらあら何いグレーテルちゃん？ 私にそんなに副会長の貞操を食べてもらいたいですって？」

『私の操は私のものだ!!』  
「きやあアー★ 副会長男前えく！ そして生徒会混沌としてますう」

生徒会が漫才している仮設テントには続々と男子生徒たちが投票していく中、着々と全男子生徒の投票が集まっていく。

この投票で決着がつく。  
固唾を飲むは御伽銀行。選挙中の政治家もこのような心持ちなのだろう。

ミス御伽学園を決める方法は実に簡単でよく用法される投票だった。投票は任意、一人一票で男性しか投票できない。校内の何カ所かに投票所が用意されていて、投票は午後五時に締め切られる。

「それでは締め切らせて貰います」

『あーダメダメ。ダメだよちゃんとやダメ』

「これより選挙投票された票数の合わせに入りますので、副会長も早く選挙管理委員会本部にお戻りください」

『ちよつとちよつと、七五三木さん？ 何の為の苗字なんだい？ 何の為に私はこの投票所で任されている選挙管理委員会の七五三木委員長の元に居たんない？ それはね、君の姓名が正にこの日この時この“締め切り”の“しめきり”っていうこのユーモアな間をどれだけ心待ちに——』

「あー……その男子生徒、すみません。ミス御伽コンテスト会場、もしくは選挙管理委員会本部に連絡をお願いします。ええ、内容はこの神出鬼没の仮面副会長が一介の女子生徒のコンプレックスをガリガリ掘り返して愉悅に浸っていることを事細かく緻密にお願いします。……ええ、名前を教えてください？」——七五三木梨子ですが何か？」

学園の昇降口前にも設置されてある投票所でいつの間にか移動していた副会長も、自分の姓名にコンプレックスを抱いている真面目系メガネ美少女とマンモス校である御伽学園の選挙管理委員会の長を務めている七五三木に追い出され、呼ばれた生徒会の書記と会計によって捕縛される。

学園の昇降口前にも設置されてある投票所でいつの間にか移動していた副会長も、自分の姓名にコンプレックスを抱いている真面目系メガネ美少女とマンモス校である御伽学園の選挙管理委員会の長を務めている七五三木に追い出され、呼ばれた生徒会の書記と会計によって捕縛される。

肅々と、だが着々と投票が集計されていき、即日開票された結果が御伽学園の校庭に建設された最新鋭の電子モニターにて知らされる。

その校庭に天高く建てられた電子モニターの前に集まるのは男子生徒も勿論のこと、女子生徒達も楽しみにして待っていた。皆が一体誰がミス御伽学園コンテストの『学園一の美少女』になるか話し合っでは熱を込めていた。

そして、即日開票を心掛け一気呵成に集計し続ける生徒会の面々。

——と言つても御伽学園生徒会書記を務めるグレーテルと風紀委員会委員長兼生徒会会計でもある吉備津桃子を筆頭に奮戦し、選挙管理委員会も協力もあるので残り一時間も満たずに終了することを、愛する妹を眺めていたヘンゼルが予測する。

御伽学園の生徒代表たる“生徒会長”がこのヘンゼルという生徒。ドイツ人と日本人のハーフであり、髪も茶髪に近く、顔立ちも十人が見て十人が答える整った優しげある相貌。だがこのヘンゼルという男、“実妹”であるグレーテルにしか関心が持てないちよつと、というか果てしなくアブノーマルな性格の持ち主。だがそれ故に十把一絡げじっぱいとからとして他人と接すると同時、それは誰とでも“公明正大”として周囲に知られており、公平で良識的。バランス感覚が広大な為に『生徒会長』に適任な人物として高い評価を生徒から支持されていた。

『ミス御伽学園コンテストにも出場したのに、桃ちゃんには大変苦勞を掛けるな』

「ふふふ、それなら君も自重してくれよ。これ以上彼女たちを苦勞を掛けさせないでくれ。特にグレーテルには」

『君ら兄妹の仲睦まじさにはいつも手を焼かれているのだ。私の蛮勇に手を焼くくらい可愛いものだろう。おまけに他人と少し関係も必要してくるし、僥倖だと言つて前向きに喜ぼうとしようじゃないか』  
この神出鬼没の副会長は何処までが本気で何処までが戯れているのかヘンゼルにとって計り知れなかった。

確かにこの副会長を捕まえるには否（いや）が応でも生徒たちから話を聞かなければならない。そして、親しい者同士なら尚有力な情報や、もしかしたら協力してくれるかもしれない。それも全てやはり“関心”が無ければその親しい関係も築けない。それを見越して行なっているのか、はたまた本気でふざけているのか。やはりヘンゼルは理解出来なかったし、理解しようとする関心さえ向かなかつた。

「グレーテルの為にしてくれているのは嬉しい事だけど、余り度を過ぎると僕も動き出すかもしれないねえ」

『フハハ、勘弁願える。家族の恨みは憎しみの根底より深しだ。ちや

んと弁えているだろう？　こうして捕まっている訳だしね」

「ああ、だから縄で縛られているのかい？　テントに着いた時グレーテルが怒りまくっていたから何かしたのだろうな、と思っただけど……。それとだ。君いい加減に選挙管理委員長をからかうのも止してくれ。名前は忘れたけど」

『七五三木梨子ちゃんだよ、君もいい加減生徒の名前くらい覚えていたらどうだ？』

「グレーテルのことなら何でも知っているんだけどなあ……」

そんな会長と副会長の実に他愛の無い話をしていれば、グレーテルと桃子が投票結果を記した紙を片手に、二人を呼んで結果発表の準備を促していた。

生徒会長は愛しき妹と一緒に選挙管理本部に微笑みながら向かい、副生徒会長は縛られていた筈の縄をいとも簡単に、難なく解いて生徒達と共に電子モニターの前にへと向かっていったのだった。

※

「それでは皆さんお待ちかね♪　投票結果の発表です！」

ミス御伽学園コンテストを行われた会場に立つは御伽学園放送部の自称『天使のさえずり』下桐すずめ。司会アナウンサーの改造制服が似合う元気なすずめも今この場のテンションにも打って付けである。

そして会場の中央に鎮座するのは御伽銀行の面々であり、最もこのコンテストに力を入れた労働者である。その場所からでも十分に電子モニターが見えたことで、発表される順位もきつと一人残らず分かるであろう。

その御伽銀行の中、一際目立つのが黒靴ガウエインであり、黒い改

造制服に浦島よりも大きな身長。恐らく会場からもガウエインが何処に居るかなど分かるだろう。そんな誰よりも一つ目立つであろうガウエインに近寄るのは更に一際一層誰よりも目立つ御伽学園の自称・仮面貴公子。生徒会副会長が近寄って来たのだ。

「君は本当に目立つねえ？ 暑くないのかい？」

『やあ、桐木リスト。これも慣れれば大概大丈夫なものだぞ？ それとそここのあからさまに嫌そうな表情を必死に作ろうとしている無表情騎士に何か言ってくれやしないか？』

「黒軋くんはありのままが良いんだよ」

高等部三年生ということもあり、仮面を被る奇抜な格好の副会長と桐木リストは顔見知りだったらしい。互いに軽口を言いながら電子モニターにへと視線を戻す。会場で仕切るすずめによって進行する。

「それではまずは10位から4位までをどうぞっ♪」

その言葉を合図に、電子モニターに10位から4位までの準備が上下に並び、一つ間を空けてから名前が羅列する。

名前が映った瞬間に歓声を上げる生徒達。互いに笑い声や嬉しそうな声を上げていた。特に男子。

『ほー・・・4位の大槻恵美さんと5位の矢吹美和さんとの票数が凄いな。123票と97票か』

「点差が確かに差があるけどねえ、御伽銀行にも嬉しい名前が表示されているよっ。」

「あっ！ おつう先輩10位っす。凄いつスね！」

『メイド服効果というヤツだねえー！ あそこまでメイド服を着こなす淑女は居らんだろう。その所はどうだいガウエイン!!』

「元氣良く振ってこないで下さい。仕事に戻ってはどうぞです？」

メイド好きの組織票が多数入ったからか、漫研ア二研の票もあるだろう。だがそれでも鶴ヶ谷が10位。

(これは、上位に入るのはまず無いだろう)

はつきりと、ガウエインは頭の中で結論付いていた。事前に聞いていた互いの妨害工作や人物月旦の低下工作。上げるのでは無く下げの手段。ガウエインからして、良くて今の10位から4位までに竜宮

乙姫が入っていれば正に上々だったのだが、

『はっはっはっ！ やはり上位を目指すには人物崩壊してはいけな  
いということかな！ ある一種の賭けだが』

副会長の言葉にガウエインは別の同じ意見が浮かんでいた。

対決していた二人は学園での“外面”を互いに剥がしあつて、“内  
面”を晒け出しただけのことだった。

人間やはり合う合わないの自己主張が激しい生き物。宇佐見美々  
と竜宮乙姫の“内面”を『それも有り』と理解した人も居るかもしれ  
ない。だが世は千差万別の地平線。嫌う傾向もある人間はとことん  
嫌う。

学園のでは『嫌う』とまで行かずとも『苦手』とまででは行くかもし  
れない。

(それに、大体頭取の考えも読めてきた。だがこの“流れ”が濁流と  
ならなければ良いが……)

先を少しだけ読めたかもしれないガウエインはただじっと、この先  
の流れを待つことにした。

「それでは上位三位ベストスリーの発表です☆ 第3位はあく……魚住メイさん！  
249票！」

第3位は綺麗なプロポーションの上に健康的に日焼けした水着の  
痕あとがなんとも少年たちの心を踊らせた。爽やかさと守つてあげたい  
保護欲を引き立たせる可愛いさ、さらに美しい四肢にビキニを着た美  
少女の魚住メイ。確かに“夏の美少女”とキヤッチコピーでも出し  
て宣伝に繰り出せば皆が釘付けになる天然の美しさで可愛らしさを  
感じさせられた少女だ。ガウエインからも男子から見ても夏の美少  
女は“短髪”が似合う少女が至高であり、本当に魚住メイは短髪と水  
着が似合う少女である。

何故彼女が一位では無いのか、ガウエインは疑問に思ってしまった  
が、上にはその天然水で夏をすつきりさせてくれる美少女・魚住メイ  
より居たという事実。

魚住メイ本人も三位でも十分に驚いていて、凄く喜んでいる彼女  
に、男子生徒たちは次々と心を奪われていった。だがまだ終われな



い、と男子生徒たちは身を震わせた。

そして続いて審査結果の第二位はと言うと、

「続いて第2位！ 吉備津桃子さん！ 342票です!!」

下桐すずめの発表と同時に、壇上が上がっていた吉備津桃子が文字通りに胸を張って『当然よ♪』と言いた気に悠然とし、堂々とした姿で構えてみせた。

なんとけしからん水着なのだろうかムフンツ!! と言わんばかりに御伽学園の男子生徒が吉備津に視線が釘付けだ。女子高生でも絶対的な自信がなければ着れない水着を堂々と着ている桃子。豊満な胸を惜しみ無く強調としたラインある黒のスリングショット寄りの水着で、見事に胸元からお臍へそまで中心が空いている水着だ。

もうそこら中の男子生徒たちの熱気は治まることを知らず、発狂したかのように叫びまくる生徒たちまで出てくる位に刺激が強すぎる水着だった。同性からは訝しむ視線もあつたが、多くの視線は羨む者が多かった。

この超美体保持者フェイスプロポーションホルダーである吉備津桃子以上が居るのか!? というほどに男子生徒も女子生徒も興奮が醒めぬまま、下桐すずめの進行に耳も目も釘付けだった。

「そして、第一位は!.....」

下桐の固唾を飲むのは壇上にて対決する竜宮の姫と黒き兎娘。見守るのは御伽銀行の面々。

「私が勝ったら、分かってるのよね」

「その言葉、そのままお返し致します」

内面に籠ったその声質に、宇佐見美々と竜宮乙姫の並々ならぬ決意が滲み混んでいた。乙姫は絶対に勝つ、と己に言い聞かせ。そうしなければならぬという使命を帯びたかのように自分に鞭打つ乙姫。

まるで幼かった自分との、弱かった自分との決別を決断するかのように、乙姫は心強く待ち構える。

(絶対に買ってみせます! 太郎様の為にもっ!)

さあ、いざ! と言わんばかりに下桐の言葉に一言一句聞き逃さないと言わんばかりに聞き耳を立て、そして出された結果は.....、

「……輝かしいミス御伽学園コンテストの頂に立ったのは！

しらゆき・ひめの白雪姫乃さん！ 433票!!」

「……えっ？」

輝かしいミス御伽学園コンテストの優勝者になったのは、とても暖かく、優しい風を纏い、穏やかな笑顔を向けて生徒たち皆に向けてお礼の手を振って感謝している高等部三年の白雪姫乃だったのだ。

全生徒たちから惜しみ無い拍手を贈られ、優勝者には王者の資格かのように、王冠と赤いマント、そして優勝トロフィーを贈呈される。

その様子を見ていた御伽銀行の面々は、

「まあ、こうなつた訳だね？」

「……頭取は最初からこれを狙っていたのですか？」

泣き崩れる（内心煮え立つ）宇佐見に追い討ちを掛けるりんごを遠目に、ガウエインは計画通りといった感じに事の顛末を眺めている頭取に聞いた。

「まあ、ね」

頭取はガウエインの質問に答えながらも、横に座る浦島に目を向けている。浦島もなにか思う所があったのか、ただ黙って、落ち込む竜宮乙姫にだけ視線を向けていた。



ミス御伽学園コンテストを終え、無事に終幕したコンテスト会場は茜色に染まっており、誰も居なくなつた会場にただ一人、落ち込んでいる少女がペタンと座り混んでいた。生徒会役員たちも後片付けは明日に構え、帰つてしまっている。

「……」

負けてしまった。何故負けてしまったのか理解出来ないといった感じに下を向く竜宮乙姫は、負けた事実と、浦島に対して申し訳なさ過ぎて、悲しんでいたのだ。

(・・・意地を張り、とことん勝ちに向かつて突き進んだ結果がコレですか・・・御伽銀行の皆様と、太郎さま、に、申し訳・・・・・・・・・・) 本当に泣きに入ってしまった乙姫に、

「落ち込むにはまだ早いよ?」

「えっ?」

声が掛かった方に目を向ければ、そこには協力してくれた御伽銀行の頭取・桐木リストが立っていた。女性みたいな細身の体つきなのに、今夕日の光に当たる頭取はとても雄々しく堂々とした立ち構えだ。

『落ち込むにはまだ早い?』 頭取はそう言ったが、乙姫にとって今は理解しようにも負けたショックで頭も回らない。

「おいでよ、竜宮君」

そういって、乙姫を動かし催促をする。

壇上に立っていた頭取は、地面に降りて未だに残っているコンテストの結果表が貼られたホワイトボードまで移動する。乙姫は大人しく言うことを聞いてホワイトボードまで移動すると、頭取が静かに人差し指をある票のある所まで移動させて、『ここ見てみなよ』と優しく語り掛けてくれる。

この先輩はあんなに迷惑を掛けたていうのにどうしてこんなに優しく語り掛けてくるんだろう、と不思議に思っていた乙姫が目線がその頭取が指差す箇所を見てみれば、そこには、最下位にあった二つの名前。票数を集計した数もあったが、分かりやすいように、乙姫の票数に『1』とだけ入れられた数があった。

「この一票、誰が入れたのか分かるよね?」

そういって、頭取は胸ポケットからある紙を一つだけ取りだし、乙姫の掌に握らせた。

「まさか・・・・・・・・」

「この勝負、乙姫さんの勝ちですよ」

会場本部のテントから赤井林檎がそう言ってきたが、『勝ち』というのには宇佐見には勝ったというだけで、コンテストでは一位にはなれなかった。

「竜宮君、君が本当に欲しかったのは、本当に大好きな浦島君の一票じゃないのかな？ でも君は過去と勝負にこだわってそれを忘れちゃってた」

「だから今回、敢えて宇佐見さんと乙姫さんの好感度を落とし、乙姫さんにその一票の重みを感じて貰いたかったのです」

副頭取である桐木アリスも頭取と並び、今回の行動の意図を説明する。

「まあ、竜宮君の依頼を果たせなくて申し訳なかつたけどね？」

その意味を知り、握られた掌にある折られた紙を小さく開けば、そこにあつたのは愛しい人が書いたであろう『竜宮乙姫』の名。

その字を見た瞬間に、瞳から雫が流れおち、その紙を大切に額まで移動させ、ただ想う。愛しいあの人を、と。

そして、横から感じる「あの人」の気配に気付いた乙姫は、涙を流しながらも、確りと視線を向けた。

「太郎、さま」

そう、そこに立っていたのは今日この日の為に頑張つてこれたであろう健康的な褐色肌と長身、そして女性であれば振り向いてしまうであろう端麗な顔付きである少年・浦島太郎がそこに立っていたのだ。

「乙姫は頑張つて可愛くなった、もう過去なんて気にする必要なんてない。他の人間の評価なんてどうでも良い・・・このオレが可愛いと思つてるんだから・・・それで十分だろ？」

誰が何と言おうが、誰がどう思おうが関係ない。乙姫が可愛いと思つてる自分が居るだけじゃダメなのか？と、そう思わせるような優しい眼差しで、浦島は乙姫に向けて皆に見せるような笑顔じゃなく、口角に皺が出来るくらい大きな笑顔の、ちよつとカツコ悪くて情けなさそうな顔で笑つた。

乙姫はその笑顔を見て思い出す。小さかつたあの頃の浦島の笑顔

を、  
あの頃と変わらず、あの頃の『亀子』と呼ばれてた乙姫でさえ『可愛い』と豪語してくれた浦島に涙が出そうになったあの頃と変わらず笑顔を向けてくれた。

(ああ………本当に……)

胸が突き破るくらいに、暑くて苦しくて、好きで愛しくて、あなた様の近くに居たいと叫ぶ心に、乙姫は口が震えながらも愛しい名を呟く。

「たろ……う、さま」

自分でも驚く程に震えていた声で呼ぶ。

「たろう、さま」

愛しい想い人の名を、大切に、呼んだ。

「乙姫は、乙姫は……」

「本当に、可愛いやつだよ、馬鹿みたいに」

乙姫は涙を隠そうとせず、大好きな浦島の元に飛び付いた。ぐしやぐしやになった顔を、浦島にだけ見せる。大事に受け止めてくれた浦島を好きですと何回も泣きながら言えば、浦島は優しい声色で『オレもだよ』と応えてくれた。

御伽銀行の面々はそれを優しく見守り、『良かったね』と呟いた。

亀は助けてくれた恩人を愛した

美しい乙姫ひめとなり

迷惑になると知りながらも

愛し尽くす限りを饗もてなした

亀じゃなく、乙姫ひめにしてくれたあの人を

いつまでも、愛してしまった

## 第22話 「騎士の兄の弟妹と金太郎」

黒い意識の中、黒軋くろきしガウエインは微睡みの中に居た。

あのコンテストを終え、竜宮乙姫も浦島太郎も、考えがまた一回り変わったかもしれない。そんな事を思いながら、ガウエインは重い瞼を開けようと、目を開けた。

さあ、朝日を拝めて目覚めよう。それがガウエインの日課なのだ。気持ち良い朝を迎えようと、目をゆつくりと開け、脳もゆつくりと覚醒しようとガウエインが目を開ければそこには、

「あふん、おはよん♪ お兄ちゃん」

男が布団に入っていた。



「やっぱり朝一の散歩は何処も気持ちが良い、田舎を思い出す」

そう男前に言っているのはなんとあの森野亮士もりのりやうしだった。早朝もなればまだ誰も起きてないだろう、も思っていた亮士だったが、この『御伽花市』の街も誰かしらは起きていたりしていた。

早朝出勤の勤労戦士サラリーマンや新聞配達人の姿が見える。だが亮士とて愛するオオカミおおかみさんりやうしこと、大神涼子の為にも視線恐怖症を克服する為に実家から連れてきた猟犬のエリザベスとフランソワの白黒犬を連れて散歩をしていた亮士が、地区を一周くらい回り、ご近所さんに軽く挨拶をするくらいの訓練を終え、未だ元気に荒く呼吸している二匹を撫でながら犬小屋に戻そうと、叔母の村野夫婦の屋敷の庭に入れば、

ガラガラーツツ！ と窓が開く音がしたと思うと、  
「ぎゃあああああああああ!! 落ちる落ちる落ちるうん?!

何コレ新手の愛情表現かッ? 新手の愛情表現なの!」

「落ちろ」

「わー目が笑ってないー!」

ガウエインの部屋の窓から飛び出したのはこれまたガウエインに

そつくりな少年がガウエインから落とされそうになっていた。

「なななな何してるんすか!?!」

当然その行為に驚き、亮士は慌てていつもの口調で戻って先輩の殺人行為を止めようとする。するとガウエインも正気に戻り、

「悪かった、もつと朝早い時にやった方ご良かったな」

「朝6時よりっすか!?!」

「朝4時」

「時間リアルっす!」

「じゃあ夜だな」

「ちよつと良いですかあああ!?! マジでいい加減オレ落ちるんですけどオ!?!」

「ご近所にご迷惑かけるな」

「うなあああああああああああああああああああああああああ  
あっつっ!!?!?!?! ずり落ちるウウ! ベランダからずり落ちるうううう  
う」

うるさい、と言いながらガウエインがその男を口を押さえ込みながら部屋に戻して窓をピシヤリと閉めて事を終えた。

ただ一人、何とも言えない表情のまま意味も分からない亮士はただ、ガウエインの部屋からまた男の悲鳴を聞きながら愛犬たちにエサをあたえた。

どうやらこの喧騒には慣れたらしい亮士だった。



「いやいやいやなにになに? 弟を殺して有名にでもなりたいんす

か兄貴? こんな可愛い弟を」

「すまない、寝惚けていた」

そう言っつてガウエインは先ほどの行動を重く反省する。本当にご近隣の方々に迷惑を掛けてしまった。

『まったく兄貴はまったく』と言いながら、質素な部屋作りになっているガウエインの部屋で横になるその少年。

「何しに来た、アグラ」

「えっ？ 遊びだよお兄ちゃん。あつ、この読んでくれてんだこのライトノベル♪ 嬉しいぜ」

アグラと呼ばれた少年は戸棚に綺麗に並んでいる中、ひとつだけ抜き取ってあったライトノベルに注目しながら、ガウエインに向き合う。

容姿は完全には言わないが、ガウエインに異様に似ており、確かに兄弟と言えば納得すると思うのだが、ガウエインもベッドから出て、黒を強調とした部屋着のままアグラと対面し、

「お前は従弟だろう？」

「従弟だけど、弟だしよ？ だしよだしよ？」

「……」

『……まあ、そうだな。フッフッフ』ぐらい言つてよ……寂しいよー」

「お前今のオレの真似か？ 似てないぞ」

「分かつてるよ分かつてますよ！ え？ そこツツコむの？ 相変わらず天然で最高だぜ兄貴！」

「で、一体何しに来た」

「おふ……唐突にモドツタ」

従兄弟同士であつたアグラは、まあ良いか、と自己で納得して兄に話す。

「実は従兄あにに相談したく参りましたに候」

「金か？ この前貸したの返さないと貸さないと」

「えっ？ まだ返してなかった？」

「お前マカには金を借りない方が良い、叔母さんに情報行くから」

「マジで!? え……マジで? ……ええ……何それマジ、ただ今日用事の頼み事に来ただけなのにスゲー嫌な情報もらった……マジヨ姉マジかー」

ダルンと床に俯せになって何もかもきだる気怠そうになったアグラはウネウネとくねりながら『オレ鬱だよー今から鬱だよー』とアクションし始める。ガウエインはそんなアグラに慣れているのか、朝から起き



たばかりで空腹な腹を摩りながら、従弟の用事が何なのかを想像している。

「だるくだるダルく高一にもなって従姉に親に密告されてのにダルだるダルく」

「おー（・・・腹減ったな）」

「だるダルく、あくお兄ちやま、コンビニで買って来たパンあるから食ってエエよ」

「良いのか？」

「だるダルく」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だるダルく」

「・・・・・・・・（もしやもしや）」

「だるダルく（ダルもしやもしや）」

折角買って来て貰ったんだからと、ガウエインは自分のを食べながら従弟にもパンを食べさせてあげていた。兄が黙ってパンを口まで移動させて来たから弟もすかさず口を動かしてパンを咀嚼させていく。

二人が簡単な朝食を済ませ、アグラは従姉のマジョーリカに報復を考えながら、従兄のガウエインと一緒に零したパンのカスを拾いながら用を話す。

「ガレスに悪い虫がくつきそうなんだ！」

「ベッドの下の方も見るよ、掃除するのオレなのだから」

「あ、はい」

暫し、二人は無言でパンクズを拾い、

「ちやうわっ！」

「15分か、頑張って我慢したな。偉いぞ、お前が15分も黙って行動するなんて」

「あのねオレ話したいのだから話す為に来たのだから話さないと進まないよ駄目だよねだって話進まないと用件終えないしガレスが悪い虫にくっつかれたままになっちゃうんだからマジ心休む暇も何もあつたもんしやねえよマジで兄貴どうすんのコレ何なの一体何なの

オレの心休ませない気が世界はどうとうオレの精神を病ませようと妹にまで魔の手が伸びちやつたのか？ あ、なに？ 神はまさか：ロリコンだったのか!? いや待て『ロリコン』が神なんじゃないのか？ 幼女が神なんじゃないだろうかそうなんじゃないんだろーかきつとそうだそうなのかそうなんだよ！ なんじゃそりや．．世界も神も幼女だったんだアアアアアアアア!？」

瞬く間に言葉を吐き出すアグラだったが、内容が内容でありガウエインも少し驚く。別の意味でも、

「ガレス、に悪い虫だと？」

「そうだよ兄い！ マジ何なんだよアイツ小学生の体軀からだじゃねえよ中学生だよ畜生ふざけんよマジだぞゴラアオレあ小学生にでも本気出せる高校生だぞゴラア熊みてえな凶体しやがって熊狩りして熊鍋にして食ってやろうか」

「アグラよ、先程から口が過激だし、何より兄はお前の将来が心配だ。取り敢えず。ダメ・ハンザイ」

「ハッハッ！ 取り敢えずオレはもう我慢出来なくなったからさあ、マジオレ今最高にキマっちゃってるからさアア？ マジなにすつか予測不可能？ つうかマジ怒髪天？」

「許してくれアグラ、お前の言語能力を理解出来ないオレを許してくれ」

「ふおううおお．．．もう、手が、手が震えてくらあ．．．あの熊を退治しろよとオオレに囁いてくらあ〜あ」

「手で．．．」

「ギハヒヒヒ．．．イクゼ．．．オレはやるぜ．．．ヤツちまうぜエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

いい加減壊れた従弟モノを叩いて直さなくてはと、ガヴェインが朝一の素晴らしい容赦かんじょう皆無の張り手をバシイイイイイイイイイイイイイイイイイン!!! と耳にも大変ダメージを与えるほどに思えてしまう程の音を張って、見舞わせて、見事にベッドに吸い込まれるが如くアグラはベッドの中でブラックアウトした。

騒ぎに騒いでしまっているが、このおかし荘は比較的常識人が多いが、それは人並みということだ。ガヴェインも含め、余りこういう喧騒には慣れていない。だから皆は通常通りに働いてある。

だから、と。ガヴェインは小学生の従妹であるガレスを純粹に心配の念が浮かんだ。



「おつ、やっと騒ぎがおさまったな」

そう言つてニヤニヤと笑つているのは、この『おかし荘』を経営している主である村野雪女が氷を沢山に入れた透明に輝くサイダーを片手に朝食を食べ終えていた。普段ならまだ寝ている時間だったのだが、

「雪女、また本読んで徹夜したんだろ？ 体に悪いって言っているだろう？ どうして止めないかなあ」

「どうしてだつてえ？ そんなの分かつてんだろう、す……」  
「……好き」だから、だろう？ そりゃ口が酸っぱくなるくらい言っているんだから覚えるさ。それでも僕は何回も言うけどね」

広いダイニングにあるテーブルで食べていた雪女に、台所から現れたのは夫である村野若人むらのわかとだった。相変わらず穏やかな口調と雰囲気であったが、妻の雪女がかなりの本好きを為に困った様子で小言を言うが、本人は知らぬ顔だ。

まったく、と言いながら若人が雪女の食べ終えた食器を片付けようと雪女に近付くと、

「このオカンめっ」

「おつと、雪女の行動パターンなんて知っているさ」

そう言つて膨れっ面になつていた雪女の軽い足蹴りを避け、華麗に食器をテーブルから片付ける若人が雪女にドヤ顔を漂わせて台所へと戻つていった。若人の軽い牽制けんせいだろう。ドヤ顔されなくなつたら徹夜読書止めなさい、という若人の意思が雪女にも伝わるほどの行動力だったが、

「ふん……今日新しい本出るらしいからこりや徹夜で読むしかないな、うん」

しまった、逆効果だったか。と台所までわざと聞こえるように言った雪女に、若人は皿を洗いながら微笑した。そして雪女も冷たくて美味いサイダーを飲みながら家の玄関に繋がる廊下側のドアに目を向けると、甥の亮士が呆れたように立ちながら見てた。

「また若人さんにちよっかい出したんスカ?」

「ふん、ラブラブだったろ?」

「ラブラブっスカ」

なにやら亮士は慣れた感じで叔母の相手をしながら、リードを片付けていると、

ピンポーンっ!

うん? と亮士は先程入ったばかりの玄関から鐘が鳴る音に反応する。だがここで直ぐに出る亮士では無い。『アレ、どうしよ、出ないとダメだよね?!』とかなり焦りと緊張で頭が真っ白になる亮士。

見兼ねた叔母が、まったく情けない、と言わんばかりに固まった亮士の脇をすり抜け、来客が誰なのかを確認のために玄関のドアを開けると、

「あ、おはようございます。朝早く大変申し訳ありません。こちら、村野さんのお宅で間違いありませんでしょうか?」

「はい、そうですか?」

なんと玄関の先で待っていたのは、綺麗な金髪を肩までに切り揃えた外国人……というより半分は日系を感じさせる美少女だった。だからか、流暢に日本語を喋る辺り、かなり慣れていることが窺える。「申し遅れました。私はおかし<sup>わたくし</sup>荘<sup>こ</sup>に住んでおります兄、黒軋ガウエインの妹の『ガヘリス』と申します。失礼ながら念のため、これは偽名では無く本名です」

そう言っつて何とも礼儀正しく頭を下げてきたので、思わず雪女も頭を下げるが、

「ガウエインの、妹だあ?」

「正確には従兄妹なのですが・・・」

そう言つてガヘリスと名乗った金髪美少女は苦笑いを浮かべ、手に持っていた高級そうな菓子袋を雪女に丁寧<sup>ていねい</sup>に差し出した。

「貴女が村野雪女さんで間違いありませんでしょうか？」

「あ、そうだった。私が村野雪女です」

「ああやはりそうでしたか。兄から話を聞いていたが。まあ、本当にお綺麗なお方だったので分かりませんでした。失礼ながら大変お若くお見えになられておりましたので、森野さんのお姉さんにか見えていませんでした・・・。これは我が両親から村野さんにへとお贈りする品であります。本当ならば両親も挨拶に来る筈だったのですが何分多忙<sup>むかひ</sup>でして、失礼ながらガウエインの妹である私が挨拶<sup>わたくし</sup>に参りました」

見た目はカッチリ外国人なのに、かなり丁寧<sup>ていねい</sup>に礼節ある挨拶に日本人である雪女もたじろぐほどにガヘリスの言葉はどこまでも流暢<sup>りゅうせう</sup>だった。それに『お姉さん』発言に雪女は機嫌がすこぶる良くなり、温かくそのガヘリスを迎え入れようと笑顔で挨拶に答え、中に入って休んでいっては何？ と誘うも、

「大変嬉しい申し出なのですが、すみません。私の『弟』が先に兄に会いに行つたらしいので、先にそちらに向かわせてもらいたく・・・」

「ああ、構わないけど・・・場所分かる？」

「大丈夫です。先ほど騒がしい声が聞こえました。・・・そして、朝から騒がしくして申し訳ありませんでした。こんなに騒ぐのなら先に私が来ていれば良かったです」

「アツハツハツ！ 良いって別に。元気でなによりだからな」

まあ、とガヘリスと名乗った金髪の美少女は雪女の豪快さに驚きと共に微笑を浮かべて一緒に笑った。気を良くした雪女がやつぱりまた休むよう誘うとするも、

「雪女。あんまりお客さまを困らせてはいけませんよ。何かガウエインくん<sup>くん</sup>に用事がありそうな感じじゃないかな？」

雪女の後ろからエプロン姿でやって来た若人にガヘリスはまた深々と礼儀ある挨拶をすれば、若人もまげず綺麗な挨拶をする。





「なあなあ！ さつきのをあえて名付けるなら『ワガマイ：バーサーカー狂い暴れる我が妹』と命名しよう！ あ、コレ良くないスカね会長！」

「良くない・・・危うくガヘリスが勘違いであの世に行く所だった」  
「どうもすみませんでした」

「.....」

この狂暴化して襲ったのはヘンゼルの妹であるグレーテルだったという。名前さえ聞いていればガヘリスも原因がこの兄関連なのだということが分るので、素直に謝り倒し、そしてガウエインも間に入って説明をしたのがつい先ほど。だが、余りにも信用無く執拗にガヘリスを睨んでいたグレーテルだったが、兄のヘンゼルが優しく微笑んでグレーテルに察せるよう説明をすれば、

『そうですか』

の言葉だけで通常に戻った。

そして、普通に戻ったグレーテルは通常通り兄以外は余り感情を向けない顔に戻っていて、ガヘリスにも平然と、

「どうもすみませんでした」

「.....」

ここまで平然とされたら襲われた側は言いたいことを拳に乗せて伝えたい衝動に動かされるが、静かにガウエインがガヘリスの拳を握ってきたので、怒りよりも羞恥くろきしに駆られてしまう。

「朝から騒がしいから、黒軋君くろきしに文句を伝えに来ただけだね？ 何やら面白いことになっていたからお邪魔してたところだったんだ」

ニコニコと笑うヘンゼルにグレーテルはポオ、と頬を紅潮させる。もうアグラもガヘリスもこの兄妹をどんな相思相愛を示しているのか理解した。

「それで、休みの日にどうしたんだい？」

「いやいや、会長に話すほどにやあございませんで？」

「ああ、それとこのアグラ君は君の従兄弟だったみたいだね？ いやあ、似てるのは髪ぐらいじゃないのかな？」

「おつ、なんだ。話聞かない系かこの会長。それにオレを『この』扱スーパーサディストい？ あれ、SSか？ S Sか？」



ヘンゼルは予めガウエインから話を聞いていたので、そこまで説明することもなくアグラ達の用件を聞いた。因みなグレーテルは、大好きなヘンゼルの為に特性プリンをコンビニから買って戻ってきたらガハリスが居た為に勘違いを起こし狂暴化を起こした。

「めっちゃめっちゃ身内話だったね。これは大変不躰なことをしたよ。ごめんよ」

「いや、大丈夫ですよコレくらい」

「そうかい？ まあ黒靴君の『話』を聞かせて貰ったんだし。僕も一つ良いことを教えてあげよう」

ガウエインはそこで、なにか『裏』を感じる感覚に襲われる。この感覚は御伽銀行の頭取・桐木リストに、『魔女』の名を放つマジョーリカ。

そして『円卓の騎士』から挙げるなら『毒舌変舌のケイ』。

そして御伽銀行を軽く総動員させるまで至らせた白馬王子を思い浮かばせる。

つまり簡単なことで……『謀』を感じさせる空気だったのだ。

それは相手の弁舌を何を絡ませて味わい転がし、飲み込んでいる？ 全て知謀を走らせるものの為だと、頭の切れや発想を得意としな、ガウエインが唯一誇れる『直感や本能』からきたもの。

あの御伽学園の高等部生徒会の変人なマスク副会長からもたまに感じたりしていた。

とにかく、ガウエインの予想は的中することになるのだった。



とあるボクシングジムの前で、巨躯な少年と、まるで対比するかのようわいくに矮躯で華やかさを感じさせる少女が立っていた。

「オオオオオオレ！ ハハハハハハに、じゃなくて、こ、ここのジムに通ってたんだぜ！ オレ！」

「……………(コクン)」

「だ、だから。ひ、姫の言う通り。なまけないで、ちゃんと来たぜ！」  
「……怠ける、は……なすべきことをしない。働かない、動かない……こと。だから、今日だけ来ても……意味はない」

「ええええ!? そんな! オレがちゃんと練習サボらないでジムに行ったら、その、デデデデ……デートに行ってくれるんじゃないかなかったのかよ!」

姫と呼ばれた少女は、ゴスロリ衣装を着こなし、まるで異国の姫様然としたその美少女に、巨軀の少年はこよなく『好きです』オーラを漂わせてその子と一緒にボクシングジムの前で喋り合っていた。

「実は叔父貴おじきに呼ばれて、誰かと試合しあうことになってんだ! だから、ひひひ姫にはオレの勇姿を見て欲しくてよ!」

「……ボクシング? ほんとうにやるの?」

どうやら、このゴスロリ美少女が気になっているのは練習不足に自信過剰なこの少年の後の事だった。

普段小学校で、まるでボスだと言わんばかりに威張り散らしていたこの少年が、その小学校でいわゆる『高嶺の華』と呼ばれ、小学校で抜きん出て小学生には余る『美貌』を放つこの美少女・黒騎くろぎガレスがおかつば頭の大柄な少年・金太郎に忠言ちゅうげんする。

実は、この『姫』と呼ばれているガレス。小学生以上の体躯を持つ金太郎でさえ低姿勢なのは、このガレスの『美しさ』が皆を、自然と言葉と唾を飲み込ませていたのだ。

日本人特有の美しい漆黒の長髪が上品で優美な雰囲気醸し出しているというのに、表情を一切変えない顔も何処か一般の少女から放たれることはない儂さが強力な魅力の一つで、男の意識を射殺している。

そして同時に、小学生特有の守ってあげたくなる保護欲が更にまた魅力の一つ。だが、どこかその雰囲気から近付くことすら許されない優雅さで孤高孤立の華と化している。勿論小学生の男子生徒たちもガレスの美貌に目を奪われ、同性さえも嫉妬も出てこないほどに消失し、羨望と憧れの眼差しで見られている。

——が、それはやはり本人が望んでなどいなかった結末。

まだこのガレスという子も、小学生なのだ。友達と遊んだり、お話をしたり、勉学を育みたいと思っている。だが、実際に話しかけてきてくれる子は同姓の女の子少数。男子生徒はガレスが話し掛けるだけで体を硬直して顔を紅潮させたまま無言で終わり、またある男子生徒はガレスが来るだけで逃げてしまう。それが恥ずかしさからくる行動でどう対応すればいいのか分からない男の子の意思逃避だとしても、ガレス本人は最早イジメを受けていると思っても仕方なかった。

それも小学校全男子生徒たちにだ。

そんな時に、現れてくれたのが、この熊みたいな大きな体を持つ金太郎だった。

小学校の全男子生徒のボスにして、中学生にも負けない力で支配している生意気な子供。だが、如何に子供ながらにして屈強な金太郎の前にしても、ガレスの美しさに力は無力となるほどに霧散していく。簡単には言えば生徒たちが手を出すことも無かったあの『高嶺の華』に、この金太郎、臆しながらも手を伸ばしたのだ。

——『いいいいいい、いつひよに、あああ遊びようよー！』

恐らくあの小学校の中で唯一の『力』と『勇氣』を持った金太郎だったからこそ出せたであろうその言葉は、余りにも残念で無惨であった。言った本人でさえ赤から青のシフトチェンジしていく顔が分かった。

だが、ガレスはそれが果てしなく嬉しくもあり、それが果てしなく可笑しくて、クラスの皆の前で笑ったのだ。それはもう美しい顔から涙が出るほど笑っていた。金太郎はまた青から赤に変色して低姿勢ながらも抗議しながらガレスと笑いながら一杯話をした。その金太郎の行動が皆の塞ぎ止めていた一線を無くしたのか、皆がガレスに話しかけてくるようになったのだった。

この自分の力に心酔するほどの自己顕示欲の金太郎に、呆れながらも着いて来たガレスも自分に対して呆れ果てていた。

「・・・おおおし！　いつちよ見てろよ姫！　俺の強さつてのを見せー



面のおやつさんこと熊田さんに驚き急いで、慌てながらも確りと110番（何故か）にテレフォンしようとしていると、ゾロゾロとジムから屈強なマッスルマンが出てきて、その鍛え上げられた俊敏なフットワークで中学生を翻弄しながら取り押さえていた。

窓ガラスを割って飛び出していった熊田だったが、奇跡的に怪我ひとつしておらず、事務員とジムに通っていたメンバーからしつかりと説教を受けて窓ガラス直して再び再開。

「おう涼子！ おう涼子オー！」

「なんすか、おやつさん」

「甥っ子が、甥っ子が彼女連れて来やがったア！」

バムンツ！ とリングに拳を打ち付ける熊田。大神はなんで殴った？ ぐらいしか分かっていないが、事の重大さは大神も分かった。「お山の大将気取つてるところに、あんな可愛い娘まで一緒じゃもつと大変になりますね」

大神は先程、ジムコーチしている熊田からある頼み事をされていた。甥っ子である金太郎を打ちのめしてくれと。

熊田が初めて出来た甥っ子だったが為に可愛がり過ぎ、ガタイも良かった為に色々と仕込み過ぎ、今では周辺の小中学校のボスで、高飛車に自尊心がかなり出来上がってしまったという。そこで、今まで「負け無し」を自慢にしている金太郎を、女の身である大神涼子が打ち倒せば、自信を打ち碎けるだろう。負けを知り、己の未熟さを知るだろうと思いついた熊田の決断であった。

だが、そこに更に小学生ではまず予想もしていなかった『彼女』。更には付け加えれば熊田さんや金太郎一家には程遠い「優雅」さが熊田を吃驚させている一因でもあった。

最早すでにジム内で一番豪華で最良材質の最高級ソファーにジムメンバーが姫・ガレスを鎮座させ、最高の接待をしていた。

「へっ、オレは、オレは負けられねえんだよオ!! 勝って、勝ってあの娘に告白するツ!!」

そんな突然宣言をした金太郎。当然、

「「なにいいいいーっっっっ!!」」

ジム内が声の音圧で揺れた。

「なに言ってるんだマセガキっ！」

「止める止めとけ！ 小学生で玉砕されんのも酷だ。そりゃあ酷過ぎるぜー！」

「ぎげんなあ！ なんで、なんで彼女居ない!! 年齢の俺より先に彼女だとオー！ ふぎげんなあああああああああ!!」

「ぎしやああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「無理だつて無理。高望みすんな。お前はそこの辺のクマプーのヌイグルミ買ってきてそれで満足してろ。つか熊田コーチに似るお前が彼女wwww」

「あーハイハイ。妄言乙(笑)」

「(笑) ヲ、) ケラケラ」

「最後の三人出てこいや!!」

激しい文句が飛び交う中、大神は相変わらず騒がしいこのジムに笑しながらもウォーミングアップをしている。子供相手に本気を無しにしても、今の金太郎は女の大神涼子を舐めては掛かる。最初こそ楽勝だろう、簡単に予想がつく。だが、

(想いの強さ、は馬鹿には出来ねえな)

一昔なら、大神も負けはしないだろうが、この今の金太郎に牙を向かれていただろう。

だが大神は知った。『想い』という物がどれほどの力を発揮するのか。あの大神涼子を好きだと宣言した森野亮士を知ったのだ。

(たとえば、格上の相手だろうと、好きな奴の為の決死の一撃・・・もしそんなのがあれば、そりゃ相当キツイだろうな)

思わずにやけてしまった顔を引き締めるかのようにパンパン！

とグローブ同士を打ち付けて、感触を確かめる。

(・・・だがよ。おかつぱ頭の金太郎くん。お前には一度味わった方がいい。敗北の味を)

その苦い味さえ覚えていれば、必死にそれを二度と味あわないよう努力する。努力して、馬鹿みたいに努力して力を手に入れる。失う前

に手に入れる。

(それが、女である前に、まだ子供だった私が味わった『モ経験』だ) 　　まだ子供であるが、この世を知った少女としての贈り物。  
グローブを嵌めた両者が対峙する。

いつの間にかジム内も喧騒が止んで、大神と金太郎の試合に目が集まっていた。大神が不敵な笑みを浮かばせて、金太郎は煮え滾る意志を以て。

「じゃあ、始めだ」

カーン！ とゴングが鳴った。



私立御伽学園は幼等部、小等部、中等部、高等部、大学すべてそろった巨大学園だ。だが、それらの敷地はそれぞれ独立している。と言ってもそれぞれが御伽花市北の学園地区、幼等部から大学まで順に隣り合うようにして建っているので行き来には苦労しない。そういう訳もあり、ただいま黒靴ガウエインと、その従兄妹であるアグラとガハリスが御伽学園高等部からちよつとだけ距離のある『御伽大学』の校門に立っていたのだ。

用件は一つ。簡単なことで、人を待っているのだ。時間は早朝。霧が掛かっていたが徐々に晴れていき、朝露掛かった草木を眺めながら、三人は待っていた。

「あ、兄上。今日は私が作ったサンドイッチをお食べになって下さいまし！ その、兄上の好きなハムチーズツナマヨですよ！」

「・・・なん、だと!？」

ガウエインは手持ち無沙汰だったが為に、ガハリスは長い金髪を揺らして、鞆から綺麗に包まれたサンドイッチを取り出してガウエインに手渡した。

「・・・ハムチーズ、これだけでサンドイッチとして好物であるのに対

し、更にはツナマヨだと？　なんという、しよぎよう「諸行」

「仏語が飛び出るほどですか？　ま、まあ、善行といえは、良いことをしました。あ．．．兄上の、お腹を満たすという善行を．．．」

「うわああ、オレも腹減ってたんだよね。ただきパクツペロンツゴクンツゴツそさん！」

乙女な顔から一転して、無表情ながらシヨックを受けてプルプルと震えているガウエインにガヘリスはあつという間に双子のアグラにきじよ貴女から鬼女と化して、アグラの股間に容赦ない蹴りを喰らわせた。

「へぐうつ!？」

「毎度毎度貴様はなんだ?!　虫か？　虫なんだろ？　隙間から出てき

て勝手に物食って兄上を悲しませるなぞ言語道断！　情状酌量の余地すら無い死刑罪だ！」

「はふうんんん!!　ハツハツハツ．．．うつふつふうううううう．．．ダメ、だたダ、メ、ダメメメ．．．ダメツ！　ダメよダメツ！　ハツハツハツ、ああああああ」

男性なら分かる地獄の苦しみも朝御飯と同じく味わっているアグラを余所に、まだ残っているサンドイッチをガウエインに至福そうに食べさせているガヘリスたちの前に、やつと待っていた人物がやって来ていた。

その影が見えるな否や、猛スピードでダッシュしたかと思うと、ガウエインの背に思いつきり乗っかかる人物にガヘリスが声かける。

「お久しぶりですね。マカ姉上」

「おう！　おひささダヨー！　ヘイリスちゃん！」

ガウエインの長身な背中に乗ったまま挨拶してきたのは、ガウエインと同じく御伽銀行に所属している通称『魔女さん』こと、マジヨールリカ・ル・フェイだった。綺麗な金髪が地につくほど長いのが幼い頃より変わっていないことにガヘリスは嬉しくもあり、嫉妬心も浮き出てきた。因みに『ヘイリス』とは名前の『ガヘリス』が余りに女の子らしくない！　と自分より従姉であるマジヨールリカが騒ぎだし、ガウエインの『ガークン』と同じように愛ニツクネーム称を付けられたものだ。

「アレエ？　なんでアグーは地に伏してるヨー？　おもしろいヨーw



W W」

「■■■■■■■■■■ ツツツ!!!」

「バサカ声だヨー（笑）」

ガウエインはマジョーリカを落ちないよう器用に手を回して、優しく捕まえて地に下ろす。そして『アグー』もマジョリカから付けられたアグラの愛称だ。

「いやあー疲れたヨー。大学の研究室に呼ばれたかと思うとお急に教<sup>プロフェッサー</sup>授に『3囚人問題』の解法議論したヨー」

「『3囚人問題』？」

「確率論の問題だヨー。ベルトランの箱のパラドクスを下敷きにした問題だネー。問題自体は簡単なように見えるものノー、確率計算の結果が人間の直感と全く異なるためニー、これまで多くの研究がなされているヨー……特に日本の心理学分野において盛んに研究され、非常に多くの著書、論説、学会発表がある、だヨー」

さっそくアグラが興味を無くし、今日の授業の面倒臭さに欠伸をしながら思い耽り、ガヘリスは従姉の言葉をなんとなく理解しようとしてだけ聞き入れようとしているが、まったく理解できないでいた。

ガウエインも然り、マジョーリカが夢中で喋っている中、ヒョイツと軽くまた肩に抱えると、『行くぞ』と告げて歩き始めていた。

「ぶーぶー！ 話をスルーされたヨー。アグーもなんだヨー！ 少しは分かれヨー！」

「無茶言う、ネーチャンだ」

御伽大学から高等部まで数分足らずに着ける距離だが、それは数分は掛かるということ。

ガウエインは無遅刻を狙うべく高等部へと向かう。

担がれたマジョーリカは後ろから追従するように歩くアグラに長身であるガウエインの肩から見下ろして不満を告げていたが、アグラは大学レベルの勉強なんて分かって無いし、したいとも思っただけなので従姉のマジョーリカを正面にちよっかいを出しながら歩いていけば、高等部の校門までやって来ていた。

遠くからでは分からなかったが、入り口に立っている人物に目を向

けた。

「誰かと言いつ争つてる感じですね」

ガヘリスがそんな事を告げる前に、ガウエインの耳にも聞こえるくらい何やら言い争つてる二人の姿があった。

片方は見知った人物で、この御伽学園高等部の風紀委員の委員長にして《生徒会》の会計にも兼任している三年生の吉備津桃子きびつももこの姿と、一人の男子生徒だった。だが、この男子生徒も改造制服を着ており、何処か和服をイメージされた改造制服だった。

会話が聞こえてくる。

「どうして何回も言っているのに来ない!？」

「……だから、それも何回も言っているわ。そして何回聞いても同じ答え。……もうやらないと決めたの私は」

「……ッツ!!」

そこでアグラとガヘリスは思わず『あつ』などと声を思わず出してしまったくらい驚いた行動が起きていたのだ。

目の前に居るあの吉備津桃子という先輩は、この御伽学園高等部の『風紀委員会』の長であり、その意味は風紀を乱す者を取り締まるほどの実力を持っているということ。

乱れた原因追求やその対処法。その場での一番の最良となる判断と決断力、力だけでなく言葉による解決の方が多々あるだろうが、それら全てを兼ね備えた者こそが風紀委員長となったあの吉備津桃子に、このマンモス校の中おいに於て何か因縁付けられる以外ならば絶対に敵に回したくないと言わしめるほどの人物、それが吉備津桃子イメージの想像の一つだろう。

だが、別の濃い理由により、その確固とした風紀委員長としての厳ついイメージを隠しているのを知っているのは三年生の少数だけだろう。

そんなアグラとガヘリスは、実は大神や亮士たちと同じ高等部一年生であった為に、三年生である吉備津桃子は風紀委員長として朝の挨拶を元気にしてくれるグラマラスな先輩や《生徒会》の会計という二つの大きな役職に付いている人だと認識イメージがあった。

そんな、色々な噂ある先輩であるが、男を実力で屈伏させるほどの腕前がある桃子が、その男子生徒に迫られ、後退りしていた場面だった。

「あの吉備津先輩が、後退り？」

「……………」

アグラは驚き、ガヘリスは何か考えながらその光景を見ていた。

ガウエインはマジョーリカを下ろし、さっそく止めに入ろうとしたが、マジョーリカが腰に抱きついて止められた。

「待ってヨー、ガークン今回は助けは要らないかもだヨー」

「……………どういう事だ」

「朝から浅はかな行動は慎むということだヨー……………おい、アグー？

調子こいて（苦笑）してんじやねえヨー」

アグラはびくつ、とマジョーリカに怯えていたが、ガウエインはずっと桃子と男子生徒をよく観察しようとしていた。

（ム……………？）

そこであることに気付いたガウエインは、マジョーリカが大変珍しくガウエインを止めた理由が分かったのだ。

（もしかして、彼は……………）

すると、また男子生徒が一方的に桃子に言いたいこと言ったあと、とても苦しそうな、そして悲しげな顔で御伽学園高等部の校門を潜っていた。

アグラやガヘリスが当然気まずそうにして、如何にあの校門を潜るかを思考を巡らせていると、空気を読むことに関しては人の数倍疎い騎士男と魔女が勇み足で吉備津桃子の元へ向かっていた。

唾然としながらも、アグラとガヘリスは後をついて行く。

ガウエインとマジョーリカに気付いた桃子は、暗そうな顔から一転、明るいつもの顔に戻して挨拶してくれる。

「あら、おはよう。珍しいわね、魔女ちゃんも一緒だなんて♡ さっそくだけで抱き付いていいかしら？」

「本当に突然ですね」

マジョーリカは笑顔ながらやんわりとガウエインの背後に回り隠

れるようにくつついている。もう見た目が妹だ。

そんな愛くるしいマジョーリカの行動に桃子は『最高よんっ!!』と悶えるが、アグラたちでさえ分かってしまうほど動きにキレが無かった。

今はそつとするべきだろう。そう思ったアグラやガヘリスはきちんと朝の挨拶をして、横を通り過ぎようとするが、

「今のは誰だヨー。『コレ』かヨー」（ニヤニヤ）

そう言つてマジョーリカが小指を立ててニヤニヤ顔で桃子にそう聞いた。

（オイイイツツ?!）

（そつとときましようよお姉ちゃんツツ!!）

ぐわあお！ と身をねじるようにして振り向き、空気読むこと知らない魔女さんを弟妹たちが支え捕まえる。だがもう一人空気を読むのではなく力強く吸い込んで、言葉を吐き出す者が居た。

「今の男子生徒、吉備津先輩の顔立ちが似ていました。もしかして、ご姉弟きょうだいなのでは？」

マジョーリカにはアグラがホールドし、ガヘリスが長身なガウエインのお腹に突っ込む。もうこれ以上プライベートをガン無視してガシガシ突き進む二人を身内が必死に阻止しようとするが、桃子がそんな兄妹を止めようとしている弟妹たちがどう映ったのか、

「朝から兄弟姉妹仲が良いのねん」

仲睦まじく見えたらしい。

結果オーライとして見るしかない。アグラとガヘリスは『アハハ』と渴いた笑いで応える。

そして、桃子は聞き取れるか否か分からないほど小さな声で『羨ましい』と呟いていた。

それを見ていたガウエインだったが、桃子はすぐに明るくなり、ガウエインたちを見送ってくれた。風紀委員は朝からの挨拶運動をするのだろうか。生徒会と風紀委員の仕事をこなす桃子先輩には尊敬の念が浮かぶが、やはり気になったガウエイン。

それを感じ取ったマジョーリカがまたガウエインの背中にへとダ

イブして抱き付く。

金色に輝く綺麗な長髪がガウエインの首から垂れると、ガクンツ！と膝を砕け、バランスを崩して転びそうになるガウエイン。やはりマジョーリカの綺麗過ぎる長髪にガウエインは意識がぼやけてしまふ。

「(ガークン？ 沢山の考え事は体や脳に負担が多少なり掛かるんだよ？ 今は私の実験に付き合いなさい？)」

「ゴホツコホオツ!」

金髪をちらつかせながらの素の状態の口調、そして耳元での発言で、流石の鉄仮面の表情が崩れた。

やはり、この魔女は騎士を誑かすことに長けていた。



「騎士先輩助けてくれ!」

「なんだ、喧嘩か?」

放課後、豪華絢爛な御伽銀行地下本店にて、急いで入ってきたオオカミさん“の通称持つ高等部一年の大神涼子が慌てた様子で入ってきた。だが、その聞いた相手・ガウエインは暇をしていた頭取・桐木リストと将棋を指していた。

そして大神が入ってきた瞬間、久しぶりに頭取がハキハキとした声で、

「やあ、大神君！ 君、若いツバメを集団で飼ってるんだって?」

「・・・喧嘩では無く燕を？ なんだ、燕を飼うのか涼子は?」

いや違うよ黒軋君、あのね。と説明しようとする頭取に大神はすぐに背後に回って口に手を当てついでにアイアンクローして止める。

「騎士先輩助けてくれ!」

「なんだ、燕か?」

「むぐぐむぎゅ?!」

さつきとのやり取りをもう一度やってから、ツバメでは無いことを赤面しながら説明する大神。その間もギギギギ、と顔面絞める音が地

下店内に響かせるが、ガウエインはなに食わぬ鉄仮面むひょうじょうのまま話を聞くことにした。

後から来た赤井林檎と森野亮士を含めて、改めてさきほど聞いた話を確かめる。

「なるほどね。それはそれは楽しいことになったね？」

ギンツ、と睨む大神から隠れるように盾のようにガウエインの背後に隠れながら顔を摩る頭取。

「はあ。……まさか涼子ちゃんが通っていたボクシングジムの熊田おやつさんの甥・熊田金太郎くんが同世代で敵う者が居なく、お山の大将を気取ってる金太郎くんを女の子である涼子ちゃんが勝つことで、天狗の鼻をへし折ってくれと頼まれ、見事にその鼻をへし折った涼子ちゃんは泣きじやくる金太郎くんにまた見事な殺し文句的な励ましたかたをして、その『俠氣』きやうきに惚れられたと、そういうことですね」

「わー長い説明ありがとう赤井君？」

「……その結果に、朝校門で男子小学生たちに整列されながら挨拶された、と」

「しししししかも、おおお男にしてもらったとか言ってたっスよ!」  
ガウエインたちが通う早朝の後、つまりよく学生たちが通学する時間帯にてそのような出来事が起きていたらしい。

しかも、沢山通学する学生たちに見られながら勘違いワードの連発をされた挙げ句、今の御伽学園高等部では『大神涼子はシヨタ好き』の噂が面白いように広がっているらしい。

そういえば朝から騒がしかったな、と今更ながら原因が分かったガウエイン。

「大変だね大神君も、まあ後は大変だけどがんば——」

「頭取、何を他人事のように言ってるのです？」

「アリスちゃん？ いやーねえ、だってめんど——」

「……頭取？」

やる気なさそうにしている頭取に、秘書然としたクールビューティ  
桐木アリスが眼鏡を光らせて眼光が貫く。

「手伝いますよね？　頭取？」

凄みを効かせて睨む、のではなく、諭すように再度問うアリス。だが、それだけで別の意味も悟った頭取はすぐに態度を改める。

「そーね？　流石にこのままだと大神君が使い物ひならないし、どうにかしないとイケないね？　何より大神君は大切な仲間だしね？」

流されるままに意見を変える頭取に凄い小者臭が漂っているが、その良い台詞もとってつけた感が溢れていて何も心を奮いも揺るがすこともない。

「でもね、どーしたのかな？　真実を流すことで噂を駆逐するので良いけど、元を絶たない限り再燃しちゃうよね？」

なるほど、とりんごがその頭取の言葉に納得する。着実な方法であるが、そんなやり方をしていては時間が掛かってしまうし、本元の金太郎は御伽学園小等部を巻き込んで噂が真実にへと変わるという恐ろしいことになるかもしれない。それでは遅すぎる。

(・・・『嘘から出た実』となる可能性があるのか・・・)

そのことに危惧したりんごは大神がこれ以上シヨタコン女番長と呼ばれることを予想した。それは余りにも、悲惨だ。

「とりあえず、あの金太郎さんをどうにかしないとイケないってことですのね？」

「そういうこと——」

プルルルルル

頭取の机の上の電話が鳴る。通知は内線で、御伽銀行地上支店からだった。

「あ、はいはい？」

『あの、おつうですけど』

「ああ、鶴ヶ谷君つるがやどうしたの？　何かあった？」

『はい、お客様がいらしてまして』

「えっ、そうなの？　ちよつと待ってね？　こちらでも確認するから」

そう言っつてパソコンのキーボードをでいくつか操作したあと、液晶画面に映し出されたのはやはりと言うか、あの金太郎だった。

「でかいな」

「騎士先輩ほどじゃないですが、そうっスね。本当に小学生なのかと思わせる体格っス」

確かに中学生と言われても何も疑問に思われないほど大きな体だった。

とにかく、なんだか任侠街道まっしぐらな金太郎少年が、わざわざこの御伽学園高等部の御伽学園学生相互扶助協会、通所『御伽銀行』の地上支店まで足を運んだのは凄い行動力だと思った。今も恐れも無しに地上支店の扉にたのもーって感じで叩いている。

『それでどうしましょう』

「……本当にどうしようか？　ちなみに彼がここまで来れたのはいろいろな所で聞き込みしたからだだろうね？　どんな聞き方したのか分からないけど、たまたま噂に尾ひれがついちやっただらうね？」

「……最悪だ」

大神はさらにブルーな気持ちに、

「あと、あそこに突っ立たせておくのも問題だと思えますの」

「……あそこ、目立つっスしね」

以前あそこで視線に晒されて暴走しかけた亮士だけあって、その言葉には実感がこもっている。ただ今回の場合はダメー<sup>精神ポイント</sup>ジを受けるのは大神。ステータス異常で毎秒S Pがガリガリ削って減っている。「とういうわけだから、入れちゃってちようだい？　こっちもすぐに行くから？」

『かしこまりました』

カチャ、と受話器を起き頭取は苦笑しながら大神を見る。

「んー、まあ、どうにか言い含めて、もう来ないように言うしかないね？　……まあ、がんばって？」

「……」

「それさえしてくれば、噂の方はこっちでなんとかするから、まあ、事実を噂として流して、それが行き渡った頃に何か興味を引くような別の新しい噂を流して、大神君の噂を忘れてもらうって感じかな？」

「……」



わかった」

大神はヨロヨロと立ち上がる。

「どうにかもう来ないように説得するよ」

しかし、その背には覇気はなくヒロインにあるまじき哀愁が漂っていた。



そしてあの後、金太郎の相手を大神たち一年生が相手し、それを眺める二年、三年のメンバーたちだったのだが、ガウエインの携帯に電話が鳴り響いたのは丁度『白馬王子』の拉致事件の経緯を少し暈しながら話す頭取が現れた頃だった。

亮士のヘタレ加減を払拭するために話しているらしいが、とても金太郎には現実に湧かない話だったらしい。

そんな途中に電話が掛けてきた相手は、いつかの市街地で成敗した『鬼ヶ島高校』の生徒の一人からだった。

いや、・・・生徒と部類するには姿形が凄いで生徒と呼ぶには抵抗があるのだが、歴れっきとした生徒の者からの電話だった。

電話を取るガウエインに他のメンバーは自然と眺める形となる。いやだつてガウエインが離れることもなく無骨に携帯を取ったので必然的にそうだった。

『あふうううん♡ お久しぶりね！ 元気にしてたかしら、ガウエインちゃん♡』  
ブチッ

「ちよ、あれ？ ガ、ガウエインさま？ 今の電話は・・・？」

「気にしなくていい」

それだけを呟いた瞬間、またも音が鳴る。

「もしも・・・」

『ちよつとおん!! もおヒドイじゃないガウエインちゃん♡ ていうかこらからガウちゃんと呼ばせてもわらうわよ？ もおー名前長すぎぃー』

「ゴホゴホッ」

『ちよつとオー！ なに咳吐せきいてんのよん！』

ガウエインから聞こえてくるのはかなり野太い声だった。それだけで男の声だと分かるのだが、ここまで女口調で話されると逆に清々しい。咳が出たのはたんに驚いただけだった。

隣から心配そうに見ている鶴ヶ谷からの視線から逃れ、その通話相手に集中する。

「……鬼ヶ島高校の名高い「貴方」がどうしたのですか？」

『あん！ ちよつとん！ 敬語なのん!? 敬語使つてアタシとの距離を置こうとしてるのね!? ダメよ！ そんなの絶対に許さないんだから！』

「……話を進めましょう。何か用件があつたから電話をかけてきたのですよね。それは一体なんなのか、説明をお願いします」

『うふ、そうね。敬語云々はまた会った時にでも話しましょう♡ 今回電話させてもらったのはガウちゃんに『お願い』があつたからなのよ♡』

「……? ……内容を聞かない限り判断しかねますが、どういった『お願い』でしょうか」

『簡潔に言うわね♪ ……近頃、鬼ヶ島高校ちで一部の生徒が利用された事が発覚してね、御伽学園ちの生徒に騙されたと、証言しちやつたのよね〜』

内容はそれだけで十分に理解したガウエインだった。今現在、金太郎と大神の件で頭取が仲裁役として出す条件内容なども同時に聞いていたガウエインだったから分かったのかもしれない。

「白馬王子先輩の件、ですね」

『そうよん。その白馬王子が御伽銀行あなたたちにコテンパンにされ、挙げ句その経緯を細かに書いた資料がばらまけられて大変大変！ そしてなーに？ その鬼校生徒が一人の女の子にボッコボコにされ、そして『黒騎士』も出張るといふ話も出てきたじゃない？ そしたらもうアタシたちも出るに出来ないとなんちやつてね?』

その言葉に、ガウエインは盛大に溜め息を吐く。そんな溜め息をマ

イクこ越しに聞いた相手も苦笑した笑い声が聞こえた。

「……つかぬことをお聞きします。……貴方は今御伽花市に来てるのですか？ 確か前添付されてたメールでは北海道で蟹食べてる写真を見ましたが、帰って来てないですよね？」

『うふふふ、残念よねえ。……帰って来てるわ。今も御伽花市のショッピングセンターから電話させてもらってるの♡ 久しぶりに帰って来てたら知ってたお店が何件も潰れてて泣きそうになったわよ！ あそこの中華そば屋好きだったのに残念で堪らないわ!!』

ガウエインは無表情ながら、この人は本当に自由なんだなと小さく微笑する。

「はあく……ああ、いいえ、オレも貴方が帰って来てくれて嬉しいです。もつとも一番良かったのは貴方が卒業生だったら尚嬉しかったのですが……」

『うふふふ。そうねえ、でもアタシ残念ながらまだ一年残ってるのよ♡ だから『避けられない』わね。こればかりは……』

暫しの互いの無言。そして、

「今度貴方が知ってたラーメン屋教えておきます。潰れたのは店だけですよ。まだあの味は消えてません」

『あら！ そうなの♡ それは本当に嬉しいわ♡ 次に会うのが楽しみだわ。それじゃ、また連絡するわね♪』

「はい、それでは」

ピツ、と通話ボタンを切ると、地上支店に居たメンバーが戻ってきていた。恐らくある程度の話は着いたのだろう。

懐かしい声と記憶を呼び覚ましていると、鶴ヶ谷が心配そうにチラリとガウエインの顔を覗き込む。

「ガウエインさま。その、今の電話は……」

「……そうだな」

綺麗な瞳を向けてくるメイドさんに、騎士は心配させまいと正直な答えを遠回しに伝えることだけにしておいた。

大神たちにボッコボコにされた鬼ヶ島高校の不良たち。ソイツらが仕返しに大神の前に現れると告げた頭取は、目先の問題・金太郎少

年のを纏めて解決させる一石二鳥を成す為に、計画を練るのであった。